

中津居館跡Ⅱ

2016

岩国市教育委員会

なか づ きよ かん あと
中 津 居 館 跡 II

2016

岩国市教育委員会



一括出土銭



中津居館跡周辺の地形（南から）



中津居館跡全景（上が北）

序

中津居館跡は岩国市を流れる錦川の河口の三角州に立地する中世に築かれた居館の跡で、現地には、居館を囲む一辺100mを超す土塁の基底部分がほぼ一周残っています。地域の方からは「朝日長者」又は「椿長者」の屋敷跡とも呼ばれ、屋敷にまつわる多くの言い伝えとともに、古くから愛着を持って語られる遺跡です。学術的な面からは、大規模な平地の居館跡が市街地に有りながら良好に残った全国的に見ても大変珍しい例であり、今に至る岩国と周辺地域の中世史を考えるうえで、欠くことのできない重要な遺跡と言う事ができます。一方で、近年は周辺地域の急速な市街化に伴い、開発事業との調整に必要な遺跡の基礎的資料を整えることが急務となっています。

このような状況から、岩国市教育委員会では平成20年度から平成22年度の3ヵ年にわたり、文化庁の補助をうけて、遺跡の規模、築造時期、遺構の残存状況等を調べるための試掘確認調査を実施し、平成23年度に報告書「中津居館跡」を刊行しました。この調査によって、中津居館跡の築造開始時期が14世紀前半に遡る事や、居館内部に大型建物跡を伴う事などが分かってきました。これに引き続き、遺跡の変遷等の基礎資料を得ることを目的として、平成24年度から平成27年度にかけて、文化庁の補助をうけて発掘調査を実施しました。今回の調査では、推定4万～5万枚とみられる一括出土銭や14世紀の居館の活動時期に使用されていたとみられる木組みの井戸跡が確認され、居館が使用されていた当時の状況について新たな知見がもたらされました。本書は、この4ヵ年の調査成果の報告書です。

この報告書が多くの方の目に触れ、埋蔵文化財についての認識を深め、学術研究や歴史教育の資料として広く活用されることを期待するものです。そして、本書がこの遺跡と遺跡を取り巻く歴史について知る一つのきっかけになれば幸いです。

最後になりましたが、地元住民の皆さんをはじめとして、発掘調査の実施にあたり、多大なご協力・ご支援を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも文化財保護行政について、格別のご理解とご協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

平成28年3月

岩国市教育委員会

教育長 佐倉 弘之 甫

例 言

1 本書は岩国市教育委員会が平成24～26年度に実施した、山口県岩国市楠町三丁目所在の^{なかづきよかん}中津居館跡^{あと}の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は国庫補助事業として実施し、国（文化庁）から補助金を受けた。

3 調査の組織は次のとおり。

事務局	岩国市教育委員会文化財保護課	課	長	水野鉄雄（平成24年度）
			〃	沖 啓二（平成25年度）
			〃	青木英子（平成26～27年度）
		主 事	神崎 前（平成24～27年度）	（主担当）
		文化財専門員	藤田慎一（平成27年度）	（主担当）
		臨時職員	蔵中庸夫（平成24～26年度）	
			〃	里原康夫（平成26～27年度）
			〃	高井孝則（平成26年度）

技術支援 山口県教育庁社会教育・文化財課

	主 査	河村吉行（平成24～26年度）	
	〃	石井龍彦（平成27年度）	
	文化財専門員	岩崎仁志（平成24～26年度）	（主担当）
	〃	谷口哲一（平成24～27年度）	
	〃	中里伸明（平成26年度）	
	〃	岩井顕彦（平成27年度）	

調査指導 文化庁文化財部記念物課 文化財調査官 近江俊秀（平成24～27年度）

4 調査にあたっては、山口県教育庁社会教育・文化財課の技術支援を得た。

5 調査にあたり、地権者をはじめ、地元自治会など関係各位の多大な協力・援助を受けた。また、以下の方をはじめ多くの方の指導・助言を受けた。この場を借りて感謝申し上げたい。（五十音順、敬称略）

伊崎俊秋、石井啓、大庭康時、小都隆、高妻洋成、古賀信幸、小林啓、櫻木晋一、下濱貴子、鈴木康之、高瀬尚人、高橋敦、田上勇一郎、塚本敏夫、久田正弘、松田順一郎、宮田伊津美、山田豊、和田秀作、岩国市科学センター貝クラブ指導員

6 本書中の方位は世界測地系による国土座標（第3座標系）の北で表示し標高は海拔標高である。

7 本書で使用した土色の色調標記はMunsell表色系による（農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』2007年版）。

8 出土遺物実測図の遺物番号は、写真図版の番号と対応する。

9 本書に使用した図面・写真類、及び出土品は岩国市文化財保護課に収蔵保管している。

10 本書中で使用した遺構略号は次のとおりである。

建物跡-SB 溝-SD 井戸-SE 土坑-SK 柱穴-SP 発掘トレンチ-TR

11 本書の作成・編集は、山口県教育庁社会教育・文化財課の指導・助言を受けて岩国市教育委員会が行った。執筆分担はⅠ・Ⅱ（神崎）Ⅲ（神崎）Ⅳ（藤田）Ⅵ（神崎・藤田）である。本書中の挿図は神崎・蔵中・里原・藤田が作成した。

本文目次

I	位置と環境	
1	1 地理的環境	1
2	2 歴史的環境	1
II	調査の経緯と概要	
1	1 調査に至る経緯	5
2	2 調査の経過と概要	5
III	遺構	
1	1 調査区の概要	8
2	2 TR1201の成果	8
3	3 TR1202の成果	12
4	4 TR1301の成果	15
5	5 TR1302の成果	16
6	6 TR1401の成果	22
7	7 TR1402・TR1501の成果	24
IV	遺物	
1	1 出土遺物の概要	28
2	2 土器・陶磁器・土製品	28
3	3 石製品	35
4	4 金属製品	35
5	5 木製品、植物遺体、植物質遺物	42
6	6 動物遺体	48
V	関連分野報告・分析	
	出土銭繙・こも片の分析（パリノ・サーヴェイ株式会社 高橋敦）	63
	中津居館跡の一括出土銭（櫻木晋一）	68
	弘中氏について（宮田伊津美）	78
	平地居館としてみた中津居館跡（古賀信幸）	85
	地中レーダー探査による遺構分布確認調査（応用地質株式会社 高瀬尚人）	95
	一括出土銭の調査と保存処理に関する経緯（神崎前）	108
VI	総括	
1	1 遺構について	110
2	2 遺物について	114
3	3 おわりに	115
	主要参考文献	117
VII	資料編	
	白崎八幡宮御神殿棟札	118
	弘中氏一覧	119

図版目次

- 巻頭図版1 一括出土銭
巻頭図版2 中津居館跡周辺の地形（南から）
中津居館跡全景（上が北）
- 図版1 TR1201 SX120101 一括出土銭及び木製蓋検出状況（東から）
TR1201 SX120101 一括出土銭検出状況（北から）
- 図版2 TR1201 SX120101 一括出土銭 十貫文繒①検出状況
TR1201 SX120101 一括出土銭 十貫文繒②検出状況
TR1201 SX120101 一括出土銭 八貫文繒①検出状況
TR1201 SX120101 一括出土銭 八貫文繒②検出状況
TR1201 SX120101 東西断ち割り土層断面 東側（南から）
TR1201 SX120101 東西断ち割り土層断面 西側（南から）
TR1201 全景（南西から）
TR1201 SK120101 検出状況
- 図版3 TR1301 全景（東から）
TR1301 北壁土層断面（南西から）
TR1301 西壁土層断面（北東から）
TR1301 土塁補強石材検出状況（南西から）
TR1301 土塁補強石材検出状況（西から）
- 図版4 TR1301 北壁土層断面①（南から）
TR1301 北壁土層断面②（南から）
TR1301 北壁土層断面③（南から）
TR1301 北壁土層断面④（南から）
TR1301 西壁土層断面（東から）
TR1202 全景（南から）
TR1201 SB100301-SP17 検出状況
TR1201 SB100301-SP17・SD100302 検出状況
- 図版5 TR1302 全景（南から）
TR1302 SD130201 検出状況（北から）
TR1302 トレンチ南西隅 集石検出状況（東から）
TR1302 SE130201 検出状況（北東から）
TR1302 SE130201 検出状況（東から）
- 図版6 TR1401 全景（南西から）
TR1401 SP140101・SP140102 検出状況（北から）
TR1401 SP140102 検出状況（西から）
TR1401 SP140101・SP140102 検出状況（西から）
TR1401 トレンチ南東隅 土層断面
- 図版7 TR1501 SE140201 検出状況（東から）
TR1501 SE140201 検出状況（南から）
TR1501 SE140201 検出状況（南から）
TR1501 SE140201 北西隅 井戸枠検出状況（東から）
TR1501 SE140201 北東隅 土師器・木製品出土状況（西から）
- 図版8 TR1402 全景（西から）
TR1402 北壁土層断面（南から）
TR1402 SE140201 南半検出状況（上から）
TR1402 SE140201 横棧・縦板検出状況（西から）
TR1402 SE140201 埋土中 土師器出土状況（西から）
TR1402 SE140201 埋土中 土師器出土状況（北から）
TR1501 SE140201 北東隅埋土中 土師器出土状況（南から）
TR1501 SS140201・SS150101 検出状況（北から）
- 図版9 中世土師器・輸入陶磁
- 図版10 中世陶器①
中世陶器②
中世陶器③
近世陶磁器①
近世陶磁器②
近世陶磁器③
近世陶磁器④
土錘・石製品
- 図版11 出土銭①
- 図版12 出土銭②
- 図版13 出土銭③
- 図版14 出土銭④
- 図版15 出土銭⑤
- 図版16 鉄滓・金属製品
木製品① 箸状木製品・折敷・付け木・杭・下駄・
ひしゃく・不明木製品
- 図版17 木製品② 井戸枠部材
植物遺体（炭化種実）
繊維製品（紐）
- 図版18 板状木製品（赤外線写真）
動物遺体（貝・骨）

挿 図 目 次

第1図	中津居館跡の位置と周辺の遺跡	第19図	遺物実測図⑥ 土錘
第2図	調査区配置図	第20図	遺物実測図⑦ 近世陶磁器
第3図	TR1201 実測図	第21図	遺物実測図⑧ 石製品・銭貨
第4図	一括出土銭土坑 (SX120101) 実測図	第22図	遺物実測図⑨ 鉄滓・鉄製品図面
第5図	SK120101 実測図	第23図	出土銭①
第6図	TR1202 実測図	第24図	出土銭②
第7図	SB100301-SP17・SP120201 実測図	第25図	出土銭③
第8図	TR1301 実測図	第26図	出土銭④
第9図	TR1302 実測図	第27図	出土銭⑤
第10図	TR1302 遺構実測図	第28図	遺物実測図⑩ 木製品 1
第11図	TR1401 実測図	第29図	遺物実測図⑪ 木製品 2
第12図	TR1402・TR1501 実測図	第30図	遺物実測図⑫ 木製品 3
第13図	SE140201 実測図	第31図	遺物実測図⑬ 木製品 4
第14図	遺物実測図① 弥生土器	第32図	遺物実測図⑭ 紐
第15図	遺物実測図② 中近世土師器	第33図	大型掘立総柱建物跡 (SB100301) 配置図
第16図	遺物実測図③ SE140101出土中世土師器	第34図	中世土師器碗・坏分類図
第17図	遺物実測図④ 中国陶磁	第35図	中津居館跡出土一括中世土師器
第18図	遺物実測図⑤ 中世陶器		

表 目 次

第1表	中津居館跡関連年表	第7表	遺物観察表 (木製品)
第2表	出土貝類一覧	第8表	遺物観察表 (繊維製品)
第3表	遺物観察表 (土器、陶磁器、瓦)	第9表	遺物観察表 (一括出土銭)
第4表	遺物観察表 (土製品)	第10表	山口県内の一括出土銭
第5表	遺物観察表 (石製品)	第11表	調査成果一覧表
第6表	遺物観察表 (金属製品)		弘中氏一覧

I 位置と環境

1 地理的環境

なかづきょかんあと
中津居館跡は岩国市楠町三丁目に所在する。周辺は瀬戸内海に向かって開けた岩国市の中心をなす平野部で、2級河川錦川の河口に形成された三角州の先端付近に位置する。

錦川（流域面積501km²、流路延長110km）は山口県と島根県の県境に近い中国山地に源流を発し、河口から約4km上流で今津川と門前川に分流して三角州を形成する。居館跡が位置する三角州が形成され始めるのは11世紀頃とされ、東側大部分は近世以降の干拓と埋立による。三角州の末端に軍民共用の岩国航空基地が立地する。気候は瀬戸内海型気候に属し、一年を通じ穏やかである。

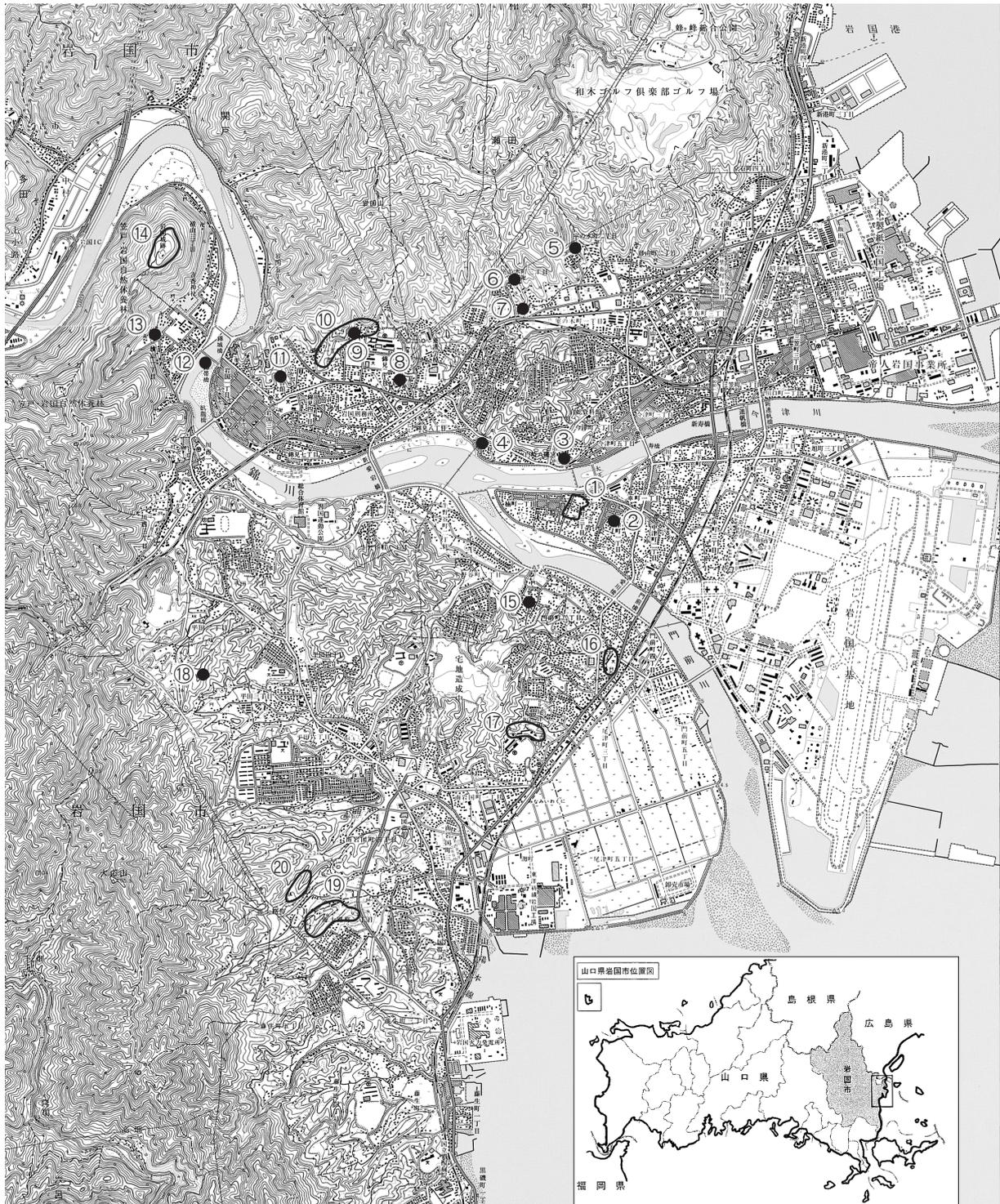
2 歴史的環境

錦川流域において旧石器時代の遺物は各地で散発的に採集されているに過ぎないが、錦川に合流する宇佐川上流の冠高原一帯は旧石器時代から石材に利用されたデイサイトの産出地として著名である。錦川上流の本郷盆地及び広瀬盆地には縄文時代の遺跡が知られており、郷遺跡では多数の縄文土器片と石器、狩猟用落とし穴が確認されている。下流域では、平野部を臨む丘陵に弥生時代の大円寺山遺跡及び錦見遺跡、古墳時代の江臨寺谷横穴などが分布する。しかし、これらの遺跡に関する情報は乏しく、一帯の古代史像を描き出すには不十分といえる。

平安時代末期、平家に属し岩国（石国）氏を名乗る一族が岩国を拠点に勢力を持っていたが、壇ノ浦の合戦を境に衰退し、代わって勢力を伸ばしたのが清縄氏（後の弘中氏）といわれる。清縄氏は建長2年（1250）に都濃郡の遠石八幡宮を勧請して八幡小社を創建し、貞和4年（1348）弘中兼胤が社殿を現在地の白崎山¹に移し、社領を寄進して伽藍を整備した²。以降、岩国荘の鎮守として最盛期には十二坊を有し、代々弘中氏が官司を世襲した。弘中氏の一族は山口を拠点とした守護大名大内氏に仕え、15世紀初頭の大内氏の氏寺興隆寺の「供養勧進帳」及び「一切経勧進帳」に複数名が名を連ね、陶氏、杉氏らと並んで奉加額も多額であった。庶家の弘中武長は一時大内氏直属水軍の総司令官を務め、同じく庶家の弘中重勝は応仁の乱の際に大内政弘に従って上洛し、大内氏奉書の奉者を務めている。これらの事蹟から、弘中氏の一族は大内氏家中の中樞を担ったと考えられる。

中世における中津居館跡を取り巻く周囲の状況は、近世以降の史料から推測せざるを得ない。居館跡の南、門前川を挟んだ対岸に喜楽寺跡と伝えられる場所があり、現在もこの地域を門前と呼ぶ。喜楽寺は真言宗の大寺で弘中氏の菩提寺とされるが、天正年間に毛利輝元の命で本堂が解かれた後、海路で運ばれ、安芸吉田の洞春寺の資材に転用された³。また、中津居館跡から約2km上流の錦川左岸に、弘中氏の居城とされる亀尾城⁴がある。大円寺山と呼ばれる標高36mの小山に築かれた連郭式の山城で、周辺に「城の前」「舟入」などの地名が残る。亀尾城の西600mの場所には、厳島の合戦直前、陶晴賢の武将江良房榮が自刃した場所とされる琥珀院跡⁵がある。さらに約1km西の横山の永興寺は、延慶2年（1309）大内弘幸の開基と伝えられ、大内義興と子の義隆の代に尼子氏経略の拠点となった。また、厳島の合戦直前に陶晴賢が滞陣し、その後の毛利元就の防長進攻においても弘治3年（1557）まで拠点とされた。

弘中氏の所領支配における経済的基盤は、錦川及び瀬戸内海水運によってもたらされる通行税などが考えられ、中津居館跡と白崎八幡宮、さらに南の喜楽寺とを結んだ南北の海岸線一帯は弘中氏所領



- ①中津居館跡 ②穂田元清館跡 ③白崎八幡宮 ④関所山城 ⑤室の木貝塚 ⑥室の木墳墓群 ⑦室の木遺跡
 ⑧大円寺山遺跡・亀尾城跡 ⑨琥珀院跡 ⑩錦見遺跡 ⑪江臨寺谷横穴 ⑫錦帯橋 ⑬岩国藩主吉川家墓所
 ⑭岩国城（山上要害） ⑮喜楽寺跡 ⑯愛宕遺跡 ⑰深田ヶ浴遺跡 ⑱平田城跡 ⑲海土路遺跡 ⑳海土路貝塚

第1図 中津居館跡の位置と周辺の遺跡

の政治経済の中心地だったと考えられる。弘中氏一族の最後の惣領とみられる弘中隆兼は、天文24年(1555)、陶晴賢と共に巖島で毛利元就と戦ったが敗れ、隆兼父子は自刃した。

元就の防長進攻の序盤戦である鞍掛城合戦⁶の直後、元就は永興寺、小早川隆景は琥珀院、吉川元春は中津居館跡に駐留しており⁷、当時ここが重要な軍事拠点であったことが窺える。巖島の合戦を境に岩国は毛利氏の支配地となり、川内警固衆の一人であった賀屋和泉守武頼が中津居館跡を管理下に置いたとみられる。中津居館跡が近世以降の文献で「加陽（賀屋、賀陽とも）和泉守の屋敷」と呼ばれるのはこのためである。賀屋氏は、安芸武田氏の直轄水軍として太田川を中心に活動していたが、天文10年（1541）武田氏滅亡を境に毛利元就の直轄水軍に組み込まれた。巖島の合戦から、慶長6年（1601）に吉川広家が岩国に入封するまでの約45年間の内、賀屋氏による居館跡の管理がいつ頃まで続いたかについては、はっきり分かっていない。

慶長7年（1602）、初代岩国領主吉川広家は城下の整備に着手し、中津居館跡の西約1kmの錦川が分流する地点に堰を築き、それまで本流であった門前川の流れを堰き止めて今津川を本流とし、今津川の河口に今津港を整備した。2代領主吉川広正は、万治3年（1660）中津で自身の隠居屋敷と家臣の屋敷地の造営に着手し、寛文元年（1661）に完成しここに移った⁸。同2年（1662）永興寺の石翁に命じて、中津居館跡に瑞光寺を再興した。瑞光寺は応永12年（1405）に没した大内弘世の娘の菩提を弔うために建立されたと伝えられ、弘中氏と関連の深い寺とみられるが、吉川氏入封の頃には廃寺同然の状態であったとされ、寺伝等は伝わっていない。寛文7年（1667）に吉川興経の位牌を瑞光寺に移してからは、瑞光寺が興経の菩提寺となり、その後も度々加増され、元禄12年（1699）に興経の150年忌の時点で13石が加増され計30石となった。以後も瑞光寺は毎年、興経の忌日に領主の参詣又は代参を受けるなど、幕末まで吉川家の庇護を受けたが、慶応2年（1866）廃寺になり、薬師堂以外の建物は解体され、代わって四境戦争に備えた藩の弾薬庫及び大砲保管庫が置かれた。明治2年（1869）に藩命により、土塁を含む旧瑞光寺境内全域が詳細に測量され、分筆のうえ払い下げられた。瑞光寺の廃寺後も、薬師堂は現地に存続し、昭和30年代頃までは正月八日に縁日が開かれるなど信仰を集めたが、平成26年3月に解体された。

参考文献

- 岩国市史編纂委員会『岩国市史』上下 1970年
岩国市史編さん委員会『岩国市史 通史編一 原始・古代・中世』2009年
山田豊「賀屋一族について」（『岩国郷土史研究第5号』2006年）

-
- 1 中津居館跡の北、今津川を挟んだ対岸に位置する。
 - 2 『白崎八幡宮御神殿棟札』白崎八幡宮所蔵。→本書資料編p.118。
 - 3 『萩藩閥閥録巻54入江七郎左衛門』毛利輝元書状
 - 4 「一、古城山 亀尾城山。白崎八幡宮の大宮司弘中三河守居城の跡なり。弘治、巖島合戦に弘中討死して、城破却せしなるべし。』『享保増補村記』錦見村の項
 - 5 「陶どの被仰者、さてハ丹後守、元就へ内通候て之儀ニ候哉、とて岩国琥珀院にて、丹後二腹を御切せ之由、承及候。』『森脇覚書』安芸攻略の事
 - 6 山口県岩国市玖珂町谷津に在った山城。鞍掛城合戦時の城主は杉隆泰。
 - 7 「其日、岩国永興寺まで御打入候。隆景様琥珀院、元春様中津かや和泉所に御宿陳候。』『森脇覚書』防長進軍の事
 - 8 広正の隠居所及び家臣の屋敷地は寛文6年（1666）広正の死後、寛文12年（1672）には年貢地に戻った。

第1表 中津居館跡関連年表

年号	事項
元暦元(1184)年	一の谷の戦いで平家方に岩国源太維道が参戦。『源平盛衰記』
元暦2(1185)年	3. 壇ノ浦の戦いで平家方の岩国二郎兼秀、岩国三郎兼末が生け捕られる。『吾妻鏡』 →以降、岩国地域で岩国氏に代わり清繩氏が台頭か。
建長2(1250)年	1. 20 清繩良兼、今津琵琶頭に小社を建立。白崎八幡宮創建。『白崎八幡宮御神殿棟札』
延慶2(1309)年	大内弘幸が横山に永興寺を創建。開山仏国国師。『寺社記』
貞和4(1348)年 (正平3)	9. 17 弘中兼胤が白崎山に白崎八幡宮の社殿を造営し遷宮。社領・神宝を寄進。『白崎八幡宮御神殿棟札』
正平13(1358)年 (延文3)	大内弘世、南朝方の長門国守護職に任命される。『大内氏實録』
貞治2(1363)年 (正平18)	大内弘世、北朝方に転じ室町幕府から周防・長門両国の守護職に任命される。『大内氏實録』
貞治6(1367)年 (正平22)	大内弘世、横山永興寺を整備し、普明国師を頂戴。『寺社記』
応永12(1405)年	弘中氏が妻(大内弘世の息女)の菩提を弔うため瑞光寺を建立か。瑞光寺殿立峰建公大禪尼。『永興寺所蔵位牌』
応永年間頃	大内氏の氏寺水上山興隆寺の「供養勸進帳」に奉加者として弘中円政以下弘中氏12名が、計3000疋を寄進。『興隆寺供養勸進帳』 大内氏の氏寺水上山興隆寺の「一切経勸進帳」に奉加者として弘中兼実以下弘中氏10名が、計1500疋を寄進。『興隆寺一切経勸進帳』
永享5(1433)年	4. 岩国領主弘中兼勝、大内義弘の嫡子持世と弟持盛の争いに巻き込まれ、持盛の敗死により所領を没収される。
応仁元(1467)年	5. 10 応仁の乱が起こり弘中弘信、山名方に加わった大内政弘に従い京都へ上る。『白崎八幡宮御神殿棟札』
文明4(1472)年	4. 2 弘中弘信が白崎八幡宮の社殿を上葺。『白崎八幡宮御神殿棟札』
文明10(1478)年	10. 弘中四郎武宗 大内政弘に供し筑前に出陣。『正任記』10.1の項
明応5(1496)年	6. 27 白崎八幡宮焼尽。『白崎八幡宮御神殿棟札』 8. 弘中弘信、白崎八幡宮再建。『白崎八幡宮御神殿棟札』
明応6(1497)年	3. 18 弘中弘信、白崎八幡宮に御宝殿を建立。『白崎八幡宮御神殿棟札』
文亀3(1503)年	4. 28 白崎八幡宮舞殿、籠所建立。願主弘中弘信、同嫡男興輔。『白崎八幡宮御神殿棟札』
永正5(1508)年頃	大内義興が山城国守護職に任じられたのに伴い、弘中武長が山城国守護代に任じられる。『久我家文書』
永正8(1511)年	6. 2 白崎八幡宮楼門建立。願主弘中弘信。『白崎八幡宮楼門棟札』
大永3(1523)年	8. 18 弘中武長、防州警護船の大将として厳島を奪回する。『房顕覚書』
天文10(1541)年	5. 安芸武田氏が滅亡。武田氏に属していた賀屋氏がのちに毛利氏の直轄水軍に編入される。
天文11(1542)年	1. 弘中隆兼、大内義隆に従い安芸を経て、出雲に遠征。 6. 頃 弘中隆兼、安芸国東西条代官として槌山城に駐留。『閩閩録』『大願寺文書』
天文20(1551)年	9. 1 大内義隆、陶隆房(晴賢)らに背かれ、長門大寧寺で自刃。
天文24(1555)年	3. 16 弘中隆兼らが陶晴賢の命により錦見の琥珀院で江良房栄を襲撃し殺害。 9. 28 弘中隆兼、厳島渡海直前の状況を家臣らに報告。『西郷家文書』 10. 1 厳島の合戦で毛利元就が陶晴賢を破る。 10. 3 弘中隆兼父子、厳島の竜之馬場で自刃。 10. 27 毛利元就の軍勢が玖珂の鞍掛城で杉隆泰を討った後、吉川元春が中津の「中津かや和泉所」に宿陣。『森脇覚書』
天正5(1577)年	7. 28 毛利輝元が粟屋元重に弘中氏の居城であった亀尾城の管理を命じる。『閩閩録』
天正16年頃	門前の喜楽寺(弘中氏の菩提寺)、解体され広島に運ばれる。実務担当者のひとりに賀屋伊豆守。『閩閩録』
慶長6(1601)年	8. 吉川広家、毛利氏防長移封に伴い岩国に入る。
万治3(1660)年	2. 29 吉川広正の中津隠居所起工。『岩邑年代記』
寛文元(1661)年	10. 18 中津隠居屋敷が完成。吉川広正が士卒二百余人と共に移り住む。『岩邑年代記』
寛文7(1667)年	7. 9 吉川興経(桃源院)の位牌を瑞光寺に移す。寺領17石寄付。『岩邑年代記』
貞享3(1686)年	5. 20 瑞光寺が京都紫野龍光院末寺となる。『岩邑年代記』
元禄12(1699)年	9. 7 瑞光寺で吉川興経(桃源院)の百五十年忌法要。瑞光寺は13石の加増を受け計30石となる。『寺院雑記』
寛延2(1749)年	2. 2 瑞光寺の建替えが決定。『岩邑年代記』 9. 16～ 瑞光寺で、吉川興経(桃源院)の二百年忌法要。『御用所日記』
慶応2(1866)年	3. 24 瑞光寺廃寺。吉川興経の位牌を永興寺に移し、薬師堂以外の建物を解体。『享保増補村記』(欄外追記) 6. 14～ 四境戦争 芸州口の戦い。
明治元(1868)年	6. 6 吉川経幹を城主格にするとの奉書により、岩国藩となる。
明治2(1869)年	5. 旧瑞光寺の境内地が藩によって測量され、払い下げられる。『中津瑞光寺附近図』

II 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

中津居館跡については、元治7（1621）年の『森脇覚書』の中で、巖島の合戦の直後、吉川広家が中津居館跡に宿陣したとする記述がみられ、17世紀前半に吉川家が編纂した岩国領内の地誌「享保増補村記」には、「一 築地。東西四十九間半。南北六十二間半。いつの時代、いかなる者の築きしや、分明ならず。」とある。平成9年に岩国市文化財審議会委員の棟安唯夫氏が現地を踏査し、土塁の基底部分が近世の文献および絵図のとおり現地に残存することを明らかにし、直後に山口県教育委員会および岩国市教育委員会がおこなった現地踏査によって、土塁の良好な残存状況が確認され、埋蔵文化財包蔵地として周知された¹。

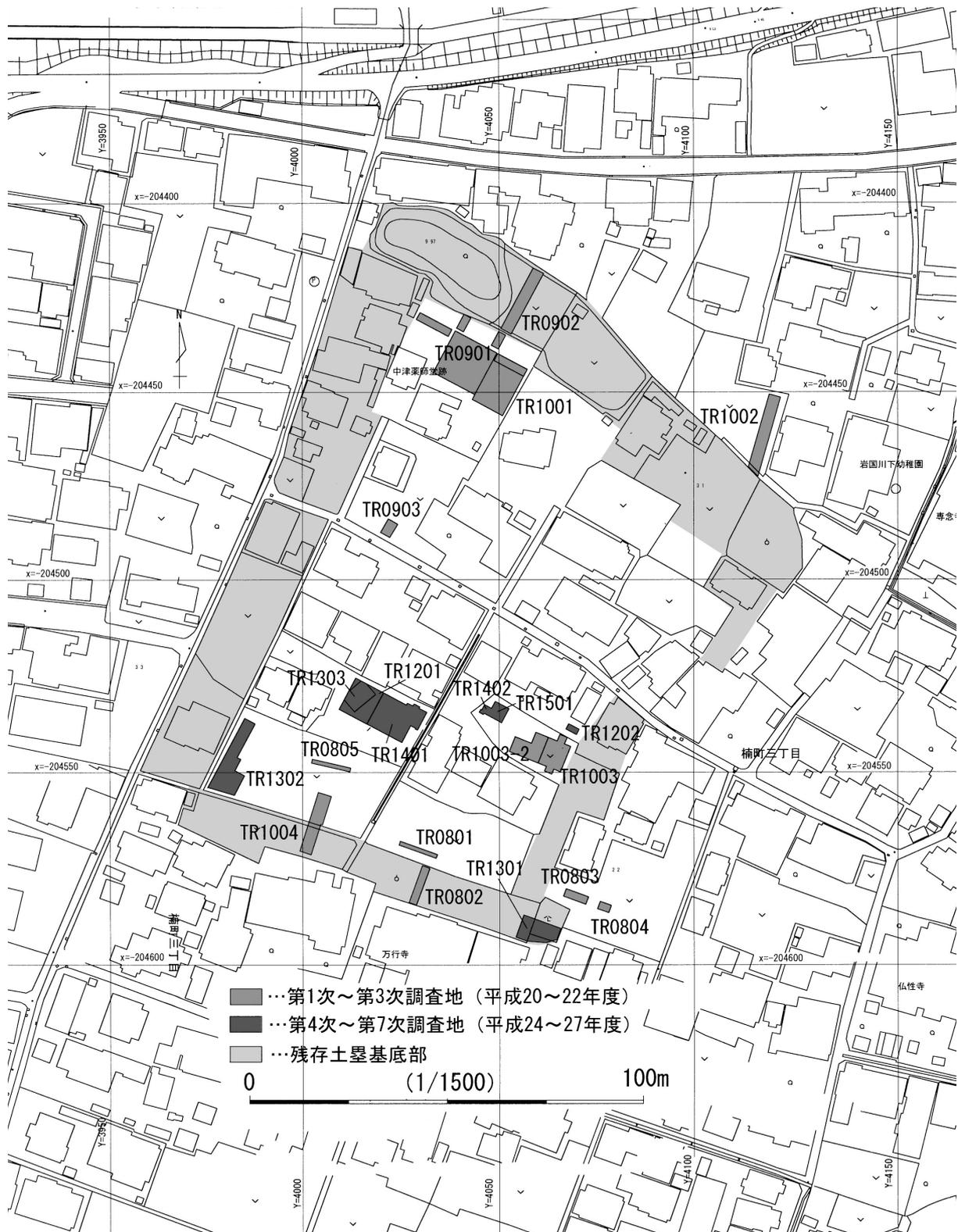
平成19年に岩国市道路課から、遺跡内における市道中津56号線（仮称）²の整備計画について岩国市教育委員会文化財保護課に協議があり、事業との調整と遺跡の価値判断の為の試掘確認調査を早急におこなう必要が生じたことから、岩国市教育委員会が主体となり、平成20～22年度の3ヵ年に現地の試掘調査を実施し、平成23年度に報告書を刊行した。この3ヵ年の調査から、居館内部に大型建物跡が存在したこと、この大型建物跡と同時に見つかった土師器一括廃棄土坑の出土土師器から14世紀前半ごろに居館が機能したとみられること、居館を囲む土塁の築造時期も14世紀前半まで遡ることなどが確認された。遺跡周辺の状況として、平成20年に遺跡の約200m西に国道188号線岩国南バイパスの供用開始、平成24年の岩国錦帯橋空港の開港、中津居館跡が直接影響を受ける都市計画道路楠中津線の事業開始など、今後周辺で大規模な開発が予想され、これらの事業との調整および遺跡の保存方法の検討の為に、遺跡の性格をより詳細に把握するための調査が必要となった。そこで、平成24年度から、平成27年度まで試掘確認調査を継続し、平成27年度に中津居館跡に関して2冊目となる本報告書を作成した。調査にあたっては山口県教育庁社会教育・文化財課の技術支援を受けた。

2 調査の経過と概要

本報告書には、中津居館跡における第4次（平成24年度）、第5次（平成25年度）、第6次（平成26年度）・第7次（平成27年度）の4ヵ年の調査成果を収録した。

第4次調査では、遺構の分布状況確認のための地中レーダー探査を平成24年9月と翌年2月の2回に分けて業務委託により実施し、居館内部に2ヵ所のトレンチ（TR1201・TR1202）を設定して試掘調査をおこなった。地中レーダー探査では、土塁から堀（推定）にかけて直線的に配置した測線を遺跡の外周に38本（計1054m）、居館内部の遺構を確認するために格子状に測線を配置した平面的な探査を4ヵ所（計3825.5m）でおこなった。探査で得られたデータと、既往の試掘調査成果の比較から、地中レーダー探査の有効性が確認できたことから、第4次調査以降の調査区設定の際に、地中レーダー探査で得られた成果を活用した³。試掘調査は平成24年10月29日から開始し、この内のTR1201で同年12月10日に一括出土銭を検出した⁴。同年12月15日に開催した現地見学会では、少雨が降るあいにくの天候であったが、一括出土銭への注目度が高かったこともあり、80名の参加があった。

一括出土銭は取り上げ方法の検討及び取り上げ準備のために一旦、現地に埋め戻すこととし、翌年1月30日に全ての調査地点の埋め戻しを完了した。



第2図 調査区配置図

第5次調査は、土塁と居館内部の2ヵ所（TR1301・TR1302）に調査区を設定し平成25年9月24日から現地の試掘調査に着手した。同年12月14日の現地見学会では、71名の参加があった。その後も調査を続け、翌年3月19日に埋め戻しを完了した。この試掘調査期間中の平成25年12月16日～同年12月19日の間、第4次調査で一時的に埋め戻した一括出土銭を再度検出し（TR1303）、業務委託によ

り、出土状態を保ったまま一括出土銭の切り取りをおこなった。当該年度当初の計画では、一括出土銭の出土地点に仮設の覆い屋を設置し、出土銭貨と甕を幾つかの塊に分けて取り上げる方法を想定したが、遺物の持つ資料的価値を損なわないために、計画を変更して、出土銭貨と甕を現状のまま一体的に現地から切り取り、室内に移動して調査することとした。



地中レーダー探査実施状況

第6次調査は、居館内部の2ヵ所（TR1401・TR1402）に調査区を設定し平成26年11月20日から調査を開始し、TR1402で中津居館跡では初となる中世の井戸跡を検出した。翌年2月14日に開催した現地見学会には72名の参加があった。同3月26日に現地の埋め戻しを完了した。現地の試掘調査の他に、平成26年9月3日から、岩国徴古館（市立博物館）において、前年度現地から切り取りおよび移動を完了していた一括出土銭の銭貨の調査に着手した。推定総数4万～5万枚とみられる甕内部の銭貨のうち、調査に必要な最小限の、計964枚を取り出して銭種を判読した。調査の為の銭貨を取り出した後、一括出土銭を収納した状態のまま、甕本体の保存処理を業務委託によりおこなった。

平成27年度は当初、第4次～第6次の発掘調査成果をまとめた報告書の作成のみをおこなう予定であったが、前年度調査で確認された井戸跡の正確な規模と時期を確認することが遺跡の性格を判断するうえで重要と考え、計画を一部変更して井戸跡の追加調査をおこなった（第7次調査）。現地の調査では、井戸跡が検出されたTR1402を北側に拡張し（TR1501）、平成27年7月14日から現地での調査を開始した。調査は井戸跡の掘り下げに伴う大量の湧水に対処しながら短期間でおこなう必要があり困難を伴った。現地調査とは別に、第4次～第7次調査の遺物整理・実測・写真撮影をおこない、また、一括出土銭については、前年度に甕から取り出した銭の洗浄・計測・拓本を経て整理し、緡銭をばらした際に得られた緡紐の同定を業務委託によっておこなった。これらの成果をまとめ、平成28年3月に本報告書を刊行した。報告書の作成と併せて、これまでの調査成果を紹介する企画展を岩国徴古館で開催し、一括出土銭をはじめとする遺物を展示し好評を得た⁵。



第5次調査現地見学会の様子

- 1 平成9年に周知化された時点では近世に書かれた地誌の記述を引用して、遺跡名称を「加陽和泉守居館跡（かやいずみのかみきょかんあと）」としたが、平成20年～23年度の試掘調査によって、居館が14世紀前半には成立していたことが明らかとなり、16世紀にこの居館に入ったことが史料から確認できる賀屋氏の名を冠することを避け、平成24年2月に旧地名を引用し遺跡名称を「中津居館跡」に変更した。
- 2 平成20年度からの試掘確認調査の発端となった市道中津56号線（仮称）は事業中止されている。
- 3 本書第V章『地中レーダー探査による遺構分布確認調査』P95～参照。
- 4 本書第三章P8～およびV章『一括出土銭の調査と保存処理に関する経緯』P109～参照。
- 5 岩国徴古館企画展「中津居館跡発掘調査報告展」会期：平成28年2月28日（日）～同年5月8日（日）（予定）

Ⅲ 遺構

1 調査区の概要

調査は、遺跡の性格を把握し遺跡の保存方法を検討する目的で、平成24～27年度の4ヵ年で実施した。平成20～23年度に実施した発掘調査には、第1次～第3次までの調査次を付しており、これを踏襲して平成24年度実施の調査を第4次とし、以降、25年度調査を第5次、26年度調査を第6次、27年度調査を第7次とした。トレンチ番号（TR○○○○）の前半2桁は調査年度の西暦の下2桁をあらわし、第4次調査ではTR12、第5次ではTR13、第6次ではTR14、第7次ではTR15を付した。後半2桁は、同一年度内で着手した順に番号を付した。個別の遺構については、柱穴（SP）・土坑（SK）・溝（SD）・石列及び集石（SS）・性格不明遺構（SX）・井戸（SE）などの遺構種別の略号の後ろにトレンチ番号を続け、その後ろに検出面が新しい物から順に2桁の通し番号とした。

（例）SP1201…SP（柱穴）1003（トレンチ）01（通し番号）

検出された中世の居館に関連する主な遺構は、一括出土銭土坑1ヵ所、井戸1基、溝1条、柱穴1基などである。

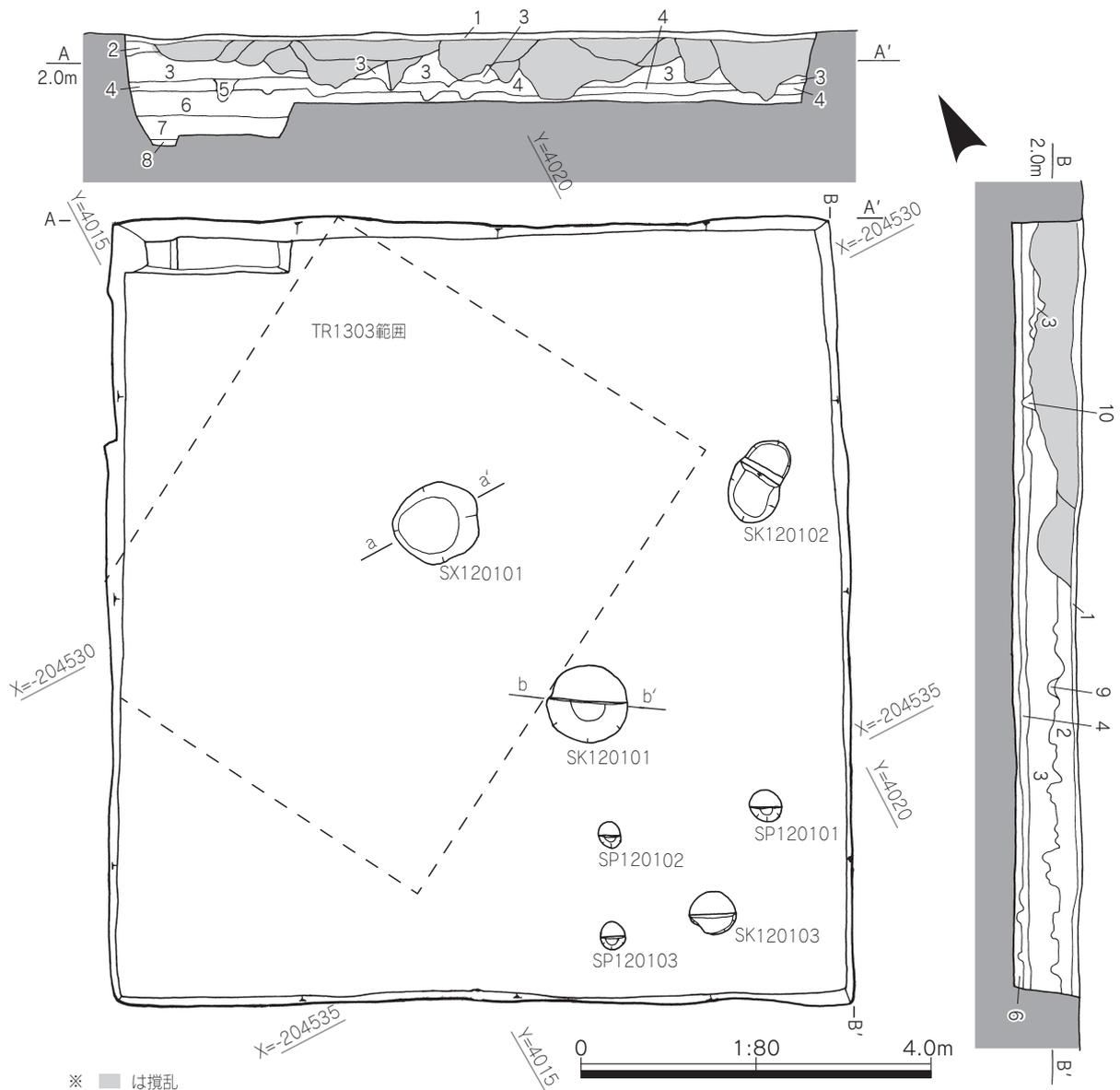
遺跡の立地環境は、2級河川錦川の河口に形成された三角州頂部付近にあたり、標高2.6～3.0mで概ね平坦である。周辺は地下水位が高く、概ね標高1.0m付近で湧水する。現在の中津居館跡内部の宅地と耕作地（近年まで耕作が行われていた耕作放棄地も含む）に大きく分けられ、調査区は、耕作地のうち、地権者の了解が得られた場所に設定した。

第4次～第7次調査において、土塁上に設定したTR1301と、一括出土銭の切り取りの為に設定したTR1303を除く、すべてのトレンチについて、主軸方向を真北から28°東に振った方向に傾けている。これは、第3次調査のTR1003・TR1003-2で検出した大型掘立総柱建物跡（SB1003-01）の主軸方向に合わせたためであり、居館内において、同時代の遺構が共通の規格の下で配置されている可能性が高いと考えられるためである。

トレンチの配置は第2図に示した。以下に各トレンチの調査概要と個別遺構の特徴について述べる。

2 TR1201の成果

TR1201は居館の中心から約40m南西の居館内部に位置する。調査着手時の平成24年時点では耕作放棄地で、数年前まで耕作がおこなわれていた。TR1201付近は、まとまった面積の調査区を設定可能なうえ、居館の中心部にも近く、居館に伴う遺構が存在する可能性が高いと考えられた。このことから、第4次調査の調査区設定前に実施した地中レーダー探査において、TR1201を含む広範囲に格子状の測線を配置し、礎石・柱穴・溝跡等の確認を試みた。測線間隔が2.0mと粗かった為、タイムスライス解析等の平面的な解析はできなかったが、複数の局所的な反応が確認され、これらの反応箇所を可能な限り調査区に含むように調査範囲を設定した¹。トレンチの規模は東西8.0m・南北9.0mである。



- 1 表土 において黄褐色土 (10YR4/3) 細かい根が入る。
- 2 耕作土 黒褐色土 (10YR3/2) $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ の小礫が入る。
- 3 において黄褐色土 (10YR5/4) しまりあり。 $\phi 20 \sim 30\text{mm}$ の小円礫を含む。遺物がまれに混入する。
- 4 において黄褐色土 (10YR5/4) において黄褐色土とオリーブ灰色土 (10Y6/2) ブロックを含む。橙色、黒色土粒を含む。土師器片が比較的密に入る。
- 5 において黄褐色土 (10YR4/3) 単層土で土師器片が散発的に混入する。SD120101。
- 6 において黄褐色土 (10YR6/4) 非常にしまる。オリーブ灰色土 (10Y6/2) ブロック ($\phi 5 \sim 50\text{mm}$) を含む。無遺物になる。
- 7 褐色土 (10YR4/6) オリーブ灰色土と互層となる。砂質土
- 8 均質な砂層・無遺物。
- 9 において黄褐色土 (10YR5/4) 橙色・黒色の微粒子含む。
- 10 において黄褐色土 (10YR5/4) しまりを欠く。

第3図 TR1201実測図

基本層序

地表から-40cmまでは黒褐色の耕作土である。耕作土の直下で、において黄褐色土となり2.0~3.0cm大の小円礫を含む。地表から-60cm付近で、土器片を密に含む遺物包含層となる。地表から-80cm付近で柱穴・土坑等を伴う中世遺構面が確認された。この遺構面より下ではほぼ無遺物となり、標高1.0m付近で湧水する。

個別遺構

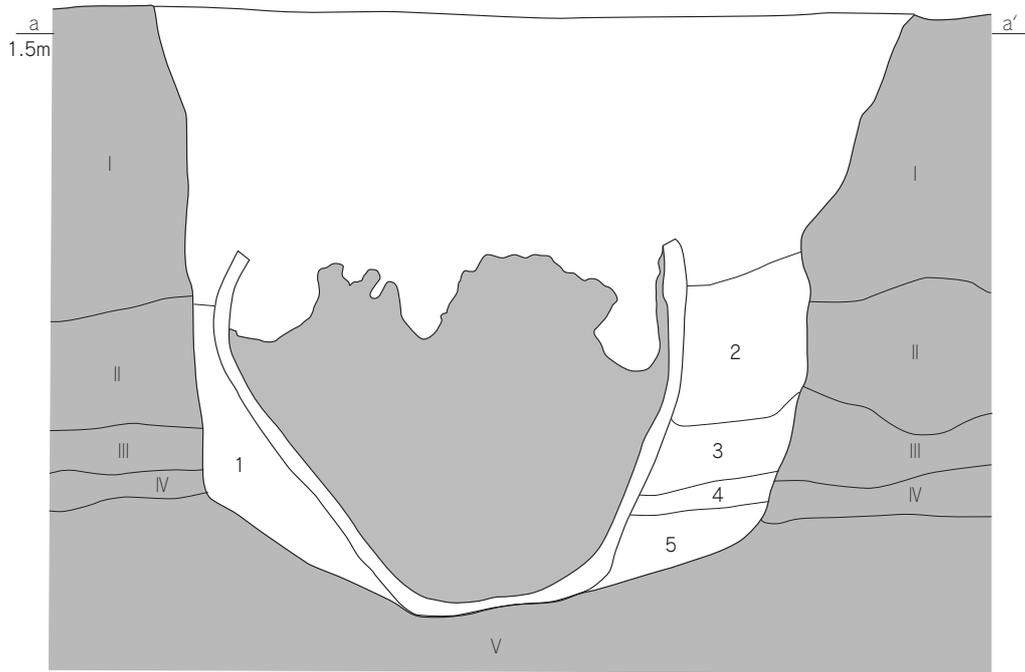
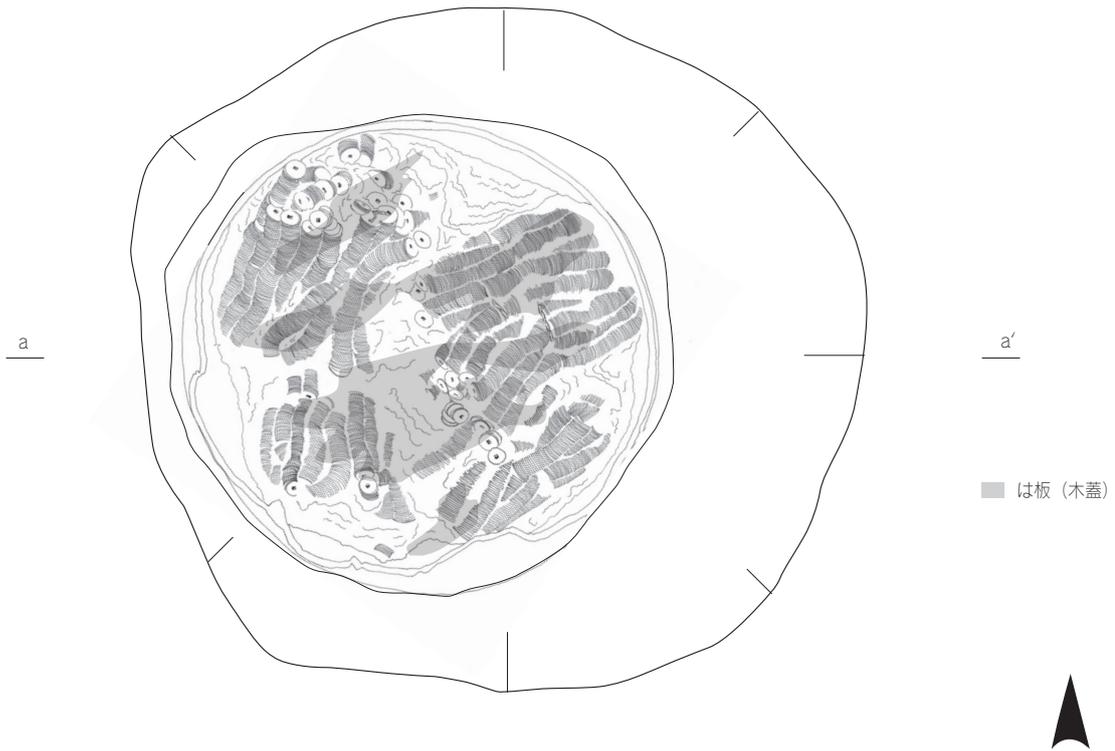
一括出土銭土坑 (SX120101) (第3・4図、図版1・2)

TR1201中央付近の遺物包含層直下で、一括出土銭土坑 (SX120101) を検出し、土坑の掘り込み面から40cm下で、備前焼の甕に4万～5万枚とみられる銭貨を納めた一括出土銭が検出された。土坑の上部の直径は約1.0m、深さは1.0mで、円形に掘り込まれ、底部付近は自然堆積の砂礫層に達して湧水する。埋納容器の甕は備前焼で、最も大きい肩部の直径が約65cm、底部の直径が約20cmで、口縁部は割り取られて失われている。内部の銭貨は、埋納当時の流通形態を良好に留めており、97枚毎にわら紐に通してまとめた「緡銭」の状態に納められている。更にその緡銭が、100個分にあたる約10,000枚をまとめた「十貫文緡」、又は、緡銭80個分にあたる約8,000枚をまとめた「八貫文緡」とみられる高額の流通単位にまとめられている。表面観察から「十貫文緡」が2組、「八貫文緡」が2組、の計4組が重なり合う様に甕に納められており、更にその下に、約1,000枚分をまとめた「一貫文緡」に相当するとみられるまとまりが、少なくとも2組確認できる。以上のことから、甕の内部には、現時点で約38,000枚の銭貨が納められているのは確実に、未確認の部分も含めると、甕内部の銭貨の総数は4万～5万枚と推定される。

埋納容器の備前焼の甕については、口縁部が欠損しているため正確な型式分類が難しいが、①底部から2段目および、4から5段目に、成形時の傾き変化点が観察できる。②還元焰焼成による灰色の焼き色を呈する。③丸底ではないことから、重根編年のIB期（間壁編年のI期）までは遡らず、IIA期の中に収まるとみられる²。このことから、製作時期は13世紀末～14世紀初頭にかかる時期とみられる³。土坑の埋土には甕の破片が全く含まれていなかったことから、埋納当初から口縁は欠損していたとみられ、銭貨を収納する目的に合わせて故意に調整された可能性が高い。

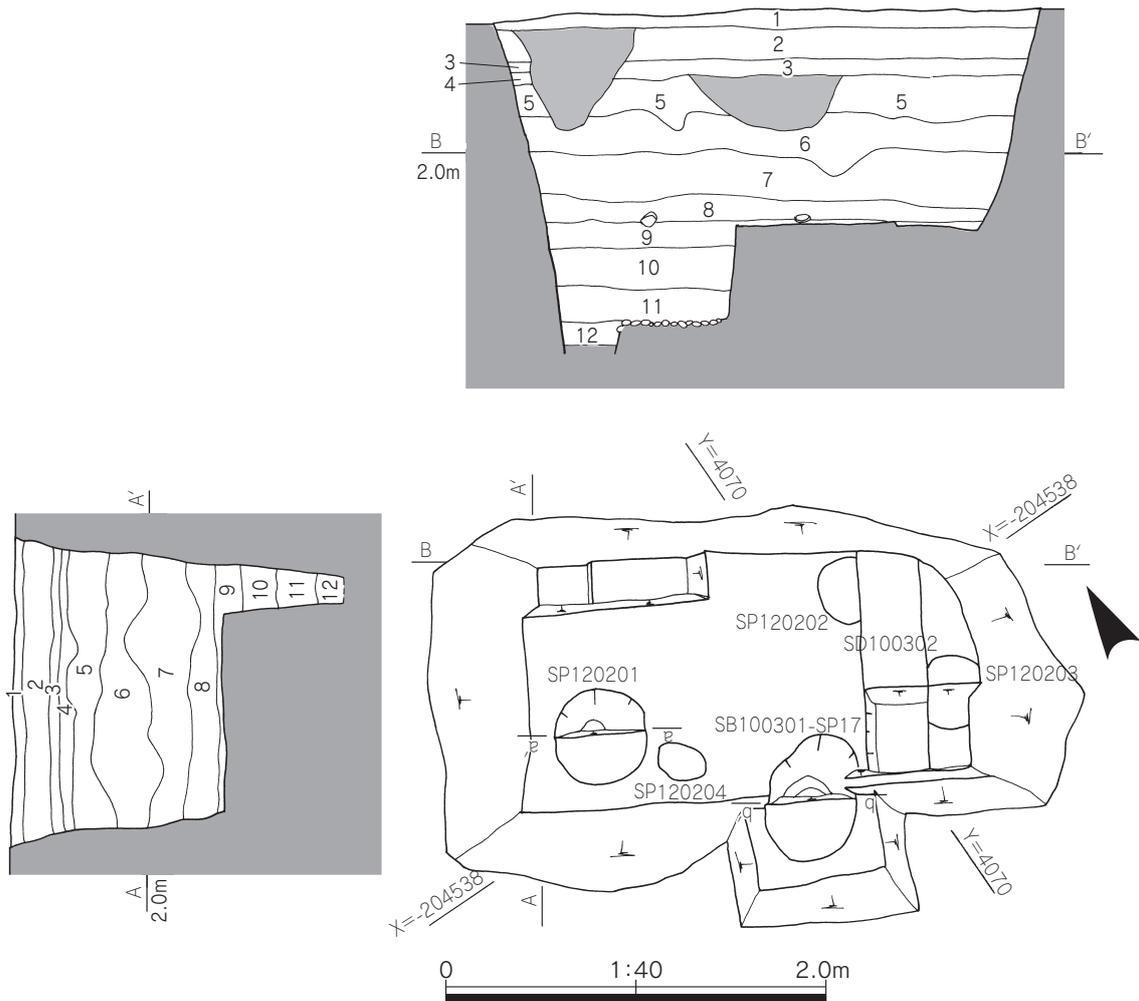
銭貨上面の一部に、蓋とみられる板状の遺物が、銭貨を覆う形で残存していた。材質は杉で⁴、経年の土圧によって銭表面の凹凸に沿って変形するなど、遺存状態は悪かったが、均一な厚みを保っている点や、一定の木目の方向が確認できる事などから、本来は方形あるいは円形の板材とみられる。表面に墨書や特別な加工痕は確認できなかった。銭貨の表面の一部に、緡銭を高額単位にまとめる際に使用された縄の一部が確認できた。この縄状遺物は、十貫文緡および八貫文緡の中央と、そこを中心にして2つに分かれた緡銭の束の真中付近に僅かに残存し、その部分には、縛り付けられていた事を示すくびれが確認できる。縄状遺物は劣化が激しく、ほとんど形状を留めなかったが、わずかに採取された小片の同定から、材質はわらとみられる⁵。

一括出土銭は、第4次調査で検出した後、一旦埋め戻して第5次調査で再度検出し、現地で切り取り作業をおこなった⁶。切り取り作業では、甕周囲の土砂を部分的に取り除き、そこに発泡ウレタンを充填する作業を計9回繰り返し、その過程で土坑の南北方向及び東西方向の断ち割り断面を、記録及び土層剥ぎ取りをおこなった。切り取り作業に伴ってはじめて甕を真横から観察する事が可能になり、甕が土坑の南西側に向って倒れ込む様に傾いている事が判明した。真上から見たとき、甕が土坑の中心から西方向に片寄って見えたのはこの為である。計測した結果、甕底部傾斜角は約30°であった。検出時に甕に縦方向のひび割れが2ヵ所入っていることが確認されたが、切り取り作業中にこの2ヵ所のひび割れが甕の体部まで達している事が確認された。（その後の保存処理の過程で、ひびが底部までは達していない事が確認されている。）2ヵ所のひび割れは、甕の北西部分と南西部分に入っており、南西部分のひび割れは、大きい所で約1mmの幅がある。この2ヵ所には、甕の内面に



- | | |
|------------------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色粘質土 (10YR3/2) オリーブ灰色粘土少し含む。 | I 褐色シルト粘質土 (7.5YR4/3) |
| 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 1の土が混じる。 | II 暗褐色砂質土 (7.5YR3/4) |
| 3 黒色粘砂質土 (10YR3/2) 灰オリーブ色粘土を含む。 | III オリーブ褐色砂質土 (2.5Y4/4) |
| 4 黒色粘土 (10YR3/2) 灰オリーブ粘土を含む。 | IV オリーブ灰色粘土 (5Y5/1) |
| 5 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 土師質土器の出土が見られた。 | V 褐色礫 (10YR4/6) 砂を含む。 |

第4図 一括出土銭土坑 (SX120101) 実測図



- | | |
|--|--|
| 1 表土 真砂土。 | く混じる。 |
| 2 造成土表土、砂、小礫混じる。 | 8 褐色 (10YR4/4) 砂質土。遺物包含層。土器片多く含む。 |
| 3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土。φ20～30mmの円礫を多く含む。 | 9 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト砂質気味。ごく少量の土器片含む。 |
| 4 にぶい黄色 (2.5Y6/4) シルト。礫を含まない。 | 10 暗褐色 (10Y3/4) 細粒砂。無遺物。 |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土炭化物、小礫を含む。 | 11 暗褐色 (7.5YR3/4) 中粒砂。無遺物。 |
| 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土炭化物、小礫を少し含む。 | 12 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粗粒砂にφ50mmまでの礫が混じる。 |
| 7 暗黄褐色 (10YR4/2) 砂質土。φ10mm前後の円礫土器小片が多数混じる。 | 湧水あり。 |

第6図 TR1202実測図

ほぼ無遺物の均質な砂層となり、標高1.1mで自然堆積の礫層（12層）に変わり、この礫層の上面で直径5.0cm大の円礫が平坦な面を形成する。事前の地中レーダー探査で得られた強い反応は、遺構に伴うものではなく、この礫層上面にあたる11層と12層の層界部分での反応であった。

柱穴 (SB100301-SP17) (第6・7・33図、図版4)

トレンチ南壁の直下で、直径50～65cm、深さ55cmの柱穴が検出された。柱穴の底に幅15cmの花崗岩を平らな面を上にして据えた地下式礎石が認められる。花崗岩を用いた地下式礎石は、第3次調査で確認された大型掘立総柱建物跡 (SB100301) の柱穴に見られる工法で、第3次調査で確認された計16個の柱穴 (SB100301-SP01～SB100301-SP16) 全てが地下式礎石を備えている。SB100301の柱間距離は2.4mであることが既に確認されているが、新たに検出された柱穴 (SB100301-SP17) は、SB100301の北辺にあたるSB100301-SP04から、建物主軸方向に2.4m北の延長線上に位置する。これらのことから、新たに確認された柱穴をSB100301に伴う柱穴の一つと断定し、SB100301-SP17とし

た。SB100301-SP17が確認されたことにより、SB100301の建物規模は既知の北辺から柱間1間分(2.4m)北に拡大する事になり、平面規模は、確認できた範囲で、東西4間(9.6m)×南北5間(12.0m)、面積115.2㎡になった。

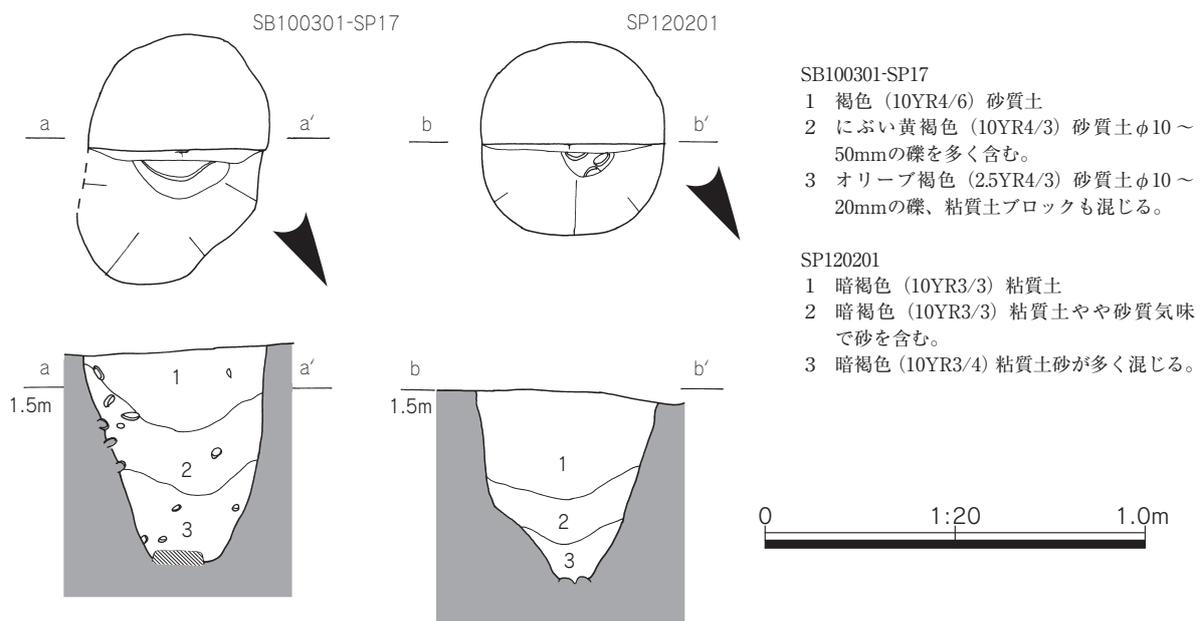
柱穴 (SP120201~120204) (第6・7図、図版4)

SP120201は、標高1.6mの中世遺構面から掘り込まれる、直径48cm・深さ50cmの柱穴である。底に直径5cm大の円礫がある。対応する柱穴は確認できていない。

SP120202およびSP120203は、同じく標高1.6mの中世遺構面で検出された柱穴である。柱穴の一部が溝(SD100302)によって切られている様に見えるが、両者の時期差は小さいと思われ、前後関係の判断は難しかった。SP120204はSP120201に近接する穴で狭小な調査区内でなほ他の柱穴との関係は不明である。

溝 (SD100302) (第6図、図版4)

トレンチ東端で、南北方向に伸びる幅約35cm・深さ約15cmの溝が検出された。この溝は、第3次調査のTR1003で検出された溝(SD100302)と同一遺構とみられる⁷ため遺構番号を同じくした。図面からの検討により、同じ延長線上に存在する事が確認され、検出面の高さ(標高1.6m)・幅・深さが共通する事からも、同一遺構と考えられる。TR1003で確認された溝の南端から、TR1202で確認された溝の北端までを結んだ長さは11.5mである。なお、既刊の報告書(『中津居館跡発掘調査報告書』2012)において、SD100302の検出状況を近世遺構面検出状況として掲載しているが、TR1202では、同一標高から大型掘立総柱建物跡の柱穴を検出できた事など、以降の調査成果から総合的に判断して、SD100302は大型掘立総柱建物跡に近い時期の遺構である可能性が高く、検出面も「中世遺構面」と改めたい。TR1003の調査時に、SD100302を検出した時、大型掘立総柱建物跡の柱穴が検出できなかったのは、中津居館跡の他の調査区と同様に、柱穴等の遺構の輪郭が明瞭に現れ難い事が起因したとみられる。



第7図 SB100301-SP17・SP120201実測図

4 TR1301の成果

中津居館跡には、一辺100mを越す土塁が幅15～20mの規模で矩形に配置され、その基底部がほぼ一周残存している。第1次～第4次調査において土塁の調査を主目的としたトレンチは3カ所設定されており、調査成果から、①護岸工事を思わせる大量の石材を用いた特徴的な土塁構造を備え、少なくとも3段階の築造工程が確認できる事、②調査したトレンチ（北土塁1カ所、南土塁2カ所）では、部分的に多少の相違はありながらも、共通する盛土構造がみられる事、③南土塁の土塁基底部で検出された土器集積100401の一括資料などから、土塁と居館内部の中世面との間に同時期性が認められる事、などが指摘されている。一方で、上記の3段階の築造工程が、時期差を伴う土塁の順次増築・発展過程を示すものか、短期間内の一連の築造作業による工程差を示すものか、の判断については、今後の調査の検討課題とした。

TR1301は、土塁南東隅に、東西10.0m、南北6.0mの扇形のトレンチを設定し、土塁の変遷に関する資料を得る事と、現地の残存土塁と地下遺構との整合の確認による遺跡の範囲確認を目的に調査をおこなった。トレンチ内では、盛土構造の面的な検出を試み、北壁および西壁で土塁の断面構造を確認した。なお、現地は数年前まで竹が繁茂していたが、調査時は全て伐採されており、現況は空き地である。

基本層序

調査区は、土塁外側に向って緩やかに傾斜しており、トレンチ北西隅は、標高3.5m、北東隅は標高2.9mである。地表から-30cmまでは黒褐色の耕作土で、竹や木の根が密集する。この耕作土の直下で土塁盛土構造の上面が検出され、この検出面上に人頭大の花崗岩が点在する。土塁の断ち割り断面には、砂礫、砂、シルトを互層に重ねた盛土構造が確認され、土塁外側では、花崗岩を大量に用いる補強構造が確認できる。

土塁の構造（第8図、図版3・4）

トレンチ北壁および西壁で確認した土塁断ち割り断面の土層を、構築工程から8つのブロックに分割し、古い段階から順に述べる（第8図参照）。A・B・Cは、最も古い段階の盛土で、既往の調査で第一段階としたブロックである。この内、Aは均質なシルトからなり、土塁の外側に向かって落ち込んでいる。Bは、Aに掘り込まれた矢板を抜き取った痕跡である。これと同様の矢板痕は、過去に土塁の断ち割り調査を行った3カ所全てで確認されており、TR1301西壁と同じ南土塁のTR1004で確認された矢板痕の深さは約80cmである。Cは、砂礫とシルトを互層に重ねた人工の盛土である。Cに用いられている砂礫およびシルトは、遺跡周辺の地下の自然堆積層に存在しており、土塁の外側の地面を掘削して盛土したと推察される。なお、北壁の観察において、矢板痕を確認することはできなかった。Dは、均質な中～細粒砂を主体に、おおむね水平方向に堆積した自然堆積とみられる層である。これらの中～細粒砂は、河川（錦川）の氾濫で一帯に運ばれて堆積したとみられ、上記の第一段階の盛土に覆い被さり、除去されずにそのまま土塁の一部に用いられている。Eは均質な中～細粒砂の層の下にシルト層が重なり、さらにその下は粘土層になり標高1.8m付近で一部に花崗岩の集石が検出される。中～細粒砂の層に偽礫がみられる点や、中～細粒砂より下層に、シルト層・粘土層および集石遺構がみられる点で、Dと区別される。ただし、DおよびEの主体となっている、中～細粒砂の土質は殆ど同じであり、Eは、Dの氾濫堆積層を利用しながら加工を加えたものとみられる。Fは、砂礫およびシルトからなる盛土に人頭大の花崗岩が入る。過去に土塁の調査を行った3カ所にお

いて、既存の土塁幅の中心付近の高い位置で花崗岩の集石が検出されており、土塁外側の補強構造とは別の目的で設置された、土塁中心線の石列状の構造があった可能性がある。GおよびG'は、花崗岩を大量に用いた土塁外側の補強構造である。砂礫とシルトを互層に盛土し、盛土の中に人頭大の花崗岩を大量に充填する。G'は、花崗岩の充填がみられない点を除き、Gとの間に土質の大きな違いはみられず、両者は同時に築かれたとみられる。花崗岩を充填するGの63層のみから、14世紀代とみられる備前焼の甕の胴部が出土している。

TR1301内の面的な遺構検出においては、土塁外側の補強構造（GおよびG'）が、現地で確認できる残存土塁基底部の外周ラインに概ね沿う形で検出された。TR1301より外側における補強構造の状況を、今回の調査では確認できなかったが、トレンチ内での検出状況を見る限り、現地の残存土塁基底部および地割が、中世の居館に伴う土塁の分布状況を概ね継承する事が改めて確認された。

5 TR1302の成果

居館が機能した時期の建物跡等の遺構を確認するため、居館内部の南西隅に東西7.0～3.0m、南北20.0mのL字型のトレンチを設定した。このエリアは、中津居館廃絶後に居館の跡地に整備された瑞光寺の本門（土塁南西隅を削平して設けられたとみられる）に近いことから、瑞光寺時代の遺構と、中世の居館内部の遺構の前後関係が確認できる可能性があり、発掘調査成果でも資料の少ない、14世紀後半～17世紀前半にかけての居館の変遷の確認に努めた。試掘調査着手の前年度におこなった地中レーダー探査の成果を、トレンチ設定の際の基準資料とした。

基本層序

地表から-40cmまでは黒褐色の耕作土である。-70cmの標高1.9m付近で、中世の土師器片を多く含む遺物包含層になり、更に包含層直下の標高1.7m付近で中世の溝、柱穴等が検出される中世の遺構面となる。

遺構

溝（SD130201）（第9・10図、図版5）

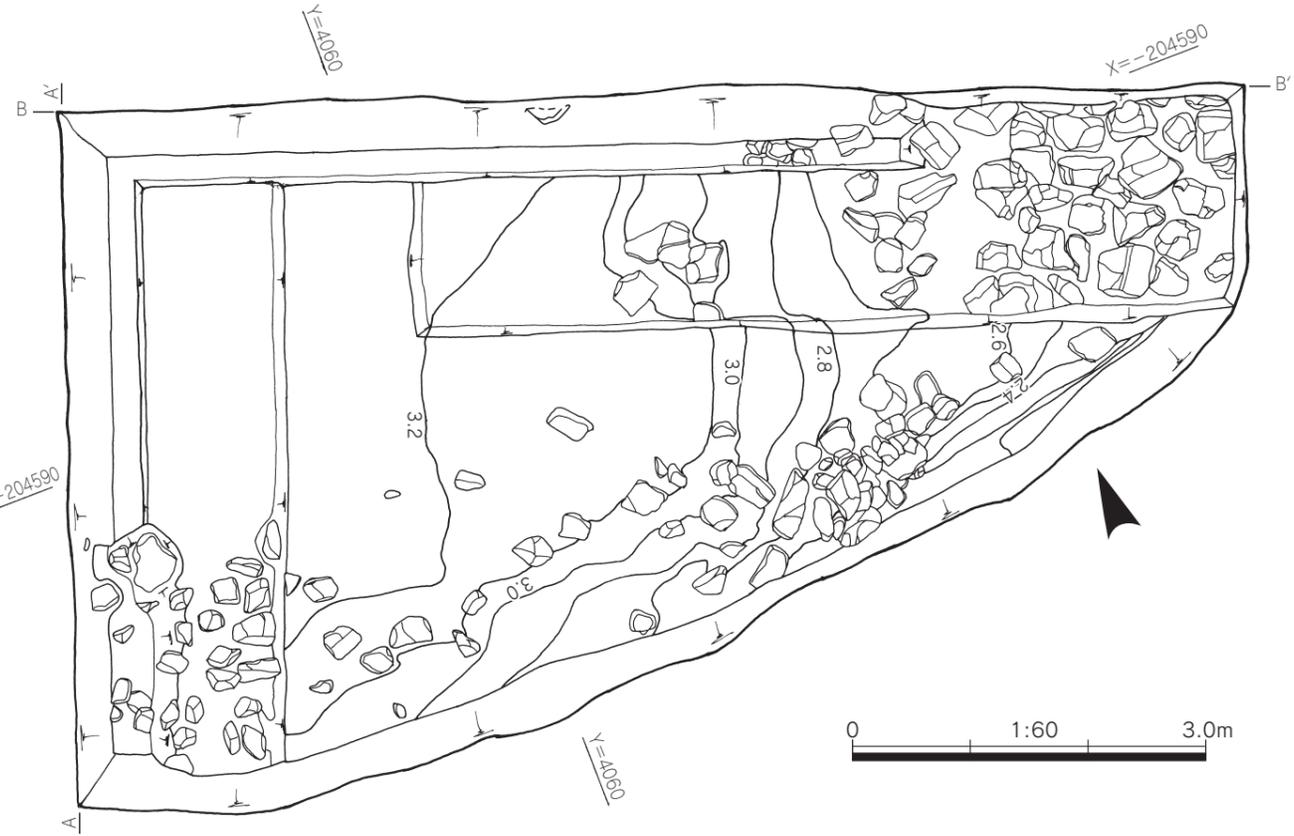
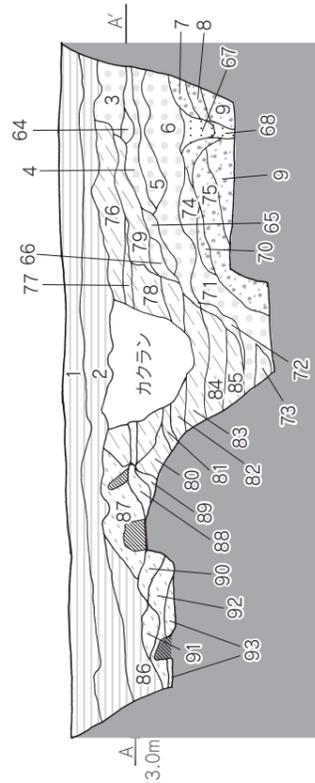
中世遺構面で、西土塁とほぼ平行に設置された溝（SD130201）を検出した。溝の幅は約20cmで、トレンチ内を南北方向に伸びる。調査区内において、溝の北端は近世の井戸跡（SE130201）に切られており、その先の延長は確認できなかった。南方向の延長線は、近世の大型廃棄土坑（SK130201）の下に潜り込む様に伸び、SK130201の底部付近に溝の一部が検出された。確認された範囲における南北方向の溝の延長距離は13.0mである。SK130201の底部で検出された溝跡は、やや南東方向に曲がっていく様子が確認されたため、トレンチ南東隅付近の東壁にサブトレンチを設定してSD130201の延長を追ったが、検出することはできなかった。同様に南方向の延長線上のトレンチ南壁直下にサブトレンチを設けたが、ここでもSD130201の延長を確認する事はできなかった。第3次追加調査のTR1004において、南土塁の内側で今回検出されたSD130201と同様に土塁と平行に伸びる溝（SD100401）が検出されており、これらの溝（SD100401・SD130201）は、土塁と居館内部の境に設けられた区画溝とみられる。

柱穴（SP130201～130203）（第9・10図、図版5）

溝（SD130201）とほぼ平行して柱穴3個（SP130201～130203）が検出された。柱穴は2.4mのほぼ等間隔で南北方向に並ぶが、東側では対応する柱穴は不明瞭であり、西側は残存する西土塁にかかる

TR1301土層凡例

- 1 表土
- 2 表土
- 3 オリーブ褐 (2.5Y4/3) シルト。φ20～30mmの円礫を多く含む。よくしまりかたい。
- 4 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト。オリーブシルトと褐色中～粗粒砂が細かく重なる。軟質。
- 5 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト。シルトに褐色中～粗粒砂が水平方向に入る。φ20～50mmの円礫を含み、よくしまりかたい。
- 6 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト。φ30～40mmの円礫が所々に入る。よくしまる。
- 7 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト。φ10mm程の礫が少し混ざる。粘性強い。
- 8 オリーブ褐 (2.5Y4/3) シルト。均質。φ1cm大の円礫わずかに含む。粘性強い。
- 9 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト。粘性強い。
- 10 暗オリーブ (5Y4/3) シルト。φ50mm程の円礫が所々に入る以外に礫を含まず。
- 11 褐色 (10YR4/4) シルト。やや砂質。φ20～50mm大の円礫多く含む。
- 12 褐色 (7.5YR4/4) シルト。シルトと砂・礫が同じ位の割合で混ざる。非常にもろい。
- 13 暗オリーブ (5Y4/3) 砂礫。φ10～80mmの円礫と砂からなる。非常にもろい。
- 14 褐色 (7.5YR4/4) 砂礫・シルト。シルト・砂・礫が同じ位の割合で混ざる。非常にもろい。
- 15 褐色土 (10YR4/4) シルト。根あり。やや濁りあり。
- 16 オリーブ褐色 (2.5YR5/4) シルト。根あり。やや濁りあり。
- 17 褐色 (10YR4/4) 細粒砂。均質。礫を含まない。
- 18 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト・砂。中粒砂にシルトの偽礫が多く入る。
- 19 黄褐色 (2.5Y5/4) 中粒砂。中粒砂の中に灰色シルトが水平に入る。
- 20 暗黄灰色 (2.5Y4/2) シルト。非常に粘性が強い。少し褐色砂が混じる。
- 21 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂。若干濁りあり。根の痕か。
- 22 褐色土 (10YR4/4) 細粒砂。砂の中にシルトがブロック状に入る。
- 23 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。均質。その中に褐色の斑模が全体に浮かぶ。
- 24 にぶい黄褐 (10YR4/3) 細粒砂。均質。礫を含まない。
- 25 褐色 (10YR4/4) 細粒砂。所々にφ10mm以下の円礫を含む。
- 26 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。粘性強。
- 27 にぶい黄褐 (10YR4/3) 中～細粒砂。砂に一部シルトが積み重なる。自然堆積とみられる。
- 28 褐色 (10YR4/4) 細粒砂。炭色のシルトが混じる。自然堆積とみられる。
- 29 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。東方向斜め下に向かってやや傾いて堆積。
- 30 黄褐色 (10YR5/6) シルト。砂礫を多く含む。φ50mm程の円礫を含む。
- 31 黄褐色 (10YR5/6) シルト。根あり。やや濁りあり。
- 32 にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト。粘性強。やや砂混じり。よくしまる。
- 33 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。粘性強。砂質を帯びる。
- 34 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。粘性強。砂質を帯びる。φ10mm以下の小礫を多く含む。
- 35 褐色 (10YR4/4) 極細粒砂。均質。
- 36 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト。粘性強。中粒砂を多く含む。
- 37 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト。粒子小。やや中粒砂を含む。
- 38 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト。粒子小。細かい根の痕が入り赤味を帯びる。土師器片含む。
- 39 暗黄褐色 (2.5Y5/2) シルト。粒子小。均質。偽礫がみられる。
- 40 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂。均質で礫などを含まない。
- 41 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルトと中粒砂の混合土。φ10mm以下の小礫を多く含む。
- 42 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルトと中粒砂の混合土。41層よりも小礫を多く含む。
- 43 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルトと中粒砂の混合土。やや赤味を帯びる。41・42層と似る。
- 44 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルトと中粒砂の混合土。41・42・43層と似るが、小礫の量が減る。
- 45 褐色 (10YR4/4) 細粒砂。小礫を少量含む。
- 46 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘土。小石や砂を含まない。均質。やや赤味を帯びる。
- 47 暗灰褐 (2.5Y4/2) 粘土。標高2.0m付近の石に被さる。均質。
- 48 暗褐色 (10YR4/6) シルト・砂・礫の混合土。濁りあり。根が入る。
- 49 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂礫。φ10～50mmの円礫を多く含む。もろい。
- 50 暗黄灰色 (2.5Y4/2) シルト。粘性強。均質。所々にφ10～30mmの円礫を含む。
- 51 褐色 (7.5YR4/3) シルト。褐色中粒砂と礫を多く含む。
- 52 褐色 (10YR4/4) 砂礫。φ10～50mmの円礫を非常に多く含む。もろい。
- 53 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト。粘性強。礫を全く含まず均質。
- 54 暗褐色 (10YR3/3) 砂礫。φ10～50mmの円礫を非常に多く含む。もろい。
- 55 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト。φ10～50mmの円礫が少し入る。中粒砂が所々に混じる。
- 56 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂礫。φ10～20mmの円礫を含む。中粒砂の中にシルトがブロック状に入る。
- 57 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト。粘性強。均質。
- 58 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト。中粒砂・円礫の混合土。φ30mm大の礫を含む。
- 59 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂礫。主に中粒砂。シルトを少し含む。φ20mm大の礫を含む。
- 60 褐色 (10YR4/6) シルト。根あり。濁りあり。
- 61 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルトと褐色砂の混合土。φ30～50mm大の円礫を含む。
- 62 黄褐 (2.5Y5/3) 砂礫。φ10mm未満からφ50mmの円礫と砂からなる。
- 63 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細～中粒砂。φ30～50mm大の円礫を少量含む。
- 64 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 極細粒砂。礫を含まない。
- 65 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルトと中粒砂の混合土。φ10～20mmの礫を少量含む。
- 66 褐色 (7.5YR4/4) 砂礫。中～粗粒砂にφ10cm未満の大小の円礫が多量に入る。
- 67 灰黄褐色 (10YR4/2) シルトと中粒砂の混合土。φ20～30mmの円礫を含む。溝状遺構。
- 68 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト。φ30～50mmの円礫が所々に入る。ややにごりあり。
- 69 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト。φ10mm未満の小円礫を含む。
- 70 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトと中～粗粒砂の混合土。φ10mm大の礫を少量含む。
- 71 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルトと中粒砂の混合土。φ30～50mmほどの円礫を含む。

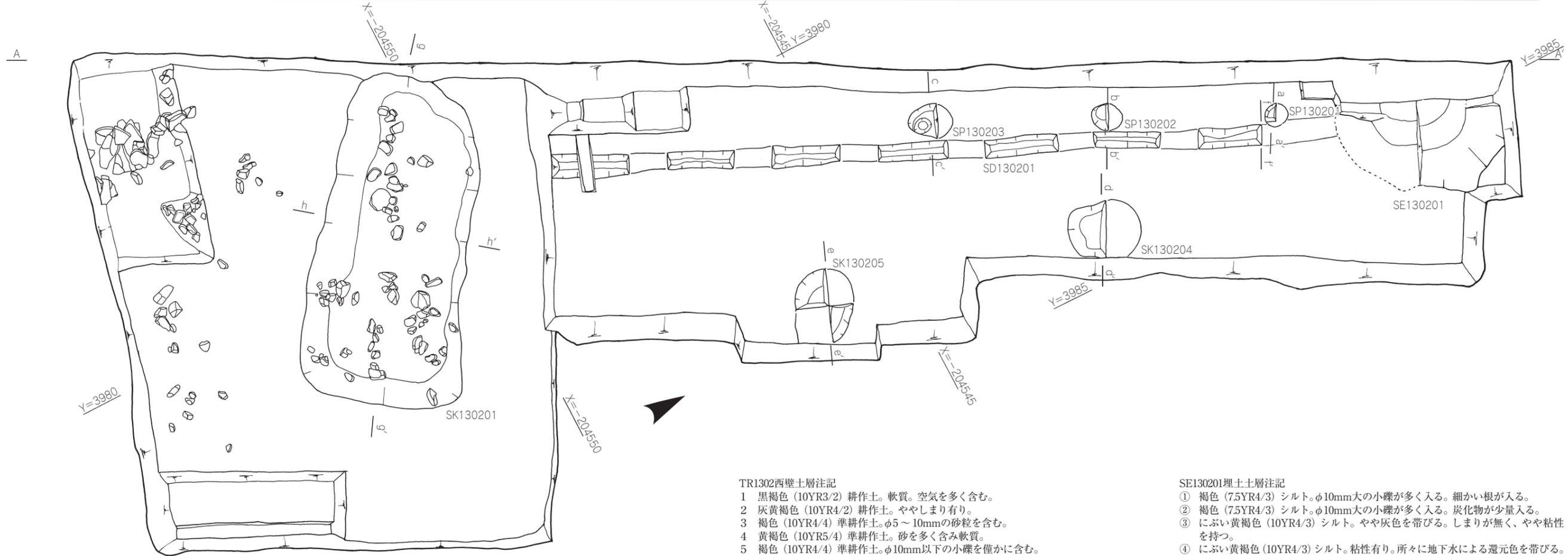
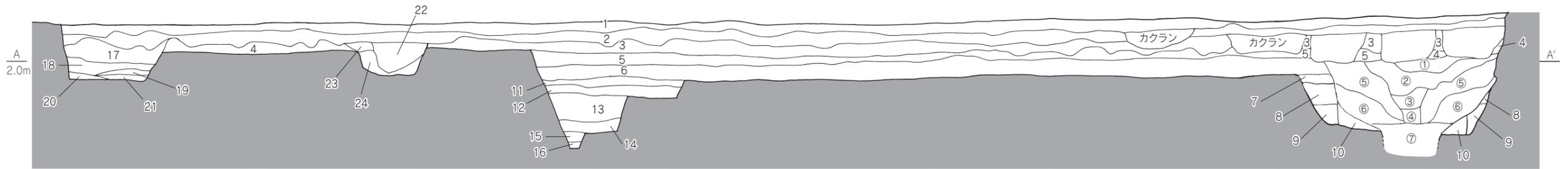


- A
- B
- C
- D
- E
- F
- G
- G'
- H

- 72 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト。φ50mm未満の円礫を少量含む。
- 73 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト。均質。礫を含まない。
- 74 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト。少量の粗砂と小円礫を含み、砂質を帯びる。
- 75 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト。均質。ごくわずかに炭が入る。φ10～20mm大の円礫が少量入る。
- 76 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂。中～細粒砂。均質。
- 77 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細粒砂。炭色のシルトが点々とする。
- 78 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂。均質。ややにごりあり。
- 79 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト。均質。礫を含まない。
- 80 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中～細粒砂。均質。礫を含まない。
- 81 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中粒砂。φ20mm未満の円礫をごく少量含む。
- 82 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中～細粒砂。均質。
- 83 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 極細粒砂～シルト。均質。
- 84 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。均質。やや粘性あり。
- 85 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。均質。やや粘性あり。
- 86 褐色 (10YR4/4) シルト。φ30mm未満の円礫が点々とする。上層の表土と似る。にご

- りあり。
- 87 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト。粘性あり。均質。ごく少量φ10mm大の円礫を含む。
- 88 灰黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂、礫、シルトの混合土。φ50mm未満の礫を多く含む。
- 89 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト。褐色砂と小円礫が部分的に入る。
- 90 灰黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂、シルト、礫の混合土。シルトがφ50mm大のブロック状に入る。
- 91 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂礫。中～粗粒砂とφ50mm未満の礫から成る。
- 92 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂礫。中～粗粒砂と円礫から成る。灰色シルトが帯状に水平の層を成す。
- 93 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト。均質。褐色砂と小円礫が帯状に入る。

第8図 TR1301実測図



TR1302西壁土層注記

- 1 黒褐色 (10YR3/2) 耕作土。軟質。空気を多く含む。
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 耕作土。ややしまり有り。
- 3 褐色 (10YR4/4) 準耕作土。φ5～10mmの砂粒を含む。
- 4 黄褐色 (10YR5/4) 準耕作土。砂を多く含む軟質。
- 5 褐色 (10YR4/4) 準耕作土。φ10mm以下の小礫を僅かに含む。
- 6 褐色 (10YR4/6) シルト。上半部は遺物を含む。砂利や炭化物を僅かに含む。
- 7 褐色 (10YR4/6) シルト。6層に類似する。遺物を伴わない。
- 8 褐色 (7.5YR4/6) シルト。よくしまり安定する。無遺物。
- 9 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中粒砂。自然堆積層。無遺物。
- 10 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂礫。自然堆積層。無遺物。荒粒砂と小礫から成る。
- 11 褐色 (10YR4/6) シルト。濁りあり、少量の遺物と炭化物が混じる。
- 12 褐色 (10YR4/4) シルト。よくしまり、ほとんど礫を含まない。
- 13 褐色 (10YR3/4) φ5～10mmの小礫を多く含む。
- 14 暗褐色 (7.5YR3/4) 中粒砂。均質。
- 15 灰褐色 (7.5YR4/2) 中粒砂。ブロック状に粘土が入る。
- 16 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂礫。湧水。φ50mmの円礫と粗粒砂から成る。
- 17 褐色味を帯びた白・黒の微細な砂粒子のみから成る。粘性なし。
- 18 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘性のある褐色土と砂の混合土。オリーブ灰色土粒が入る。
- 19 17層に類似する。僅かに18層の褐色土が入る。
- 20 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 ややしまり有り。花崗岩片、小石を僅かに含む。
- 21 にぶい黄褐色 (10YR5/4) φ20～30mmのオリーブ灰色土に赤褐色土が混じる。
- 22 褐色 (10YR4/4) 江戸期廃棄土坑。φ30～40mmの礫が大量に混ざる。
- 23 褐色 (10YR4/4) 上層の2層の灰黄褐色耕作土が混ざる。やや砂質。
- 24 黄褐色 (10YR5/6) φ10～20mmの砂礫が入る。やや砂質。

SE130201埋土土層注記

- ① 褐色 (7.5YR4/3) シルト。φ10mm大の小礫が多く入る。細かい根が入る。
- ② 褐色 (7.5YR4/3) シルト。φ10mm大の小礫が多く入る。炭化物が少量入る。
- ③ にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。やや灰色を帯びる。しまりが無く、やや粘性を持つ。
- ④ にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。粘性有り。所々に地下水による還元色を帯びる。しまり無し。
- ⑤ 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト。φ20mm大の小礫が混じる。染付小片1片が出土。
- ⑥ 暗褐色 (7.5YR3/3) 中粒砂。中粒砂にブロック状の粘性土が混じる。
- ⑦ 褐灰色 (10YR4/1) 粘性土。還元色を呈し、しまり無し。



第9図 TR1302実測図

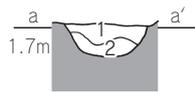
為、対応する柱穴の確認をおこなうことができず、柱穴の性格は不明である。

大型廃棄土坑 (SK130201) (第9・10図、図版5)

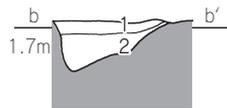
調査区の南側で東西径5.0m・南北径2.0m・深さ40cmの大型廃棄土坑が検出された。土坑最上面は厚さ20cmの粗粒砂で覆われ、その下層で直径5~20cmまでの円礫を大量に含む埋土となり、埋土から、幕末期の陶磁器類・瓦類がまとまって出土した。廃棄土坑としてはかなり大型で幕末の瑞光寺廃寺の前後に、居館内部の整理に伴って一括廃棄されたとみられる。

井戸跡 (SE130201) (第9図、図版5)

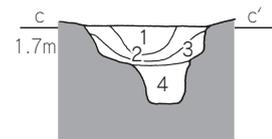
トレンチ北端において、標高1.9m付近で井戸跡(1基)を検出した。検出面では直径2.5mの円形の掘り方が明瞭に確認できる。検出面から80cm下では木枠とみられる直径60cmの円形の有機物の輪郭を検出した。木枠とみられる外側は砂利を多く含む土によって埋められ、内側の埋土はシルトでしまりがない。SE130201の検出地点は西土塁と近接しており、土塁上端との比高差が大きく成り過ぎることや、木枠を確認した付近から地下水が湧出することから、作業の安全確保が困難な為、底部の確認までは行わなかったが、埋土から少量の肥前系染付の破片が出土しており、近世の遺構とみられる。地中レーダー探査では、地表から-1.2m(標高1.5m)の位置で井戸跡に伴う反応を捉え、そこか



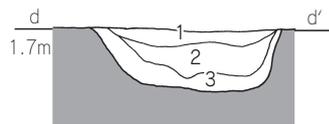
- SP130201
- 1 褐色 (10YR4/4) 粘質シルト明黄褐色土わずかに混じる。
 - 2 褐色 (10YR4/4) 粘質シルト混入物なし。



- SP130202
- 1 褐色 (10YR4/4) 粘質シルト粘質シルト。炭化物を含む。
 - 2 褐色 (10YR4/4) 粘質シルト混入物なし。



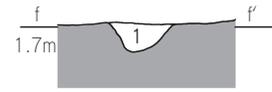
- SP130203
- 1 褐色 (10YR4/4) 粘質シルト明黄褐色土と互層となる。
 - 2 褐色 (10YR4/4) 粘質シルト1より明色で、粘性強。
 - 3 褐色 (10YR4/4) 粘質シルト1よりしまり強。
 - 4 褐色 (10YR4/4) 粘質シルト1より粘性強。色調がややにごる。



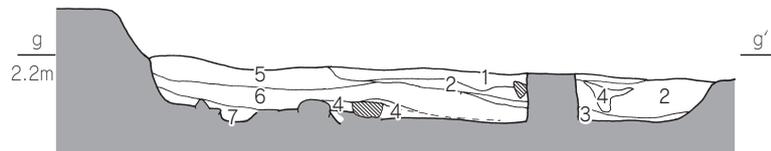
- SK130204
- 1 褐色 (10YR4/4) 粘質シルト
 - 2 褐色 (10YR4/4) 粘質シルト1より色調がややにごる。φ10~20mmの礫少し混じる。
 - 3 褐色 (10YR4/4) 粘質シルトφ20~30mmの礫まじる。鉄分を含む。



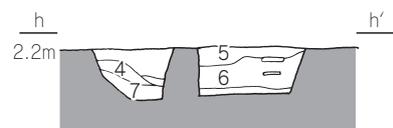
- SK130205
- 1 黄褐色 (10YR5/6) 粘質シルトしまりあり。炭化物少し混じる。



- SD130201
- 1 黄褐色 (10YR4/6) 粘質シルト礫を含む。



- SK130201
- 1 灰白色 (N7) 砂質土にぶい褐色土混じる。
 - 2 灰白色 (N7) 砂質土。
 - 3 灰白色 (N7) 砂質土灰黄褐色土混じる。
 - 4 黒褐色 (10YR2/2) 土具が多く混じる。
 - 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 土しまり弱。
 - 6 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土。礫混じる。
 - 7 明黄褐色 (10YR6/6) 土。やや砂質。



第10図 TR1302遺構実測図

ら-3.0m（標高-0.3m付近）まで反応が連続して確認されている事から掘り込みの深さを推測する事ができる。なお、断ち割り断面の観察から、一度埋まった後に掘り直した形跡が少なくとも1回確認できる。

6 TR1401の成果

居館に伴う建物等の遺構を確認する目的で、居館内部の中心に近いエリアに東西10m×南北9m（一部拡張区有り）の四角形のトレンチを設定した。このトレンチの西辺は、第4次調査のTR1201に接しており、一括出土銭と同時期の遺構の存在も期待された。

基本層序

地表から-40cmまでは黒褐色の耕作土である。-70cmの標高1.9m付近で、中世の土師器片を多く含む遺物包含層になり、更に包含層直下の標高1.7m付近で中世の溝、柱穴等が検出される遺構面となる。

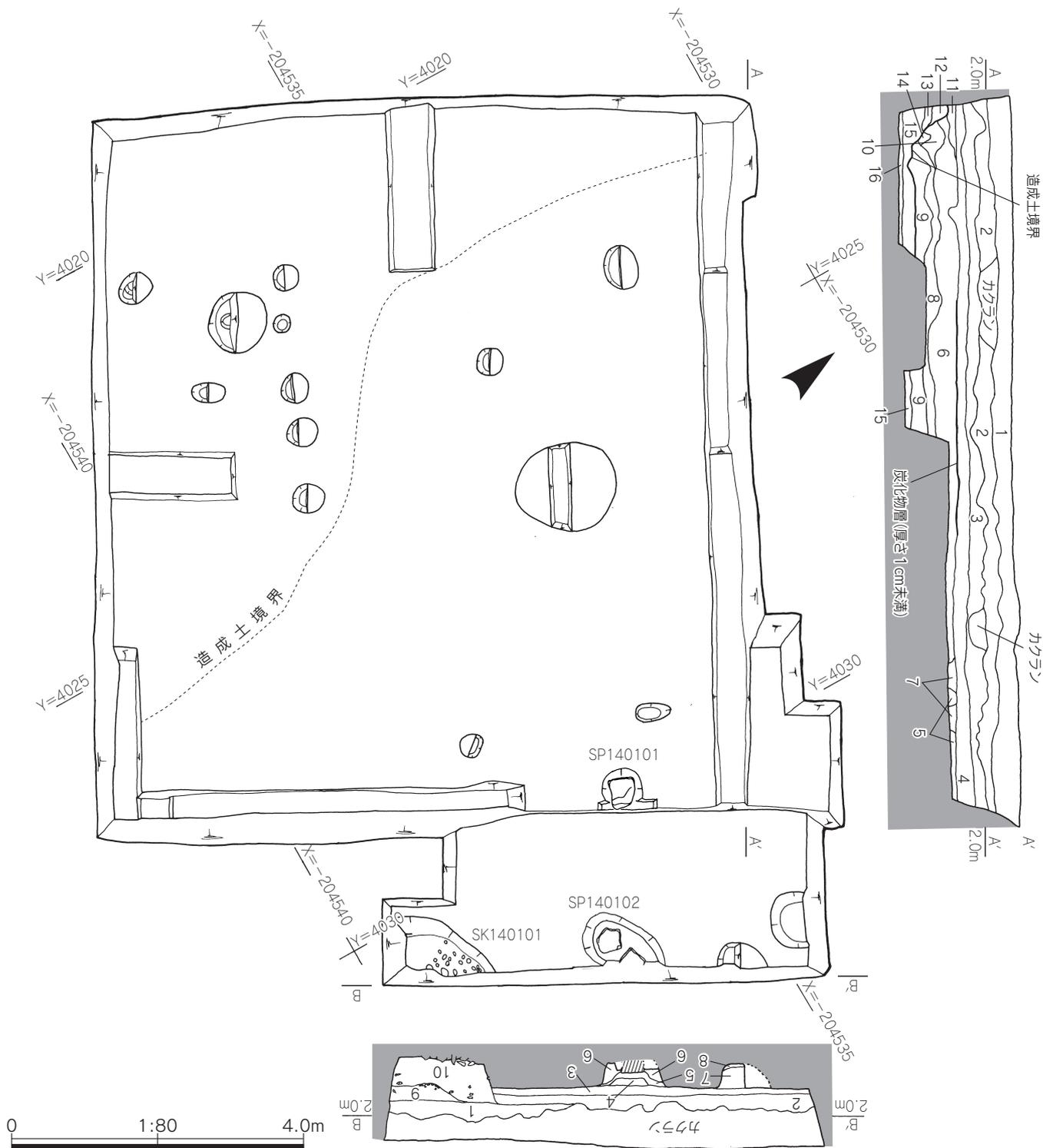
遺構

SP140101・SP140102（第11図、図版6）

トレンチの北東隅付近で柱穴の底に礎石を伴う柱穴2個が検出された（SP140101・SP140102）。2個の柱穴は東西方向に並んで検出され、西側のSP140101は柱穴上端の直径が東西約50cm×南北53cmで、柱穴の底に上面の平らな花崗岩1個をほぼ水平に据える。東側のSP140102は、柱穴上端の直径が東西約70cm×南北約100cmの柱穴の底に、上面の平らな花崗岩2個を据える。2個の礎石の内東側の礎石は若干傾いている。これら3つの礎石の上面は、標高1.4mに±3cmの範囲内に収まっており、後述する共通点などからも、同一遺構の柱穴とみられる。なお、TR1401内で、この2個の柱穴に対応する柱穴の有無を入念に確認したが、検出する事はできなかった。理由として、①居館内部を仕切る門の遺構である可能性、②対応する柱穴の礎石が抜き取られた可能性、が考えられる。①については、SP140102はトレンチ東壁にかかっており、そこから東に約30cmの場所に、居館の南北方向中心軸を貫く幅120cmの道が通っていることから、現在まで残るこの道が、居館の中心軸線を踏襲していれば、道を跨ぐ門があった可能性が考えられる。②については、近世の土坑SK140101が柱穴を掘りぬいた可能性が有る。

いずれにしても、公共の道路による制約から今回調査範囲を広げることができなかったトレンチの東側に、SP140101およびSP140102と関連する遺構が存在する可能性が高く、遺構の性格も今後の調査・研究によって、より正確に判断されるべきと考える。

柱穴の底に花崗岩を据える工法（地下式礎石）は、中津居館跡の第3次調査で見つかった大型掘立総柱建物跡（SB100301）でも確認されており、今回見つかったSP140101・SP140102はSB100301とは別遺構である事から、中津居館跡内部における地下式礎石を用いた2例目の建築物とみられる。2カ所の柱穴の中心付近を結んだ距離は約2.2mで、軸線方向は東西座標軸から約28°傾く。柱間距離については、SP140102に2個の礎石があり、それぞれの礎石の中心とSP140101の礎石中心とを結んだ距離は、2.1m及び2.4mである。柱間距離と軸線方向の傾きについて、第3次調査で見つかった大型掘立総柱建物跡（SB100301）では、柱間距離が約2.4m、主軸の傾きが真北から東に28°の傾斜であり、SP140101・SP140102の実測数値とほぼ一致する。これ以外に、柱穴の検出面の標高（H=1.6m）および、柱穴の底に据えられた花崗岩の特徴（長辺約30cmの不整形の角礫を用いる）、などの共通点



TR1401土層注記

- 1 暗褐色 (10YR3/3) シルト。表土。耕作土。
- 2 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト。細粒砂含む。上層の表土が多く混じる。木炭を含む。
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。直径1cm大までの円礫を少量含む。
- 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。土師器片多く含む。よくしまる。
- 5 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト。遺物を殆ど含まない。所々に灰オリーブ色の偽礫がまじる。
- 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂混じりシルト。1cm大の円礫少量まじる。土師器片少量。
- 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト。均質。土師器片・木炭ごく少量含む。
- 8 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂混じりシルト。土師器片少量含む。
- 9 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂まじりシルト。中粒砂及び1cm大の円礫多い。
- 10 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト。均質。
- 11 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂まじりシルト。1cm大円礫を少量含む。
- 12 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘土。マンガンの斑紋現れる。
- 13 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粗粒砂。マンガンが褐色のまだら模様を呈す。
- 14 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 砂礫。粗粒砂と5cm大以下の円礫から成る。

第11図 TR1401実測図

がみられることから、SP140101・SP140102と大型掘立総柱建物跡（SB100301）は、同時期に共通の基準のもとで、計画的に配置された施設と考える事が妥当である。一方で、礎石上面の標高は、大型掘立総柱建物跡（SB100301）の柱穴で平均して標高1.0m付近だったのに対し、SP140101・SP140102では標高1.4mに据えられており、相対的に柱穴が浅いという相違点がみられる。現在確認できている柱穴の構成から、SP140101・SP140102の上部構造物は、大型掘立総柱建物跡（SB100301）より小規模だった可能性が高いとみられることから、上部構造物の規模および重量によって、柱穴の深さを変えた可能性が考えられる。

SK140101（第11図、図版6）

標高1.8m付近から掘り込まれ、確認できた範囲で、東西80cm×南北140cm×深さ60cmである。底部には直径5～10cm大の円礫が集中する。肥前系染付、瓦などが出土し、近世の瑞光寺にともなう廃棄土坑である。

造成痕跡

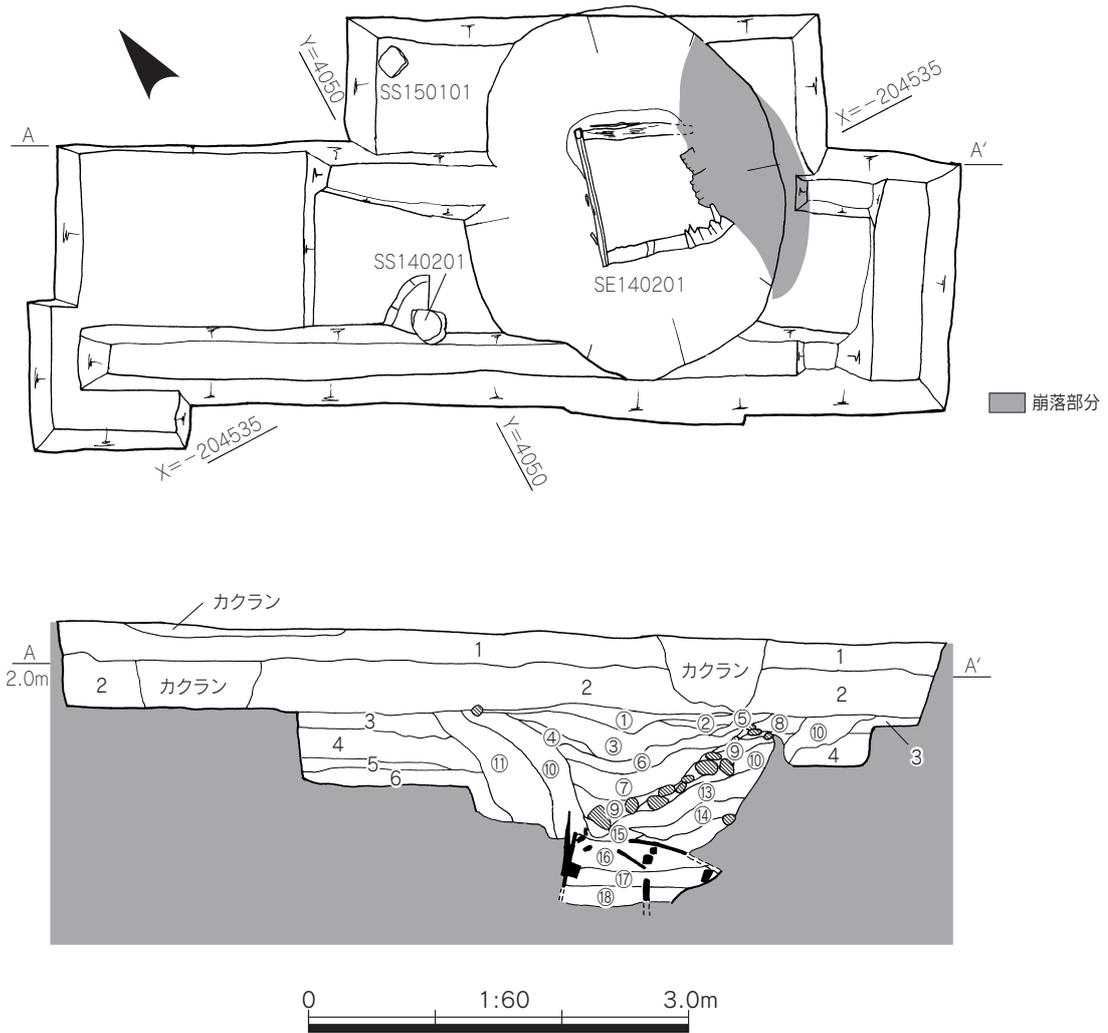
トレンチ北壁および南壁の土層断面で標高約1.6m～約1.0mにかけて、斜めに落ち込む土層の境界が確認された。この土層の境界は、トレンチ内における標高1.5m付近の遺構検出面直下にも面的に検出された。土層の境界より西では、概して褐色シルトからなる水平方向の堆積が確認され、遺構検出面より下層の標高1.6m以下ではほぼ無遺物である。これに対し、土層の境界より東では、標高1.6m～1.1m付近まで、堆積状況が乱れ、少量ではあるが土師器の碎片および木炭の小片が所々に混入する。上記の観察結果から、土層断面および平面検出によって確認された土層の境界より西側では、（居館が築かれる以前に多少の生活層があるにしても、）標高1.6mより下層はほぼ無為物^{*1}であるのに対し、東側では何らかの理由でもともと窪んでいた場所を、人工的に整地した可能性が推測できる。つまり、北壁土層断面における6層、7層、8層、9層は人工的な造成土であり、居館が築かれる直前に、土層の境界より西側の地面を削平し、東側に搬入して、高低差を解消した可能性が考えられる。中津居館跡の居館内部において、土地造成によると見られる痕跡が確認されたのはTR1401がはじめてであり、この様な土地造成が居館内において他にもおこなわれていたのか、おこなわれたとすればどの程度の規模だったか今後の調査において注視する必要がある。

7 TR1402・TR1501の成果

この調査区は、第6次～第7次調査の2カ年にわたって調査をおこなった。調査区内で確認された遺構は、中世の井戸跡1基、礎石2カ所である。調査区の位置は、居館の中心付近に近く、第3次調査で大型掘立総柱建物跡（SB100301）が確認されたTR1003-2と10m程しか離れていない。第6次調査において、東西7m・南北2mのトレンチ（TR1402）を設定して調査した結果、トレンチの北壁で半載する状態で井戸跡1基を検出し、井戸南半の井戸枠上端までを確認した。翌年の第7次調査で、トレンチを北に拡張して井戸全体を検出した。

基本層序

地表から-40cmまでは黒褐色の耕作土である。標高1.7m付近で、中世の土師器片を多く含む遺物包含層になり、更に包含層直下の標高1.6m付近で中世の井戸跡、礎石が検出される遺構面となる。



- 1 暗褐色シルト (10YR3/3) 炭化物・砂礫混じる。
- 2 褐色シルト (10YR4/6) φ10mm前後の円礫が少し混じる。やや砂質。土師器片含む。
- 3 にぶい黄褐色シルト (10YR4/3)。炭化物少し混じる。
- 4 灰黄褐色砂礫 (10YR4/2) 砂礫。しまり強。φ10mm前後の礫が多くまじる。
- 5 暗オリーブ褐色粗砂 (2.5Y3/3) 粗粒砂。自然堆積層。
- 6 暗灰黄色砂礫 (2.5Y4/2)。φ10~20mmの円礫と粗粒砂からなる。

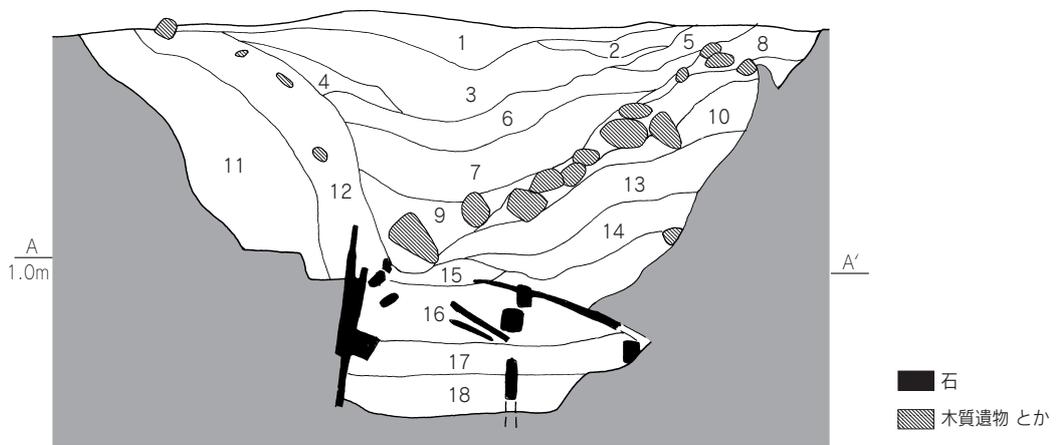
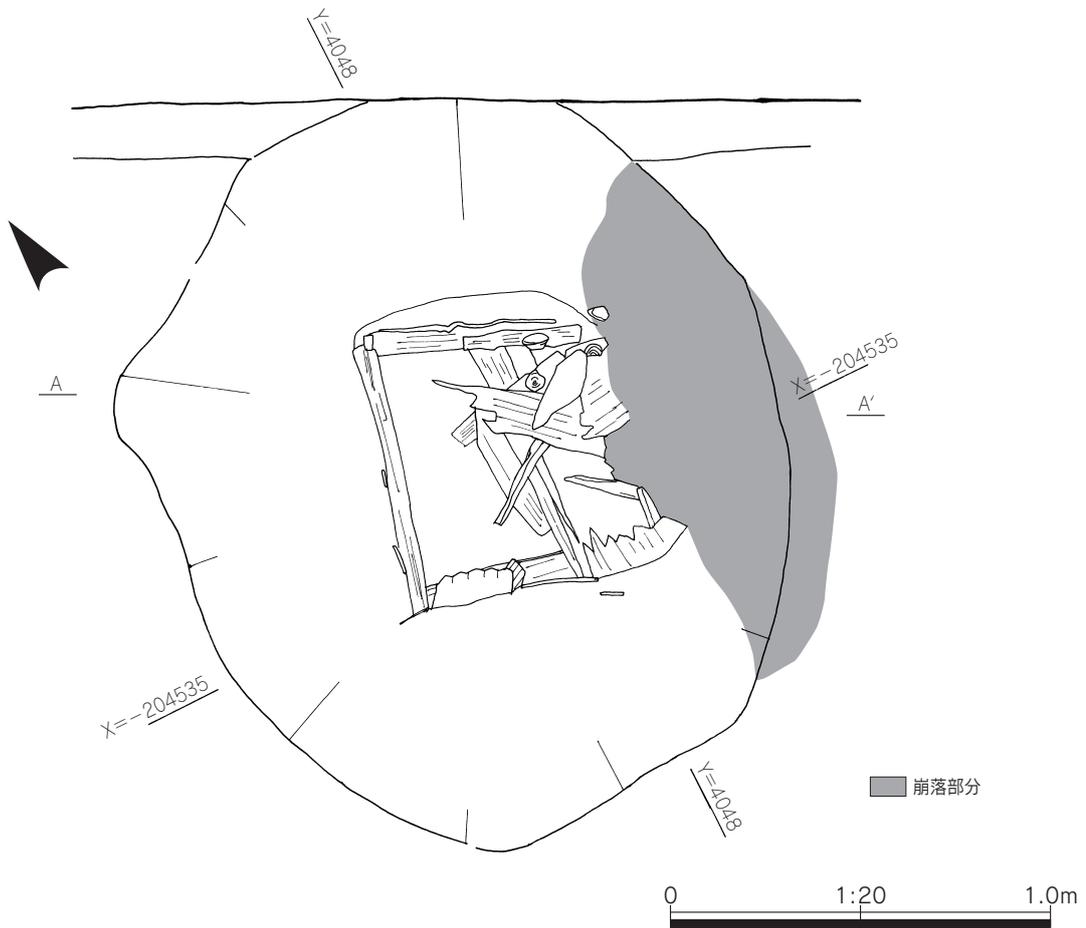
①~⑱ SE140201埋土 (第13図参照 1~18)

第12図 TR1402・TR1501実測図

遺構

井戸跡 (SE140201) (第12・13図、図版7・8)

標高1.62m付近の中世遺構面で井戸埋土の上面を検出した。埋土には土師器・陶器・金属製品・木炭が非常に多く含まれており、標高1.0m付近の湧水点より下層では木製の井戸枠および木製品が残存している。検出面における井戸埋土は東西方向の中心線で約4.0mの範囲に広がっており、この検出面で遺構の輪郭を明瞭に捉える事はできない。後述するように井戸は廃絶時に井戸東面を中心に大きく崩壊しており、上部構造はこの時点で殆ど失われていたとみられる。標高0.7mより下層には井



- | | |
|---|--|
| <p>1 におい黄褐色 (10YR4/3) シルト。礫 (φ10~20mm、50mm) を多く含む。</p> <p>2 暗褐色 (10YR4/3) シルト。炭片を含む。</p> <p>3 におい黄褐色 (10YR4/3) シルト。礫 (φ20mm前後) を含む。遺物、炭片を多く含む。</p> <p>4 暗褐色 (10YR3/4) シルト。礫 (φ10 ~ 50mm) を含む。花崗岩質のものが多い。</p> <p>5 暗褐色 (10YR3/4) シルト。やや砂質気味。礫 (φ20mm) を含む。遺物を多く含む。</p> <p>6 暗褐色 (10YR3/4) シルト。礫 (φ30mm) を含む。遺物、炭灰を多く含む。</p> <p>7 暗褐色 (10YR3/3) シルト。礫 (φ10mm) を含む。遺物、炭灰等多量に含む。全体的にススを含む。</p> <p>8 暗褐色 (10YR3/4) シルト。やや砂質気味。礫 (φ50 ~ 100mm) を多く含む。</p> <p>9 黒褐色 (10YR3/2) シルト。遺物、炭灰を多く含む全体が黒ずむ。被熱を受けた石が多く見られる。</p> | <p>10 暗褐色 (10YR3/4) シルト。礫 (φ10 ~ 20mm) を含む。遺物、炭を非常に多く含む。</p> <p>11 褐色 (10YR4/4) シルト。礫 (φ5 ~ 10mm) を多く含む。しまりあり。</p> <p>12 褐色 (10YR4/4) シルト。φ10 ~ 20mmの円礫を含む。φ100mm未満の円礫が少量入る。</p> <p>13 褐色 (10YR4/4) シルト。礫 (φ10 ~ 30mm)、炭片を含む。</p> <p>14 におい黄褐色 (10YR4/3) シルト。中粒砂含みやや砂質気味となる。φ10 ~ 50mmの円礫を含む。</p> <p>15 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト。φ10 ~ 50mmの円礫を含み、やや砂質。</p> <p>16 黒色 (5Y2/1) 粘土。礫 (φ100 ~ 150mm) 9層よりの流れこみか) を少し含む。砂礫 (φ2 ~ 5mm) を多く含む。</p> <p>17 黒色 (5Y2/1) 粘土。しまり弱、砂礫 (φ2 ~ 5mm、φ10 ~ 20mm)、15層より多く含む。植物質、動物遺体 (貝) を含む。</p> <p>18 灰色 (10Y6/1) 粗砂。砂礫 (φ2 ~ 5mm、φ10 ~ 20) を多く含む。植物質を含む粘土が直下に堆積する部分を確認する。(埋設物の可能性)</p> |
|---|--|

第13図 SE140201実測図

戸枠が残っており、縦板（幅約20cm・厚さ約2cmの板材）・支柱（1辺約10cmの角材）・横棧（1辺約10cmの角材）を組み合わせた縦板組横棧留めの形式である⁹。井戸枠の規模は、内径が横棧の内側で約0.9m、縦板の外側では約1.1mの正方形で、東面および南面の縦板は外側から内側に向かって倒れ込む。調査では標高0.3m付近まで井戸枠内の確認をおこなったが、底部に曲げ物・石敷き等の構造は確認できなかった。標高0.3m付近で井戸枠内のほぼ中心に、直径3cmの丸棒が垂直に立てられており、さらに下層まで埋まっていたが、湧水により正確な調査が困難なため、下層の調査はおこなわなかった。

井戸埋土を掘り下げる過程で、土師器杯および椀・陶器・金属製品・木製品・炭化種子等が出土し、これらの遺物の年代観から、井戸（SE140201）は14世紀前半に廃絶したとみられる。井戸の縦板は東面および南面が内側に倒れ込み大きく崩壊しているが、埋土の土層断面の観察からも、廃絶時に直径20cm前後の花崗岩・木炭・土師器等の遺物を密に含んだ黒褐色シルトが東側から井戸中心部に向かって流れ込んでいる様子が確認された。井戸跡から東に約10mの距離のTR1003-2で火災痕跡は確認されておらず、TR1402・TR1501内でも同様に火災痕跡は確認されていないことから、埋土に含まれる炭や遺物は、井戸廃絶に伴う儀礼の痕跡の可能性が高いとみられる。仮に、木炭・土師器・花崗岩等を最も多く含む9層・10層を廃絶儀礼によって生じた焼土層と捉えた場合、東側から倒れ込んだ井戸縦板よりも下層（15・17・18層）では、焼土や花崗岩が極端に減ることから、廃絶儀礼以前に、井戸東側の崩壊があったと考えられる。崩壊の直接の要因は不明である。

礎石（SS140201、SS150101）（第12図、図版8）

井戸跡（SE140201）の井戸枠から約1.5m西の位置で、標高1.6mの遺構検出面に据えられた礎石2個が検出された。礎石の間の距離は2.4mで、隣接する大型掘立総柱建物跡（SB100301）の柱間距離と一致する。また、2つの石を結んだ直線方向は、井戸跡（SE140201）の主軸方向とほぼ一致する。2つの礎石はいずれも一辺20～25cmの花崗岩で、平らな面を上に向けて据えられており、上面は標高1.53mと1.56mでほぼ同じである。井戸跡に伴う覆い屋の礎石の可能性も考えられるが、対応する礎石は確認できていない。

-
- 1 地中レーダー探査の成果については本書V章「地中レーダー探査の成果について」を参照。
 - 2 重根弘和「中世の備前焼」（備前市歴史民俗資料館紀要7『備前歴史フォーラム資料集「備前焼研究最前線II」～備前焼、その歴史、今まで何がわかって、何がわからないのか～』2005年）
 - 3 備前焼の甕の制作時期については、備前市教育委員会の石井啓氏の御教示による。
 - 4 平成25年度に実施した板状遺物の保存処理業務委託（受託者：株式会社吉田生物研究所）に伴いおこなった樹種同定の結果による。
 - 5 銭貨を高額単位にまとめていたとみられるこも片、および銭銘判読作業に伴って得られた緞紐の同定結果はV章P63～の「出土銭緞・こも片の分析」に掲載した。
 - 6 第4次調査における一括出土銭の検出以降の、切り取り及び保存処理、銭貨の調査の経緯については別に述べる。
 - 7 岩国市埋蔵文化財調査報告第1集『中津居館跡（旧加陽和泉守居館跡）』2012年岩国市教育委員会 III章遺構編 P19
 - 8 註7に同じ。
 - 9 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』1996. P54

IV 遺物

1 出土遺物の概要

今回の調査では、13世紀後半～14世紀前半を中心とした中世の遺物と近世以降の遺物に大別される。中世遺物は土師器、陶器（常滑・備前）、中国陶磁、鉄製品、木製品、銭貨、貝類、炭化種実である。一括出土銭土坑SX120101と井戸SE140201からまとまった量の遺物が出土している。

SX120101は今回の報告のなかでは特筆すべき成果である。その詳細については遺物観察表と後述の櫻木晋一氏の考察で紹介し、この章では概要のみを記述する。

SE140201は土師器、陶器、金属製品、木製品が出土しており、今回報告の中世遺物の大半を占めている。中世土師器は前回報告の一括廃棄土坑SK100310に並ぶ出土量であり周防東部の当該時期の土器様相を考える上でも重要な資料となった。陶器は常滑と備前の製品が出土しており、常滑は本遺跡で初めての出土である。中国陶磁は、青磁、白磁、天目が出土している。鉄製品は各調査区で鉄滓が確認され、これまでの調査においても少量ながらも出土している。製品については釘のほか鎌、加工痕跡が残る鉄片が出土している。木製品はSX120101で銭が納められていた備前甕を蓋していた板状木製品のほかはすべてSE140201からの出土である。箸状木製品のほか、折敷、付け木、柄杓の底板、杭、下駄部材、不明木製品、井戸枠部材が出土した。多量の木製品の出土はこれまでの報告にはなかったため、居館内の様相を考えるうえで重要な資料となった。貝類、炭化種実についてもSE140201からの出土で炭化種実については井戸の底面付近の埋土を採取して水洗選別を行い検出したものである。穀類だけでなくマメ科、シソ科のものも確認されており、中世の食生活の一端を伺うことが出来た。

中世遺物は前回の報告より出土量は少ないものの煮炊具、貯蔵容器、木製品等多岐にわたっており居館内での様相をより詳細にするものとなった。

近世の遺物は土師器、陶磁器、土製品、石製品、鉄製品、動物遺体が出土しており、とくに土坑SK130201からの出土が顕著である。多量の近世遺物が出土しているが今回の報告では近世の陶磁器に関しては主要なものに限定している。

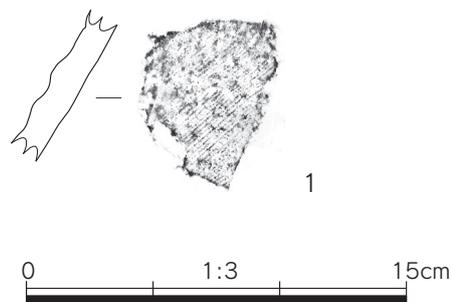
2 土器・陶磁器・土製品

(1) 弥生土器（第14図）

今回の調査では1点、弥生土器が出土している。TR1201の包含層より出土し遺構に伴うものではなかった。

14-1は弥生土器の甕である。体部下半の底部付近の破片でタテ方向にハケメが付されている。時期は弥生時代中期と考えられる。

本遺跡では平成21年度調査のTR1001およびTR1003からの出土があり¹、居館の立地する三角州上で弥生時代の遺跡が存在する可能性が看取出来る。



第14図 遺物実測図① 弥生土器

(2) 中近世土師器

① 井戸SE140201出土中世土師器 (第16図 図版9)

SE140201からは中世の土師器が掲載出来なかったものも含め50個体以上出土している。器種は皿、椀、杯、鍋が確認された。

1～7は皿である。ロクロ成形で底部には回転糸切り、ヘラ切りの痕跡が残る。内側は強いナデによって内側が盛り上がる形状をもつものがみられる。8～10は椀である。底部が平底で、底部から外湾して伸び上がり、口縁端部はやや丸みを呈する。底部は回転糸切り、ヘラ切りの両方の痕跡が見られる。8は同時期の瓦器に形状が似ており、伏せ焼き痕跡も確認できる。11～26は杯である。椀と同じくロクロ成形で底部は糸切りである。形状は平底で底部から外傾して直線的に伸びるもの、口縁部付近でやや外反気味となり喇叭状に呈するものが見られる。整形はヨコナデであり、体部中位で器面を窪ませるような強いナデもみられるものがある。27は鍋である。内外面ともにヨコハケをほどこす。形状は口縁部分で屈曲し、受口状となる。外面には体部上半を中心にススの付着がみられる。

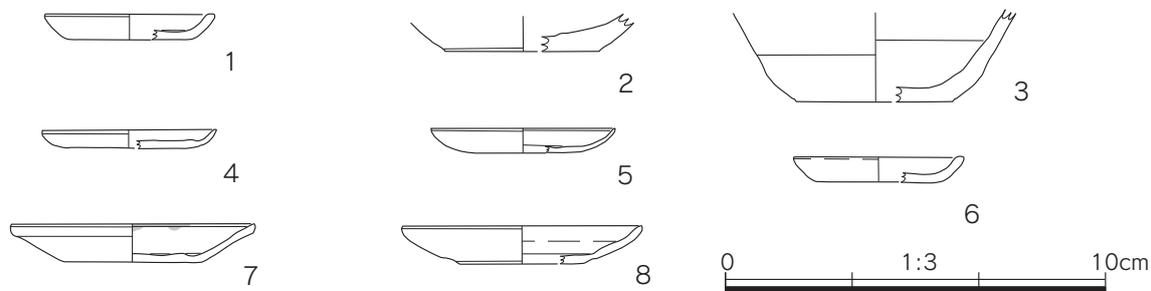
時期は相伴する常滑や備前等の検討も含めて14世紀の第一四半世紀にあたりと考えられる。詳細な年代観については総括で述べる。

② その他出土の中世土師器 (第15図 図版9)

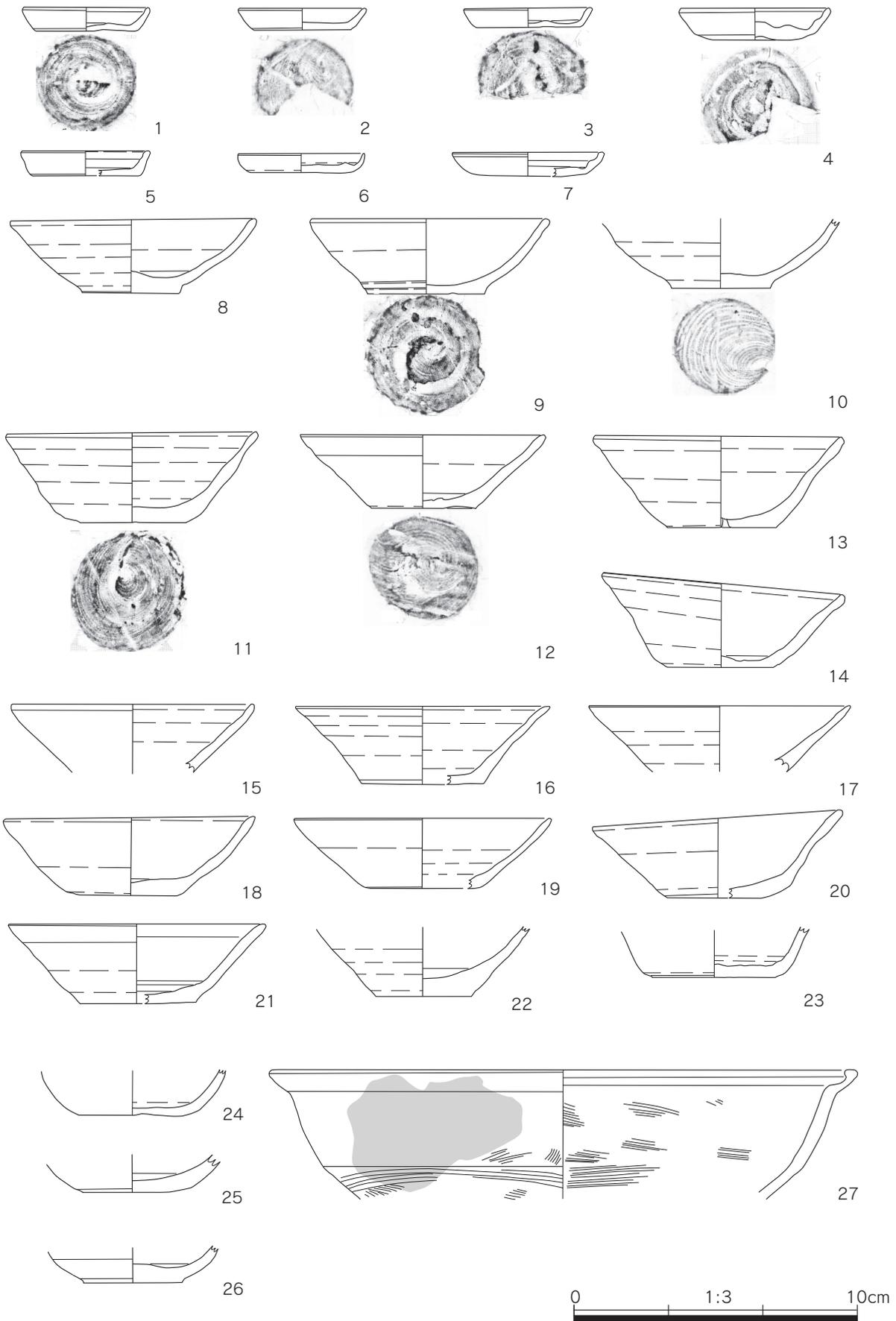
TR1201、TR1301から中世土師器が出土している。細片が多く皿1点、杯2点を掲載した(15-1～3)。1は皿である。ロクロ成形で、底部には糸切り痕が残る。体部下半に強いナデ、口縁端部はヨコナデをほどこし整形しているためSE140201で出土した土師器皿と同様である。2、3は杯でロクロ成形で底部には糸切り痕が残る。底部より外傾する体部がつくられている。概ね時期はSE140201の中世土師器と同じく14世紀の第一四半世紀と考えられる。

③ 近世土師器 (第15図 図版9)

SK130201からの出土している。5点の皿を掲載した(15-4～8)。皿はロクロ成形であり、径7cm前後と10cm弱の2種類の法量が確認出来る。4～6は法量の小さな皿で、7、8は法量の大きな皿である。中世のものより薄作りであるが基本的にヨコナデにより整形している。時期は出土した陶磁器等の遺物から18世紀を前後する時期と考えられる。



第15図 遺物実測図② 中近世土師器

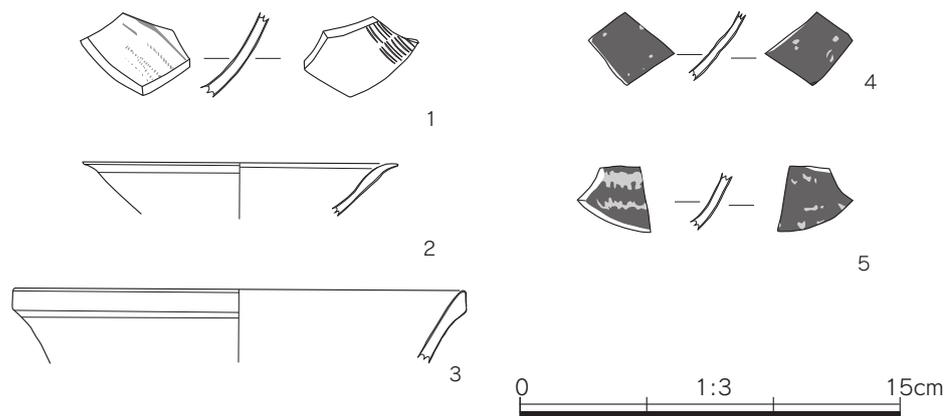


第16図 遺物実測図③ SE140101出土中世土師器

(3) 中国陶磁 (第17図 図版10)

少量であるが
TR1302の包含層、
SE140201で青磁、
白磁、天目が5点
出土している。

1はSE140201か
ら出土した青磁で
ある。碗の内側
には櫛目描文、外側
には櫛描文が付さ
れる。福建の同安
窯系の青磁とみられる。



第17図 遺物実測図④ 中国陶磁

2、3はTR1302の包含層より出土した白磁碗である。2は口縁端部で大きく外反するもので大宰府分類白磁Ⅷ類²とみられ、時期は12世紀中頃から後半である。3は口縁が厚い玉縁状となるものでこちらは大宰府分類白磁Ⅳ類³にあたる。時期は11世紀後半から12世紀前半である。産地は2、3ともに福建である。

4、5はSE140201より出土した天目の碗である。接合は出来ないが同一個体の可能性も高い。黒色の釉層に一部褐色が点在している。産地は建窯をはじめとする福建地域で生産されたものである。時期については細片のため詳細はわからないが13世紀から14世紀にかけてのものと考えられる。

輸入陶磁については前回の報告も含めて居館内で出土した中世土師器や陶器に比して、古い時期となるものが多い。この事については骨董品としての入手あるいは伝世と推測される。

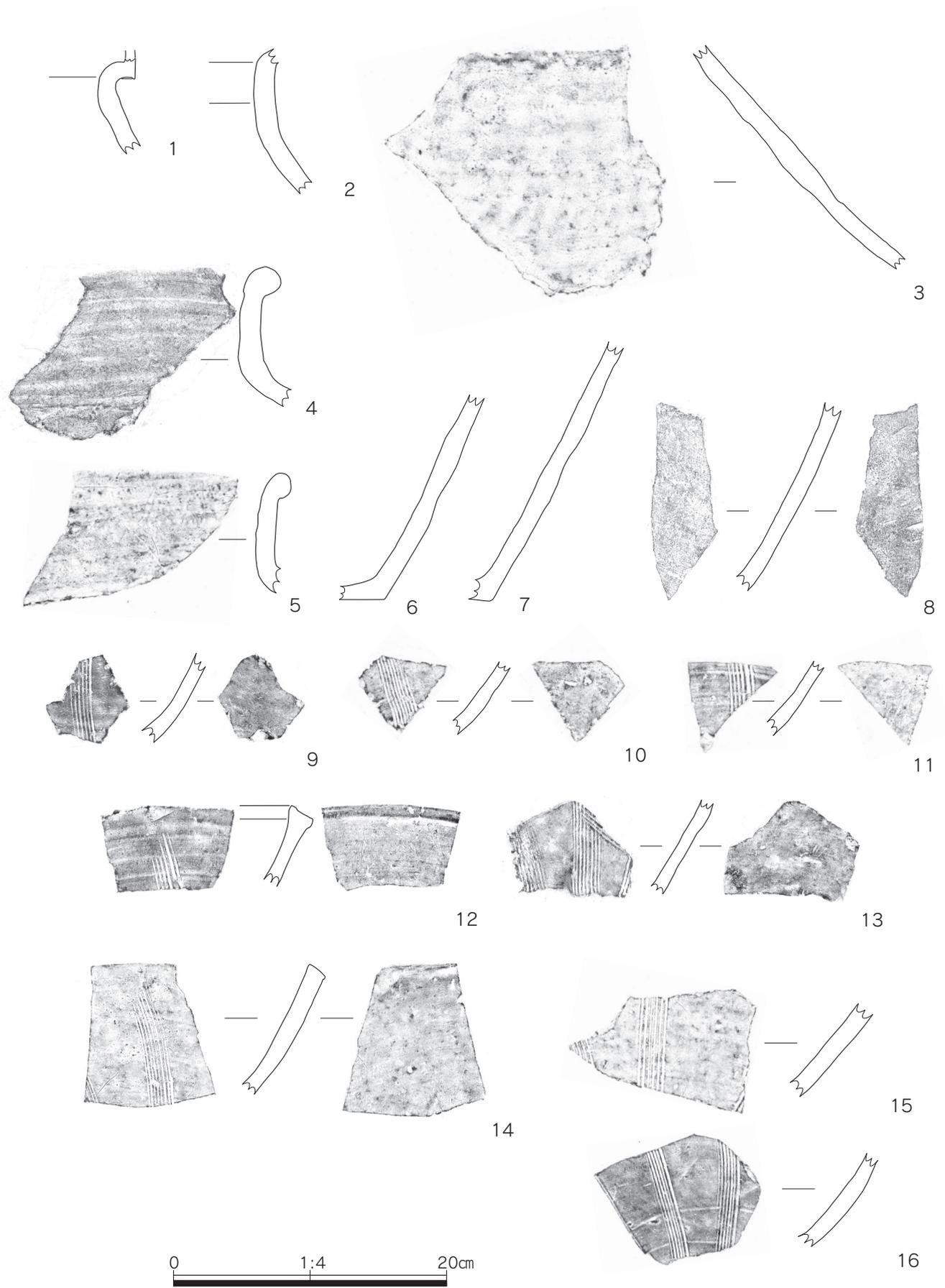
(4) 陶器 (第18図 図版10)

陶器はTR1201、1301、1402から出土している。甕、播鉢が出土している。産地については常滑と備前が確認された。1～3は常滑、4～16は備前である。

常滑は甕のみの出土である。1は上部が欠けているものの口縁は幅広い口縁緑帯部を有する受口状を呈している。2、3はともに体部上半の破片で肩部が大きくハの字に開いた部分とみられる。時期は常滑窯の編年⁴の6b～7型式段階にあたり13世紀後半から14世紀前半にあたる。

備前は甕・播鉢が出土している。4～8は甕、9～16は播鉢である。焼成による発色については、甕は青灰色のみであるが播鉢は青灰色、赤褐色を呈するものが並存しており、還元炎焼成と酸化炎焼成両方の焼成技法が当時の備前に混在していたことがわかる。

4、5は口縁部、6、7は底部、8は胴部片である。4、5は口縁端部が折り曲げられ丸みを呈している。6、7は平底で外傾して底部を形成する。13は播鉢は6～8条を一単位とする卸目が間隔を開けて放射状に付されている。12、14は口縁部が残存しており片口の一部が看取出来る。時期は備前焼編年⁵の第Ⅱ期から第Ⅲ期にあたり、13世紀後半から14世紀にあたる。また、実測図を作図出来なかったが一括出土銭を納めていた甕も備前であり、こちらは、13世紀後半から14世紀前半の範疇にあたる⁶。



第18図 遺物実測図⑤ 中世陶器

(5) 近世陶磁器・瓦 (第20図 図版10)

SK130201からの出土が顕著である。多くの近世陶磁器が各調査区より出土しているが確認調査の主対象である中世居館に関わるものではないため、22点の遺物を抽出して掲載した。基本的には前回報告と同じく遺跡の範囲が近世瑞光寺の境内地にあたるため、堂宇が主として機能していた17世紀後半から19世紀にかけての陶磁器が多く出土している。

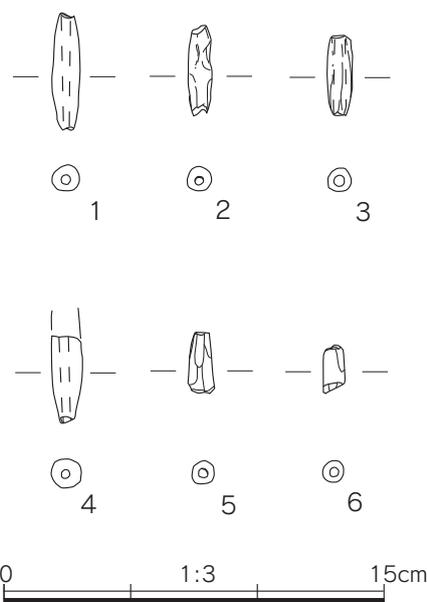
1～10は染付碗である。10のみが陶胎で胎土が褐灰色を呈しており唐津である。あとは伊万里等肥前系の磁器で硬質で白色の胎土ある。高台は低く、径も小さいもので畳付けの内部に窯印が付されたものもある。底部から外湾し、中位でやや直線気味に伸びるものである。文様は丸に三つ葉、梅花、草花、しめ縄、菊花などが絵付けされている。時期は17世紀後半から18世紀前半にかけてのものとかんがえられる。11、12は染付皿である。見込中央に五弁花文を絵付けし、圏線をめぐらせている。12は口縁部に菱花文を帯状に配している。時期は11、12ともに17世紀後半と考えられる。時期は近世以降である。13、14は陶器である。やや黄味をおびた透明釉がかけられている。13は丸碗で見込みに草花の絵付けがある。14は体部中位に明確な稜をもち、中位から口縁に向かって直線的に伸びる。時期は18世紀後半以降とみられる。15は紅皿である。紅の痕跡は残っていなかった。外面に連弁をめぐらせる小型の皿である。16は唐津の片口鉢であり、見込みに刷毛目文様をめぐらせている。時期は18世紀以降か。17、18は備前播鉢である。密に卸目が付されている。ともに18世紀以降のものと考えられる。19、20は土師質で20には外面にススが付着しているので焙烙と考えられる。19は口縁部に突帯が貼りついているため鍋の可能性もある。時期18世紀以降と考えられる。21は土師質の手あぶりて底部に三足が付く。時期は近世以降である。22は軒丸瓦である。内区に巴文、周囲に珠文をめぐらせている。時期は近世である。他の出土した瓦についても中世にさかのぼるものはない。

(6) 土製品 (第19図 図版10)

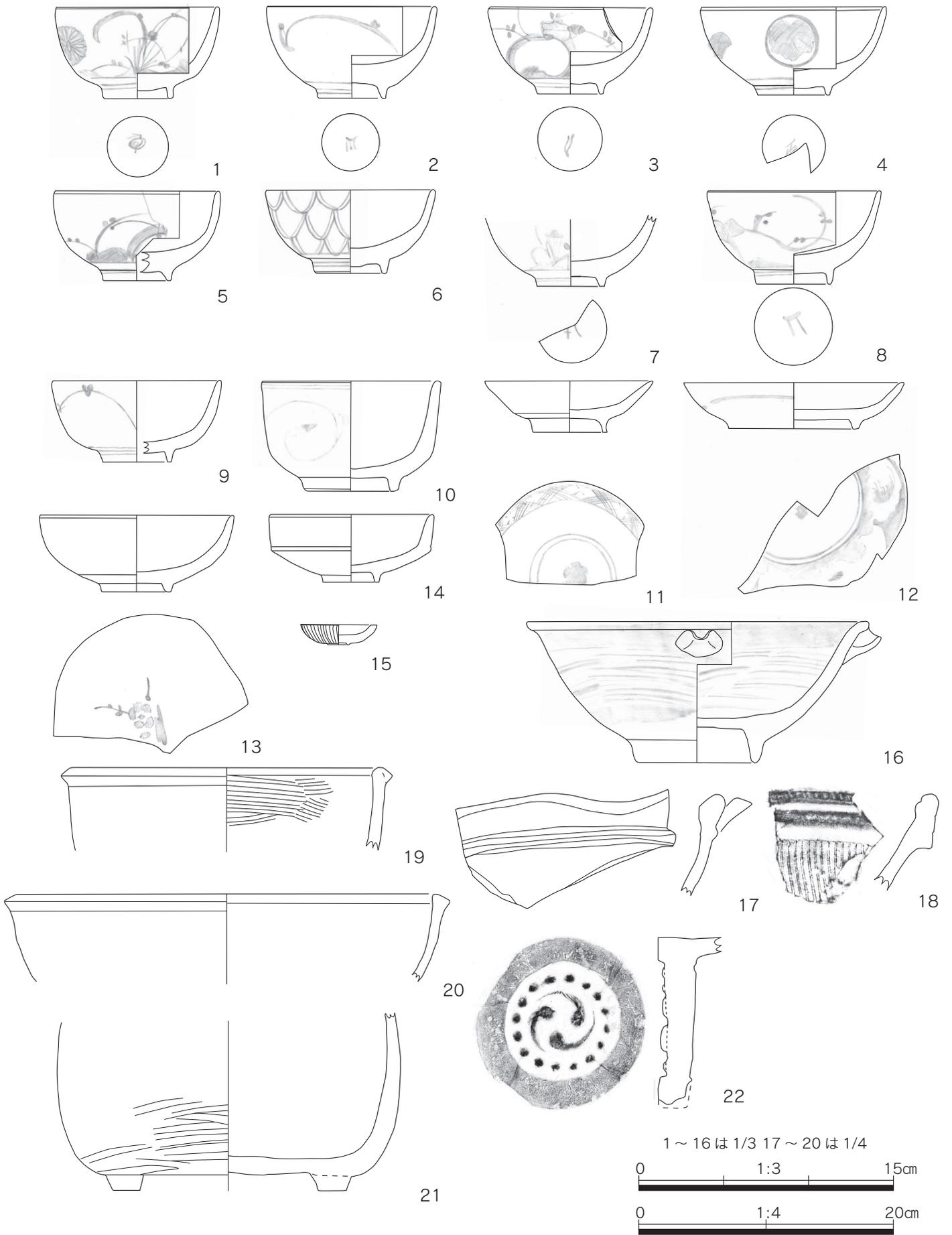
各調査区から土錘が出土している。形状は細い紡錘状で中心に長軸方向に穴をあけたいわゆる管状土錘と呼ばれるものである。今回報告の土錘は前回報告のものと法量はさほど変わらず小型である。

本遺跡は錦川の河口部に位置することから投網につけられた錘として使われていたと考えられる。

時期については、近世の遺物包含層からの出土であり、近世以降の所産である。



第19図 遺物実測図⑥ 土錘



1 ~ 16 は 1/3 17 ~ 20 は 1/4
 0 1:3 15cm
 0 1:4 20cm

第20図 遺物実測図⑦ 近世陶磁器

3 石製品

(1) 石製品 (第21図 図版10)

硯、砥石が出土している。1～3は砥石で1、2はSK130201、3はTR1301の近世層からの出土である。石材は泥岩で仕上げ砥として使われたとみられる。時期は近世以降である。4は硯でTR1302の近世層より出土した。泥岩質の赤紫色の石でつくられている。こちらも時期は近世以降である。

4 金属製品 (第21図～第27図 図版11～17)

(1) 鉄製品・鉄滓 (第22図 図版11)

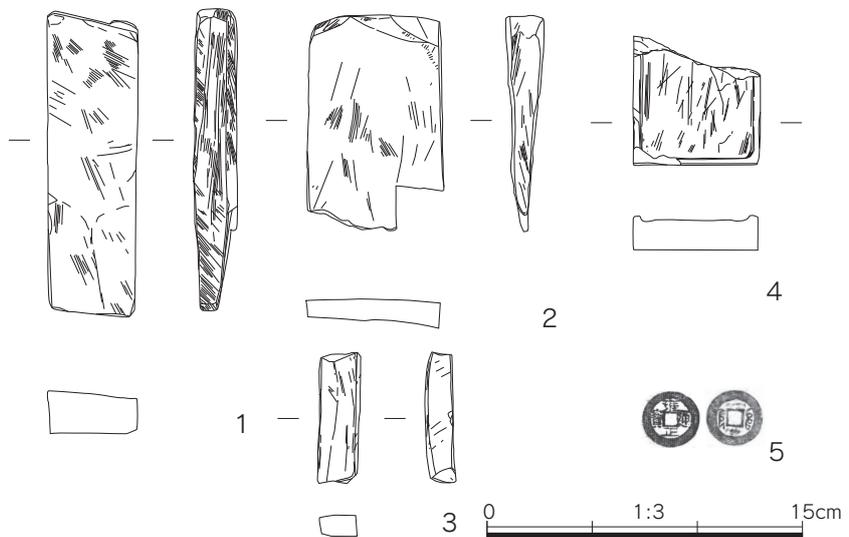
鉄製品については中世と考えられる遺物のみをとりあげて紹介する。1～21は鉄滓である。各調査区の包含層からとSE140201からの出土である。小型のものが多く、鍛冶作業で生じたものと考えられる。これまでの調査においても鉄滓は出土しており、炉の確認には至っていないものの城館内で鍛冶が行われていたことを示唆する。

22、23はSE140201より出土した鉄鏃である。22は茎部が長く、先端の菱形の身が付く。23は身が長い円錐状となるもので広島県福山市草戸千軒町遺跡でも類例⁷がある。鉄鏃は2点ともに茎部で人為的に折り曲げられた可能性があり、井戸鎮めの祭祀などで使われたものと想定出来る。24～27はSE140201から出土した鉄釘である。鉄釘はいわゆる和釘の形状をとり釘頭が折り曲げられた形状をもつ。28は鉄片である。2ヶ所の切れ込みと表面に繊維質と見られる付着物⁸が確認出来る。

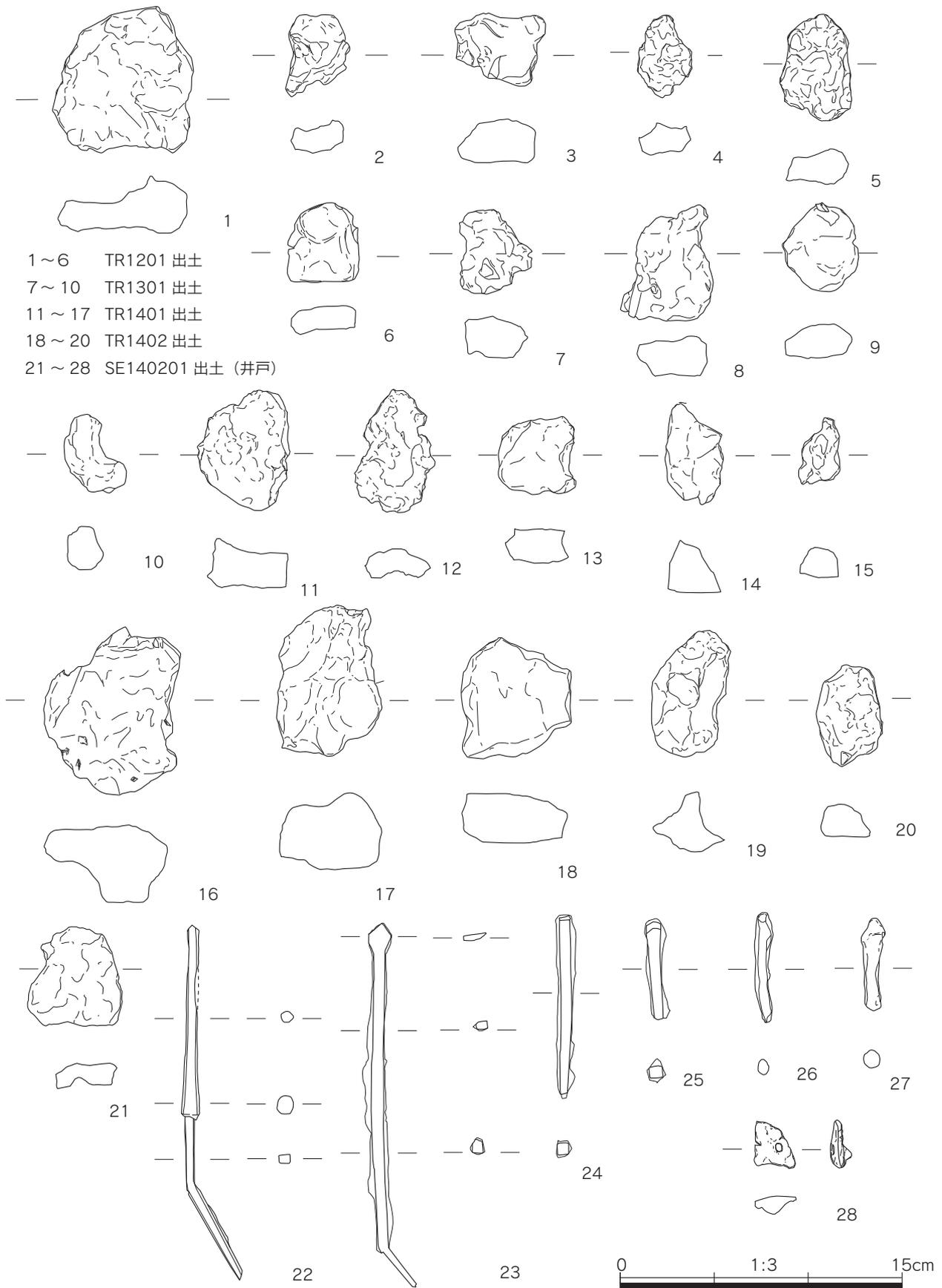
(2) 銭貨 (第21、23～27図 図版12～16)

銭貨は、TR1202埋納甕のほか、TR1401の近世層より出土している。TR1401から1点は雍正通寶が出土している。雍正通寶は清朝銭であり、雍正年間（1722-35）に铸造されたものである。表は漢字で铸造時期を示す年号、裏面は満州文字で製造箇所を示している。製造場所については中央で財政を司る戸部で製造されたと考えられる。

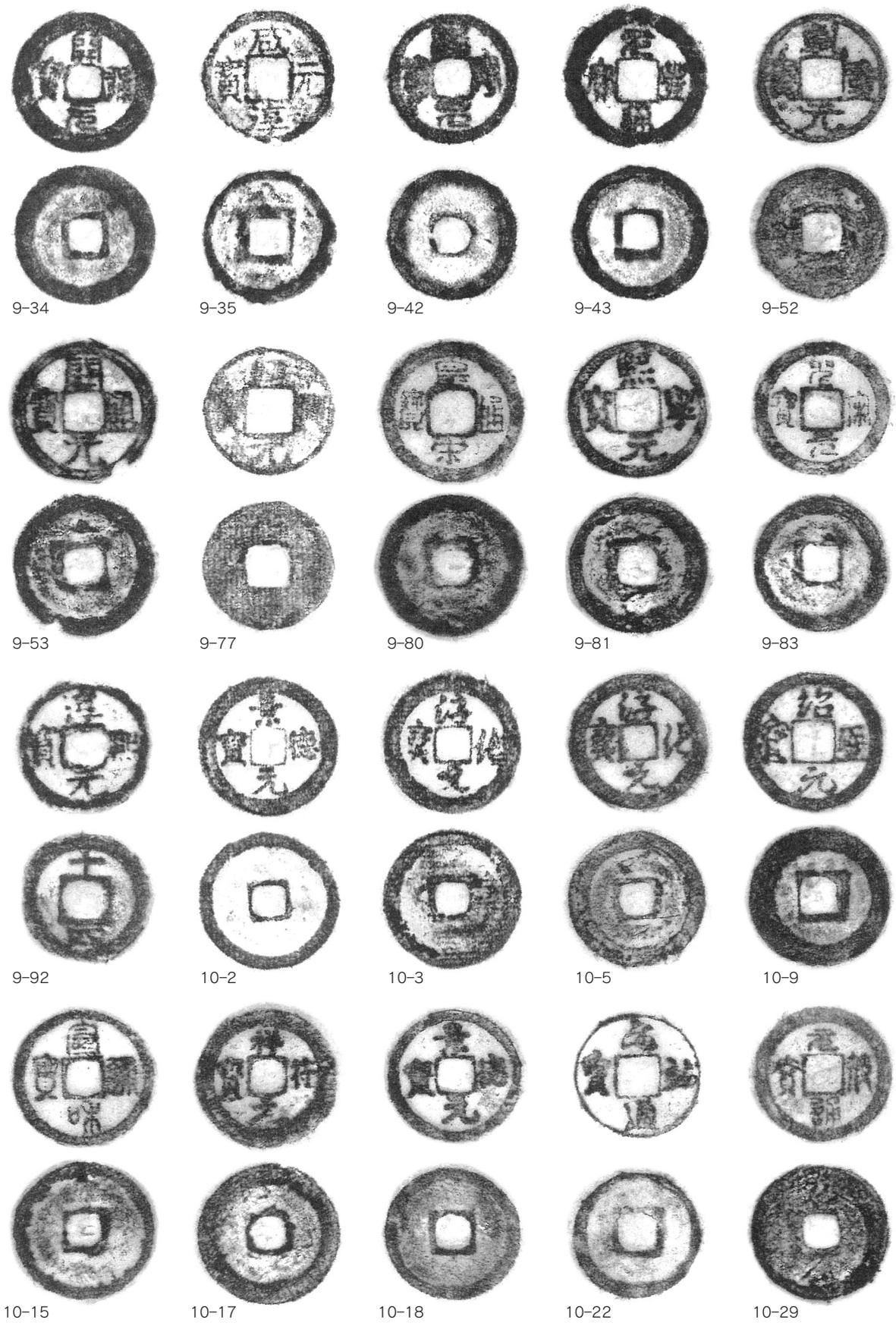
埋納銭については、後述の櫻木晋一氏の考察および観察表で詳細を示すため、ここでは概要にとどめる。埋納銭は推定で約4万から5万枚程度納められている。そのうち約1貫文分（964枚）を取り上げ銭貨そのものの詳細な調査を実施した。唐代の開元通宝（621年初铸）を最古とし、最新は元代の至大通宝（1310年初铸）である。出土の多くは北宋銭であり、とくに北宋後半の11世紀後半に铸造されたものが多く調査した銭の8割以上を占めている。



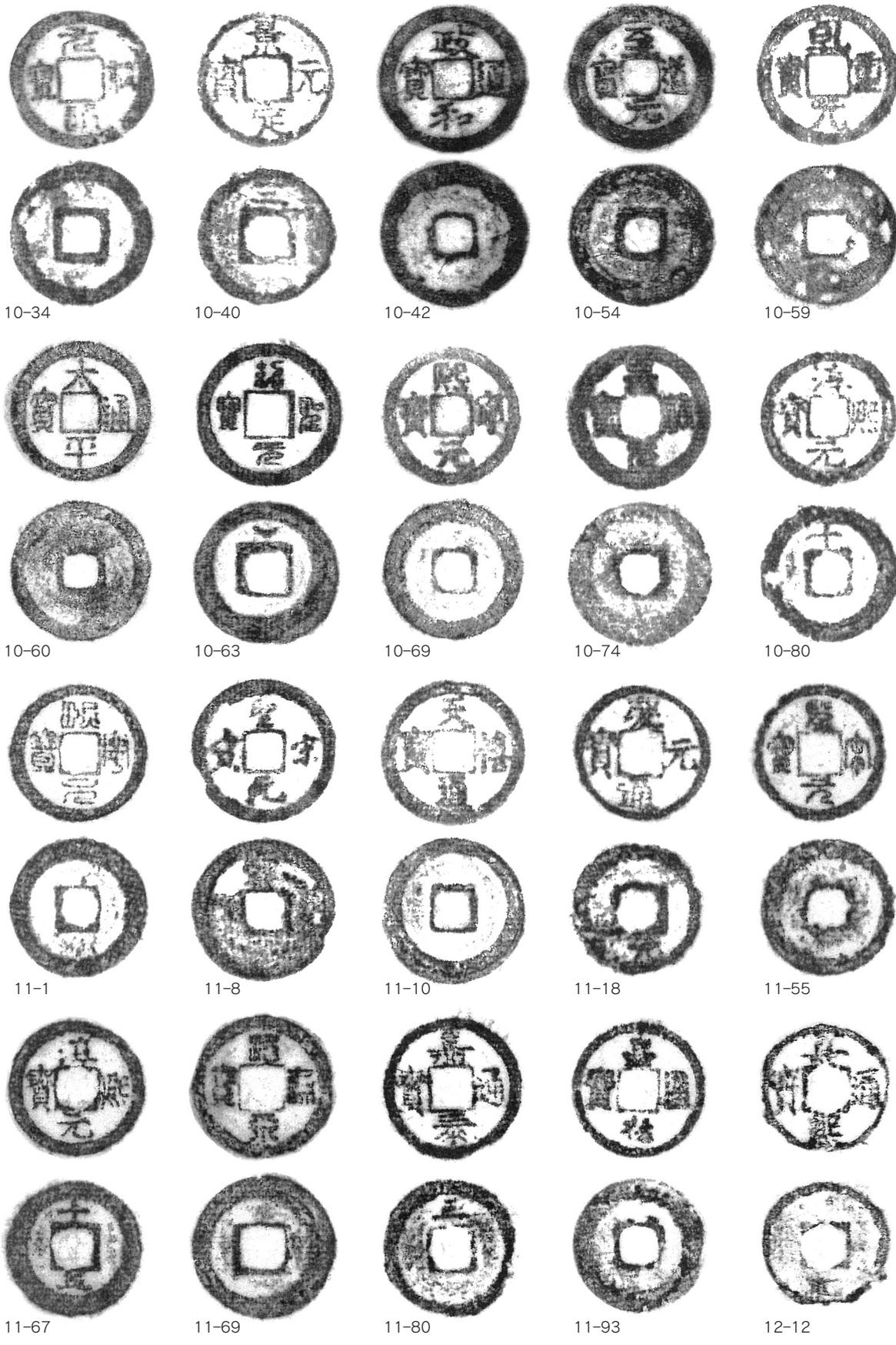
第21図 遺物実測図⑧ 石製品・銭貨



第22図 遺物実測図⑨ 鉄滓・鉄製品図面



第23圖 出土錢①



第24圖 出土錢②

5 木製品、植物遺体、植物質遺物

(1) 木製品（第26図～第29図 図版17、18）

木製品はSX120101とSE140201からの出土である。SX120101の出土木製品は板状の木製品であり、銭を埋納した甕の上に被せられていたものと考えられる。出土時の状態が悪く凶化出来なかったが、スギ材を薄い板状に加工したものであったと考えられる。時期については埋納銭と同じく14世紀の前半から中葉にかけてである。

SE140201からは箸状木製品、折敷、付け木、柄杓底板、杭、下駄部材、不明木製品、井戸枠部材が出土している。これらの木製品の時期は土器等の年代観から14世紀前半である。

28-1～7は箸状木製品である。全体を伺えるものは出土していないが、四面あるいは六面に側面を面取りしたものと後世に「利休箸」と呼ばれるような両側を丸く整えた断面形のものが出土している。

28-8、9は折敷である。スギの柾目材を利用した平折敷で9には棧を綴じた桜の樹皮がわずかに残っている。

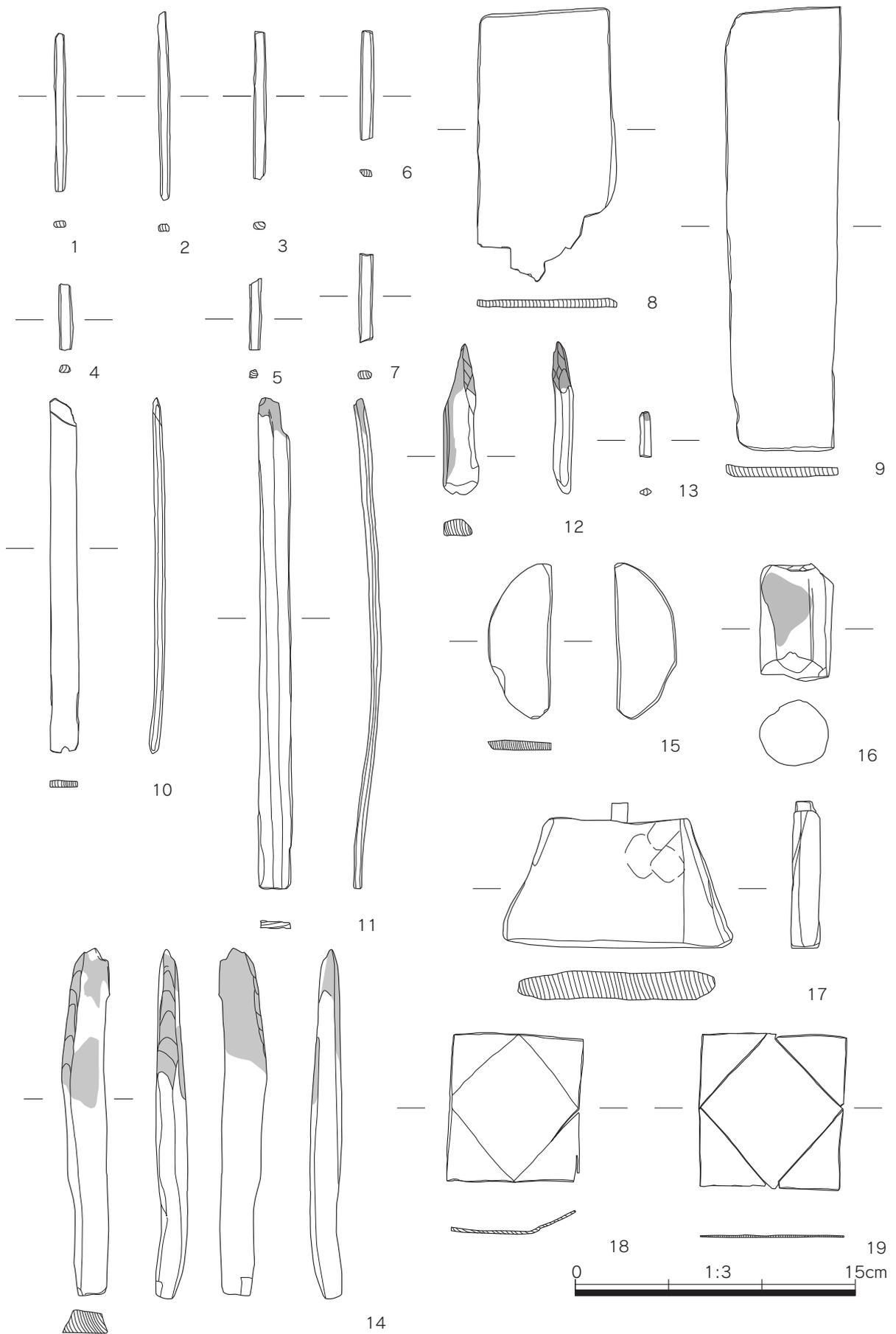
28-10～14は付け木である。付け木は木材の加工時に生じた端材を利用して製作されたものと考えられる⁹。10、11は柱などの形状を整える際に生じた長い短冊状の端材あるいは曲物のタガを転用したのと考えられる。12、13も同じく端材の利用である。民俗事例のホダ木のように不定形で生じた端材の先端部を加工し、着火箇所を作り出している。14は棒状で先端部が炭化したものである。端材の二次利用というよりは製品に近いものと考えられる。

28-15は柄杓の底板で板の側面がナナメに加工されており、曲物に底を付けるための加工である。

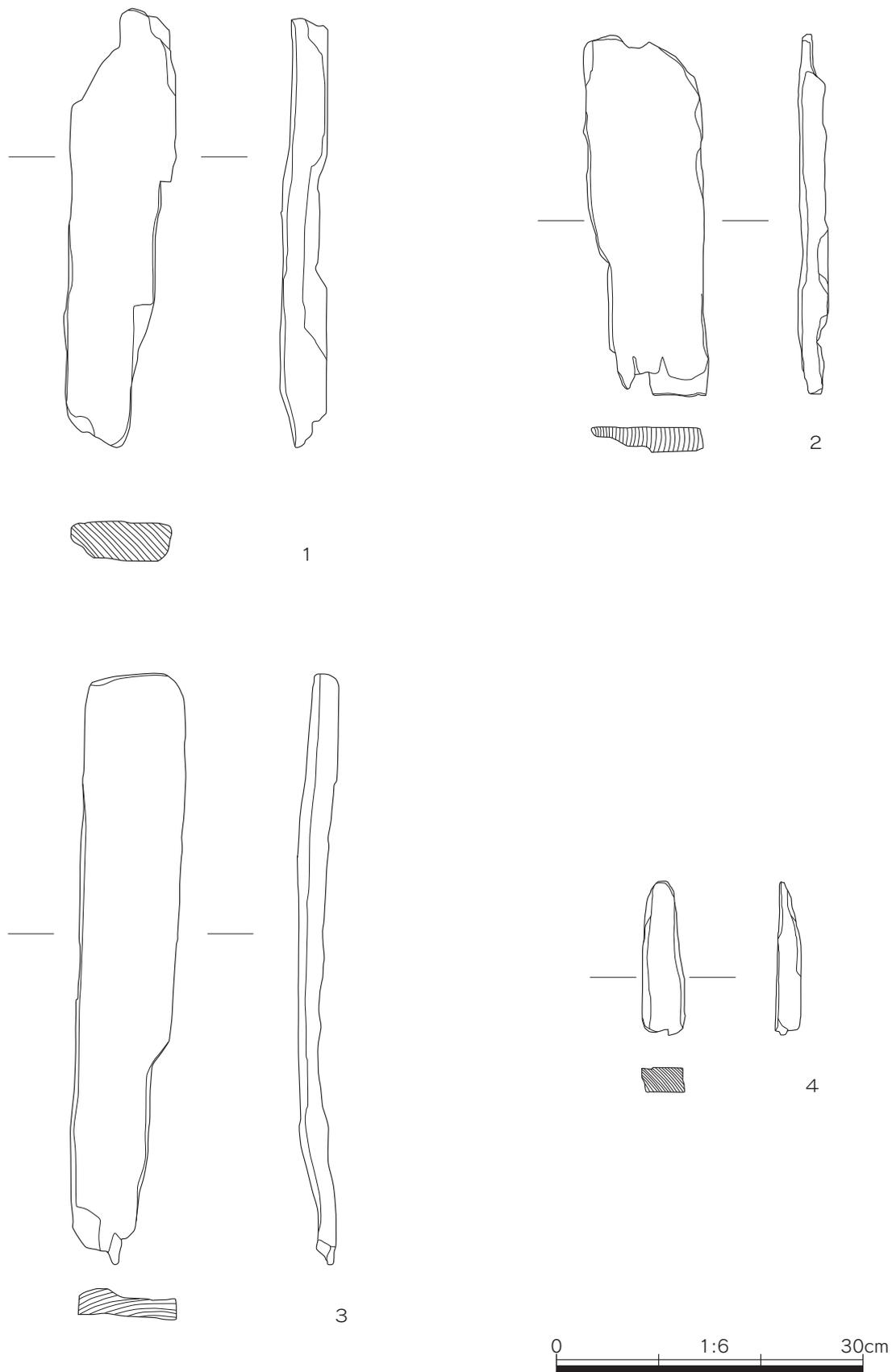
28-17は下駄の部材でいわゆる差歯下駄の歯の部分である。16は杭である。18、19は不明木製品で、2点ともに約8cm四方の薄い杉板に菱形の切れ込みを入れた木製品である。衝撃等を加えると切れ込みによって四隅が外れるように加工されたと考えられる。今回出土のものは四隅が離れているものもあるが、切れ端がすべて出土しており完形となる。類例としては秋田県の洲崎遺跡群で同じものが約30点出土している¹⁰が、用途の記載については不明となっている。洲崎遺跡群の場合、井戸では完形品が多く、溝からの出土については四隅が離れて出土する事例が多い傾向であり、本遺跡のものも井戸からの出土であるため、同じ傾向にあると推測する。そして、形状、大きさと四隅が外れるという効果を考えると流鏝馬の的ではないかと推測するが、今後の検討の必要もあり、不明木製品としておく。

井戸枠の部材は29-1～3は縦板、29-4は支柱、30-1～4、31-1、2は横棧である。今回報告の調査は確認調査であるため掲載のものは調査の過程で取り上げたものだけを掲載した。井戸の底面近くで確認された部材については現位置を保っていたため現地での保存を行っている。井戸枠は隅柱横棧組であり、13世紀後半から14世紀前半の井戸によく利用される枠の形態である。樹種は隅柱がヒノキ科であること以外は全てスギである。

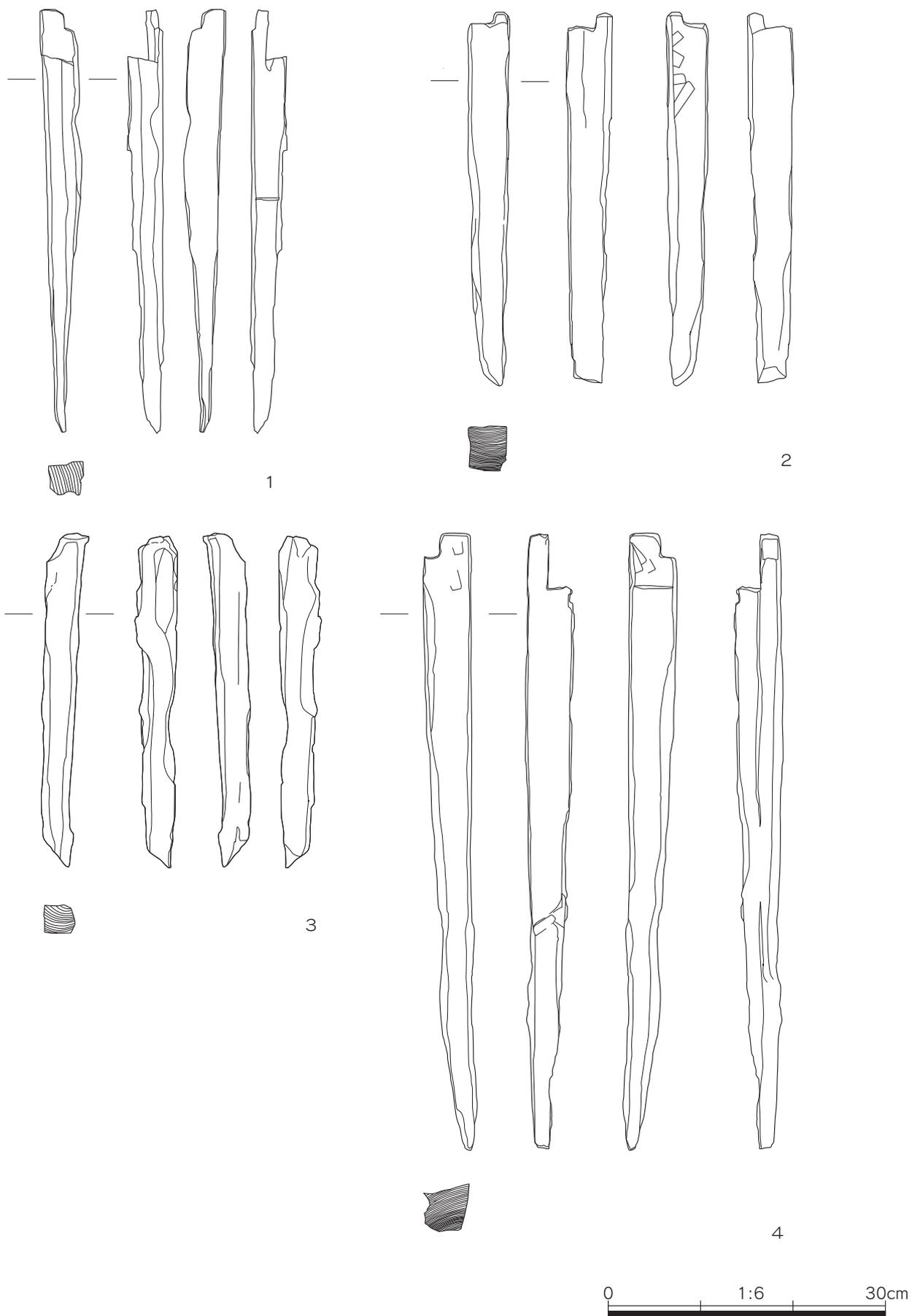
縦板は井戸枠の外側に配置されていたもので幅は30cm前後であったと考えられる。埋没過程で破砕されていたため全容は不明である。隅柱は基部のみが残存している。横棧は両端にホゾが付き、柄穴の無い相欠き柄組で長短の柄を作り出して接合を強固にしている。



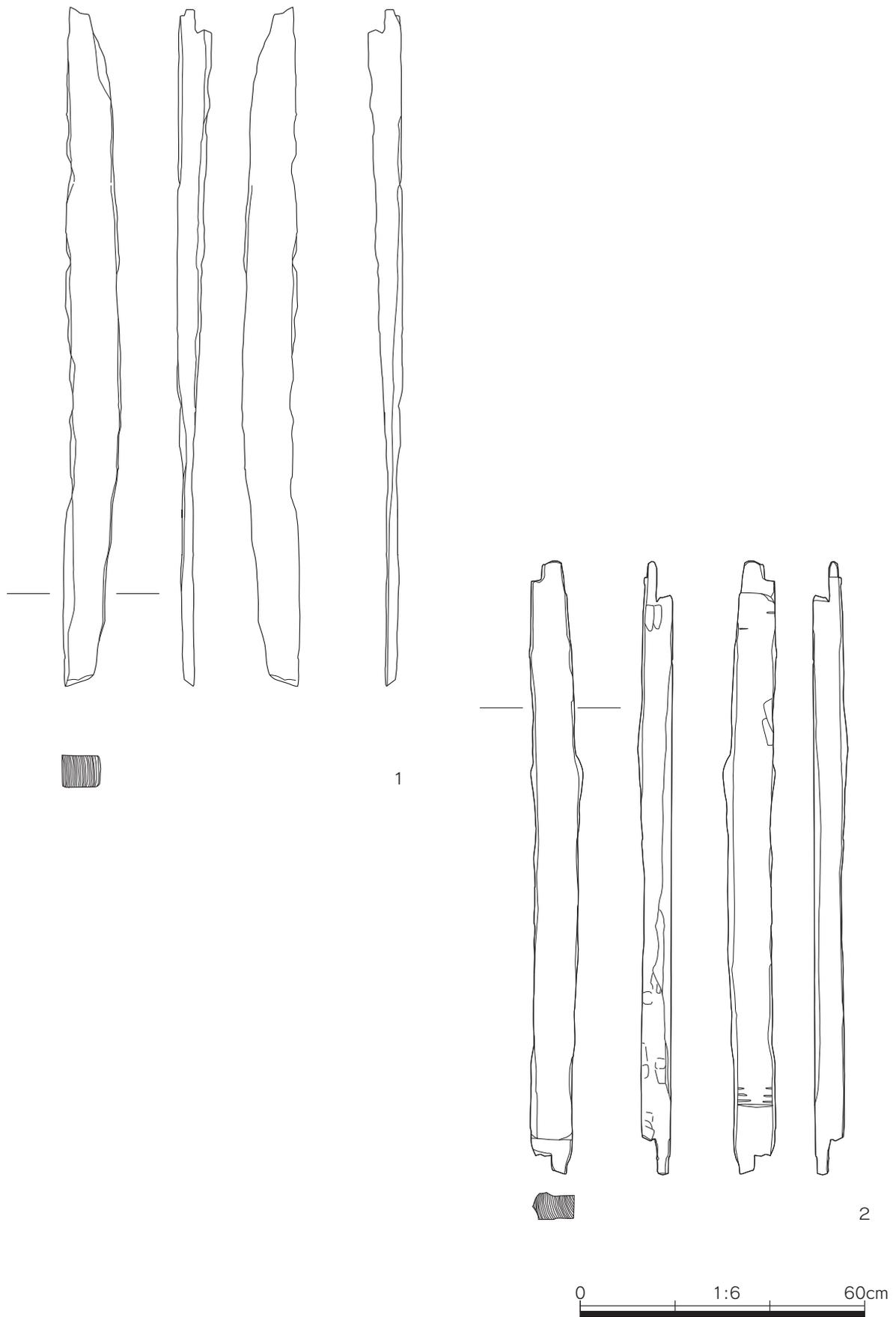
第28図 遺物実測図⑩ 木製品 1



第29図 遺物実測図① 木製品2



第30図 遺物実測図⑫ 木製品3



第31図 遺物実測図⑬ 木製品4

(2) 植物遺体 (図版18)

植物遺体はSE140201の底面付近から炭化種実が出土している。平成27年度の調査時に井戸から木製品や貝類の出土を確認したため、埋土の一部をとりあげ水洗選別を実施し、41粒が確認された。詳細な同定作業や分析作業は実施していないが、コメ、ムギ、マメ、エゴマと見られる種実が確認された。

コメは長さ8mm、幅3mmである。籾殻は外れた状態であったことから精米は行われていることがわかる。中世段階では蒸す強飯だけでなく、姫飯とよばれる。現在のような炊き方も登場しているが、どちらの調理方法のものかは不明である。

ムギはコメより少し大きく、先端部がやや尖り気味になる。調理としては粉食としての麺や団子ではなく、米飯の不足を補うためのかて飯として使われたと考えられる。

マメは殻の部分が炭化して約半分残存している。復元すると長軸12mm前後となる。マメ類についてもムギと同じく用途としてつかわれたと想定される。

エゴマは径1mm前後の球状で残存している。民俗事例では炒ってすりつぶしたものを用いたり、これを味噌にまぜたりして使われており、この時代においても同様の使われ方をしていたと考えられる。

(3) 植物質遺物

① 銭紐 (第30図、図版18)

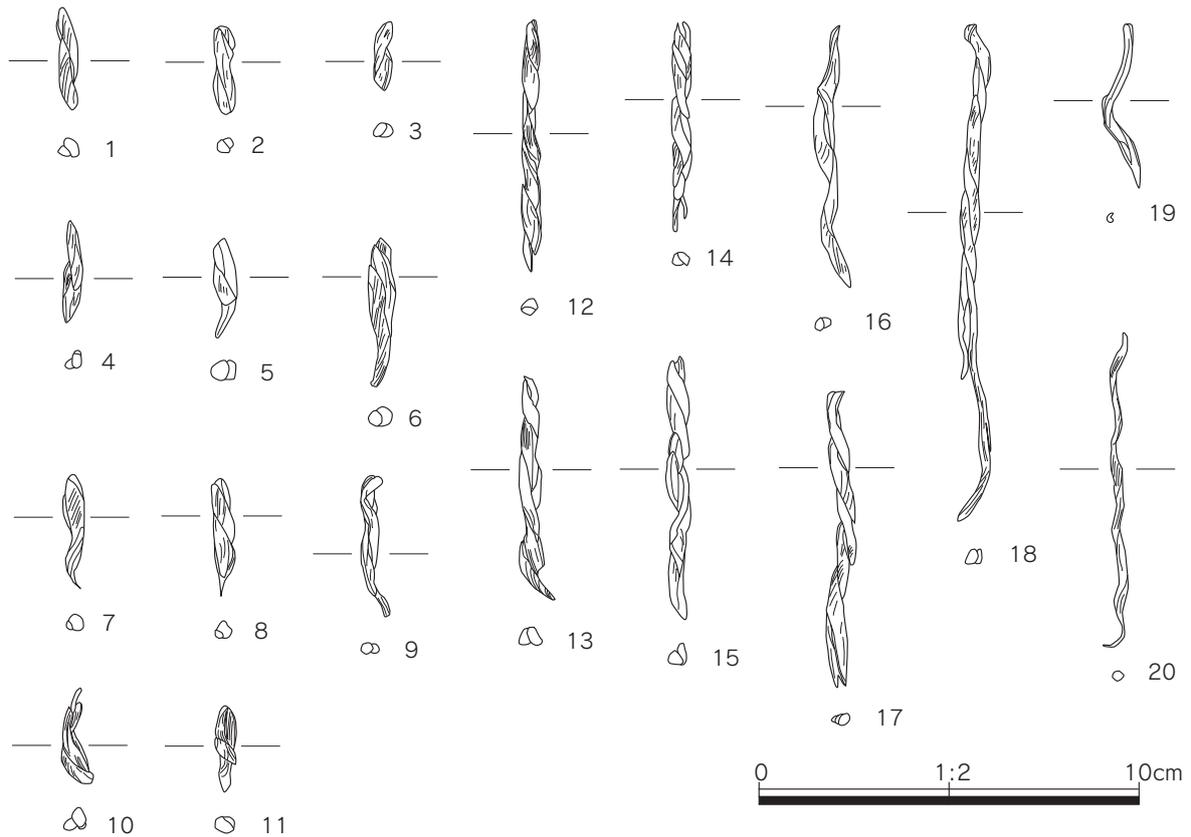
19点を図示した。1～17は撚りが残った紐、18、19は撚りが解けた紐である。埋納銭の一部を取り上げ、銭種判読のために緡銭を解体した際に出土したものであり、銭を百文にまとめるために銭孔に通された紐あるいは、これらをさらに大きな単位でまとめるための紐とも考えられる。

紐の素材は分析の結果、稲藁であった。紐の製作方法については現在も中山間地域に残る藁紐や藁縄の編み方と同じである。藁を横槌等でたたいて繊維をほぐし、数本を束にして両手に各々とり束ごとに撚りながら二束の藁を交差させて合わせていく二本撚りの方法である。縄の太さは直径0.5～0.8cm、残存する長さは3～15cmである。縄の太さは民俗例等からモノの結束や運搬などに適した規格で銭の結束や運搬などにも適したサイズであると考えられる。

また、出土状況や紐の遺存状況から銭を通して1貫文あるいは5貫文単位で緡銭を結束する際に結び目だった部分に近いところが残存したと考えられる。

② 菰

細片のため、図示出来るものがないが出土銭に伴って出土しているので報告する。素材については、試料の状態も良好でなかったため草本類との結果¹¹が出ている。ただ試料の状況から稲藁と推定される。菰は絵画資料に、五貫あるいは十貫を単位として結束された緡銭をまとめるために巻かれた状況が描かれたものがあり¹²、絵画資料と同様の使われ方をしたと推測される。このことから埋納の際にも緡銭に菰が巻かれた状態で甕に納められたと考えられる。



第32図 遺物実測図⑭ 紐

6 動物遺体

(1) 動物骨・貝 (図版18)

主として中世の井戸SE140101と近世の土坑SK130201より動物遺体が確認された。SK130201出土の貝については岩国市科学センター貝クラブ指導員に同定を依頼した。SE140101出土の貝については出土量、種類が少ないため、SK130201での同定結果をもとにして同定を行っている。骨に関してはウシ等の大型動物の背骨と見られる。ただし、近世段階での1点のみのため上記の記述にとどめ、これ以降は中世、近世の遺構から出土した貝について述べていく。

SE140101では底面の砂層より出土が見られハマグリとアサリが確認出来た。個体としては残存状況が悪く、細片になっているがハマグリとアサリの量は概ね半々といった組成である。出土した土器、陶磁器などから13世紀末から14世紀初頭の遺構と考えられる。

SK130201は近世土坑で陶磁器等に伴って出土している。貝の種類に関しては以下の種が同定された。カキ、ナガニシ、アサリ、カガミガイ、ハマグリ、サメザラモドキ、オオノガイ、アカニシ、スガイ、サルボウの9種類の貝が確認された。組成はカキ、アサリ、ハマグリが主体を占め、この3種で全体の9割以上である。また、中世に比べて相対的にハマグリの割合が少なくなる傾向がみられる。時期は18世紀以降と考えられる。

貝は中世、近世ともに食用の貝のみが出土しており、生食、焼き、煮るなど調理方法も多様な食材で、大きさも可食に適したサイズである。基本的には遺跡近くの海浜付近の遠浅の海で採取されたと推測する。貝は食用に供され、その後、井戸や土坑に廃棄されたと考えられる。

近世以降、中津居館跡が所在する三角州や錦川河口部では干拓地が増加しており、これにより水質の変化が見られ、変化に強いアサリや、護岸等の設置により石積に定着するカキが増えているのが中世から近世への変化と見られる。

第2表 出土貝類一覧

科名	名称	SE140101 (中世)	SK130201 (近世)
イタボガキ科	カキ		○
イトマキボラ科	ナガニシ		○
マルスダレガイ科	アサリ	○	○
	ヌノメアサリ		○
	メオニアサリ		○
	カガミガイ		○
	ハマグリ	○	○
アサジガイ科	サメザラモドキ		○
オオノガイ科	オオノガイ		○
アクキガイ科	アカニシ		○
サザエ科	スガイ		○
フネガイ科	サルボウ		○

○は出土。

- 1 『中津居館跡（加陽和泉守居館跡）』（岩国市教育委員会2012）47頁
- 2 『太宰府条坊跡XV』（大宰府市教育委員会 2000）
- 3 前掲2
- 4 中野晴久「中世陶器（常滑・渥美）」『概説 中世の土器・陶磁器』（真陽社 2000）
- 5 伊藤晃「中世陶器（備前）」『概説 中世の土器・陶磁器』（真陽社 2000）
- 6 鈴木康之氏の教示による。
- 7 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1996）
- 8 塚本敏夫氏の教示による。
- 9 藤田慎一「付け木について」、パリノ・サーヴェイ株式会社「大丹保遺跡の自然科学分析」『大丹保遺跡発掘調査報告』（砺波市教育委員会ほか 2014）
- 10 高橋学「木都の誕生」『木材の中世』（高志書院 2015）
『洲崎遺跡群』（秋田県教育委員会 1990）
- 11 高橋敦「出土銭繒・こも片の分析」（本報告書）
- 12 櫻木晋一「中津居館跡の一括出土銭」（本報告書）図1

第3表 遺物観察表(土器、陶磁器・瓦)

No	挿図	図版	調査区	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	備考
							口径	器高	底径				
1	14-1		TR1201	包含層	弥生	甕		(5.8)		浅黄	密	良好	弥生時代中期 ハケメ
2	15-1		TR1302	包含層	土師器	皿	(6.8)	1.0	5.0	灰白	密	良好	中世
3	15-2		TR1302	包含層	土師器	杯		(1.5)	6.0	浅黄橙	密	良好	中世
4	15-3		TR1202	包含層	土師器	杯		(3.6)	6.3	浅黄橙	密	良好	中世
5	15-4	9	TR1302	SK130201	土師器	皿	6.8	0.7	6.0	灰白	密	良好	近世
6	15-5	9	TR1302	SK130201	土師器	皿	6.8	0.7	6.0	灰白	密	良好	近世
7	15-6	9	TR1302	SK130201	土師器	皿	7.2	1.0	3.8	浅黄橙	密	良好	近世
8	15-7	9	TR1302	SK130201	土師器	皿	9.6	1.5	5.2	灰白	密	良好	近世
9	15-8	9	TR1302	SK130201	土師器	皿	9.5	1.5	5.0	浅黄橙	密	良好	近世
10	16-1	9	TR1402	SE140201	土師器	皿	6.8	1.3	5.2	橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
11	16-2	9	TR1402	SE140201	土師器	皿	6.8	1.2	5.3	浅橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
12	16-3	9	TR1402	SE140201	土師器	皿	6.8	1.0	5.4	浅黄橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
13	16-4	9	TR1402	SE140201	土師器	皿	8.0	1.7	5.0	灰黄褐	密	良好	ロクロ成形 ナデ
14	16-5	9	TR1402	SE140201	土師器	皿	6.8	1.8	5.6	にぶい橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
15	16-6	9	TR1402	SE140201	土師器	皿	6.7	1.0	5.0	橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
16	16-7	9	TR1402	SE140201	土師器	皿	8.0	1.2	4.0	にぶい橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
17	16-8	9	TR1402	SE140201	土師器	椀	13.1	3.9	5.2	浅黄橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
18	16-9	9	TR1402	SE140201	土師器	椀	12.7	4.0	6.4	にぶい橙	密	良好	ロクロ成形 ヘラ切り
19	16-10	9	TR1402	SE140201	土師器	椀		3.5	5.2	にぶい黄褐	密	良好	ロクロ成形 ナデ
20	16-11	9	TR1402	SE140201	土師器	杯	13.6	4.8	5.6	にぶい黄褐	密	良好	ロクロ成形 ナデ
21	16-12	9	TR1402	SE140201	土師器	杯	13.0	3.9	5.6	浅黄	密	良好	ロクロ成形 ナデ
22	16-13	9	TR1402	SE140201	土師器	杯	13.2	4.9	5.8	にぶい黄褐	密	良好	ロクロ成形 ナデ
23	16-14	9	TR1402	SE140201	土師器	杯	12.9	5.0	5.6	浅黄橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
24	16-15	9	TR1402	SE140201	土師器	杯	13.4	4.1	(6.4)	浅黄橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
25	16-16	9	TR1402	SE140201	土師器	杯	13.4	4.1	(6.4)	浅黄橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
26	16-17	9	TR1402	SE140201	土師器	杯	13.8	(3.4)		にぶい橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
27	16-18	9	TR1402	SE140201	土師器	杯	13.6	4.3	5.6	にぶい黄橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
28	16-19	9	TR1402	SE140201	土師器	杯	13.6	3.7	6.2	灰白	密	良好	ロクロ成形 ナデ
29	16-20	9	TR1402	SE140201	土師器	杯	13.2	4.7	5.4	にぶい黄褐	密	良好	ロクロ成形 ナデ
30	16-21	9	TR1402	SE140201	土師器	杯	13.6	4.2	6.2	にぶい橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
31	16-22	9	TR1402	SE140201	土師器	杯		3.7	5.4	にぶい橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
32	16-23	9	TR1402	SE140201	土師器	杯		(2.6)	6.6	浅黄橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
33	16-24	9	TR1402	SE140201	土師器	杯	12.8	(3.7)		灰白	密	良好	ロクロ成形 ナデ
34	16-25	9	TR1402	SE140201	土師器	杯		(2.4)	5.4	灰白	密	良好	ロクロ成形 ナデ
35	16-26	9	TR1402	SE140201	土師器	杯		(2.0)	5.4	灰白	密	良好	ロクロ成形 ナデ
36	16-27	9	TR1402	SE140201	土師器	杯		(1.9)	5.2	浅黄橙	密	良好	ロクロ成形 ナデ
37	16-28	9	TR1402	SE140201	土師器	鍋	31.0	(6.8)		にぶい橙	密	良好	ハケメ スス付着
38	17-1	9	TR1402	SE140201	輸入陶磁	碗		(3.0)		灰	密	良好	青磁(同安窯系)
39	17-2	9	TR1302	包含層	輸入陶磁	碗	17.8	(2.8)		灰	密	良好	白磁(大宰府Ⅳ類)
40	17-3	9	TR1302	包含層	輸入陶磁	碗	12.4	(2.0)		灰	密	良好	白磁(大宰府Ⅶ類)
41	17-4	9	TR1402	SE140201	輸入陶磁	碗		(2.6)		灰	密	良好	天目
42	17-5	9	TR1402	SE140201	輸入陶磁	碗		(2.7)		灰	密	良好	天目
43	18-1	10	TR1402	SE140201	常滑	甕		(6.8)		赤褐	密	良好	
44	18-2	10	TR1402	SE140201	常滑	甕		(10.8)		赤褐	密	良好	
45	18-3	10	TR1402	SE140201	常滑	甕		(16.0)		赤褐	密	良好	
46	18-4	10	TR1402	SE140201	備前	甕		(10.8)		灰	密	良好	還元焰焼成
47	18-5	10	TR1402	SE140201	備前	甕		(8.8)		灰白	密	良好	還元焰焼成
48	18-6	10	TR1402	SE140201	備前	甕		(15.2)		黄灰	密	良好	還元焰焼成
49	18-7	10	TR1402	SE140201	備前	甕		(19.2)		灰	密	良好	還元焰焼成
50	18-8	10	TR1301	土塁盛土	備前	甕		(14.2)		灰赤	密	良好	酸化焰焼成
51	18-9	10	TR1201	包含層	備前	播鉢		(4.8)		灰赤	密	良好	還元焰焼成
51	18-10	10	TR1301	包含層	備前	播鉢		(4.5)		灰赤	密	良好	酸化焰焼成
51	18-11	10	TR1402	SE140201	備前	播鉢		(6.8)		灰赤	密	良好	酸化焰焼成
52	18-12	10	TR1402	SE140201	備前	播鉢		(7.2)		灰赤	密	良好	酸化焰焼成
53	18-13	10	TR1402	SE140201	備前	播鉢		(9.6)		褐灰	密	良好	還元焰焼成
54	18-14	10	TR1402	SE140201	備前	播鉢		(9.6)		灰白	密	良好	還元焰焼成
55	18-15	10	TR1402	SE140201	備前	播鉢		(7.2)		褐灰	密	良好	還元焰焼成
56	18-16	10	TR1402	SE140201	備前	播鉢		(6.8)		褐灰	密	良好	還元焰焼成
57	20-1	10	TR1302	SK130201	磁器	碗	9.6	4.9	3.8	灰白	密	良好	草花・菊花 肥前系
58	20-2	10	TR1302	SK130201	磁器	碗	9.6	5.1	3.8	灰白	密	良好	梅花 肥前系
59	20-3	10	TR1302	SK130201	磁器	碗	9.8	5.3	4.0	灰白	密	良好	草花 肥前系
60	20-4	10	TR1302	SK130201	磁器	碗	10.0	4.8	4.0	灰白	密	良好	草花 肥前系
61	20-5	10	TR1302	SK130201	磁器	碗	11.0	5.2	4.2	灰白	密	良好	丸に葉 肥前系
62	20-6	10	TR1302	SK130201	磁器	碗	10.0	4.9	4.2	灰白	密	良好	絞め縄 肥前系
63	20-7	10	TR1302	SK130201	磁器	碗		3.9	4.2	灰白	密	良好	草花 肥前系
64	20-8	10	TR1302	SK130201	磁器	碗	10.2	5.5	4.2	灰白	密	良好	梅花 肥前系
65	20-9	10	TR1302	SK130201	磁器	碗	10.0	5.4	3.8	灰白	密	良好	草花 肥前系
66	20-10	10	TR1302	SK130201	陶器	碗	10.2	5.5	4.2	灰白	密	良好	草花 陶胎染付
67	20-11	10	TR1302	SK130201	磁器	皿	10.0	3.0	4.4	灰白	密	良好	五弁花 外面緑

No	挿図	図版	調査区	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	備考
							口径	器高	底径				
68	20-12	10	TR1302	SK130201	磁器	皿	12.9	2.0	4.4	灰白	密	良好	五弁花
69	20-13	10	TR1302	SK130201	陶器	碗	9.8	4.0	3.2	黄灰	密	良好	京焼系?
70	20-14	10	TR1302	SK130201	陶器	碗	11.4	4.5	4.2	黄灰	密	良好	京焼系? 見込に花文
71	20-15	10	TR1302	SK130201	陶器	片口鉢	20.4	8.5	7.0	黄灰	密	良好	刷毛目 唐津系
72	20-16	10	TR1302	SK130201	磁器	紅皿	4.4	1.2	1.2	灰白	密	良好	
73	20-17	10	TR1302	SK130201	備前	播鉢		(6.0)		灰	密	良好	錆釉
74	20-18	10	TR1302	SK130201	備前	播鉢		(5.5)		橙	密	良好	
75	20-19	10	TR1302	SK130201	土師質土器	土鍋?	26.0	(6.5)		にぶい黄橙	密	良好	
76	20-20	10	TR1302	SK130201	土師質土器	焙烙	35.0	(7.0)		にぶい黄橙	密	良好	
77	20-21	10	TR1302	SK130201	土師質土器	火鉢		(14.0)	19.0	橙	密	良好	
78	20-22	10	TR1302	包含層	瓦	軒丸瓦	面径12.7 長さ4.7			灰	密	良好	表面は黒

第4表 遺物観察表(土製品)

No	挿図	図版	調査区	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調	備考
							長さ	径	孔径		
79	19-1	10	TR1201	包含層	土製品	土錘	4.6	1.1	0.3	にぶい黄橙	管状土錘 両端打ち欠き ナデ
80	19-2	10	TR1201	包含層	土製品	土錘	(2.4)	1.0	0.3	にぶい黄橙	管状土錘 ナデ
81	19-3	10	TR1201	包含層	土製品	土錘	(2.8)	0.8	0.3	にぶい黄橙	管状土錘 ナデ
82	19-4	10	TR1201	包含層	土製品	土錘	3.5	1.0	0.3	にぶい黄橙	管状土錘 指頭圧痕
83	19-5	10	TR1201	包含層	土製品	土錘	3.1	1.0	0.3	にぶい黄橙	管状土錘 ナデ
84	19-6	10	TR1201	包含層	土製品	土錘	(3.3)	1.2	0.3	にぶい黄橙	管状土錘 ナデ

第5表 遺物観察表(石製品)

No	挿図	図版	調査区	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調	備考
							長さ	幅	厚さ		
85	21-1	10	TR1302	SK130201	石製品	砥石	14.5	4.3	2.0	灰白	泥岩質
86	21-2	10	TR1302	SK130201	石製品	砥石	(10.2)	6.4	(1.9)	赤褐	泥岩質
87	21-3	10	TR1301	包含層	石製品	砥石	(6.2)	1.9	1.0	灰白	泥岩質
88	21-4	10	TR1302	包含層	石製品	硯	(6.2)	6.0	1.6	赤紫	泥岩質

第6表 遺物観察表(金属製品)

No	挿図	図版	調査区	出土地点	種別	器種	法量(cm)			備考
							長さ	幅	厚さ	
89	21-5		TR1402	包含層	銅製品	銭貨	2.6	2.6	0.2	雍正通宝 表…漢字 裏…満州文字
90	22-1	16	TR1201	包含層	金属	鉄滓	7.4	7.2	3.0	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
91	22-2	16	TR1201	包含層	金属	鉄滓	4.3	3.0	1.8	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
92	22-3	16	TR1201	包含層	金属	鉄滓	3.8	4.8	2.3	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
93	22-4	16	TR1201	包含層	金属	鉄滓	4.5	3.0	1.8	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
94	22-5	16	TR1202	包含層	金属	鉄滓	5.7	3.6	1.9	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
95	22-6	16	TR1201	包含層	金属	鉄滓	4.2	3.6	1.3	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
96	22-7	16	TR1301	包含層	金属	鉄滓	4.5	3.7	2.2	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
97	22-8	16	TR1301	包含層	金属	鉄滓	6.1	4.6	2.1	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
98	22-9	16	TR1301	包含層	金属	鉄滓	4.6	4.0	1.8	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
99	22-10	16	TR1301	包含層	金属	鉄滓	4.1	3.2	2.3	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
100	22-11	16	TR1401	包含層	金属	鉄滓	6.5	4.6	2.6	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
101	22-12	16	TR1401	包含層	金属	鉄滓	6.5	4.2	1.9	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
102	22-13	16	TR1401	包含層	金属	鉄滓	4.1	4.1	1.8	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
103	22-14	16	TR1401	包含層	金属	鉄滓	5.3	3.0	2.8	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
104	22-15	16	TR1401	包含層	金属	鉄滓	3.5	2.0	1.5	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
105	22-16	16	TR1401	包含層	金属	鉄滓	9.0	7.0	4.1	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
106	22-17	16	TR1401	包含層	金属	鉄滓	6.7	4.0	3.2	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
107	22-18	16	TR1402	包含層	金属	鉄滓	5.4	3.5	1.7	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
108	22-19	16	TR1402	包含層	金属	鉄滓	8.1	5.5	4.1	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
109	22-20	16	TR1402	包含層	金属	鉄滓	6.4	5.8	2.6	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
110	22-21	16	TR1402	SE140201	金属	鉄滓	5.3	5.0	1.0	椀形滓(鍛冶の炉内滓)か
111	22-22	16	TR1402	SE140201	鉄製品	鉄鏃	18.9	1.1	1.1	茎部に折れ
112	22-23	16	TR1402	SE140201	鉄製品	鉄鏃	19.3	0.7	0.7	茎部に折れ
113	22-24	16	TR1402	SE140201	鉄製品	鉄釘	9.8	0.6	0.6	
114	22-25	16	TR1402	SE140201	鉄製品	鉄釘	5.3	0.6	0.6	
115	22-26	16	TR1402	SE140201	鉄製品	鉄釘	5.8	0.8	0.8	
116	22-27	16	TR1402	SE140201	鉄製品	鉄釘	4.9	1.2	0.9	
117	22-28		TR1402	SE140201	鉄製品	鉄片	(2.5)	(2.1)	1.1	切り込みあり。繊維質の付着?

第7表 遺物観察表(木製品)

No	挿図	図版	調査区	出土地点	種別	器種	法量(cm)			樹種	備考
							長さ	幅	厚さ		
118	28-1	17	TR1402	SE140201	木製品	箸状木製品	(8.5)	0.6	0.4	スギ	
119	28-2		TR1402	SE140201	木製品	箸状木製品	(10.0)	0.6	0.3	スギ	
120	28-3	17	TR1402	SE140201	木製品	箸状木製品	(8.0)	0.6	0.4	スギ	
121	28-4	17	TR1402	SE140201	木製品	箸状木製品	(3.5)	0.6	0.4	スギ	
122	28-5		TR1402	SE140201	木製品	箸状木製品	(3.9)	0.6	0.4	スギ	
123	28-6		TR1402	SE140201	木製品	箸状木製品	(5.9)	0.7	0.4	スギ	
124	28-7	17	TR1402	SE140201	木製品	箸状木製品	(4.7)	0.8	0.4	スギ	
125	28-8		TR1402	SE140201	木製品	折敷	23.9	(6.0)	0.5	スギ	平折敷
126	28-9	17	TR1402	SE140201	木製品	折敷	(16.7)	(7.4)	0.5	スギ	平折敷
127	28-10	17	TR1402	SE140201	木製品	付け木	19.1	1.4	0.3	スギ	未使用?
128	28-11	17	TR1402	SE140201	木製品	付け木	26.5	1.7	0.5	スギ	先端加工 表面炭化
129	28-12	17	TR1402	SE140201	木製品	付け木	7.0	1.6	0.9	スギ	先端加工 表面炭化
130	28-13	17	TR1402	SE140201	木製品	付け木	18.8	1.9	1.2	スギ	先端加工 表面炭化
131	28-14		TR1402	SE140201	木製品	付け木	(2.4)	0.6	0.4	スギ	棒状加工 先端炭化
132	28-15	17	TR1402	SE140201	木製品	部材(板)	径8.4	3.2	0.4	スギ	柄杓底板
133	28-16	17	TR1402	SE140201	木製品	杭	6.2	径3.8		スギ	井戸底に打ち込む
134	28-17	17	TR1402	SE140201	木製品	部材	7.8	12.2	1.5	スギ	下駄部材(歯部)
135	28-18	17	TR1402	SE140201	木製品	不明木製品	8.0	7.0	0.1	スギ	的?
136	28-19	17	TR1402	SE140201	木製品	不明木製品	8.2	7.6	0.1	スギ	的?
137	29-1	18	TR1402	SE140201	木製品	縦板	(32.7)	(9.7)	(4.0)	スギ	井戸部材
138	29-2	18	TR1402	SE140201	木製品	縦板	(62.6)	(19.2)	(5.2)	スギ	井戸部材
139	29-3	18	TR1402	SE140201	木製品	縦板	(51.8)	(8.6)	(2.8)	スギ	井戸部材
140	29-4		TR1402	SE140201	木製品	支柱	(26.6)	7.3	4.3	ヒノキ	井戸部材
141	30-1	18	TR1402	SE140201	木製品	横棧	(61.1)	(5.2)	(5.0)	スギ	井戸部材
142	30-2	18	TR1402	SE140201	木製品	横棧	(53.5)	(5.5)	(6.5)	スギ	井戸部材
143	30-3	18	TR1402	SE140201	木製品	横棧	(48.4)	(6.0)	(5.0)	スギ	井戸部材
144	30-4	18	TR1402	SE140201	木製品	横棧	(89.0)	(6.8)	(6.8)	スギ	井戸部材
145	31-1	18	TR1402	SE140201	木製品	横棧	(110.4)	(10.0)	(6.3)	スギ	井戸部材
146	31-2	18	TR1402	SE140201	木製品	横棧	(100.7)	(7.5)	(4.5)	スギ	井戸部材

第8表 遺物観察表(繊維製品)

No	挿図	図版	調査区	出土地点	種別	器種	法量(cm)			樹種	備考
							長さ	幅	厚さ		
147	32-1		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(2.7)	0.5	0.5	ワラ	二本撚り
148	32-2		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(2.4)	0.5	0.4	ワラ	二本撚り
149	32-3		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(1.8)	0.5	0.4	ワラ	二本撚り
150	32-4		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(2.7)	0.5	0.4	ワラ	二本撚り
151	32-5		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(2.5)	0.7	0.5	ワラ	二本撚り
152	32-6		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(3.9)	0.7	0.5	ワラ	二本撚り
153	32-7	18	TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(2.5)	0.5	0.4	ワラ	二本撚り
154	32-8		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(3.0)	0.6	0.4	ワラ	二本撚り
155	32-9		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(3.5)	0.5	0.3	ワラ	二本撚り
156	32-10	18	TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(2.5)	0.7	0.6	ワラ	二本撚り
157	32-11		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(2.0)	0.5	0.4	ワラ	二本撚り
158	32-12		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(6.7)	0.5	0.4	ワラ	二本撚り
159	32-13		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(6.0)	0.6	0.5	ワラ	二本撚り
160	32-14		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(5.5)	0.5	0.4	ワラ	二本撚り
161	32-15		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(6.9)	0.6	0.6	ワラ	二本撚り
162	32-16		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(7.0)	0.5	0.4	ワラ	二本撚り
163	32-17	18	TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(7.7)	0.5	0.5	ワラ	二本撚り
164	32-18	18	TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(13.2)	0.5	0.4	ワラ	二本撚り
165	32-19		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(4.2)	0.2	0.2	ワラ	二本撚り(単体)
166	32-20		TR1201	SX120101	繊維製品	紐	(8.2)	0.2	0.2	ワラ	二本撚り(単体)

第9表 遺物観察表（一括出土銭）

No.	銭種名	書体	初鋳年	表・裏 (内側から見て)	備考	銭径		内径		銭厚		量目	拓本・ 写真	蛍光 X線
						(A)	(B)	(C)	(D)	最小	最大			
9-1	聖宋元寶	篆書	1101	裏		23.6	23.8	19.6	19.3	1.5	1.7	3.87		
9-2	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.8	24.5	19.8	19.4	1.3	1.4	3.76		
9-3	元豐通寶	篆書	1078	裏	寸穴有	24.8	24.8	21.1	20.4	1.2	1.4	2.92		
9-4	景德元寶	真書	1004	表		24.9	24.7	20.3	19.6	1.1	1.3	3.12		
9-5	景德元寶	真書	1004	表		24.5	24.6	18.3	17.8	1.1	1.3	3.79		
9-6	元豐通寶	行書	1078	裏		23.6	23.6	18.3	18.4	1.3	1.5	3.41		
9-7	軋元重寶	隸書	758	表		23.5	23.3	18.7	18.3	1.3	1.5	3.78		
9-8	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.5	24.6	20.0	19.9	1.3	1.4	3.59		
9-9	皇宋通寶	篆書	1038	裏	星形孔銭	24.7	24.6	20.5	20.0	1.3	1.4	3.48		
9-10	熙寧元寶	篆書	1068	裏		23.4	23.5	19.2	19.4	1.1	1.4	3.42		
9-11	至和元寶	真書	1054	表		23.5	23.7	19.7	19.3	1.5	1.6	4.01		
9-12	開元通寶	隸書	621	裏		24.8	24.7	20.5	20.1	1.0	1.2	3.08		
9-13	聖宋元寶	行書	1101	表		24.8	24.6	18.3	18.2	1.3	1.4	4.37		
9-14	祥符元寶	真書	1009	表		25.1	25.1	19.0	18.9	1.2	1.3	3.62		
9-15	明道元寶	篆書	1032	裏		24.7	24.6	20.9	21.2	1.1	1.3	2.90		
9-16	元祐通寶	行書	1086	表		24.1	24.3	20.1	19.5	1.2	1.3	3.44		
9-17	政和通寶	隸書	1111	表		24.8	24.6	20.0	20.9	1.2	1.4	3.48		
9-18	皇宋通寶	篆書	1038	表		24.5	24.7	19.7	19.7	1.1	1.4	3.55		
9-19	至道元寶	行書	995	表		24.6	24.6	16.2	17.0	1.1	1.2	3.30		
9-20	咸平元寶	真書	998	表		24.7	24.8	18.7	19.1	1.2	1.4	3.73		
9-21	祥符元寶	真書	1009	表		25.3	25.3	18.8	18.5	1.1	1.4	3.40		
9-22	紹聖元寶	行書	1094	表	星形孔銭	24.6	24.8	18.7	18.7	1.3	1.4	3.88		
9-23	嘉祐通寶	篆書	1056	表	寸穴有	24.8	24.6	19.7	19.8	1.2	1.3	3.18		
9-24	皇宋通寶	篆書	1038	表		24.8	24.8	20.4	20.5	1.2	1.6	4.06		
9-25	元豐通寶	篆書	1078	表		25.0	25.0	18.1	19.0	1.3	1.5	4.31		
9-26	大觀通寶	瘦体	1107	表	星形孔銭	24.3	24.3	21.3	21.3	1.7	1.8	4.14		
9-27	聖宋元寶	行書	1101	裏		23.9	23.9	18.5	18.5	1.3	1.6	4.01		
9-28	淳熙元寶	真書	1174	裏	背上「月」・下「星」	24.0	23.7	18.0	17.8	1.2	1.5	3.75		
9-29	至和元寶	篆書	1054	裏		24.3	24.5	19.3	19.4	1.1	1.4	3.40		
9-30	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.5	24.4	17.7	17.8	1.1	1.2	3.39		
9-31	開元通寶	隸書	621	裏	背上「月」	24.9	25.0	21.0	20.9	1.3	1.4	3.54		
9-32	宣和通寶	隸書	1119	表		24.2	24.1	20.6	20.4	1.1	1.2	2.79		
9-33	祥符元寶	真書	1009	裏		25.5	26.1	18.5	19.0	1.1	1.2	3.50		
9-34	南唐開元	篆書	960	裏		24.9	24.9	17.9	18.1	1.1	1.2	3.51	○	○
9-35	咸淳元寶	真書	1265	表	背上「八」	23.5	23.3	19.7	19.7	1.2	1.4	3.21	○	○
9-36	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.0	23.8	18.9	18.5	1.1	1.3	3.32		
9-37	元豐通寶	行書	1078	裏		25.1	25.3	18.5	19.0	1.1	1.3	3.55		
9-38	政和通寶	隸書	1111	裏		25.1	25.1	21.8	21.7	1.3	1.5	3.92		
9-39	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.3	24.4	19.9	20.3	1.2	1.3	3.59		
9-40	元祐通寶	行書	1086	表		23.5	23.6	19.1	19.2	1.1	1.3	3.00		
9-41	熙寧元寶	篆書	1068	裏	寸穴有・一部欠損	24.4	24.4	19.2	19.0	1.1	1.3	3.34		
9-42	熙寧元寶	篆書	1068	裏		23.0	22.9	18.9	18.8	1.1	1.2	2.88	○	
9-43	元豐通寶	篆書	1078	裏		24.0	24.2	17.7	17.9	1.3	1.4	3.61	○	
9-44	元豐通寶	篆書	1078	裏		24.6	24.6	19.0	19.0	1.1	1.2	3.62		
9-45	天聖元寶	真書	1023	裏		25.0	24.9	20.6	20.5	1.2	1.3	3.37		
9-46	開元通寶	隸書	621	裏		24.0	23.9	20.5	20.4	1.3	1.5	3.82		
9-47	元祐通寶	行書	1086	表		24.3	24.4	20.2	20.1	1.3	1.5	3.99		
9-48	熙寧元寶	真書	1068	表		23.9	23.7	18.8	19.1	1.4	1.8	4.09		
9-49	天聖元寶	篆書	1023	表		25.7	25.7	22.2	22.2	1.1	1.2	3.17		
9-50	紹聖元寶	篆書	1094	裏		24.9	24.7	17.2	17.9	1.2	1.4	3.68		
9-51	開元通寶	隸書	621	裏	背左「」	24.9	25.0	21.0	20.9	1.5	1.7	3.92		
9-52	軋元重寶	隸書	758	表		22.9	22.7	19.7	19.5	0.9	1.1	2.33	○	
9-53	開元通寶	隸書	621	表	背上「星」・一部欠損	24.9	25.0	20.4	20.3	1.4	1.4	3.29	○	
9-54	治平元寶	篆書	1064	表		24.2	24.2	19.9	20.1	1.2	1.4	3.51		
9-55	天聖元寶	真書	1023	表		25.1	25.5	21.1	20.8	1.2	1.4	3.74		
9-56	元祐通寶	篆書	1086	表		24.0	23.9	18.8	18.8	1.5	1.7	4.11		
9-57	熙寧元寶	真書	1068	裏		23.8	23.8	19.0	19.4	1.4	1.8	3.87		
9-58	天聖元寶	篆書	1023	表		25.2	25.2	21.3	21.4	1.1	1.4	3.38		
9-59	熙寧元寶	篆書	1068	表		23.7	24.0	19.5	19.1	1.3	1.4	3.63		
9-60	至和元寶	真書	1054	表		24.5	24.6	19.1	19.1	1.2	1.4	3.64		
9-61	政和通寶	隸書	1111	表		25.3	25.2	19.7	19.6	1.2	1.4	3.43		
9-62	熙寧元寶	真書	1068	裏		23.8	23.9	20.0	19.9	1.1	1.4	3.43		
9-63	元符通寶	行書	1098	裏		23.7	23.9	18.9	18.6	1.3	1.5	3.87		
9-64	開元通寶	隸書	621	表		23.5	23.5	18.5	18.8	1.4	1.6	3.84		
9-65	開元通寶	隸書	621	表		23.5	23.6	20.6	20.6	1.1	1.3	2.84		
9-66	元祐通寶	行書	1086	表		24.3	24.2	19.2	19.1	1.2	1.6	4.17		
9-67	元豐通寶	行書	1078	裏		25.0	24.9	20.2	20.4	1.2	1.4	3.72		
9-68	嘉祐元寶	真書	1056	表		23.5	23.3	17.9	18.1	1.3	1.5	3.82		
9-69	嘉祐元寶	真書	1056	表	星形孔銭	24.7	24.7	20.3	20.4	1.0	1.2	3.51		
9-70	聖宋元寶	行書	1101	表		23.8	24.2	19.7	19.6	1.3	1.5	3.86		
9-71	皇宋通寶	真書	1038	表		25.0	24.8	19.8	19.7	1.2	1.4	3.74		
9-72	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.7	24.5	20.7	20.5	1.2	1.4	3.72		
9-73	聖宋元寶	行書	1101	表		22.4	22.2	18.8	18.7	1.2	1.4	3.06		
9-74	開元通寶	隸書	621	表	背左「」	24.9	25.0	20.2	20.2	1.5	1.7	3.61		
9-75	咸平元寶	真書	998	裏		24.8	24.7	18.8	19.1	1.2	1.3	3.27		
9-76	景德元寶	真書	1004	裏		23.8	23.9	19.9	19.5	1.0	1.1	2.90		
9-77	紹興元寶	真書	1131	表		23.3	23.3	20.8	20.2	0.8	0.9	2.17	○	○
9-78	開元通寶	隸書	621	裏		26.0	25.8	21.2	20.9	1.2	1.5	3.49		
9-79	皇宋通寶	真書	1038	表		24.9	24.9	20.0	20.0	0.9	1.1	3.06		
9-80	皇宋通寶	真書	1038	表		25.0	24.9	19.6	19.7	1.2	1.5	3.89	○	
9-81	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.3	24.4	20.2	20.9	1.3	1.4	3.97	○	
9-82	太平通寶	真書	976	裏		24.5	24.4	18.8	19.1	1.1	1.3	3.18		
9-83	聖宋元寶	篆書	1101	裏		23.8	23.8	18.6	18.3	1.3	1.4	3.63	○	
9-84	嘉祐元寶	真書	1056	裏		23.5	23.5	18.1	18.3	1.1	1.2	3.01		
9-85	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.7	25.0	18.1	18.1	1.1	1.2	3.33		
9-86	皇宋通寶	篆書	1038	裏		25.0	24.9	20.0	20.0	1.2	1.4	3.55		
9-87	至道元寶	草書	995	裏		24.6	24.6	18.4	18.4	1.1	1.4	3.27		
9-88	天禧通寶	真書	1017	表		25.1	25.1	20.4	20.4	1.2	1.3	3.84		
9-89	皇宋通寶	真書	1038	表		25.3	25.0	18.7	19.6	1.1	1.4	3.58		
9-90	熙寧元寶	真書	1068	表	右上欠損	24.3	24.2	18.9	18.8	1.2	1.4	3.41		
9-91	熙寧元寶	真書	1068	表		24.4	24.6	19.1	18.9	1.3	1.5	4.30		
9-92	淳熙元寶	真書	1174	裏	背「十四」	22.9	22.2	19.4	19.4	1.2	1.4	2.69	○	
9-93	元豐通寶	篆書	1078	裏		24.3	24.4	19.1	19.1	1.2	1.3	3.27		
9-94	皇宋通寶	篆書	1038	表		24.3	24.5	19.7	19.8	1.4	1.5	4.10		
9-95	元豐通寶	行書	1078	表		24.3	24.5	19.3	19.1	1.1	1.4	3.77		
9-96	紹聖元寶	篆書	1014	裏	星形孔銭	23.6	23.9	18.2	18.0	1.5	1.6	3.96		
9-97	政和通寶	隸書	1111	表		24.8	24.9	21.0	21.1	1.4	1.6	4.31		

No.	錢種名	書体	初鑄年	表・裏 (内側から見て)	備考	錢径		内径		錢厚		量目	拓本・ 写真	蛍光 X線
						(A)	(B)	(C)	(D)	最小	最大			
10-1	皇宋通寶	真書	1038	表		23.6	23.9	19.8	19.6	1.1	1.4	3.28		
10-2	景德元寶	真書	1004	裏		24.8	24.9	18.4	18.4	1.5	1.7	4.44	○	
10-3	淳化元寶	草書	990	表		24.7	24.9	18.4	18.6	1.1	1.4	3.51	○	○
10-4	皇宋通寶	篆書	1038	裏	星形孔錢	24.4	23.7	19.9	19.8	0.9	1.1	2.67		
10-5	淳化元寶	草書	990	裏		24.1	24.3	18.5	18.8	1.3	1.4	3.80	○	
10-6	開元通寶	隸書	621	裏		23.8	23.9	20.4	20.5	0.9	1.1	2.86		
10-7	聖宋元寶	行書	1101	表		24.6	24.6	19.4	19.3	1.1	1.3	3.48		
10-8	咸平元寶	真書	998	表		24.7	24.7	18.7	19.1	1.2	1.3	3.61		
10-9	紹聖元寶	行書	1094	裏		24.9	24.7	19.9	20.0	1.4	1.5	4.29	○	
10-10	太平通寶	真書	976	裏		23.8	23.8	18.9	18.8	1.1	1.2	2.85		
10-11	太平通寶	真書	976	表		24.6	24.8	19.0	19.2	1.3	1.4	3.66		
10-12	熙寧元寶	真書	1068	表		24.4	24.2	20.5	20.6	1.2	1.3	3.64		
10-13	熙寧元寶	篆書	1068	表		24.1	23.8	18.2	18.4	1.5	1.7	4.61		
10-14	太平通寶	真書	976	表		24.2	24.5	18.7	18.8	1.1	1.4	3.19		
10-15	宣和通寶	篆書	1119	裏		24.7	24.6	20.7	20.5	1.3	1.5	3.44	○	
10-16	熙寧元寶	篆書	1068	表		24.3	24.4	20.3	20.3	1.3	1.5	4.00		
10-17	祥符元寶	真書	1009	裏		25.1	25.1	18.6	18.3	1.2	1.5	4.04	○	
10-18	景德元寶	真書	1004	裏		24.0	23.9	19.5	19.3	1.4	1.5	4.42	○	
10-19	天聖元寶	篆書	1023	表		25.1	24.9	20.5	20.4	1.4	1.5	4.56		
10-20	開元通寶	隸書	621	裏		23.6	23.7	20.1	20.0	1.2	1.3	3.36		
10-21	淳化元寶	行書	990	裏		24.3	24.2	18.5	18.5	1.1	1.2	3.19		
10-22	元祐通寶	行書	1086	裏	摩輪	22.2	22.2	20.4	20.4	1.2	1.4	2.76	○	
10-23	熙寧元寶	篆書	1068	表		25.2	25.2	20.6	20.6	1.2	1.3	3.95		
10-24	紹聖元寶	篆書	1094	表		23.5	23.7	19.4	19.2	1.3	1.5	3.71		
10-25	元符通寶	篆書	1098	表	摩輪	21.1	21.6	18.9	18.8	1.2	1.4	2.93		
10-26	景德元寶	真書	1004	裏		24.1	23.9	19.4	19.2	1.2	1.4	3.49		
10-27	熙寧元寶	真書	1068	表		23.9	23.9	19.9	20.1	1.1	1.3	3.43		
10-28	熙寧元寶	篆書	1068	裏		24.2	24.2	20.6	20.6	1.3	1.5	3.58		
10-29	元符通寶	篆書	1098	裏		24.0	24.1	18.9	19.0	1.5	1.7	4.27	○	
10-30	明道元寶	篆書	1032	表		24.8	24.8	20.2	20.3	1.3	1.5	4.46		
10-31	元祐通寶	篆書	1086	表		24.4	24.4	20.2	20.2	1.0	1.1	3.01		
10-32	皇宋通寶	篆書	1038	表		24.4	24.3	19.4	19.6	1.2	1.4	3.50		
10-33	至道元寶	行書	995	表		25.1	24.9	17.6	18.0	1.2	1.5	3.98		
10-34	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.9	24.9	19.7	19.7	1.1	1.4	3.81	○	
10-35	祥符元寶	真書	1009	裏		25.3	25.3	19.2	18.6	1.2	1.3	3.30		
10-36	元豐通寶	行書	1078	裏		23.5	23.6	19.1	19.0	1.3	1.6	2.86		
10-37	元符通寶	篆書	1098	表		24.9	24.8	19.6	19.3	1.3	1.4	3.99		
10-38	聖宋元寶	篆書	1101	裏	一部欠損	24.7	24.8	19.0	18.9	1.1	1.3	3.27		
10-39	宋通元寶	真書	960	表		24.2	24.2	18.7	19.1	1.0	1.2	3.15		
10-40	景定元寶	真書	1260	裏	背上「三」	23.9	23.8	21.0	21.0	1.1	1.2	2.71	○	○
10-41	祥符通寶	真書	1009	表	湯回りが悪い	25.0	25.4	19.3	19.0	1.2	1.3	3.21		
10-42	政和通寶	隸書	1111	裏		25.3	25.1	19.9	19.8	1.1	1.3	3.61	○	○
10-43	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.9	24.8	20.9	20.7	1.2	1.3	3.67		
10-44	政和通寶	隸書	1111	表		24.5	24.9	21.6	21.3	1.3	1.6	3.81		
10-45	熙寧元寶	篆書	1068	表		24.8	24.6	15.2	15.4	1.2	1.5	3.98		
10-46	熙寧元寶	真書	1068	表	寸穴複数有	24.6	24.4	19.0	1.30	1.2	1.3	3.62		
10-47	咸平元寶	真書	998	表		24.7	24.8	19.3	19.3	1.2	1.3	3.72		
10-48	天聖元寶	篆書	1023	裏		24.8	24.7	20.6	20.8	1.0	1.2	3.35		
10-49	政和通寶	隸書	1111	表		24.2	24.4	21.1	21.3	1.3	1.5	4.13		
10-50	熙寧元寶	真書	1068	裏		23.0	23.0	19.3	19.3	1.3	1.4	3.13		
10-51	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.8	24.2	20.1	19.7	1.1	1.3	3.19		
10-52	開元通寶	隸書	621	裏		24.2	24.2	20.2	20.2	1.2	1.5	4.15		
10-53	咸平元寶	真書	998	裏		24.9	24.9	18.4	18.5	1.2	1.3	3.97		
10-54	至道元寶	真書	995	裏		24.9	24.8	18.7	18.4	1.2	1.4	3.75	○	
10-55	嘉祐元寶	篆書	1056	裏		24.6	24.7	20.5	20.4	1.1	1.2	3.65		
10-56	元豐通寶	篆書	1078	裏		25.2	25.3	18.7	18.7	1.0	1.2	3.57		
10-57	嘉祐元寶	篆書	1056	表		23.7	23.6	18.2	18.7	1.3	1.6	3.93		
10-58	熙寧元寶	真書	1068	表		24.1	24.0	19.8	19.6	1.2	1.4	3.78		
10-59	軋元重寶	真書	758	表		24.4	24.8	19.9	20.3	1.3	1.5	3.92	○	
10-60	太平通寶	真書	976	裏		24.4	24.3	19.0	19.3	1.2	1.4	3.49	○	
10-61	至道元寶	行書	995	表		24.9	24.8	17.7	17.7	1.2	1.4	4.31		
10-62	熙寧元寶	篆書	1068	裏	一部欠損	23.5	23.5	19.2	19.0	1.3	1.4	3.24		
10-63	紹聖元寶	篆書	1094	裏	背上「月」	25.1	25.1	20.5	20.3	1.3	1.4	4.01	○	
10-64	元祐通寶	行書	1086	表		23.7	23.8	18.8	18.6	1.2	1.3	3.10		
10-65	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.7	24.9	19.8	19.9	1.1	1.5	3.29		
10-66	大觀通寶	瘦體	1107	裏		24.8	24.9	21.6	21.5	1.0	1.1	3.05		
10-67	咸平元寶	真書	998	表		24.5	24.7	18.6	18.4	1.2	1.3	3.35		
10-68	元豐通寶	行書	1078	表		24.6	24.7	19.8	19.5	1.1	1.3	3.49		
10-69	熙寧元寶	真書	1068	裏		23.7	24.0	19.8	19.6	0.9	1.1	2.85	○	
10-70	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.2	24.5	19.3	19.5	1.2	1.4	3.93		
10-71	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.5	24.8	19.3	19.4	1.2	1.5	3.78		
10-72	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.6	24.3	19.1	19.0	1.3	1.4	4.05		
10-73	元豐通寶	行書	1078	表		24.5	24.4	19.3	19.5	1.2	1.5	4.19		
10-74	景祐元寶	篆書	1034	表		25.1	25.0	19.5	19.4	0.9	1.0	2.98	○	
10-75	元祐通寶	篆書	1086	表		24.6	24.3	20.2	20.3	1.1	1.3	2.99		
10-76	元豐通寶	篆書	1078	裏		24.9	24.4	18.8	18.5	1.2	1.4	3.22		
10-77	聖宋元寶	行書	1101	表		23.9	23.9	19.0	19.3	1.4	1.5	3.89		
10-78	元豐通寶	篆書	1078	裏	内孔一部欠損	25.0	24.9	18.9	18.9	1.3	1.4	3.46		
10-79	元祐通寶	行書	1086	裏		24.2	24.2	19.4	19.3	1.4	1.5	4.27		
10-80	淳熙元寶	真書	1174	裏	背上「十」	23.5	24.1	18.8	19.0	1.4	1.5	3.64	○	
10-81	皇宋通寶	篆書	1038	表		24.4	24.3	19.5	19.0	1.3	1.5	3.66		
10-82	紹聖元寶	篆書	1094	表		24.0	24.0	19.6	19.1	1.2	1.3	3.63		
10-83	景德元寶	真書	1004	裏		24.6	24.7	19.7	19.6	1.1	1.3	3.54		
10-84	天禧通寶	真書	1017	表		24.7	24.8	20.0	19.9	1.3	1.4	3.85		
10-85	祥符通寶	真書	1009	裏		25.0	24.9	19.8	19.6	1.3	1.4	3.90		
10-86	天聖元寶	篆書	1023	裏		24.9	24.9	21.0	21.1	1.3	1.4	3.91		
10-87	熙寧元寶	真書	1068	表		25.2	25.0	20.9	20.9	1.0	1.1	3.56		
10-88	元豐通寶	行書	1078	裏		24.6	24.7	19.6	19.8	1.2	1.4	3.85		
10-89	開元通寶	隸書	621	裏	背上「月」	24.9	24.7	21.1	20.9	1.1	1.2	2.70		
10-90	至道元寶	行書	995	表		21.3	21.8	16.8	17.2	1.1	1.4	2.70		
10-91	元豐通寶	行書	1078	裏		23.7	23.8	19.3	19.4	1.4	1.4	3.42		
10-92	天禧通寶	真書	1017	表		24.3	24.7	19.2	19.2	1.3	1.4	3.85		
10-93	景祐元寶	真書	1034	表		25.2	25.2	19.5	19.4	1.1	1.3	3.50		
10-94	元祐通寶	行書	1086	裏		24.8	24.7	18.3	18.4	1.0	1.2	3.16		
10-95	元祐通寶	行書	1086	裏		24.5	24.6	18.3	18.4	1.3	1.4	3.92		
10-96	元豐通寶	篆書	1078	裏		24.4	24.5	20.2	20.4	1.0	1.2	2.85		
10-97	天禧通寶	真書	1017	表		25.8	25.7	20.6	20.5	1.1	1.2	3.62		

No.	銭種名	書体	初鑄年	表・裏 (内側から見て)	備考	銭径		内径		銭厚		量目	拓本・ 写真	蛍光 X線
						(A)	(B)	(C)	(D)	最小	最大			
11-1	熙寧元寶	篆書	1068	裏	星形孔銭	24.0	24.3	19.7	19.5	1.2	1.3	2.84	○	
11-2	熙寧元寶	篆書	1068	裏		23.8	23.7	20.4	20.3	1.0	1.1	3.03		
11-3	熙寧元寶	真書	1068	表		25.0	24.8	20.1	20.2	1.3	1.6	4.07		
11-4	政和通寶	隸書	1111	裏		25.9	26.0	20.5	20.6	0.9	1.0	2.79		
11-5	至道元寶	行書	995	表		24.7	24.5	18.4	18.5	1.1	1.3	3.36		
11-6	開元通寶	隸書	621	表		24.8	24.5	18.9	18.3	1.1	1.3	3.43		
11-7	天聖元寶	真書	1023	裏		25.2	24.9	20.6	20.6	1.3	1.5	3.72		
11-8	聖宋元寶	行書	1101	表	す穴有・鑄上がりが悪い	25.2	24.9	20.4	20.4	1.0	1.2	2.92	○	○
11-9	聖宋元寶	篆書	1101	裏		24.4	24.5	19.1	19.1	1.3	1.3	3.84		
11-10	天禧通寶	真書	1017	裏		25.3	25.2	20.9	20.5	1.2	1.3	3.65	○	
11-11	皇宋通寶	真書	1038	裏		25.2	25.0	20.6	20.5	1.2	1.3	3.19		
11-12	皇宋通寶	篆書	1038	裏	湯回りが悪い	24.8	24.5	20.4	20.2	0.9	1.2	2.43		
11-13	皇宋通寶	篆書	1038	裏		25.2	24.8	20.9	21.3	1.1	1.3	3.51		
11-14	熙寧元寶	真書	1068	表	一部欠損	23.7	23.8	20.0	19.9	1.1	1.2	2.27		
11-15	天聖元寶	真書	1023	表	一部欠損	24.6	24.7	20.9	20.6	1.1	1.4	3.09		
11-16	元祐通寶	行書	1086	裏		24.3	24.3	19.6	19.6	1.3	1.5	4.02		
11-17	嘉祐元寶	真書	1056	表	歪み有・一部欠損	23.3	23.1	18.3	18.3	1.1	1.3	2.67		
11-18	慶元通寶	真書	1195	裏	背下「元」	23.5	23.6	20.4	20.5	1.2	1.6	3.45	○	
11-19	元豊通寶	行書	1078	表		24.3	24.2	20.0	20.4	1.3	1.5	3.82		
11-20	開元通寶	隸書	621	裏		23.0	23.0	18.6	18.9	1.0	1.3	2.90		
11-21	政和通寶	隸書	1111	表		25.2	24.9	19.4	19.6	1.3	1.5	4.02		
11-22	元豊通寶	篆書	1078	表		23.9	23.9	19.7	19.4	1.3	1.4	3.85		
11-23	景祐元寶	篆書	1034	裏	す穴有	25.1	24.8	19.5	19.5	1.0	1.2	3.02		
11-24	熙寧元寶	真書	1068	表	一部欠損	23.2	23.3	19.0	19.3	1.1	1.2	3.02		
11-25	政和通寶	隸書	1111	表		24.8	24.8	22.1	22.1	1.4	1.5	4.08		
11-26	熙寧元寶	真書	1068	表		24.3	24.3	20.9	21.1	1.2	1.4	3.59		
11-27	景德元寶	真書	1004	表		24.3	24.3	19.6	19.4	1.2	1.5	3.76		
11-28	聖宋元寶	行書	1101	裏		24.7	24.4	20.7	20.6	1.3	1.4	3.88		
11-29	元祐通寶	篆書	1086	裏	す穴有	24.5	24.7	21.1	20.9	1.3	1.4	3.34		
11-30	元祐通寶	篆書	1086	表	す穴有	24.2	24.2	20.7	20.6	1.0	1.2	3.00		
11-31	紹聖元寶	行書	1094	表	す穴有	23.8	24.2	18.5	18.7	1.1	1.4	3.60		
11-32	元豊通寶	篆書	1078	裏		24.8	24.9	19.3	19.4	1.2	1.3	3.61		
11-33	元祐通寶	行書	1086	裏		24.7	24.5	20.5	20.7	1.4	1.6	4.64		
11-34	元祐通寶	行書	1086	裏		24.6	24.7	20.6	21.1	1.3	1.4	3.95		
11-35	開元通寶	隸書	621	表		24.6	24.7	20.9	20.9	1.1	1.2	3.08		
11-36	治平元寶	真書	1064	表		23.9	23.9	19.6	19.6	1.1	1.3	3.15		
11-37	皇宋通寶	篆書	1038	裏	複数す穴有	23.8	23.7	20.0	19.7	1.0	1.4	3.06		
11-38	政和通寶	隸書	1111	裏		24.4	24.4	20.9	20.9	1.4	1.6	3.83		
11-39	祥符元寶	真書	1009	表		25.4	25.4	19.3	18.9	1.2	1.3	3.72		
11-40	開元通寶	隸書	621	表	星形孔銭	23.4	23.8	19.9	20.4	1.1	1.2	3.27		
11-41	熙寧元寶	真書	1068	裏		23.6	23.9	19.4	19.4	1.1	1.2	2.88		
11-42	天聖元寶	篆書	1023	裏		24.2	24.3	21.3	21.1	1.1	1.3	3.37		
11-43	元祐通寶	行書	1086	表		24.5	24.7	21.0	21.0	1.3	1.4	3.57		
11-44	元祐通寶	篆書	1086	表		24.4	24.3	18.3	18.1	1.3	1.4	4.00		
11-45	開元通寶	隸書	621	裏	背上「月」	25.0	25.1	21.1	21.2	1.2	1.4	3.32		
11-46	皇宋通寶	篆書	1038	表	す穴有・一部欠損	24.8	24.7	20.1	20.4	0.9	1.2	2.69		
11-47	咸平元寶	真書	998	表		24.7	24.5	18.9	18.6	1.2	1.3	3.04		
11-48	嘉祐元寶	真書	1056	裏	一部欠損	23.5	23.2	18.8	18.8	1.3	1.4	3.16		
11-49	嘉祐元寶	篆書	1056	裏		24.8	24.9	21.2	21.0	1.2	1.3	3.62		
11-50	皇宋通寶	真書	1038	裏		25.0	25.0	21.3	21.4	1.5	1.6	4.65		
11-51	熙寧元寶	真書	1068	裏		23.6	23.6	19.0	19.1	1.2	1.4	3.36		
11-52	熙寧元寶	篆書	1068	裏		24.3	24.0	21.3	21.2	1.4	1.5	3.88		
11-53	元祐通寶	行書	1086	裏		23.8	24.0	19.8	19.8	1.2	1.4	3.48		
11-54	政和通寶	隸書	1111	裏		24.5	24.6	21.4	21.5	1.4	1.5	3.78		
11-55	聖宋元寶	篆書	1011	裏		23.6	23.1	20.1	19.8	1.4	1.5	3.35	○	
11-56	景祐元寶	真書	1034	裏		25.6	25.8	20.2	20.1	1.3	1.4	3.94		
11-57	聖宋元寶	篆書	1101	裏	す穴有	24.7	24.8	20.4	20.6	1.4	1.6	3.80		
11-58	至道元寶	草書	995	表		23.9	24.3	19.6	19.3	1.2	1.5	3.24		
11-59	元豊通寶	行書	1078	裏		24.6	24.6	19.7	19.4	1.3	1.4	3.56		
11-60	元豊通寶	行書	1078	裏		24.9	24.9	18.7	18.5	1.3	1.5	3.95		
11-61	政和通寶	隸書	1111	裏		24.4	24.4	21.6	21.8	1.5	1.6	3.81		
11-62	元豊通寶	篆書	1078	表		25.3	25.3	20.2	20.4	1.2	1.3	3.70		
11-63	開元通寶	隸書	621	裏		23.5	23.5	18.9	18.8	1.4	1.5	3.98		
11-64	天禧通寶	真書	1017	表		24.4	24.4	20.2	20.3	1.4	1.5	4.11		
11-65	元祐通寶	篆書	1086	表		24.3	24.5	20.7	20.6	1.4	1.5	3.49		
11-66	元祐通寶	行書	1086	裏	一部欠損	24.4	24.2	21.0	20.4	1.3	1.5	3.65		
11-67	淳熙元寶	真書	1174	裏	背「十三」	23.8	23.9	19.0	19.3	1.2	1.3	3.06	○	
11-68	熙寧元寶	篆書	1068	裏		24.0	24.2	19.5	19.6	1.4	1.6	4.02		
11-69	治平通寶	篆書	1064	表		24.9	24.9	20.4	20.0	1.1	1.5	3.45	○	
11-70	天聖元寶	真書	1023	裏		25.0	25.0	21.6	21.5	1.2	1.4	3.48		
11-71	景祐元寶	真書	1034	表		25.5	25.4	20.8	20.6	1.1	1.3	3.25		
11-72	熙寧元寶	真書	1068	表		24.2	24.4	21.2	21.4	1.4	1.5	3.80		
11-73	天禧通寶	真書	1017	裏		24.6	24.4	20.3	20.1	1.4	1.5	4.04		
11-74	元豊通寶	行書	1078	裏		24.1	28.9	19.8	20.0	1.4	1.4	3.31		
11-75	開元通寶	隸書	621	裏		23.1	23.3	20.0	19.6	1.3	1.5	3.23		
11-76	元豊通寶	篆書	1078	表		24.9	24.9	20.7	20.8	1.2	1.5	3.81		
11-77	聖宋元寶	行書	1101	裏		23.9	23.7	19.2	19.1	1.5	1.6	3.98		○
11-78	熙寧元寶	篆書	1068	裏		24.0	23.9	20.3	20.3	1.2	1.2	2.92		
11-79	元豊通寶	篆書	1078	裏	星形孔銭	25.5	25.2	19.3	19.2	1.3	1.5	4.11		
11-80	嘉泰通寶	真書	1201	表	背「三」	24.5	24.2	20.6	20.2	1.1	1.4	3.28	○	○
11-81	大觀通寶	瘦体	1107	表		23.9	24.1	21.0	20.9	1.5	1.7	3.93		
11-82	皇宋通寶	篆書	1038	裏		25.7	25.6	20.2	20.1	1.1	1.3	3.06		
11-83	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.5	24.7	20.6	20.8	1.3	1.4	3.89		
11-84	元豊通寶	篆書	1078	表		23.4	23.4	19.3	19.3	1.4	1.4	3.89		
11-85	開元通寶	隸書	621	裏		23.5	23.6	19.9	20.8	1.2	1.4	2.72		
11-86	宣和通寶	篆書	1119	裏		24.2	24.4	21.1	21.3	1.5	1.6	3.89		
11-87	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.2	24.2	20.4	20.3	1.4	1.7	4.18		
11-88	紹聖元寶	篆書	1094	裏		24.0	23.9	19.2	19.1	1.6	1.7	4.87		
11-89	聖宋元寶	篆書	1101	表		24.8	24.9	19.5	19.5	1.2	1.4	3.46		
11-90	元豊通寶	篆書	1078	裏		24.4	24.4	19.2	19.4	1.3	1.5	3.66		
11-91	元豊通寶	篆書	1078	表		24.2	24.0	19.7	19.4	1.4	1.5	4.01		
11-92	淳化元寶	行書	990	表		24.9	24.9	19.7	19.7	1.1	1.3	3.14		
11-93	嘉祐通寶	真書	1056	裏		23.5	23.6	20.4	20.4	1.3	1.5	3.80	○	
11-94	皇宋通寶	真書	1038	表		25.3	25.2	20.4	20.2	1.0	1.1	2.83		

No.	銭種名	書体	初鑄年	表・裏 (内側から見て)	備考	銭径		内径		銭厚		量目	拓本・ 写真	蛍光 X線
						(A)	(B)	(C)	(D)	最小	最大			
12-1	大観通寶	瘦体	1107	表	星形孔銭	24.6	24.7	21.9	21.8	1.3	1.7	3.21		
12-2	開元通寶	隸書	621	表		23.1	23.0	20.3	20.4	1.1	1.3	2.73		
12-3	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.6	24.7	20.8	20.8	1.1	1.3	3.52		
12-4	紹聖元寶	篆書	1094	表		23.8	23.9	19.5	19.4	1.3	1.6	3.79		
12-5	天聖元寶	篆書	1023	表		24.5	24.4	21.3	21.0	1.2	1.3	2.76		
12-6	熙寧元寶	篆書	1068	表		23.4	23.4	19.4	19.6	1.3	1.4	3.45		
12-7	祥符元寶	真書	1009	表		25.3	25.5	19.5	19.7	1.1	1.3	3.44		
12-8	紹聖元寶	篆書	1094	裏		24.4	24.3	19.6	19.7	1.2	1.4	3.33		
12-9	淳祐元寶	真書	1241	表	背上「三」・磨輪	22.7	21.6	21.2	20.5	1.2	1.4	3.02		
12-10	元豊通寶	篆書	1078	裏		24.4	24.4	19.4	19.2	1.1	1.3	3.43		
12-11	嘉祐通寶	真書	1056	裏		24.3	24.4	19.7	19.8	1.0	1.1	3.20		
12-12	嘉熙通寶	隸書	1237	裏	背下「元」・磨輪	22.7	22.2	20.6	20.6	1.4	1.5	3.16	○	○
12-13	皇宋通寶	篆書	1038	裏	星形孔銭・す穴有	24.7	24.6	21.2	21.4	1.0	1.2	2.61		
12-14	開元通寶	隸書	621	裏		23.6	23.6	18.6	18.4	0.9	1.1	2.59		
12-15	皇宋通寶	篆書	1038	表	鑄上がり悪い	24.2	24.5	20.2	20.3	1.4	1.4	3.14		○
12-16	熙寧元寶	真書	1068	表		23.8	24.0	20.7	20.7	1.2	1.4	3.64		
12-17	皇宋通寶	篆書	1038	表		25.0	24.9	20.6	20.3	1.3	1.5	3.51		
12-18	嘉祐通寶	篆書	1056	表		24.6	24.4	20.5	20.4	1.3	1.6	4.02		
12-19	元豊通寶	篆書	1078	表		24.8	24.7	20.9	20.9	1.3	1.5	3.73		
12-20	天聖元寶	篆書	1023	裏	複数す穴有	24.6	24.6	21.3	21.4	1.2	1.4	3.18		
12-21	皇宋通寶	篆書	1038	表		25.3	25.3	20.6	20.9	1.3	1.3	3.63		
12-22	元祐通寶	篆書	1086	表	歪み有	24.7	24.5	20.9	20.8	1.1	1.2	2.95		
12-23	元豊通寶	行書	1078	裏		24.7	24.6	20.3	20.2	1.1	1.3	3.23		
12-24	開元通寶	隸書	621	表	背上「月」	25.6	25.5	21.6	21.4	1.4	1.5	3.52		
12-25	開元通寶	隸書	621	表		23.9	23.5	20.5	20.4	1.2	1.3	2.88		
12-26	皇宋通寶	真書	1038	表		24.1	24.5	21.1	21.3	1.1	1.2	2.97		
12-27	祥符元寶	真書	1009	表		25.2	25.4	20.1	20.2	1.4	1.6	3.97		
12-28	皇宋通寶	篆書	1038	表		24.9	24.7	21.1	20.9	1.3	1.5	4.08		
12-29	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.5	24.3	20.3	20.3	1.6	1.8	4.51		
12-30	天聖元寶	真書	1023	表		24.1	23.9	20.6	20.5	1.2	1.4	3.63		
12-31	元豊通寶	行書	1078	裏		24.4	24.3	19.8	20.0	1.2	1.3	3.52		
12-32	天聖元寶	篆書	1023	裏		24.9	25.0	21.4	21.5	1.6	1.6	4.49		
12-33	嘉祐元寶	真書	1056	表		24.8	24.9	20.7	20.6	1.4	1.6	3.67		
12-34	紹聖元寶	行書	1094	裏		23.8	24.0	19.5	19.7	1.7	1.8	4.52		
12-35	皇宋通寶	真書	1038	表		24.5	24.8	20.2	20.1	1.4	1.5	3.97		
12-36	熙寧元寶	真書	1068	表		23.6	23.8	20.2	20.3	1.3	1.5	3.72		
12-37	元祐通寶	行書	1086	裏		24.6	24.5	19.8	20.1	1.2	1.3	3.58		
12-38	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.8	24.7	20.6	20.9	1.2	1.3	3.41		
12-39	聖宋元寶	行書	1101	裏		24.9	24.8	18.4	18.5	1.1	1.2	3.50		
12-40	皇宋通寶	真書	1038	表		24.7	24.4	18.8	18.3	0.9	1.2	3.33		
12-41	元豊通寶	篆書	1078	裏	鑄上がり悪い	23.6	24.9	19.5	17.6	1.0	1.1	2.60	○	○
12-42	政和通寶	隸書	1111	表		24.6	24.6	21.8	21.8	1.3	1.4	3.39		
12-43	開元通寶	隸書	621	裏		24.5	24.5	21.5	21.7	1.2	1.6	3.34		
12-44	元符通寶	篆書	1098	裏	す穴有	23.6	23.7	18.9	19.2	1.4	1.5	3.34		
12-45	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.6	24.5	20.7	20.4	1.2	1.4	3.91		
12-46	元豊通寶	行書	10	表		25.4	25.5	19.1	19.4	1.1	1.3	3.48		
12-47	政和通寶	隸書	1111	裏		24.6	24.8	21.8	22.1	1.3	1.4	3.44		
12-48	宣和通寶	篆書	1119	裏	湯回りが悪い	24.8	24.9	21.4	21.3	1.2	1.4	3.14		
12-49	聖宋元寶	行書	1101	表		24.1	24.1	20.4	20.3	1.6	1.8	4.08		
12-50	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.3	24.1	20.2	20.1	1.2	1.4	3.43		
12-51	元豊通寶	行書	1078	表	す穴有	23.8	23.9	19.5	19.6	1.4	1.6	3.45		
12-52	開元通寶	隸書	621	裏		23.8	23.8	20.0	20.0	1.3	1.4	3.32		
12-53	元豊通寶	篆書	1078	表		24.3	24.3	19.5	19.8	1.3	1.5	3.82		
12-54	元符通寶	篆書	1098	表		23.9	24.0	19.0	18.8	1.6	1.8	4.08		
12-55	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.6	24.6	20.3	20.3	1.1	1.3	3.11		
12-56	皇宋通寶	篆書	1038	表	す穴有	24.6	24.6	20.1	20.0	1.3	1.3	3.48		
12-57	開元通寶	隸書	621	裏	背上「月」	25.0	24.9	21.3	21.5	1.1	1.2	3.18	○	
12-58	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.5	24.3	19.5	19.4	0.9	1.1	2.77	○	
12-59	皇宋通寶	真書	1038	表		24.8	24.9	20.1	20.3	1.4	1.6	4.21		
12-60	天聖元寶	篆書	1023	表		24.9	24.9	21.6	21.5	1.1	1.2	3.21		
12-61	元符通寶	篆書	1098	表		24.8	24.7	18.6	18.5	1.2	1.6	3.37		
12-62	開元通寶	隸書	621	裏		24.6	24.7	21.8	21.7	1.2	1.4	3.58		
12-63	嘉祐元寶	篆書	1056	表	湯回りが悪い	23.5	23.5	20.2	20.0	1.1	1.2	2.37		
12-64	熙寧元寶	篆書	1068	裏	星形孔銭	23.8	23.7	19.9	19.8	1.2	1.5	3.48		
12-65	紹聖元寶	行書	1094	裏		23.9	23.8	19.5	19.6	1.5	1.6	3.69		
12-66	嘉祐通寶	真書	1056	表		24.9	25.0	20.8	20.6	1.1	1.3	3.02		
12-67	開元通寶	隸書	621	表		24.4	24.5	21.4	21.5	1.2	1.4	3.42		
12-68	熙寧元寶	篆書	1068	表		24.1	23.9	21.4	21.5	1.3	1.6	3.73		
12-69	皇宋通寶	真書	1038	表		24.1	24.2	18.7	18.6	1.4	1.5	4.00		
12-70	開元通寶	隸書	621	表		24.2	24.3	20.0	20.1	1.4	1.5	4.15		
12-71	皇宋通寶	篆書	1038	表		24.7	24.5	20.5	20.5	1.3	1.6	3.62		
12-72	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.7	24.6	21.6	21.5	1.3	1.4	3.20		
12-73	治平元寶	真書	1064	裏		24.4	24.4	20.5	20.7	1.2	1.2	3.30		
12-74	紹聖元寶	篆書	1094	裏	湯回りが悪い	20.4	25.0	18.0	18.4	1.6	1.7	3.61		
12-75	聖宋元寶	行書	1101	裏		24.4	24.6	19.5	19.4	1.2	1.3	3.48		
12-76	聖宋元寶	行書	1101	表		23.7	23.7	19.1	18.9	1.4	1.5	4.33		
12-77	太平通寶	真書	976	表		25.0	25.0	19.7	19.7	1.1	1.1	2.98	○	
12-78	天禧通寶	真書	1017	裏		25.5	25.5	20.8	21.0	1.2	1.4	3.91		
12-79	元祐通寶	行書	1086	裏		24.2	23.9	18.6	18.3	1.4	1.5	3.56		
12-80	政和通寶	隸書	1111	裏		24.4	24.3	21.9	22.0	1.2	1.4	2.77		
12-81	熙寧元寶	真書	1068	表		24.7	24.6	19.7	19.5	1.4	1.4	3.80	○	
12-82	景德元寶	真書	1004	裏		24.4	24.5	19.2	19.4	1.2	1.4	3.52		
12-83	元豊通寶	行書	1078	裏	す穴有	24.1	24.0	19.8	19.5	1.3	1.5	3.85		
12-84	皇宋通寶	篆書	1038	表	複数す穴有	24.6	24.5	21.1	21.1	1.0	1.4	2.95		
12-85	熙寧元寶	篆書	1068	裏		24.5	24.4	20.8	20.6	1.1	1.4	3.59		
12-86	紹聖元寶	行書	1094	裏		24.3	24.3	20.7	20.5	1.4	1.6	3.85		
12-87	開元通寶	隸書	621	表	ひび	24.9	24.8	21.4	21.4	1.1	1.2	2.67		
12-88	紹聖元寶	行書	1094	裏		23.8	23.7	19.8	19.9	1.2	1.4	3.28		
12-89	皇宋通寶	真書	1038	表	鑄上がり悪い	23.9	24.7	20.8	21.0	1.2	1.4	3.85		
12-90	太平通寶	真書	976	表		24.3	24.4	19.4	19.5	1.2	1.3	3.33		
12-91	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.6	24.6	20.6	20.4	1.3	1.6	3.87		
12-92	景定元寶	真書	1260	表	背上「四」	23.8	23.7	20.6	20.4	1.2	1.3	3.27	○	
12-93	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.8	24.9	21.2	21.4	1.3	1.6	4.14		
12-94	聖宋元寶	行書	1101	裏	一部欠損	25.0	25.1	19.2	19.1	1.2	1.2	3.33		
12-95	政和通寶	隸書	1111	裏		24.9	25.2	21.2	21.3	1.2	1.4	3.38		
12-96	聖宋元寶	篆書	1101	裏	す穴小1・星形孔銭	25.2	25.2	20.5	20.6	1.1	1.3	3.13		
12-97	開元通寶	隸書	621	表	す穴有	23.0	23.0	20.7	20.7	1.3	1.5	3.60		

No.	銭種名	書体	初鑄年	表・裏 (内側から見て)	備考	銭径		内径		銭厚		量目	拓本・ 写真	蛍光 X線
						(A)	(B)	(C)	(D)	最小	最大			
13-1	熙寧元寶	真書	1068	表		23.8	23.8	19.0	19.0	1.2	1.3	3.37		
13-2	天聖元寶	真書	1023	表		25.1	25.2	20.8	21.2	1.4	1.5	3.88		
13-3	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.4	24.3	21.1	21.2	1.2	1.4	3.60		
13-4	皇宋通寶	真書	1038	表	星形孔銭・歪み有	24.4	24.4	21.8	21.4	1.3	1.4	3.81		
13-5	元祐通寶	行書	1086	裏		24.3	24.1	19.2	20.2	1.3	1.4	3.85		
13-6	天聖元寶	篆書	1023	表		24.7	24.7	20.9	21.0	1.2	1.4	4.02		
13-7	祥符元寶	真書	1009	裏		25.2	25.1	18.8	18.2	1.1	1.3	3.89		
13-8	元豊通寶	行書	1078	表		24.5	24.7	19.5	20.0	1.2	1.3	4.08		
13-9	皇宋通寶	真書	1038	表		25.1	24.9	20.1	20.8	1.1	1.3	3.80		
13-10	皇宋通寶	真書	1038	表		24.3	24.2	20.7	20.9	1.2	1.4	3.31		
13-11	至和元寶	篆書	1054	表		24.5	24.5	19.9	20.5	1.3	1.4	3.93		
13-12	開元通寶	隸書	621	裏		24.9	24.9	20.9	20.7	1.3	1.4	3.01		
13-13	開元通寶	隸書	621	表		24.2	24.1	20.6	20.5	1.1	1.2	3.51		
13-14	嘉定通寶	真書	1208	表	背上「三」	23.7	24.0	21.6	21.9	1.1	1.4	3.64	○	○
13-15	熙寧元寶	真書	1068	表	星形孔銭	24.3	24.3	19.3	19.6	1.0	1.1	3.04		
13-16	皇宋通寶	真書	1038	表		23.5	23.2	18.6	18.9	1.2	1.4	3.35		
13-17	政和通寶	隸書	1111	表	湯回りが悪い	24.6	24.9	21.8	21.5	1.3	1.4	3.48		
13-18	元祐通寶	行書	1086	表		23.9	24.2	18.3	18.7	1.0	1.2	2.97		
13-19	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.8	24.8	20.5	20.5	1.1	1.2	3.62		
13-20	元豊通寶	行書	1078	表	星形孔銭	24.1	24.0	19.8	20.0	1.4	1.5	3.68		
13-21	淳熙元寶	真書	1174	表	背「十三」	23.2	23.1	19.0	19.0	1.4	1.5	3.63	○	○
13-22	至道元寶	真書	995	表		25.1	25.2	19.3	19.5	1.3	1.4	4.04		
13-23	元符通寶	篆書	1098	裏		24.2	24.3	20.8	21.0	1.2	1.3	3.07		
13-24	開元通寶	隸書	621	裏		23.8	23.8	20.8	21.0	1.2	1.3	3.49		
13-25	聖宋元寶	行書	1101	裏		24.4	24.3	21.4	21.0	1.3	1.9	3.80		
13-26	開元通寶	隸書	621	裏	湯回りが悪い	23.0	23.0	20.3	20.5	0.9	1.0	2.40		
13-27	皇宋通寶	真書	1038	裏		25.0	24.9	20.3	20.2	1.3	1.6	4.42		
13-28	皇宋通寶	篆書	1038	裏	湯回りが悪い	23.9	24.3	20.6	20.7	1.0	1.1	2.49		
13-29	元豊通寶	行書	1078	裏		24.2	23.9	19.8	19.5	1.3	1.5	4.11		
13-30	元豊通寶	行書	1078	表		24.4	24.4	20.6	20.8	1.4	1.5	3.95		
13-31	太平通寶	真書	976	裏		23.6	23.1	19.8	19.4	1.1	1.4	3.31		
13-32	元豊通寶	篆書	1078	表		25.1	25.1	20.3	20.4	1.2	1.3	3.85		
13-33	慶元通寶	真書	1195	表	背下「三」	23.7	23.1	21.2	20.8	1.4	1.5	3.57	○	○
13-34	元豊通寶	行書	1078	裏		25.0	24.9	19.7	19.9	1.3	1.5	4.00		
13-35	開元通寶	隸書	621	表	背上「月」	24.4	24.5	20.8	20.9	1.3	1.4	3.78		
13-36	元祐通寶	行書	1086	裏		24.6	24.5	21.8	21.5	1.3	1.5	3.83		
13-37	元祐通寶	行書	1086	表		23.8	23.7	20.1	20.2	1.4	1.5	3.94		
13-38	元豊通寶	行書	1078	表		24.5	24.5	20.2	20.1	1.3	1.4	3.62		
13-39	熙寧元寶	篆書	1068	表		24.3	24.1	21.4	21.4	1.3	1.5	3.66		
13-40	聖宋元寶	篆書	1101	表		23.6	23.4	19.9	19.9	1.2	1.3	3.65		
13-41	聖宋元寶	篆書	1101	裏		24.4	24.2	19.8	19.5	1.3	1.4	3.65		
13-42	開元通寶	隸書	621	裏	湯回りが悪い	23.1	23.0	21.3	21.1	1.0	1.3	2.99		
13-43	天聖元寶	真書	1023	表		25.0	25.1	21.4	21.1	1.3	1.4	4.02		
13-44	元豊通寶	篆書	1078	裏		24.2	24.2	19.6	19.7	1.4	1.4	3.72		
13-45	皇宋通寶	真書	1038	裏	大きく欠損	23.9	23.9	18.7	18.8	1.5	1.5	3.69		
13-46	元符通寶	行書	1098	表		23.6	23.7	19.3	19.3	1.3	1.5	3.44		
13-47	咸平元寶	真書	998	表		24.6	24.4	20.0	19.8	1.1	1.2	3.40		
13-48	開元通寶	隸書	621	表	背上「月」	24.9	25.0	21.8	21.5	1.2	1.3	3.34		
13-49	天禧通寶	真書	1017	裏		24.2	24.2	21.2	21.2	1.4	1.4	3.89		
13-50	紹熙元寶	真書	1190	表	背下「四」	23.6	23.3	19.5	19.2	1.3	1.5	3.57	○	○
13-51	元豊通寶	篆書	1078	裏	背面鑄型ずれ	24.2	24.1	19.7	19.6	1.2	1.4	3.80		
13-52	熙寧元寶	篆書	1068	裏		23.7	23.8	19.7	19.7	1.2	1.5	3.42		
13-53	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.4	24.0	20.4	20.3	1.2	1.3	3.39		
13-54	淳祐元寶	真書	1241	裏	背上「二」	23.8	23.6	21.2	21.2	1.1	1.4	3.24	○	○
13-55	皇宋通寶	真書	1038	表	一部欠損	23.8	23.3	19.4	19.2	1.3	1.5	3.52		
13-56	元豊通寶	篆書	1078	表		23.7	23.9	20.1	19.9	1.4	1.5	3.85		
13-57	紹聖元寶	行書	1094	裏		23.6	23.6	19.6	19.8	1.3	1.5	3.67		
13-58	政和通寶	隸書	1111	表	一部欠損	24.0	24.1	21.8	21.8	1.1	1.2	3.02		
13-59	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.5	24.5	19.7	19.6	1.1	1.2	3.24	○	
13-60	皇宋通寶	真書	1038	裏		25.0	24.8	21.1	21.0	1.2	1.3	3.47		
13-61	周通元寶	隸書	955	表		23.7	24.0	18.5	19.2	1.1	1.7	3.88	○	
13-62	開元通寶	隸書	621	裏		24.3	24.2	19.8	20.1	1.2	1.4	3.87		
13-63	嘉祐通寶	篆書	1056	裏		24.2	24.3	20.0	19.9	1.0	1.1	2.89		
13-64	熙寧元寶	篆書	1068	表		25.0	25.1	21.7	21.8	1.2	1.4	3.97		
13-65	元祐通寶	行書	1086	表		24.9	24.7	21.2	20.9	1.3	1.4	3.67		
13-66	政和通寶	隸書	1111	裏		24.3	24.1	21.2	21.5	1.4	1.5	3.86		
13-67	熙寧元寶	真書	1068	表	一部欠損	23.3	23.4	20.1	20.1	1.4	1.6	3.11		
13-68	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.1	24.3	20.1	20.1	1.2	1.4	3.76		
13-69	祥符元寶	真書	1009	裏		24.7	24.8	20.3	19.9	1.1	1.2	3.26		
13-70	景祐元寶	真書	1034	表		24.3	24.5	20.7	20.7	1.1	1.0	3.02		
13-71	至道元寶	草書	995	表		24.9	24.9	19.4	19.6	1.1	1.0	3.02		
13-72	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.6	24.5	20.6	20.9	1.2	1.4	3.85		
13-73	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.8	25.0	20.6	20.1	1.2	1.4	3.62		
13-74	至和通寶	真書	1054	裏		24.7	24.8	19.1	19.0	1.2	1.3	3.74		
13-75	咸平元寶	真書	998	裏		24.8	24.8	19.4	19.8	1.2	1.4	3.96		
13-76	開元通寶	隸書	621	裏	背上「月」	25.4	25.4	21.4	21.3	1.3	1.5	3.70	○	
13-77	皇宋通寶	篆書	1038	表		23.6	23.6	18.0	17.8	1.1	1.3	3.56		
13-78	元豊通寶	行書	1078	表		23.9	23.7	18.3	18.6	1.4	1.5	3.95		
13-79	元豊通寶	篆書	1078	表		24.3	24.6	19.2	19.4	1.2	1.3	3.31		
13-80	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.9	24.7	20.0	20.5	1.1	1.2	3.50		
13-81	天禧通寶	真書	1017	表		25.7	25.7	21.9	21.7	1.1	1.3	3.43		
13-82	熙寧元寶	真書	1068	表		24.4	24.5	21.4	21.6	1.3	1.4	3.47		
13-83	天聖元寶	篆書	1023	裏		25.0	24.9	21.3	21.2	1.1	1.4	3.97		
13-84	政和通寶	隸書	1111	裏		24.5	24.4	21.0	21.0	1.4	1.6	4.04		
13-85	熙寧元寶	真書	1068	表		23.5	23.6	19.6	19.3	1.3	1.4	3.50		
13-86	祥符元寶	真書	1009	表		24.6	24.4	19.4	19.2	1.1	1.3	3.42		
13-87	皇宋通寶	篆書	1038	表		24.2	24.5	21.3	21.6	1.1	1.2	3.39		
13-88	熙寧元寶	篆書	1068	裏		24.3	24.3	20.1	20.1	0.9	1.1	3.97		
13-89	天聖元寶	篆書	1023	裏		24.9	25.0	21.7	21.6	1.3	1.4	3.97		
13-90	皇宋通寶	篆書	1038	裏		25.1	25.1	21.4	21.6	1.3	1.4	3.76		○
13-91	開元通寶	隸書	621	表	湯回りが悪い	23.6	23.5	20.0	20.2	1.3	1.4	3.16		
13-92	開元通寶	隸書	621	表	す穴・一部欠損	22.9	22.9	19.9	20.0	0.8	1.2	2.15	○	○
13-93	開元通寶	隸書	621	裏		24.0	24.1	21.0	21.1	1.2	1.2	3.34		
13-94	政和通寶	隸書	1111	表	す穴有	24.6	24.6	21.4	21.6	1.1	1.2	3.15		
13-95	景德元寶	真書	1004	表		24.4	24.5	20.4	20.3	1.1	1.3	3.07		
13-96	元豊通寶	篆書	1078	表		23.5	23.7	19.4	19.3	1.3	1.5	3.76		
13-97	元豊通寶	行書	1078	裏	鑄型ずれ	25.1	24.7	19.7	19.9	1.3	1.4	3.36		

No.	銭種名	書体	初鑄年	表・裏 (内側から見て)	備考	銭径		内径		銭厚		量目	拓本・ 写真	蛍光 X線
						(A)	(B)	(C)	(D)	最小	最大			
14-1	開元通寶	隸書	621	表		24.9	25.0	20.9	21.2	1.30	1.50	3.47		
14-2	嘉祐通寶	篆書	1056	裏		24.5	24.5	21.3	21.7	1.20	1.40	3.73	○	
14-3	開元通寶	隸書	621	表		24.0	24.0	20.9	21.4	1.00	1.10	2.65		
14-4	元豊通寶	篆書	1078	表		24.1	24.0	20.3	20.1	1.40	1.70	4.04		
14-5	元豊通寶	篆書	1078	表		24.1	24.2	19.2	19.4	1.10	1.30	3.26		
14-6	熙寧元寶	篆書	1068	裏		24.8	24.7	20.1	20.1	1.10	1.30	3.89		
14-7	太平通寶	真書	976	表		24.3	24.3	19.7	19.8	1.20	1.40	3.35		
14-8	景祐元寶	篆書	1034	裏	一部欠損	24.9	24.9	20.5	20.1	1.10	1.30	3.17		
14-9	太平通寶	真書	976	裏	す穴有	24.8	24.7	20.2	20.5	1.20	1.40	3.18		
14-10	開元通寶	隸書	621	表	大きく欠損	24.3	24.3	20.1	20.3	0.80	1.10	2.29		
14-11	天聖元寶	篆書	1023	裏		24.7	24.6	21.0	20.9	1.20	1.30	3.67		
14-12	元祐通寶	行書	1086	裏	一部欠損	24.0	24.6	18.5	18.6	1.10	1.20	2.76		
14-13	景祐元寶	真書	1034	表		24.9	25.0	21.0	21.0	1.30	1.60	4.10		
14-14	元豊通寶	行書	1078	表		24.8	24.8	20.7	20.6	1.30	1.40	3.59		
14-15	咸平元寶	真書	998	表	一部欠損	24.3	24.5	19.7	19.9	1.10	1.30	3.12		
14-16	元祐通寶	行書	1086	裏	す穴有	23.9	23.4	20.4	20.1	1.40	1.60	4.01		
14-17	景祐元寶	篆書	1034	裏		24.9	24.9	21.6	21.4	1.20	1.30	3.28		
14-18	元祐通寶	篆書	1086	表		24.0	24.4	20.1	20.7	1.30	1.40	3.89		
14-19	開元通寶	隸書	621	表	背上「月」	23.5	23.5	20.0	19.8	1.10	1.30	2.80		
14-20	紹聖元寶	篆書	1094	裏		24.2	23.8	18.9	19.2	1.30	1.50	3.89		
14-21	祥符通寶	真書	1009	表		24.5	24.4	20.4	20.3	1.20	1.40	3.46		
14-22	皇宋通寶	真書	1038	表		24.9	25.0	20.7	20.6	1.20	1.30	3.61		
14-23	聖宋元寶	篆書	1101	裏	複数す穴有	24.9	24.7	19.0	19.2	1.10	1.20	3.08		
14-24	元豊通寶	行書	1078	表	複数す穴有	24.7	24.5	20.5	20.8	1.30	1.50	3.53		
14-25	宣和通寶	隸書	1119	表		24.0	24.0	21.6	21.6	1.40	1.60	3.23		
14-26	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.0	24.1	20.3	20.5	1.40	1.60	4.31		
14-27	天禧通寶	真書	1017	表	大きく欠損	25.2	25.0	20.4	20.3	1.20	1.30	3.37		
14-28	開元通寶	隸書	621	表		24.5	24.5	20.9	20.6	1.30	1.50	3.96		
14-29	開元通寶	隸書	621	表	大きく欠損	24.2	24.2	20.4	21.0	1.20	1.50	2.60		
14-30	聖宋元寶	篆書	1101	裏	一部欠損	25.0	24.9	19.7	20.0	1.10	1.20	3.30		
14-31	元符通寶	篆書	1098	表		24.9	24.8	18.6	18.1	1.20	1.40	4.05		
14-32	開元通寶	隸書	621	裏		24.2	24.3	20.4	20.4	1.20	1.30	3.31		
14-33	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.8	24.8	20.5	20.7	1.30	1.40	4.07		
14-34	皇宋通寶	真書	1038	表	星形孔銭	24.5	24.5	21.0	21.1	1.20	1.30	3.20		
14-35	咸淳元寶	真書	1265	裏	背上「二」(1266)	23.1	23.3	20.5	20.9	1.10	1.20	2.87		
14-36	元祐通寶	行書	1086	裏		24.3	24.3	19.6	19.6	1.40	1.40	3.44		
14-37	元祐通寶	行書	1086	裏	一部欠損	24.6	24.3	19.5	19.4	1.00	1.10	3.16		
14-38	元豊通寶	篆書	1078	裏		23.8	24.0	20.3	20.5	1.50	1.70	4.24		
14-39	聖宋元寶	篆書	1101	表		23.9	24.0	20.1	20.2	1.20	1.40	3.18		
14-40	政和通寶	隸書	1111	表	す穴有	24.3	24.2	21.3	21.5	1.30	1.30	3.34		
14-41	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.4	24.3	21.0	21.4	1.10	1.30	3.29		
14-42	元祐通寶	行書	1086	表		24.2	24.0	19.8	19.8	1.40	1.50	3.95		
14-43	熙寧元寶	篆書	1068	裏	一部欠損	24.0	23.9	20.2	19.9	1.50	1.70	4.54		
14-44	元豊通寶	行書	1078	表		23.1	23.6	19.2	20.3	1.40	1.50	3.41		
14-45	祥符通寶	真書	1009	表	鋳型ずれ	25.0	25.0	20.0	20.2	1.30	1.40	3.48		
14-46	元豊通寶	行書	1078	表		24.9	24.9	19.4	19.4	1.20	1.40	3.64		
14-47	天禧通寶	真書	1017	表		25.3	24.8	21.6	21.1	1.20	1.20	3.72		
14-48	治平通寶	篆書	1064	表		24.6	24.5	20.6	20.6	1.20	1.30	3.40		
14-49	皇宋通寶	篆書	1038	表		24.3	24.2	21.0	21.3	1.20	1.50	3.82		
14-50	聖宋元寶	篆書	1101	裏		24.5	24.4	19.5	19.3	1.10	1.20	3.10		
14-51	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.5	24.4	20.8	20.9	1.30	1.50	3.51		
14-52	開元通寶	隸書	621	表		24.3	24.0	21.4	21.3	1.10	1.30	3.09		
14-53	皇宋通寶	真書	1038	表		25.0	24.8	20.0	20.4	1.30	1.40	3.55		
14-54	元豊通寶	行書	1078	表		24.9	24.7	19.5	19.5	1.30	1.50	3.72		
14-55	聖宋元寶	行書	1101	表		23.9	23.9	19.1	19.1	1.10	1.10	3.07		
14-56	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.9	24.8	19.0	19.4	1.00	1.20	3.34		
14-57	嘉祐通寶	篆書	1056	裏		24.7	24.3	21.0	21.1	1.10	1.30	3.56		
14-58	開元通寶	隸書	621	裏	背上「月」	25.1	25.0	21.3	21.9	1.30	1.50	3.48		
14-59	熙寧元寶	篆書	1068	表		24.9	24.8	20.6	20.8	1.30	1.50	4.52		
14-60	政和通寶	隸書	1111	裏		24.7	24.8	22.0	22.5	1.30	1.40	3.57		
14-61	開元通寶	隸書	621	裏		24.7	24.8	21.1	21.1	1.10	1.20	3.06		
14-62	元豊通寶	行書	1078	表		25.2	25.3	18.3	18.5	1.20	1.20	3.86		
14-63	太平通寶	真書	976	裏		24.2	24.4	20.0	20.2	1.20	1.40	3.51		
14-64	皇宋通寶	真書	1038	表		24.9	25.0	21.3	21.1	1.20	1.30	3.48		
14-65	元祐通寶	行書	1086	裏		24.5	24.6	19.8	19.6	1.20	1.50	4.15		
14-66	嘉祐通寶	篆書	1056	裏		25.1	25.0	20.1	20.3	1.10	1.30	3.50	○	
14-67	大觀通寶	瘦体	1107	裏		24.9	24.8	21.7	21.6	1.30	1.60	3.75		
14-68	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.2	24.0	20.4	20.4	1.20	1.50	3.84		
14-69	開元通寶	隸書	621	裏		25.2	25.2	20.3	20.6	1.10	1.20	2.96		
14-70	至道元寶	草書	995	裏		24.6	24.7	19.1	19.1	1.10	1.10	3.44		
14-71	祥符元寶	真書	1009	裏		24.4	24.3	18.5	18.4	1.20	1.30	3.68		
14-72	嘉祐通寶	篆書	1056	裏		24.8	25.0	20.7	20.7	1.30	1.50	4.12		
14-73	皇宋通寶	真書	1038	表		24.8	24.9	20.3	20.2	1.10	1.40	3.66		
14-74	天聖元寶	真書	1023	表		25.4	25.3	21.4	21.6	1.10	1.50	4.05		
14-75	祥符通寶	真書	1009	表		25.0	25.1	19.7	19.6	1.20	1.30	3.73		
14-76	元豊通寶	行書	1078	表		23.6	24.3	18.4	18.5	1.30	1.50	3.99		
14-77	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.3	24.0	21.5	21.5	1.50	1.70	3.99		
14-78	□□元寶			裏	烏銭。(淳化元寶)	23.4	23.3	20.6	20.5	0.70	0.90	1.93	○	○
14-79	政和通寶	隸書	1111	表		24.2	24.2	21.5	21.3	1.40	1.50	3.59		
14-80	至和元寶	真書	1054	表		24.2	24.1	19.8	19.6	1.10	1.30	3.47		
14-81	元祐通寶	行書	1086	裏		24.4	24.2	19.6	19.7	1.40	1.40	3.94		
14-82	至和元寶	篆書	1054	裏		23.4	23.3	20.6	20.9	1.30	1.40	3.38		
14-83	天聖元寶	篆書	1023	裏	湯回りが悪い	24.4	23.5	19.7	19.5	1.20	1.50	3.57		
14-84	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.3	24.4	17.0	17.3	1.10	1.20	3.54		
14-85	天聖元寶	真書	1023	裏		24.7	25.1	21.5	21.6	1.10	1.30	3.36		
14-86	景德元寶	真書	1004	表		25.0	25.2	20.8	20.9	1.20	1.40	3.70		
14-87	大觀通寶	瘦体	1107	表		24.3	24.3	21.9	21.9	1.30	1.50	3.20		
14-88	開元通寶	隸書	621	裏		24.1	24.0	21.0	21.4	1.20	1.40	3.02		
14-89	紹聖元寶	行書	1094	表		23.7	23.8	19.7	19.4	1.30	1.50	3.57		
14-90	皇宋通寶	真書	1038	表		24.8	24.9	21.0	21.1	1.30	1.40	4.08		
14-91	開元通寶	隸書	621	裏	ひび	24.6	24.7	21.7	21.4	1.10	1.30	3.31		
14-92	元符通寶	行書	1098	裏		24.4	24.5	19.4	19.8	1.20	1.30	3.35		
14-93	咸平元寶	真書	998	裏		24.0	24.2	19.4	19.5	1.30	1.40	3.45		
14-94	元祐通寶	篆書	1086	表		24.3	24.8	19.3	19.2	1.00	1.30	3.13		
14-95	皇宋通寶	篆書	1038	表		24.9	25.2	21.4	21.8	1.20	1.50	3.68		
14-96	熙寧元寶	篆書	1068	裏		24.5	24.6	20.5	20.7	1.30	1.40	3.59		
14-97	熙寧元寶	篆書	1068	裏	鋳上がりが悪い	24.8	24.8	20.0	20.1	1.00	1.20	3.00		

No.	銭種名	書体	初鑄年	表・裏 (内側から見て)	備考	銭径		内径		銭厚		量目	拓本・ 写真	蛍光 X線
						(A)	(B)	(C)	(D)	最小	最大			
15-1	元豊通寶	篆書	1078	表		23.0	22.6	18.1	17.9	1.1	1.2	2.87		
15-2	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.7	24.9	17.6	17.8	1.2	1.3	3.68		
15-3	天禧通寶	真書	1017	裏		25.5	25.5	21.0	20.8	1.2	1.4	3.74	○	
15-4	紹聖元寶	行書	1094	裏		24.2	23.8	17.7	17.4	1.1	1.4	3.73		
15-5	至大通寶	真書	1310	裏		22.6	22.8	19.6	19.9	1.6	2.0	4.08	○	○
15-6	開元通寶	隸書	621	裏		23.0	22.9	18.5	18.8	1.2	1.3	3.44		
15-7	熙寧元寶	真書	1068	表		24.1	23.9	19.8	19.9	1.2	1.4	3.76		
15-8	開元通寶	隸書	621	表		24.7	24.6	20.3	20.4	1.1	1.3	3.26	○	○
15-9	開元通寶	隸書	621	表	大きく欠損	24.7	24.8	21.7	21.9	1.2	1.3	2.86		
15-10	熙寧元寶	真書	1068	裏	鑄上がりが悪い	24.0	22.9	20.1	19.9	1.3	1.4	3.89		
15-11	紹聖元寶	行書	1094	裏		24.3	24.4	19.8	19.8	1.3	1.5	3.77		
15-12	聖宋元寶	篆書	1101	表		24.4	24.4	20.8	20.9	1.4	1.4	4.14		
15-13	元祐通寶	行書	1086	表		23.9	23.6	19.3	19.1	1.2	1.4	3.89		
15-14	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.6	24.6	19.4	19.4	1.4	1.4	3.72		
15-15	開元通寶	隸書	621	裏	背下「ノ」	24.7	24.7	21.4	21.4	1.1	1.3	3.13		
15-16	元豊通寶	篆書	1078	裏		24.0	24.0	19.0	18.9	1.3	1.5	3.96		
15-17	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.5	24.3	19.9	20.0	1.2	1.3	3.69		
15-18	元祐通寶	篆書	1086	表		24.1	24.1	19.9	20.0	1.2	1.3	3.84		
15-19	開元通寶	隸書	621	表		24.7	24.7	21.6	21.9	1.2	1.3	3.70		
15-20	政和通寶	隸書	1111	裏	磨輪	21.2	21.3	21.7	21.6	1.2	1.3	2.98		
15-21	開元通寶	隸書	621	表		24.3	24.3	21.5	21.3	1.2	1.4	2.89		
15-22	太平通寶	真書	976	表		24.4	24.5	19.6	19.9	1.3	1.5	3.71		
15-23	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.0	23.8	18.5	18.5	1.1	1.1	2.65		
15-24	開元通寶	隸書	621	裏		24.7	24.9	21.5	21.5	1.1	1.2	3.17		
15-25	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.6	24.6	21.0	20.9	1.4	1.5	4.08		
15-26	太平通寶	真書	976	裏		23.2	23.0	18.6	18.6	1.1	1.2	2.42		
15-27	開元通寶	隸書	621	表		23.3	23.4	19.7	19.6	1.0	1.1	2.89		
15-28	熙寧元寶	篆書	1068	裏		24.0	23.9	19.1	18.9	1.2	1.4	3.63		
15-29	景德元寶	真書	1004	表		24.4	24.4	20.7	20.6	1.1	1.3	3.64		
15-30	聖宋元寶	篆書	1101	表		25.0	24.9	18.6	18.2	1.4	1.5	4.79		
15-31	政和通寶	隸書	1111	表		24.7	24.3	21.3	21.3	1.2	1.3	3.78		
15-32	祥符通寶	真書	1009	裏		22.6	22.4	20.0	20.0	1.2	1.3	2.65		
15-33	政和通寶	隸書	1111	裏	横鑄銭?歪み有	23.8	22.9	20.7	20.4	1.1	1.3	2.98	○	○
15-34	天聖元寶	篆書	1023	表		24.8	24.9	21.6	21.7	1.2	1.4	3.90		
15-35	皇宋通寶	真書	1038	裏		23.6	23.5	19.0	18.6	1.1	1.2	2.82		
15-36	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.6	24.3	20.1	19.9	1.1	1.4	3.45		
15-37	元祐通寶	行書	1086	表	す穴有	24.2	24.2	19.9	19.8	1.5	1.5	3.59		
15-38	元祐通寶	行書	1086	裏		24.3	24.6	17.4	17.7	1.2	1.3	3.71		
15-39	太平通寶	真書	976	表		24.1	24.2	19.5	19.6	1.1	1.2	3.05		
15-40	皇宋通寶	真書	1038	裏	内孔ひし形	24.6	24.6	19.2	19.2	1.1	1.1	3.55		
15-41	宋通元寶	真書	960	表	背右「ノ」	24.9	24.9	19.8	20.0	1.1	1.1	3.33		
15-42	熙寧元寶	篆書	1068	表		23.3	23.4	19.2	19.3	1.4	1.6	4.16		
15-43	太平通寶	真書	976	裏		24.2	24.3	19.2	19.2	1.1	1.3	2.98		
15-44	政和通寶	隸書	1111	表		24.3	24.3	20.7	21.0	1.1	1.3	3.50		
15-45	元祐通寶	行書	1086	表		24.5	24.5	19.5	19.7	1.3	1.4	3.80		
15-46	元祐通寶	篆書	1086	表	す穴有	24.9	24.1	17.9	18.2	0.9	1.0	2.83		
15-47	太平通寶	真書	976	裏		24.4	24.3	19.7	19.6	1.3	1.3	3.69		
15-48	政和通寶	隸書	1111	表	す穴有	23.7	23.6	21.2	21.3	1.1	1.4	3.42		
15-49	政和通寶	隸書	1111	裏		23.7	23.9	20.2	20.1	1.3	1.3	3.57		
15-50	天禧通寶	真書	1017	表		24.4	24.3	19.6	19.7	1.2	1.3	3.28		
15-51	紹聖元寶	行書	1094	裏		23.6	23.7	18.8	18.5	1.1	1.2	3.12		
15-52	天聖元寶	篆書	1023	表	複数す穴有	24.3	24.3	19.5	19.6	1.1	1.3	3.39		
15-53	淳化元寶	草書	990	表		24.3	24.4	19.2	19.4	1.1	1.3	3.08		
15-54	元祐通寶	行書	1086	表		24.4	24.3	19.8	19.7	1.4	1.4	3.85		
15-55	開元通寶	隸書	621	表	複数す穴有	24.7	24.7	19.7	19.6	1.3	1.5	3.53		
15-56	至道元寶	行書	995	表		24.7	24.5	16.8	16.9	1.2	1.5	4.11		
15-57	大觀通寶	瘦体	1107	裏		24.6	24.4	22.2	22.0	1.3	1.5	3.49		
15-58	政和通寶	隸書	1111	表		23.7	24.0	19.5	20.1	0.8	1.0	2.50		
15-59	大觀通寶	瘦体	1107	裏		23.9	24.0	21.4	21.3	1.2	1.4	3.42		
15-60	熙寧元寶	篆書	1068	表		23.6	23.5	18.7	18.5	1.2	1.3	3.35		
15-61	元豊通寶	篆書	1078	表	す穴有	23.6	23.6	18.5	18.4	1.2	1.3	3.17		
15-62	咸平元寶	真書	998	表		24.8	24.9	18.1	18.2	1.2	1.5	3.77		
15-63	熙寧元寶	真書	1068	裏		23.4	23.4	18.7	18.9	1.2	1.5	3.43		
15-64	聖宋元寶	行書	1101	裏		22.8	22.3	18.7	18.8	1.2	1.4	3.26		
15-65	元祐通寶	篆書	1086	表	欠損有	24.6	24.5	17.7	17.6	1.3	1.4	3.78		
15-66	嘉祐通寶	篆書	1056	裏		22.9	23.0	19.1	19.0	1.0	1.2	3.02		
15-67	聖宋元寶	行書	1101	表	鑄上がりが悪い	23.2	23.4	18.4	18.4	1.3	1.4	3.50		
15-68	祥符元寶	真書	1009	表		24.7	24.5	20.5	20.3	1.1	1.2	3.51		
15-69	景德元寶	真書	1004	表		24.6	24.5	20.3	20.0	1.1	1.2	2.95		
15-70	元祐通寶	篆書	1086	表		23.6	23.2	18.9	18.6	1.3	1.3	3.36		
15-71	紹聖元寶	篆書	1094	表	一部欠損	23.9	23.9	17.2	17.0	1.2	1.3	3.24		
15-72	皇宋通寶	篆書	1038	表		23.5	23.6	28.4	20.3	1.1	1.1	2.80		
15-73	聖宋元寶	篆書	1101	裏	一部欠損	24.0	24.1	21.2	21.4	1.3	1.5	3.68		
15-74	天禧通寶	真書	1017	表		25.6	25.6	20.5	20.5	1.1	1.2	3.76		
15-75	宣和通寶	隸書	1119	裏		24.5	24.4	21.7	22.0	1.3	1.4	3.49	○	
15-76	熙寧元寶	篆書	1068	表	す穴有	23.8	23.8	19.4	19.1	1.3	1.5	3.94		
15-77	皇宋通寶	真書	1038	表		24.2	24.0	17.5	17.5	1.1	1.2	3.65		
15-78	熙寧元寶	篆書	1068	表	一部欠損	23.3	23.4	18.3	18.1	1.3	1.4	3.67		
15-79	景祐元寶	篆書	1034	裏		25.3	25.2	21.0	20.9	1.1	1.2	3.31		
15-80	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.4	24.6	20.3	20.0	0.8	0.9	2.59		
15-81	治平元寶	篆書	1064	裏		24.0	23.8	19.0	19.2	1.2	1.5	3.60		
15-82	景德元寶	真書	1004	裏		24.4	24.0	18.8	18.9	1.4	1.4	3.70		
15-83	皇宋通寶	篆書	1038	表		24.8	24.8	18.5	18.6	1.1	1.2	3.71		
15-84	熙寧元寶	篆書	1068	表		23.9	24.3	20.0	20.1	1.1	1.3	3.39		
15-85	嘉祐通寶	真書	1056	裏		24.4	24.4	20.1	20.0	1.0	1.2	2.85		
15-86	祥符通寶	真書	1009	裏	鑄上がりが悪い	25.0	24.8	19.7	19.6	1.2	1.2	3.09		
15-87	至和元寶	真書	1054	裏		23.2	23.5	19.7	19.9	1.3	1.4	3.27		
15-88	開元通寶	隸書	621	裏		24.2	24.2	20.2	20.1	1.3	1.5	3.44		
15-89	皇宋通寶	真書	1038	裏		22.5	22.4	18.4	18.4	1.0	1.1	2.27		
15-90	天禧通寶	真書	1017	表		25.5	25.3	20.1	20.0	1.1	1.2	3.43		
15-91	元祐通寶	行書	1086	裏	複数す穴有	24.6	24.5	18.3	18.9	1.0	1.3	3.18		
15-92	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.2	24.2	19.7	19.7	1.3	1.4	3.90		
15-93	亂元重寶	隸書	758	表		22.9	22.7	17.5	17.5	1.2	1.3	2.86		
15-94	熙寧元寶	真書	1068	表	星形孔銭	24.0	24.0	19.4	19.6	1.2	1.4	3.63		
15-95	太平通寶	真書	976	表	穿孔	24.2	24.3	19.0	19.1	1.0	1.3	3.20	○	
15-96	元豊通寶	行書	1078	表		23.7	23.6	19.3	18.7	1.2	1.3	3.35		
15-97	明道元寶	真書	1032	裏	す穴有	25.5	25.6	21.2	21.2	1.1	1.3	3.08		

() 数値は推計
だ円に見える

No.	銭種名	書体	初鑄年	表・裏 (内側から見て)	備考	銭径		内径		銭厚		量目	拓本・ 写真	蛍光 X線
						(A)	(B)	(C)	(D)	最小	最大			
16-1	元祐通寶	行書	1086	表	欠損有	24.8	24.8	20.0	19.7	1.3	1.4	3.35		
16-2	天聖元寶	篆書	1023	裏	す穴有	24.4	24.4	19.1	19.3	1.2	1.4	3.82		
16-3	天聖元寶	篆書	1023	表		24.9	24.9	20.4	20.3	1.1	1.2	3.16		
16-4	聖宋元寶	篆書	1101	表		23.9	23.8	19.4	19.4	1.3	1.3	2.99		
16-5	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.8	24.8	20.9	20.9	1.0	1.1	3.10		
16-6	元豊通寶	篆書	1078	表		24.8	24.9	18.9	19.0	1.3	1.5	4.26		
16-7	聖宋元寶	行書	1101	表		23.7	23.6	18.5	18.5	1.3	1.5	3.62		
16-8	元祐通寶	行書	1086	裏		24.1	24.2	18.6	19.1	1.1	1.2	3.20		
16-9	景德元寶	真書	1004	表		24.3	24.3	19.3	19.2	1.1	1.2	2.99		
16-10	元豊通寶	行書	1078	表		23.7	23.6	19.9	20.1	1.4	1.5	3.76		
16-11	嘉祐元寶	真書	1056	表		24.8	24.9	19.8	19.7	1.2	1.4	3.87		
16-12	元祐通寶	行書	1086	裏		24.3	24.2	20.8	20.7	1.3	1.4	3.49		
16-13	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.2	24.2	19.9	20.0	0.9	1.1	2.74		
16-14	至和通寶	真書	1054	表	す穴有	24.5	24.3	18.2	18.2	1.1	1.2	2.89		
16-15	皇宋通寶	真書	1038	裏	す穴有	24.6	24.6	19.5	20.0	1.3	1.5	3.61		
16-16	開元通寶	隸書	621	裏		24.9	25.1	21.9	21.9	1.3	1.4	3.08		
16-17	天聖元寶	真書	1023	表		25.3	25.2	22.0	21.9	1.3	1.6	4.11		
16-18	嘉祐通寶	篆書	1056	表		25.3	25.3	19.6	19.3	1.0	1.1	3.28		
16-19	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.2	24.4	19.9	19.7	1.2	1.4	3.47		
16-20	政和通寶	隸書	1111	裏		24.7	24.5	21.6	21.5	1.3	1.4	3.74		
16-21	皇宋通寶	篆書	1038	表		25.2	25.3	19.9	19.8	1.5	1.6	4.26		
16-22	開元通寶	隸書	621	裏	背上「月」	23.7	23.7	20.1	20.0	1.2	1.4	3.19		
16-23	元豊通寶	行書	1078	裏	星形孔銭	24.8	24.8	18.7	18.8	1.2	1.3	3.87		
16-24	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.3	24.2	19.8	19.9	0.9	1.1	3.04		
16-25	天禧通寶	真書	1017	裏		25.0	24.9	20.3	20.2	1.3	1.4	3.39		
16-26	正隆元寶	真書	1157	裏		24.7	24.9	21.6	21.7	1.3	1.6	3.76	○	○
16-27	開元通寶	隸書	621	裏	欠損有	23.2	23.4	19.6	19.9	1.1	1.4	2.88		
16-28	景德元寶	真書	1004	表		24.4	24.6	19.8	19.9	1.2	1.3	3.51		
16-29	元豊通寶	篆書	1078	裏		25.0	25.0	19.2	19.1	1.2	1.3	3.88		
16-30	皇宋通寶	真書	1038	表		24.7	24.6	21.2	21.2	1.1	1.2	3.35		
16-31	元豊通寶	行書	1078	表		24.9	24.9	20.0	20.1	1.3	1.4	4.13		
16-32	祥符元寶	真書	1009	裏		25.7	25.6	19.2	19.1	1.0	1.0	3.25		
16-33	咸平元寶	真書	998	表		24.4	24.4	19.1	19.0	1.2	1.3	3.80		
16-34	紹聖元寶	行書	1094	裏		24.1	24.1	19.9	19.8	1.3	1.6	4.02		
16-35	開元通寶	隸書	621	裏		24.4	24.2	20.8	20.7	1.1	1.1	2.89		
16-36	熙寧元寶	篆書	1068	表		23.5	23.4	18.9	18.8	1.3	1.4	3.51		
16-37	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.8	24.9	20.3	20.4	1.3	1.5	3.79		
16-38	開元通寶	隸書	621	裏		24.3	24.5	20.4	20.9	0.9	1.1	2.54		
16-39	聖宋元寶	行書	1101	裏		24.1	23.4	19.0	19.0	1.3	1.4	3.59		
16-40	紹聖元寶	行書	1094	表	磨輪?	23.4	23.2	19.2	19.5	1.5	1.7	3.98		
16-41	景祐元寶	真書	1034	表		24.8	24.8	20.0	20.0	1.3	1.4	3.54		
16-42	熙寧元寶	篆書	1068	表		23.9	24.2	20.3	20.7	1.3	1.4	3.53		
16-43	熙寧元寶	篆書	1068	裏		24.2	24.1	20.3	20.3	1.1	1.5	3.73		
16-44	元豊通寶	篆書	1078	表		23.5	23.5	20.8	20.8	1.1	1.3	2.99		
16-45	元祐通寶	篆書	1086	裏	星形孔銭・す穴有	24.5	24.2	18.9	19.2	1.6	1.8	4.03		
16-46	政和通寶	隸書	1111	裏		24.6	24.3	22.1	21.9	1.5	1.6	4.17		
16-47	元豊通寶	篆書	1078	裏		24.9	24.4	18.4	18.2	1.2	1.3	3.77		
16-48	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.5	24.5	19.4	19.6	0.9	1.1	2.95		
16-49	熙寧元寶	篆書	1068	表		23.7	23.6	19.2	19.2	1.2	1.4	3.41		
16-50	祥符元寶	真書	1009	表	欠損有	25.2	25.4	18.5	18.2	1.2	1.2	3.60		
16-51	政和通寶	隸書	1111	表		24.6	24.8	21.3	21.2	1.1	1.4	3.18		
16-52	元豊通寶	篆書	1078	裏		23.9	23.9	18.9	18.9	1.4	1.5	3.60		
16-53	熙寧元寶	真書	1068	表		24.8	24.9	19.5	19.5	1.5	1.6	4.20		
16-54	元祐通寶	篆書	1086	表	大きく歪み	25.3	24.7	18.5	18.9	1.1	1.4	3.28		
16-55	熙寧元寶	真書	1068	裏		23.1	23.0	19.5	19.4	1.4	1.6	3.63		
16-56	熙寧元寶	真書	1068	表		23.9	23.6	19.0	19.0	1.3	1.4	3.72		
16-57	景祐元寶	真書	1034	裏	欠損有	25.3	25.0	19.2	19.4	1.3	1.4	3.94		
16-58	聖宋元寶	行書	1101	裏		23.6	23.4	19.1	19.0	1.4	1.6	3.81		
16-59	元祐通寶	行書	1086	裏	星形孔銭	23.4	23.4	18.5	18.4	1.2	1.7	3.51		
16-60	元豊通寶	篆書	1078	表		24.6	24.0	18.4	18.7	1.1	1.2	3.30		
16-61	元祐通寶	行書	1086	表		24.0	24.0	18.8	19.0	1.3	1.4	3.84		
16-62	熙寧元寶	真書	1068	裏		23.8	23.7	18.2	18.2	1.3	1.5	3.48		
16-63	景德元寶	真書	1004	裏		24.0	24.0	18.7	18.5	1.3	1.4	3.39		
16-64	治平元寶	真書	1064	裏		24.2	24.3	18.4	18.5	1.2	1.3	3.50		
16-65	皇宋通寶	篆書	1038	裏		25.0	24.8	19.6	19.7	1.2	1.4	3.79		
16-66	熙寧元寶	真書	1068	裏	欠損有	24.0	23.9	19.8	19.8	1.3	1.5	3.62		
16-67	皇宋通寶	真書	1038	裏	欠損有	24.7	24.8	20.4	20.5	1.4	1.6	4.03		
16-68	開元通寶	隸書	621	表	背上「月」	24.9	24.8	20.8	20.6	1.4	1.4	3.55		
16-69	景德元寶	真書	1004	裏		24.8	25.0	20.2	20.0	1.2	1.4	3.46		
16-70	皇宋通寶	真書	1038	裏		23.8	23.8	17.6	17.9	1.3	1.4	3.61		
16-71	熙寧元寶	真書	1068	表	欠損有	23.3	23.1	18.0	18.0	1.2	1.5	3.51		
16-72	嘉祐通寶	篆書	1056	裏		24.7	24.8	20.4	20.1	1.3	1.5	3.78		
16-73	元豊通寶	行書	1078	裏		25.3	25.2	19.0	19.2	1.2	1.3	3.82		
16-74	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.3	24.2	19.8	20.0	1.2	1.4	3.53		
16-75	嘉祐通寶	篆書	1056	表		23.8	24.0	19.3	19.4	1.3	1.5	3.90		
16-76	嘉祐通寶	真書	1056	裏	す穴有	24.7	24.7	19.1	19.0	1.2	1.4	3.67		
16-77	景德元寶	真書	1004	裏		24.5	24.6	18.7	18.7	0.9	1.1	2.91		
16-78	元豊通寶	行書	1078	表		24.8	25.0	18.9	18.9	1.2	1.3	3.71		
16-79	紹聖元寶	行書	1094	表		23.8	23.6	18.7	18.5	1.4	1.5	3.86		
16-80	元豊通寶	行書	1078	表		24.8	24.9	18.5	18.8	1.1	1.3	3.68		
16-81	元祐通寶	行書	1086	表		24.8	24.8	19.7	20.1	1.3	1.5	3.94		
16-82	文字無銭			表	す穴有	24.6	24.6	18.1	18.2	1.2	1.4	3.29	○	○
16-83	熙寧元寶	篆書	1068	表		24.3	24.3	20.2	20.0	1.1	1.3	3.74		
16-84	紹聖元寶	行書	1094	表		24.6	24.5	19.6	19.6	1.3	1.5	3.96		
16-85	至道元寶	草書	995	表		24.6	24.7	18.5	18.5	1.1	1.2	2.89		
16-86	開元通寶	隸書	621	裏	背上「月」 湯回りが悪い	25.4	25.4	21.6	21.6	1.2	1.3	3.27		
16-87	至道元寶	真書	995	裏		24.7	24.6	19.7	19.5	1.2	1.3	3.58	○	
16-88	淳熙元寶	真書	1174	表	背上「捌」	23.9	23.5	18.8	18.6	1.0	1.3	3.16	○	
16-89	祥符通寶	真書	1009	表	す穴・欠損有	25.4	25.2	19.0	19.2	1.3	1.4	3.94		
16-90	景德元寶	真書	1004	表		25.1	25.0	19.1	19.0	1.2	1.4	3.79		
16-91	祥符元寶	真書	1009	裏	磨輪	22.2	21.7	17.7	17.5	1.0	1.2	2.36		
16-92	紹聖元寶	行書	1094	表		23.6	23.6	18.7	18.7	1.3	1.4	3.51		
16-93	天禧通寶	真書	1017	表		25.4	25.3	20.0	20.1	1.1	1.2	3.54		
16-94	開元通寶	隸書	621	裏	背下「越」	23.8	23.8	20.0	20.0	1.3	1.4	3.33	○	
16-95	皇宋通寶	篆書	1038	表	欠損有	24.1	24.0	20.3	20.4	1.0	1.1	2.66		
16-96	元符通寶	篆書	1098	表		23.7	23.9	18.6	18.6	1.4	1.6	3.91		
16-97	治平元寶	真書	1064	裏		24.0	24.0	19.1	19.1	1.1	1.5	3.42		

No.	錢種名	書体	初鑄年	表・裏 (内側から見て)	備考	錢径		内径		錢厚		量目	拓本・ 写真	蛍光 X線
						(A)	(B)	(C)	(D)	最小	最大			
17-1	元豊通寶	行書	1078	裏		22.5	23.0	19.1	19.8	1.1	1.2	3.06		
17-2	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.4	24.1	20.4	20.6	1.2	1.3	3.26	○	
17-3	太平通寶	真書	976	表		24.2	24.2	19.5	20.0	0.9	1.1	3.15	○	
17-4	元豊通寶	行書	1078	裏	一部欠損	24.0	23.9	18.8	18.8	1.2	1.4	3.30		
17-5	治平元寶	篆書	1064	裏		24.6	24.4	19.1	18.9	1.3	1.4	3.94		
17-6	元祐通寶	篆書	1086	表		24.2	24.4	19.5	19.7	1.1	1.1	3.31		
17-7	淳化元寶	草書	990	表		24.0	24.5	18.4	18.7	1.1	1.3	3.20		
17-8	熙寧元寶	真書	1068	表		24.1	24.3	20.4	20.5	1.4	1.7	4.01		
17-9	元豊通寶	行書	1078	表		24.2	24.3	19.7	19.0	1.2	1.5	3.39		
17-10	景祐元寶	真書	1034	表		24.8	24.7	21.3	21.2	1.1	1.3	3.25	○	
17-11	元豊通寶	篆書	1078	表	切込・欠損有	24.1	24.0	19.3	19.2	1.2	1.4	3.49		
17-12	祥符元寶	真書	1009	裏		25.4	25.2	18.5	18.5	1.1	1.2	3.63		
17-13	太平通寶	真書	976	裏		25.0	25.2	19.4	19.3	1.1	1.4	3.86		
17-14	紹聖元寶	行書	1094	表		24.3	24.3	19.9	19.7	1.1	1.3	3.25		
17-15	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.8	24.7	18.8	18.7	1.0	1.1	3.31		
17-16	聖宋元寶	篆書	1101	裏		23.7	23.5	19.5	19.7	1.1	1.2	3.22		
17-17	景祐元寶	篆書	1034	表		23.2	23.3	21.1	21.1	1.2	1.3	2.57		
17-18	紹聖元寶	行書	1094	表		23.8	23.7	18.8	18.9	1.2	1.3	3.11		
17-19	嘉祐元寶	真書	1056	表		23.6	23.6	18.5	18.7	1.3	1.5	3.81		
17-20	太平通寶	真書	976	裏	内孔一部欠損	24.2	24.4	18.7	18.9	1.0	1.1	2.89		
17-21	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.6	24.3	19.8	19.9	1.2	1.4	3.72		
17-22	開元通寶	隸書	621	表		24.5	24.4	19.0	19.2	1.2	1.6	4.17		
17-23	紹聖元寶	行書	1094	裏		24.0	24.0	19.3	19.5	1.4	1.5	3.55		
17-24	皇宋通寶	真書	1038	表		23.8	24.1	18.6	18.9	0.9	1.0	2.77		
17-25	紹聖元寶	篆書	1094	裏		23.9	23.8	19.1	18.9	1.2	1.5	3.45		
17-26	至和元寶	真書	1054	表		23.6	23.6	18.9	18.7	1.1	1.2	2.99		
17-27	治平通寶	篆書	1064	表	背面鑄型ずれ	24.2	23.5	19.5	19.7	1.2	1.3	3.26	○	
17-28	咸平元寶	真書	998	表	星形孔銭	24.8	24.9	18.3	18.7	1.2	1.3	3.81		
17-29	慶元通寶	真書	1195	裏	背下「六」・磨輪	23.4	23.8	19.3	19.1	1.3	1.4	3.69	○	
17-30	開元通寶	隸書	621	裏		24.4	24.4	19.9	20.0	1.3	1.4	3.38		
17-31	祥符元寶	真書	1009	裏		25.4	25.2	18.9	18.7	1.0	1.2	3.48		
17-32	治平元寶	真書	1064	裏		24.1	24.2	18.0	18.1	1.4	1.7	4.20	○	
17-33	元祐通寶	篆書	1086	裏		24.5	24.3	19.9	19.9	1.2	1.3	3.47		
17-34	元符通寶	篆書	1098	表		24.4	24.6	19.9	19.8	1.4	1.5	4.10		
17-35	天禧通寶	真書	1017	裏	一部欠損	25.6	25.7	20.6	20.8	1.2	1.4	3.78		
17-36	元祐通寶	篆書	1086	表		24.2	24.2	19.8	19.7	1.2	1.4	3.83		
17-37	政和通寶	隸書	1111	裏		24.2	24.2	19.8	20.0	1.3	1.4	3.72		
17-38	紹聖元寶	行書	1094	表		24.7	24.8	19.8	20.0	1.3	1.4	3.84		
17-39	開元通寶	隸書	621	表	複数す穴有	23.4	23.8	20.6	20.8	1.0	1.2	2.87		
17-40	景祐元寶	真書	1034	表		24.8	25.0	19.4	19.1	1.2	1.4	3.91		
17-41	開元通寶	隸書	621	表	す穴有	24.2	24.4	20.8	21.0	1.2	1.4	3.67		
17-42	元豊通寶	行書	1078	裏		25.3	25.0	18.6	18.9	1.1	1.3	3.87		
17-43	元豊通寶	篆書	1078	裏		25.2	25.2	19.8	20.0	1.0	1.2	3.57		
17-44	開元通寶	隸書	621	裏	背上「月」	24.4	24.4	20.7	20.6	1.1	1.3	2.87		
17-45	熙寧元寶	篆書	1068	裏		24.0	23.9	20.6	20.4	1.2	1.4	3.57		
17-46	皇宋通寶	篆書	1038	表		24.6	24.8	20.2	20.2	1.2	1.3	4.25		
17-47	天聖元寶	真書	1023	裏		25.0	25.1	20.5	20.6	1.2	1.4	4.18	○	
17-48	景德元寶	真書	1004	裏		24.5	24.3	18.5	18.5	1.2	1.3	3.58		
17-49	皇宋通寶	篆書	1038	裏		25.4	25.6	19.9	19.5	1.1	1.2	3.98		
17-50	熙寧元寶	篆書	1068	表		23.4	23.4	18.9	18.6	1.3	1.5	3.81		
17-51	祥符通寶	真書	1009	裏	大字	24.3	24.4	19.6	19.6	1.0	1.6	3.82	○	
17-52	聖宋元寶	篆書	1101	裏		24.2	24.1	20.7	20.5	1.5	1.6	4.01		
17-53	元祐通寶	行書	1086	裏	す穴有	24.6	24.7	19.2	19.4	0.9	1.2	3.27		
17-54	開元通寶	隸書	621	裏	背上「月」	24.6	24.5	20.1	20.3	1.2	1.4	3.48		
17-55	皇宋通寶	真書	1038	裏	す穴有	24.5	24.6	20.0	19.9	1.0	1.2	3.06		
17-56	皇宋通寶	真書	1038	表		24.5	24.6	20.4	20.0	1.4	1.5	4.02		
17-57	元符通寶	行書	1098	表	一部欠損	24.6	24.3	18.9	18.7	1.4	1.6	3.74		
17-58	開元通寶	隸書	621	表	背上「月」	24.9	25.0	21.0	21.0	1.3	1.4	3.88		
17-59	咸平元寶	真書	998	表		24.6	24.5	18.4	18.7	1.2	1.4	3.92		
17-60	淳化元寶	草書	990	表		24.7	24.6	18.5	18.5	1.0	1.1	3.20	○	
17-61	宋通元寶	真書	960	裏		24.9	25.0	19.1	19.2	0.9	1.6	4.06	○	
17-62	元豊通寶	篆書	1078	表		23.8	24.0	18.7	18.5	1.1	1.3	3.30	○	
17-63	元豊通寶	行書	1078	裏		25.2	25.2	18.3	19.0	1.0	1.1	2.88		
17-64	聖宋元寶	篆書	1101	裏	星形孔銭	24.8	24.9	19.1	19.2	1.4	1.7	5.06		
17-65	嘉祐通寶	篆書	1056	裏		24.4	24.3	20.0	20.4	1.1	1.2	3.44	○	
17-66	皇宋通寶	真書	1038	裏		25.1	24.9	19.7	19.5	1.2	1.4	4.12	○	
17-67	天聖元寶	真書	1023	表		24.8	24.9	20.4	20.2	1.2	1.4	3.64		
17-68	慶元通寶	真書	1195	裏	背下「元」	23.7	23.5	20.4	20.7	1.3	1.5	3.38	○	
17-69	皇宋通寶	真書	1038	裏	す穴有	23.9	23.8	18.1	18.0	1.1	1.2	3.24		
17-70	熙寧元寶	篆書	1068	表		23.5	23.4	18.1	18.4	1.0	1.3	2.99		
17-71	政和通寶	隸書	1111	裏		24.7	24.9	20.8	21.1	1.3	1.4	3.44		
17-72	至道元寶	真書	995	裏		24.8	24.8	18.4	18.4	1.0	1.3	3.52		
17-73	元符通寶	行書	1098	表		23.6	23.6	18.3	18.0	1.4	1.5	3.89		
17-74	淳化元寶	行書	990	表		24.0	24.0	17.9	18.0	1.2	1.3	3.51		
17-75	元豊通寶	篆書	1078	裏		24.6	24.7	18.8	18.8	1.2	1.4	4.12		
17-76	皇宋通寶	真書	1038	表		24.4	24.4	19.8	19.7	1.0	1.2	3.03		
17-77	紹聖元寶	行書	1094	表	す穴有	24.1	23.9	19.3	19.2	1.2	1.5	3.24		
17-78	聖宋元寶	篆書	1078	表	輪が雑(磨輪?)	23.8	24.1	18.4	18.7	0.9	1.1	3.06		
17-79	元祐通寶	行書	1086	裏		24.7	24.6	18.5	18.7	1.1	1.3	3.34		
17-80	嘉祐通寶	篆書	1056	裏	ひび	23.6	23.2	20.0	19.9	1.1	1.4	3.33		
17-81	元祐通寶	行書	1086	表		23.7	24.0	19.2	19.3	1.2	1.5	3.52		
17-82	元祐通寶	行書	1086	表		24.3	24.2	19.8	19.8	1.1	1.3	3.45		
17-83	元豊通寶	篆書	1078	表	磨輪	22.4	22.6	18.2	18.5	0.9	1.0	2.25		
17-84	咸平元寶	真書	998	表	す穴有	24.6	24.6	18.6	18.2	1.1	1.3	3.23		
17-85	太平通寶	真書	976	表		24.1	24.2	18.8	18.9	1.2	1.2	3.40		
17-86	大觀通寶	瘦体	1107	表		24.7	24.7	21.7	21.6	1.4	1.6	3.76	○	
17-87	嘉祐元寶	篆書	1056	裏		25.0	25.1	20.5	20.5	1.3	1.3	4.02		
17-88	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.5	24.5	18.9	18.7	1.3	1.4	3.97		
17-89	元豊通寶	行書	1078	裏	す穴有	25.3	25.4	18.2	18.4	1.2	1.6	3.89		
17-90	咸平元寶	真書	998	裏		24.5	24.5	18.9	18.9	1.2	1.4	3.88		
17-91	天禧通寶	真書	1017	表	星形孔銭	24.8	24.5	19.6	19.3	1.3	1.4	3.99	○	
17-92	元豊通寶	篆書	1078	裏		25.5	25.3	21.8	21.9	1.3	1.4	3.90	○	○
17-93	紹興元寶	真書	1190	裏	背下「元」 星形孔銭	24.1	24.1	21.8	21.7	1.4	1.5	3.59	○	
17-94	元豊通寶	篆書	1078	表		25.3	25.1	20.9	20.7	1.1	1.2	3.31		

No.	銭種名	書体	初鑄年	表・裏 (内側から見て)	備考	銭径		内径		銭厚		量目	拓本・ 写真	蛍光 X線
						(A)	(B)	(C)	(D)	最小	最大			
18-1	元祐通寶	行書	1086	表		23.8	23.8	19.8	19.5	1.1	1.2	3.12		
18-2	嘉祐通寶	篆書	1056	裏		24.5	24.6	19.9	19.9	1.1	1.1	3.24		
18-3	皇宋通寶	篆書	1038	裏	星形孔銭	24.5	24.6	17.6	17.5	1.1	1.3	3.71		
18-4	元豊通寶	行書	1078	裏	磨輪	22.4	22.9	19.8	20.3	1.2	1.3	2.92		
18-5	熙寧元寶	真書	1068	裏	星形孔銭	24.1	24.2	20.3	20.3	1.1	1.4	3.28		
18-6	至道元寶	真書	995	表		25.2	25.1	18.8	18.9	1.3	1.3	4.05	○	
18-7	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.7	24.7	19.6	19.9	1.0	1.2	3.09		
18-8	祥符通寶	真書	1009	裏		25.4	25.1	18.6	18.5	1.1	1.1	3.56		
18-9	天聖元寶	篆書	1023	裏		24.9	24.8	21.0	21.1	1.1	1.3	3.72		
18-10	熙寧元寶	真書	1068	裏	す穴有	23.9	23.4	19.0	19.0	1.3	1.5	3.16		
18-11	祥符通寶	真書	1009	表		25.7	25.8	19.3	19.4	1.2	1.4	3.91		
18-12	嘉祐通寶	真書	1056	表		24.6	24.6	20.3	20.3	1.0	1.3	3.52		
18-13	慶元通寶	真書	1195	裏	背下「六」・磨輪	22.5	22.7	19.1	19.1	1.2	1.4	2.75		
18-14	天聖元寶	篆書	1023	裏		24.7	24.8	20.9	21.0	1.2	1.4	3.66		
18-15	至和元寶	真書	1054	裏		23.5	23.6	19.7	19.8	1.2	1.4	3.19		
18-16	至道元寶	行書	995	表	星形孔銭・す穴有	24.7	24.4	17.7	17.9	1.0	1.2	2.99		
18-17	政和通寶	隸書	1111	裏		24.5	24.9	20.8	21.2	1.2	1.3	3.50		
18-18	紹聖元寶	篆書	1094	表		23.0	22.9	17.7	17.6	1.0	1.3	2.96		
18-19	元符通寶	行書	1098	裏		24.6	24.5	20.0	19.8	1.3	1.5	3.88		
18-20	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.2	24.2	20.1	20.4	1.4	1.5	3.74		
18-21	皇宋通寶	真書	1038	裏	内孔ひし形	24.9	25.1	19.8	19.9	1.3	1.4	4.12		
18-22	皇宋通寶	真書	1038	表	星形孔銭・す穴有	24.8	24.4	20.4	20.5	1.3	1.4	3.67		
18-23	政和通寶	隸書	1111	表	鑄型ずれ	24.6	24.6	21.1	21.5	1.1	1.3	3.03		
18-24	政和通寶	隸書	1111	裏	す穴有	24.8	24.7	21.6	21.6	1.1	1.3	3.20		
18-25	元祐通寶	行書	1086	表		24.3	24.4	20.0	19.9	1.3	1.4	3.76		
18-26	淳熙元寶	真書	1174	表	背上「月」	24.0	23.8	18.7	18.6	1.4	1.5	3.91	○	
18-27	咸平元寶	真書	998	表		24.2	24.1	18.9	19.0	1.1	1.1	2.93		
18-28	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.5	24.5	19.4	18.9	1.2	1.4	3.69	○	
18-29	大觀通寶	瘦体	1107	表		24.5	24.5	21.7	21.8	1.7	1.7	4.06		
18-30	熙寧元寶	真書	1068	裏		24.7	23.4	20.5	20.1	1.4	1.5	3.91		
18-31	咸平元寶	真書	998	表		24.7	24.7	19.0	19.0	1.1	1.3	3.61		
18-32	元祐通寶	篆書	1086	表		24.4	24.6	19.8	19.6	1.3	1.4	3.87		
18-33	皇宋通寶	真書	1038	表		24.8	24.8	19.6	19.6	1.2	1.4	3.70		
18-34	至道元寶	真書	995	裏		25.0	25.0	18.7	18.5	1.4	1.5	4.38	○	
18-35	元豊通寶	行書	1078	裏		24.6	24.6	19.4	19.1	1.2	1.5	3.84		
18-36	紹熙元寶	真書	1068	裏	背下「五」	23.0	23.0	19.6	19.5	1.4	1.5	3.39	○	
18-37	天聖元寶	篆書	1023	裏		25.3	25.2	20.6	20.8	1.3	1.5	3.66		
18-38	嘉祐通寶	真書	1056	裏		25.4	25.6	19.8	20.4	1.1	1.3	3.70		
18-39	祥符元寶	真書	1009	表		25.2	25.3	19.2	19.2	1.3	1.4	4.08	○	
18-40	至和元寶	篆書	1054	裏		23.9	23.8	18.9	18.9	1.0	1.2	2.83	○	
18-41	元祐通寶	篆書	1086	表	す穴・欠損有	24.4	24.3	20.3	20.3	1.3	1.5	3.73		
18-42	元祐通寶	行書	1086	裏		23.7	24.1	19.1	19.2	1.3	1.4	3.71		
18-43	天禧通寶	真書	1017	表	欠損有	24.5	24.5	19.5	19.6	1.3	1.4	3.85		
18-44	治平元寶	真書	1064	裏		23.5	23.6	19.6	19.7	1.6	1.9	4.22		
18-45	元祐通寶	篆書	1086	表		24.2	24.0	20.1	20.1	1.3	1.4	3.67		
18-46	聖宋元寶	行書	1101	裏		24.7	24.7	18.9	19.0	1.2	1.4	4.03		
18-47	皇宋通寶	真書	1038	表	欠損有	23.7	24.2	19.0	18.8	1.3	1.4	3.69		
18-48	紹聖元寶	行書	1094	裏	星形孔銭	24.7	24.5	18.8	18.3	0.9	1.1	2.87		
18-49	治平元寶	篆書	1064	裏		24.2	24.2	19.4	19.5	1.3	1.3	3.57	○	
18-50	熙寧元寶	篆書	1068	表		23.9	23.6	20.0	18.9	1.3	1.5	3.95		
18-51	元豊通寶	篆書	1078	裏		24.0	24.0	19.2	19.2	1.4	1.5	3.90		
18-52	聖宋元寶	行書	1101	表	星形孔銭	24.4	24.5	19.3	19.3	1.3	1.4	3.76		
18-53	至道元寶	草書	995	表		24.5	24.7	18.0	17.8	1.0	1.2	3.58		
18-54	治平元寶	真書	1064	表		24.2	24.3	19.5	19.5	1.2	1.4	3.04		
18-55	元豊通寶	行書	1078	表		23.9	24.0	19.1	19.1	1.4	1.5	3.79		
18-56	皇宋通寶	真書	1038	裏		24.5	24.7	19.4	18.9	1.2	1.3	3.52		
18-57	開元通寶	隸書	621	裏		22.8	23.0	18.6	18.5	1.2	1.4	3.56		
18-58	聖宋元寶	篆書	1101	表	湯回りが悪い	22.7	22.3	19.8	19.9	1.1	1.3	2.46		
18-59	皇宋通寶	篆書	1038	裏		24.8	24.8	20.4	20.3	1.0	1.2	3.31		
18-60	元祐通寶	篆書	1086	裏	欠損有	23.9	23.7	19.0	19.0	1.2	1.3	3.44		
18-61	紹聖元寶	行書	1094	裏		24.7	24.7	20.2	19.7	1.3	1.4	3.66		
18-62	治平元寶	篆書	1064	裏		24.5	24.4	19.4	19.7	1.4	1.5	4.33		
18-63	政和通寶	隸書	1111	表		24.2	24.2	20.3	20.3	1.3	1.4	3.71		
18-64	開元通寶	隸書	621	表		24.3	24.4	20.7	20.7	1.1	1.3	3.41		
18-65	皇宋通寶	真書	1038	表		24.0	23.9	18.1	18.2	1.2	1.3	3.48		
18-66	元豊通寶	行書	1078	裏		24.2	24.3	19.5	19.3	1.2	1.3	3.65		
18-67	元豊通寶	篆書	1078	表		24.9	24.8	20.1	20.1	1.2	1.3	3.80		
18-68	元豊通寶	行書	1078	裏		24.1	24.4	18.4	18.7	1.4	1.4	4.06		
18-69	熙寧元寶	真書	1068	表		23.9	23.9	19.7	19.8	1.2	1.4	3.41		
18-70	元豊通寶	篆書	1078	裏	す穴有	23.5	23.5	18.1	17.9	1.0	1.1	2.58		
18-71	開元通寶	隸書	621	裏		23.0	23.3	19.9	19.9	1.3	1.4	3.13		
18-72	紹聖元寶	篆書	1094	裏		24.8	24.8	18.9	18.9	1.3	1.3	4.06		
18-73	至道元寶	真書	995	裏		24.8	24.7	18.5	18.6	1.3	1.7	4.22	○	
18-74	景祐元寶	真書	1034	裏		24.9	25.0	19.9	19.7	1.1	1.3	3.54		
18-75	明道元寶	真書	1032	表	す穴・欠損有	20.1	22.9	18.9	18.8	1.2	1.3	3.10		
18-76	元豊通寶	篆書	1078	表		24.4	25.0	20.1	20.2	1.2	1.3	3.73		
18-77	熙寧元寶	篆書	1068	裏		23.9	24.3	20.2	20.2	1.1	1.2	3.15		
18-78	元祐通寶	篆書	1086	裏		22.5	22.4	19.2	19.1	0.9	1.1	2.23		
18-79	元祐通寶	篆書	1086	表		24.8	24.5	18.9	19.5	1.2	1.2	3.69		
18-80	聖宋元寶	行書	1101	裏		23.4	23.6	18.2	18.5	1.3	1.5	4.11		
18-81	皇宋通寶	篆書	1038	裏		23.6	23.6	18.9	19.0	1.1	1.5	3.23		
18-82	元祐通寶	行書	1086	表		24.6	24.6	18.8	18.8	1.3	1.3	3.81	○	
18-83	景德元寶	真書	1004	表		24.3	24.3	21.2	19.9	1.2	1.3	3.09		
18-84	皇宋通寶	真書	1038	表		24.8	24.9	20.0	19.8	1.1	1.2	3.37	○	
18-85	開元通寶	隸書	621	裏		24.0	24.1	20.5	20.4	1.4	1.5	3.45		
18-86	嘉祐元寶	篆書	1056	表		23.7	23.8	18.8	19.1	1.2	1.2	3.07		
18-87	熙寧元寶	真書	1068	表		23.7	23.9	18.8	18.8	1.4	1.8	3.77		
18-88	皇宋通寶	真書	1038	表	す穴有	24.7	24.8	17.8	17.8	1.2	1.3	3.56		
18-89	淳熙元寶	真書	1174	表	背上「東」 星形孔銭	24.1	24.2	18.5	18.8	1.4	1.5	3.67	○	
18-90	熙寧元寶	篆書	1068	裏		23.8	23.6	20.3	20.3	1.1	1.2	3.23		
18-91	熙寧元寶	真書	1068	表		24.3	24.3	20.6	20.8	1.1	1.4	3.49		
18-92	皇宋通寶	篆書	1038	表	磨輪?	23.2	23.4	19.0	19.1	1.1	1.4	3.02		
18-93	熙寧元寶	真書	1068	表		24.6	25.0	19.7	19.9	1.4	1.8	5.33		
18-94	元符通寶	行書	1098	表		24.5	24.5	19.7	19.7	1.5	1.5	4.21		
18-95	皇宋通寶	篆書	1038	表	欠損有	24.5	24.6	18.7	18.6	1.0	1.0	2.95		
18-96	元祐通寶	篆書	1086	表	歪み有	24.8	24.3	19.9	19.5	1.3	1.4	4.04		
18-97	元祐通寶	篆書	1086	表		24.4	24.2	19.7	20.0	1.2	1.3	3.36		

V 関連分野報告・分析

出土銭繙・こも片の分析

高橋 敦

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

はじめに

中津居館跡の発掘調査では、直径約60cmの甕が出土しており、内部には銭繙でまとめられた状態の渡来銭約2万枚が確認されている。

本報告では、銭繙に利用された素材を検討するため、薄片作成・観察を実施する。

1. 試料

試料は、中津居館跡から出土した古銭を束ねるために使われた銭繙とこも片である。銭繙は、資料を一通り観察し、保存状態などを考慮して5点（試料No.9, 12, 13, 14, 16）を選択した。この5点とこも片1点の合計6点について分析を実施する。

2. 分析方法

資料の外観観察を行った後、剃刀で端部を切断して分析試料とする。試料をアルコールシリーズ（エタノール50%、70%、90%、95%、100%、ブタノール：エタノール1：1、ブタノール、ブタノール：キシレン1：1）で脱水した後、合成樹脂に包埋して、樹脂を固化させる。紐の横断面が出るように、ダイヤモンドカッターで切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドグラスに接着した後、反対側も切断と研磨を行い、プレパラートとする。一方、こもは、脆いために、脱水時や樹脂包埋時に変形したり、切断時や研磨時に良好な断面が出せない可能性が高かったことから、一部を水中で粉碎し、その断片をガム・クロラルで封入してプレパラートとした。

プレパラートは、生物顕微鏡を用いて透過光で横断面の組織構造などを観察し、その特徴を現生標本等と比較して種類を同定する。

3. 結果

(1) 銭繙

5点の銭繙の横断面をみると、素材はいずれも似た特徴を示すことから同一の種類である。破損が激しいが、銭繙を構成する繊維は、板状、あるいは半円状等を呈する。破片になっている部分が多いが、本来は中空の円形であり、その径は約2～5mmと考えられる。横断面は柔細胞を主体としており、所々に維管束が認められる。維管束は潰れており、形状や組織配列の詳細は不明である。放射組織は認められない。

以上の特徴から、不斉中心柱の組織構造を持ち、稈（茎）が中空となる草本類と考えられる。候補としては、イネやムギ等の栽培種を含むイネ科草本類が考えられるが、組織観察から種類を特定することができなかった。

そこで、繙の表面から植物片を採取し、灰像分析を実施した。その結果、試料No.9, 16の2点でイネの短細胞列が確認された。試料No.12, 13, 14については、種類を同定できる植物珪酸体は確認さ

れなかったが、断面観察で全て同一の種類と考えられることを考慮すれば、いずれの銭縷もイネを用いていると考えられる。

(2) こも片

資料は保存状態が悪く、脆い。外観は、繊維質で、繊維が交差する箇所も認められる。繊維に細胞壁が認められることから植物繊維である。観察した範囲では、軸方向組織のみで構成されており、直交する放射組織は認められないことから、イネを含む草本類と考えられる。

4. 考察

銭縷は、いずれも2本の束を撚り合わせて1本の紐としている。紐の太さは約0.5~0.8cmである。紐を構成する2本の束は、それぞれ薄い板状の繊維が多数集まって構成されている。断面組織では、いずれの銭縷試料も不斉中心柱の組織構造が観察できること等から同一の種類であり、中空の稈(茎)を持つ草本類と考えられる。所々、元の形状を残していると思われる部分があり、その部分でみると、植物体の径は約2~5mmと考えられる。

銭縷は、組織構造と植物珪酸体分析からイネの植物体(稲藁)と考えられる。宮崎(1995)によれば、収穫直後の稲藁よりも、一定期間乾燥・保管した稲藁の方が引っ張り強度などが増すとされる。また、稲藁をそのままの形で使うことはほとんど無く、藁の株元の葉を抜き落とす「ワラスグリ」や、横槌などで藁に打撃を加えて、繊維部分と他の部分とを分ける「ワラ打ち」を経てから工作に利用するとされる。今回の資料についても、断面観察で桿が割れている様子が認められ、ワラ打ちを経た繊維が利用されていることが推定される。こうした工程を経た藁に葉が残ることはほとんど無いが、今回の資料ではイネの葉部に由来する短細胞列が認められることから、葉を抜き落とす際にその一部が残存したことが推定される。

藁縄は、作り方等から荷造り縄(普通縄)、樽掛け縄、堅縄(撚りを強めた縄)、藁束3本を束ねた三つ子縄、撚りの弱い縄数本を撚り合わせた綱の子縄などがある(宮崎, 1985a)。今回の資料は、2本の束を撚り合わせている構造から、普通縄あるいは堅縄と考えられる。

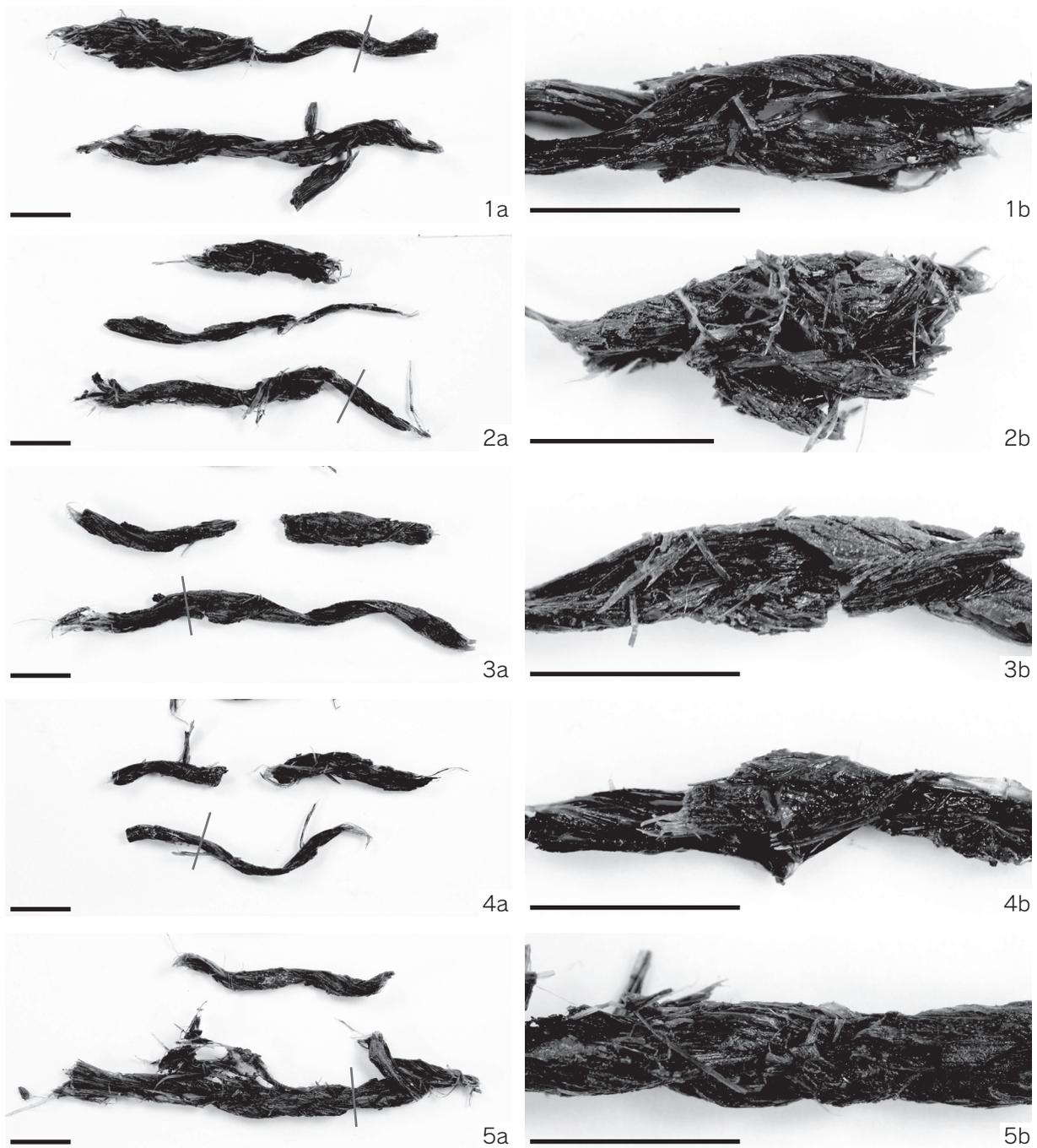
一方、こも片は、保存状態が極めて悪く、横断面での組織構造がほとんど観察できないが、繊維質であり、放射組織が全く観察できない特徴から、イネを含む草本類に由来すると考えられる。こもが一般的に稲藁を利用することを考慮すれば、本資料もイネの可能性はある。

こも(菰)は、一般的には、稲藁を俵編みで作るとされる(宮崎, 1985a)。今回の資料についても、繊維が交差する状況が見られ、編まれていた可能性があるが、断片的であり、詳細な手法を確認することはできなかった。

遺跡から出土、あるいは伝世品としての藁製品について、藁の利用状況に着目して系統的に整理した研究例はほとんどない。例えば、近代・現代の事例として、宮崎(1985a, 1985b)は、普通縄の太さの規格や人体採寸法による量の基準を紹介しているが、こうした基準が中世においてどのように存在し、また用途別に使い分けられていたのかは詳細が不明である。今後、こうした規格性についても注目して、資料を収集していくことが必要である。

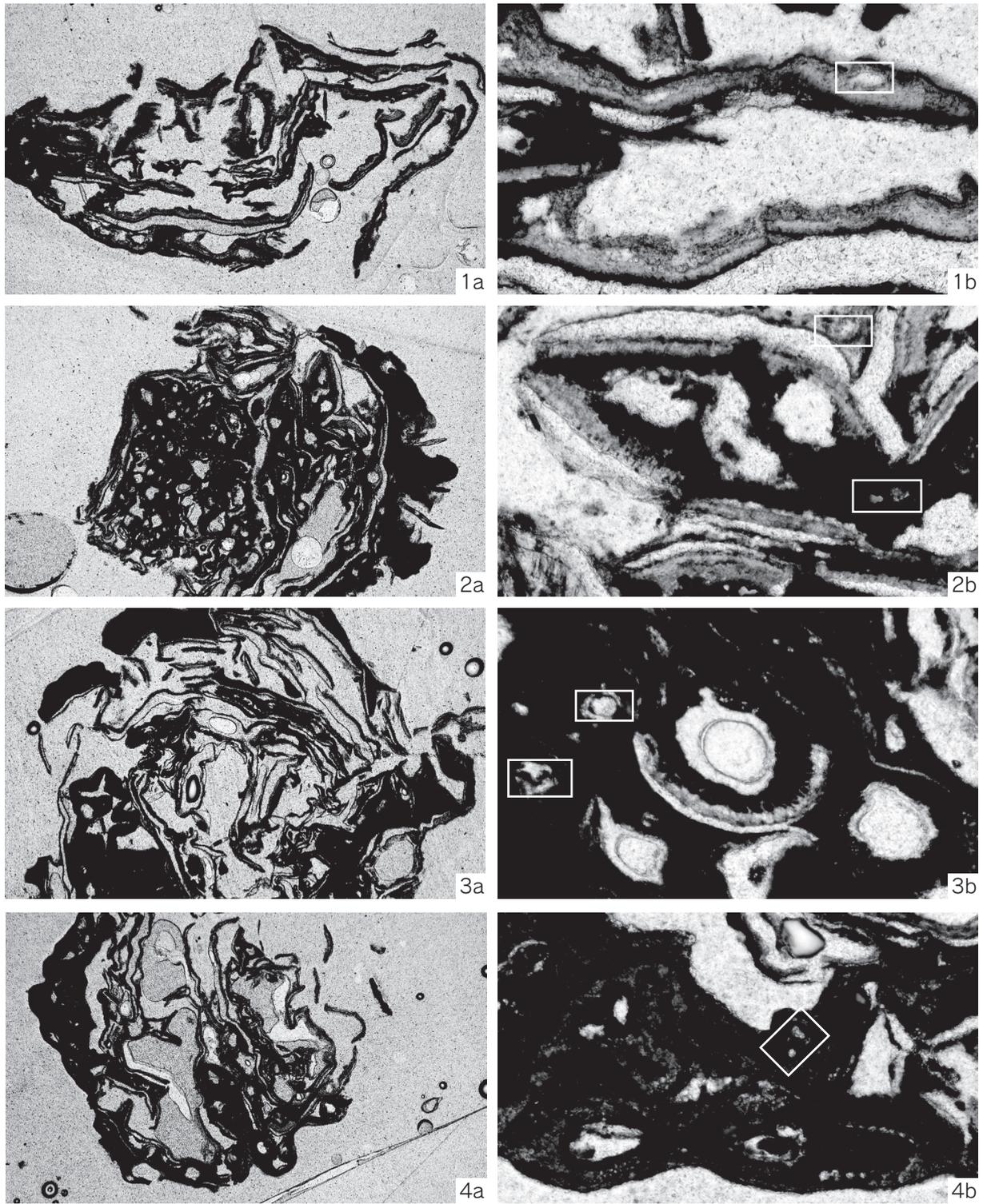
引用文献

- 宮崎 清, 1985a, 1985b, 藁 I・II. ものと人間の文化史55-I・II, 法政大学出版社, 369p., 383p
宮崎 清, 1995, 図説 藁の文化, 法政大学出版社, 543p.



1. 銭縷 (試料No9)
 2. 銭縷 (試料No12)
 3. 銭縷 (試料No13)
 4. 銭縷 (試料No14)
 5. 銭縷 (試料No16)
 a:全景写真、b:拡大写真
 各写真のスケールは、全て1cmを示す
 1-5aの紐に直交する線は、試料の切断・薄片作成位置を示す

図版1 銭縷の外観



1. 草本類 (試料No9)

2. 草本類 (試料No12)

3. 草本類 (試料No13)

4. 草本類 (試料No14)

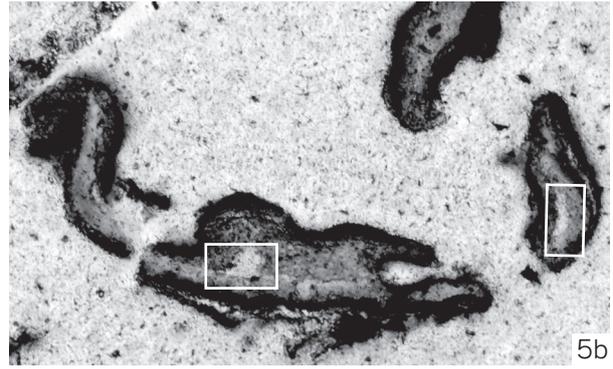
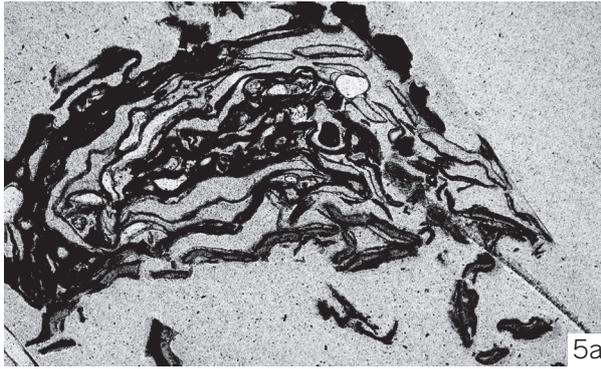
a: 全景写真、b: 拡大写真

白又キの四角で囲った部分は維管束を示す

————— 500 μ m: a

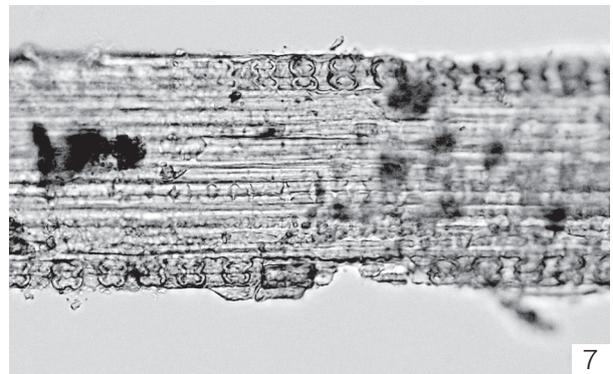
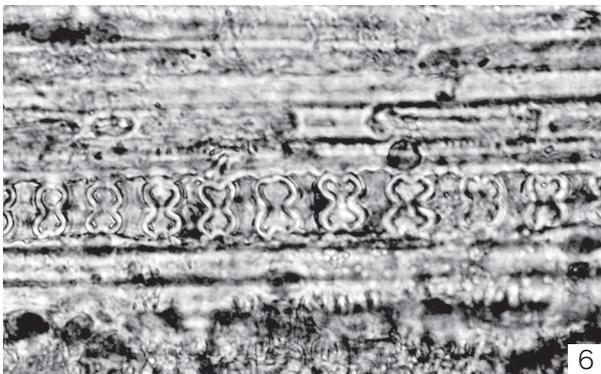
————— 100 μ m: b

図版2 錢縷の横断面 (1)



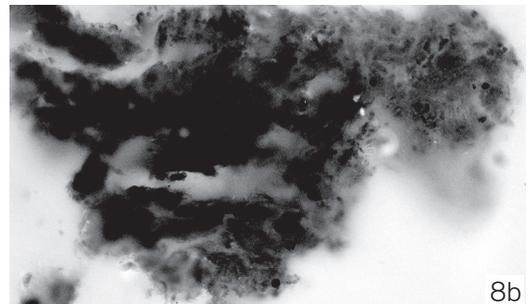
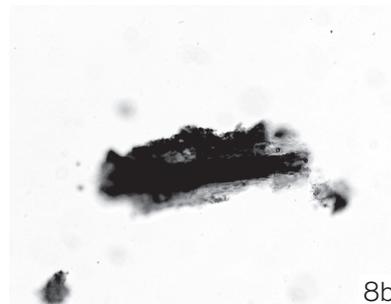
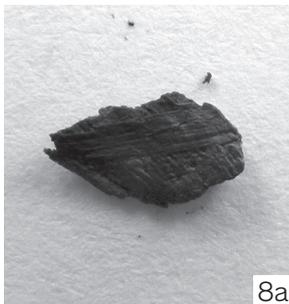
5. 草本類 (試料No16)
 a:全景写真、b:拡大写真
 白又キの四角で囲った部分は維管束を示す

500 μ m:a
 100 μ m:b



6. イネ短細胞列 (試料No9)
 7. イネ短細胞列 (試料No16)

50 μ m:6
 50 μ m:7



8. 草本類 (こも片) a:外観,b,c:断面組織

5mm:8a
 100 μ m:8b,c

中津居館跡の一括出土銭

櫻木晋一

(下関市立大学)

本資料の出土時から、調査方法の検討、実際の調査、そして報告まで携わってきた者として、この一括出土銭についての考察をおこなう。

中津居館跡から出土した大量の銭貨は一括出土銭とよばれ、おもに中世社会における経済活動を示す重要な歴史資料のひとつである。山口県内では、山陽自動車道・防府バイパス建設予定地の発掘調査中に出土した下右田遺跡の事例が、まず思い浮かぶ。これは蓋をした備前焼の壺いっぱい、最新銭を宣徳通寶（1433年初鑄）とする13,495枚の銭貨が納められていた（山口県教育委員会1980）。また、県内最多のものは山口市興隆寺の境内から出土した、備前焼の大甕に納められた294kg（推定89,000枚）の銭貨であるが、その中の12,141枚が調査され、最新銭は朝鮮通寶（1423年初鑄）であった（山本1987）。枚数でいえば、本資料は興隆寺のものに次いで県内第2位の多さである。

まず、この銭貨の性格であるが、神に捧げるための埋納か経済的備蓄なのかを判断しなければならない。一括出土銭が埋められた目的の判定は、ほとんどの場合文献史料が残っておらず、大変難しい問題である。しかし、それを承知のうえで敢えて推測するならば、本資料は土塁で囲まれた居館内から出土しており、大甕の中で銭貨の流通形態を保った梱包がなされ収納されていたこと、銭貨の梱包塊が無造作に入れられているように思われること、板で蓋をされていたことから必要に応じて使用することを意図していたと感ぜられること、また奉納の証拠となる墨書などの共伴遺物も存在しないことから、地鎮などの埋納目的ではなく、経済活動の一環として豪族の手元に蓄えられていた銭貨が、館の廃絶など何らかの原因で忘れ去られ、遺棄されてしまったものであると考える。

この一括出土銭の最も特徴的な点を述べると、発掘調査によって遺跡内から出土したものであり、銭貨が中央の孔に紐を通した縉の形態で収納されており、かつ原形を保っていたことである。この点で、本遺物は重要資料であり、取り扱いには慎重でなければならないと判断した。出土当初は、銭塊の周りにはかけられた紐も明確に確認することができ、舟木家本洛中洛外図屏風左隻第1扇に描かれている絵画資料とも一致する貴重な発見であった（図1）。これは中国から伝わった大量の銭貨を梱包使用するときの形態である。円形方孔の銭貨は、仕上げの整形時に外縁を磨くため、中央四角の孔は重要な機能を果たす。本来は銭貨を製作する技術的な意味で存在するこの孔が、これに紐を通し束ねることができるという副次的な機能を有するので、縉銭という使用形態は生まれたものであると考えられる。縉銭は、銭貨を使用するベトナムでも一縉の枚数の違いこそあれ検出されている。（昭和女子大学2008）銭貨約100枚からなる縉のことを「連」とよぶ。本資料が2つの連を直列に繋ぎ、それが25本からなる五貫文縉（約5,000枚）とよばれる形状であると思われ、発掘現場における観察で、少なくともこの縉銭が4個は存在していると推測できた。したがって、この一括出土銭には20,000枚以上の銭貨が含まれていると判断した。（保存処理を終えて、クリーニングされた状態で観察したところ、十貫文縉が2個と八貫文縉が2個、その下



図1 洛中洛外図屏風（舟木本）（部分）
画像提供：東京国立博物館

に一貫文緡が2個程見てとれ、38,000枚以上の銭貨が存在するものと思われる。) 緡銭は中世以降における銭貨を束ねる時の慣行であり、連が百枚丁度の場合と、百枚より数枚少ない場合とが存在する。百枚より少ないものを「省陌」あるいは「短陌」といって、これで百枚と見做し、百枚丁度の場合を「丁陌」という。百枚より多い資料も存在するが、呼称は定かではない。これまでに出土した資料から、中世の日本では1連=97枚のものが最も多いことがわかっている。したがって、一貫文緡は約970枚となる。外側から直接見えない部分の緡を、銭種を判読するために10緡を取り上げ、CTスキャン撮影による判読実験のためにさらに1緡の枚数を数えたが、11緡中9緡が97枚であり、2緡が94枚であった。このことから、本資料も先行研究の結果を支持するものとなった。ちなみに『大乘院寺社雑事記』文明12年(1480)12月21日条に「料足アカマカ関ヨリ西ハ百文、東ハ九十七文也」とあり、大宰府条坊跡第83次調査で出土したものは、10緡中7つが100枚丁度であった。(太宰府市教育委員会1994) さらに多くの資料による検証が必要だが、この結果は文献記録と一致しており、記憶しておく必要がある。

諸史料にみえる五貫文緡については渡政和氏の論考(渡1996)があり、ここで概要を紹介する。もともと「貫」は単位性を有しておらず、漢字の成り立ちからして、紐で繋がった状態を指すものであったが、日本に銭貨がもたらされて一般的に使用される中世には、枚数や重さの単位となっていた。文献には「貫」とほぼ同義のものとして「結」という表現があり、これも約1,000枚緡銭の状態を示している。『山王霊験紀』(1288年の奥書)に描かれている緡銭を見ると、「連」が5つ繋がり、それを2本並列に結び一結は成り立っている(図2)。この絵画は借上げから二十貫文借りている場面であり、省略して五貫文が描かれていることから、当時の人々には五貫文が一単位として認識されていたものと考えられる。考古遺物としては、山梨県北杜市小和田館跡から出土した一貫文緡が完全な形で現存する(図3)。また、「結」は五貫文以下か、十貫文でしか使用されず、「結」の前に六~九の数は存在しないことから、「貫」とまったくの同義ではない。桜井英治氏による割符の研究(桜井1996)によって、中世に流通していた手形の一種である割符は十貫文の定額のもものが多く、五貫文の半割符も存

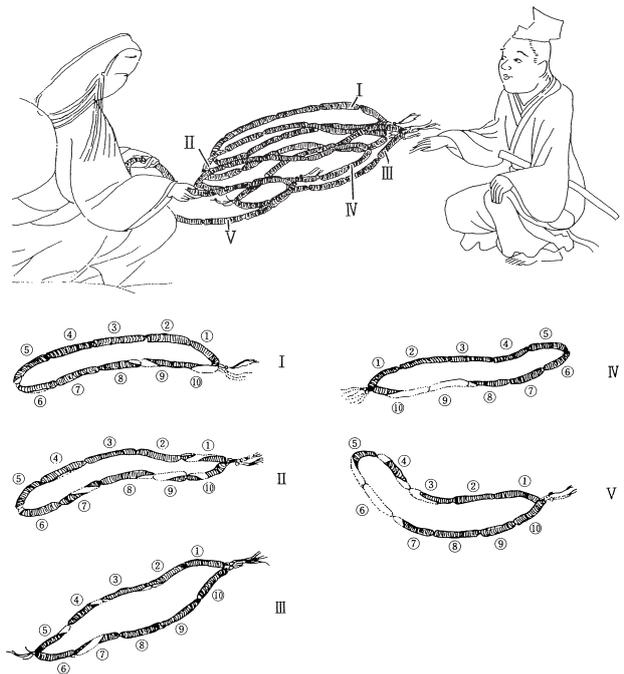


図2 山王霊験記に表現された緡銭のトレース図
『出土銭貨』第5号(1996)31頁より転載

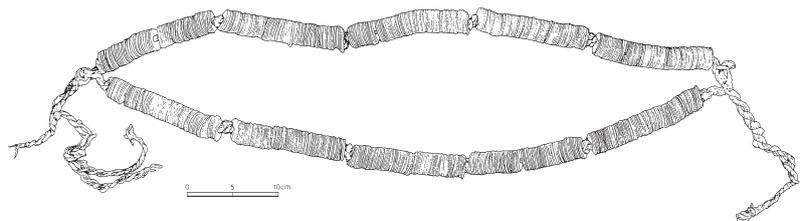


図3 小和田館跡出土の一貫文緡
『出土銭貨』第5号(1996)61頁より転載

在し、これらの定額単位が一般的に使用されていたことが明らかにされている。つまり、中世当時においては五貫文が一定単位として広く認識されて、それが緡の梱包という形態をとって使用されていたことは間違いなからう。これをモノ資料として見ると、銭貨1枚=1文は3.75gなので、十貫文を10,000枚として37.5kg、五貫文だと18.75kgとなる。周りを藁紐で梱包し持ち運びすると、十貫文より五貫文の単位の方が紐の強度と重量的な点で利便性が高いと推測できる。十貫文緡、五貫文緡、一貫文緡などさまざまな緡銭の形態が存在するので、緡銭研究は中世経済史においては史料論の立場からも重要課題であると考えられる。ちなみに、広島県福山市草戸千軒町遺跡から出土している一貫文緡は連を2本並列に繋ぎ、それが5つ繋がっている(図4)。近世の「九六銭」とよばれる緡銭もこの形態であり、緡の作り方もいくつかのタイプがあることを指摘しておく。

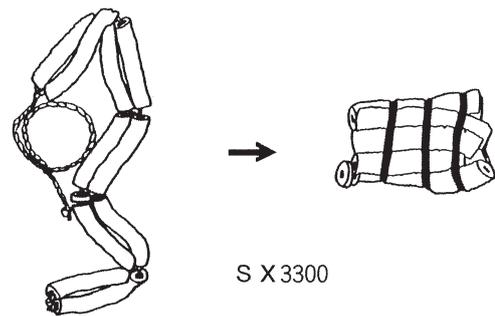


図4 草戸千軒町遺跡出土銭貨復元図
『草戸千軒町遺跡発掘調査報告II』310頁より転載

中津居館跡出土の一括出土銭に話を戻す。大半の銭貨が固着しており、その剥ぎ取りに際しては、銭貨の表裏を揃えて束ねているかどうかや、特定銭種だけを集めている形跡がないかどうかの確認作業をおこなったが、そのような形跡はなかった。つまり、多くの銭種を無作為に紐に通して緡を作っており、これまで知られている緡銭の作り方と同様であることがわかった。特定銭種を集めて緡を作っている埼玉県深谷市根岸遺跡の一括出土銭のような例外は存在するものの(深谷市教育委員会2000)、本資料は中世時代に流通していた一般的な緡銭であるといえる。

固着している銭貨と銭貨の間に、カッターの刃を当てながら慎重に剥ぎ取り作業をおこない、10連964枚について読み取った銭種ごとの枚数を集計したものが、表1である。まず、この表からも明らかかなように判読不能の銭貨が存在しなかったことから、総じて遺存状態の良い銭貨であるということが言える。本書53~62頁所収の964枚分の観察表(以下、観察表)の備考に、す穴と表記した小さな穴があいているものは若干存在するが、粗悪な私鑄銭はほとんど含まれていないと考えて良い。す穴は溶けた金属が鑄型の中でまんべんなくいきわたらない時などに生じる場合がある。もともと粗悪な銭貨が含まれていなかったことと、大甕に納められ保護されていたことが、銭貨にとって良い遺存状態を維持できたものと考えられる。銭種に着目すると、この一括出土銭からは中国政府が発行した44種類の制銭を確認することができた。全点の判読調査をおこなわなかったのは、本資料が極めて高い希少性を有する資料であり、後世に活用できる歴史資料とするためには現状保存を優先すべきであると判断したからである。とは言え、一定数の銭貨は判読しないと埋められた時期が決定できないので、統計的に全体を推測することが可能な枚数として約1,000枚を抽出することとし、外観上まったく影響のない部分の銭貨について読み取り作業をおこなった。また、これは当時の貨幣単位の一貫文でもある。しかしながら、約1,000枚の銭貨を無作為抽出したものによるデータなので、これ以外の銭種が含まれている可能性は高い。たとえば、これまでに知られている第2期(=至大通寶を最新銭とするもの)に属する一括出土銭では、半両、五銖、貨泉などが最古銭として検出されている場合も多く、本資料にも含まれている可能性は大である。964枚の銭貨を判別したことで44種が確認できた

ということは、ほぼ同時期のものであると考えられる大宰府条坊跡第83次調査の一括出土銭999枚に45種が含まれていたことと類似している。中世における一括出土銭は、40種～60種の銭貨で構成されているのが一般的である。文献史料である小田原後北条氏の発給文書（永禄7年=1563）にも、「精銭之品ハ四五十色可有之」とある。中国でも多くの銭種が混じり合って流通しており、それが日本にもたらされて流通した結果であると考えられる。至治3年（1323）に中国の寧波から日本の博多に向かって出帆し、韓国の新安沖で沈没した船に積まれていた銭種からもこのような状況は確認できる。

ここでそれぞれの銭種に着目すると、最古銭は唐の開元通寶（621年初鑄）、最新銭は元の至大通寶（1310年初鑄）である。一括出土銭の調査で重要なことは、最新銭を探し出すことがある。なぜなら、政府が発行する制銭は鑄造年が判明しており、埋められた年はその年号より遡らないからである。また、明の洪武通寶（1368年初鑄）を含んでいないことから、この一括出土銭は、14世紀第二四半期頃に埋められたものであると考えられ、これは先述の新安沖沈没船と近い年代の資料である。さらには、収納されていた備前焼大甕の編年もこのことを支持しており、埋められた時期はほぼ間違いはない。したがって、踏み込んで考察するならば、この時期に館で何かが起こり、廃絶したと推測することもできるのである。

以下、確認できた44種の銭貨について、簡単に解説する。

まず、最古銭である唐の開元通寶は、和同開珎のモデルであることでも良く知られており、隸書体である。銭貨の裏面のことを背とよぶが、背の上や下に、三日月状の線である「月」や、径2mm程度の点である「星」や、棒のような線文を確認できるものもある。また、背の下に「越」と記したものが1枚存在するが、これは江南道越州で鑄造されたものであることを示している。このように背に鑄造地を示す文字を有するものは会昌5年（845）から鑄造されているので、会昌開元ともよばれている。唐の軋元重寶（758年初鑄）は、開元通寶の次に発行されたもので、銭径等は同じであるが、財政救済のために10倍通用の当十銭として発行された。後周で鑄造された周通元寶（955年初鑄）には、開元通寶と同様、背に月や星のあるものもあるが、ここで確認したものは無背である。また、篆書体の開元

表1 中津居館跡一括出土銭種一覧

銭銘	時代	初鑄年	枚数	備考
開元通寶	唐	621	87	最古銭
軋元重寶	唐	758	4	
周通元寶	後周	955	1	
宋通元寶	北宋	960	3	
開元通寶	南唐	960	1	
太平通寶	北宋	976	21	
淳化元寶	北宋	990	8	
至道元寶	北宋	995	20	
咸平元寶	北宋	998	19	
景德元寶	北宋	1004	22	
祥符元寶	北宋	1008	19	
祥符通寶	北宋	1008	11	
天禧通寶	北宋	1017	21	
天聖元寶	北宋	1023	35	
明道元寶	北宋	1032	4	
景祐元寶	北宋	1034	16	
皇宋通寶	北宋	1038	126	最多銭
至和元寶	北宋	1054	10	
至和通寶	北宋	1054	2	
嘉祐元寶	北宋	1056	15	
嘉祐通寶	北宋	1056	20	
治平元寶	北宋	1064	12	
治平通寶	北宋	1064	3	
熙寧元寶	北宋	1068	103	数2位
元豐通寶	北宋	1078	101	数3位
元祐通寶	北宋	1086	91	
紹聖元寶	北宋	1094	38	
元符通寶	北宋	1098	17	
聖宋元寶	北宋	1101	47	
大觀通寶	北宋	1107	10	
政和通寶	北宋	1111	41	
宣和通寶	北宋	1119	6	
紹興元寶	南宋	1131	1	
正隆元寶	金	1157	1	
淳熙元寶	南宋	1174	8	
紹熙元寶	南宋	1190	3	
慶元通寶	南宋	1195	5	
嘉泰通寶	南宋	1201	1	
嘉定通寶	南宋	1208	1	
嘉熙通寶	南宋	1237	1	
淳祐元寶	南宋	1241	2	
景定元寶	南宋	1260	2	
咸淳元寶	南宋	1265	2	
至大通寶	元	1310	1	最新銭
□□元寶			1	鳥銭
文字無銭			1	
計			964	枚
			46	種

通寶（960年初鑄）を1枚検出できたが、これは五代十国の一つである南唐発行のもので、唐の開元通寶とは字体が異なっており、容易に判別できる。

宋通元寶（960年初鑄）は北宋が最初に発行した錢貨で、開元通寶と同様、背に月や星のあるものもある。次の太平通寶（976年初鑄）にもわずかではあるが、背に月や星のあるものもあるが、ここで検出したものはすべて無背である。淳化元寶（990年初鑄）は真書・行書・草書の三書体が存在する。次の至道元寶（995年初鑄）も同様に、真書・行書・草書の三書体が存在する。咸平元寶（998年初鑄）と景德元寶（1004年初鑄）は、真書しか発行されていない。祥符元寶（1008年初鑄¹）からは、元寶と通寶が対で発行されているものがある。ともに文字が小ぶりだが、祥符通寶（1008年初鑄）には文字が縦長でやや大きめのものも存在する。天禧通寶（1017年初鑄）は真書のみが発行されている。天聖元寶（1023年初鑄）からは、真書と篆書の二書体が対になって発行される。明道元寶（1032年初鑄）、景祐元寶（1034年初鑄）、皇宋通寶（1038年初鑄）がこれに続く。皇宋通寶は日本の一括出土錢のなかで最も多く出土する錢種ということもあって、真書、篆書の両書体とも文字のバリエーションが多い。至和元寶（1054年初鑄）、至和通寶（1054年初鑄）、嘉祐元寶（1056年初鑄）、嘉祐通寶（1056年初鑄）、治平元寶（1064年初鑄）、治平通寶（1064年初鑄）と、元寶と通寶が対になった錢銘が続き、すべてに真書と篆書の二書体がある。熙寧元寶（1068年初鑄）も真書と篆書の二書体だが、やはり発行枚数が多いこともあり、それぞれ文字の変化に富む。次の元豊通寶（1078年初鑄）は行書と篆書の二書体である。続く元祐通寶（1086年初鑄）、紹聖元寶（1094年初鑄）、元符通寶（1098年初鑄）、聖宋元寶（1101年初鑄）も同様に行書と篆書の二書体である。大觀通寶（1107年初鑄）は瘦金体の一書体のみである。政和通寶（1111年初鑄）は隸書と篆書、宣和通寶（1119年初鑄）も隸書と篆書の二書体である。紹興元寶（1131年初鑄）からは南宋が発行した錢貨であり、北宋時代に比して錢貨発行量が落ちるので、出土数も少なくなる。また、南宋錢は背面に鑄造された年号を刻んであるものが多いことから、番錢とよばれることもある。淳熙元寶（1174年初鑄）では背「柒」「捌」「十」「十三」2枚「十四」と背上「月」背下「星」、紹熙元寶（1190年初鑄）では背「元」「四」「五」を確認できた。「柒」は七、「捌」は八である。また、慶元通寶（1195年初鑄）では背「元」2枚「三」「六」2枚、嘉泰通寶（1201年初鑄）では背「三」、嘉定通寶（1208年初鑄）では背「三」、嘉熙通寶（1237年初鑄）では背「元」を確認できた。淳祐元寶（1241年初鑄）では背「二」「三」、景定元寶（1260年初鑄）では背「三」「四」、咸淳元寶（1265年初鑄）では背「二」「八」を確認できた。正隆元寶（1157年初鑄）は女真族の金が発行した錢貨である。至大通寶は元が発行した錢貨であり、一書体のみである。

次に、出土している錢種別の出土枚数に着目する。多い順に皇宋通寶、熙寧元寶、元豊通寶、元祐通寶、開元通寶である。皇宋通寶が第1位となるのは、鈴木公雄氏の一括出土錢全国集成（鈴木1999）と同様であり、以下の錢種も若干の違いはあるもののほぼ同様の傾向にあると見て良い。中国の窖藏錢（＝一括出土錢）や中世都市博多から出土する錢貨で元豊通寶が第1位になっていることとの相違については判然としないが、今後の課題としては指摘しておく（櫻木2009）。少なくとも、日本の一括出土錢には14世紀段階から皇宋通寶がもっとも多く含まれているという事実は指摘できる。

ここで、錢貨の製作技術について関連すること、および特徴ある錢貨について若干の考察をおこなう。

観察表の備考に星形孔銭と注記されているものは、中央の孔の四辺に傷があり、八方向に光る星のように見えることからこうよぶ。このようなものができる理由は、銭貨は鑄造品であり、枝銭とよばれる形状で出来上がったものから切り離して仕上げをする。その際、外輪を磨き弧を整形するさいに、数十枚の銭貨を束ねて重ね、中央の孔に方形の芯を通して砥石で磨くのだが、芯のずれによって孔の四辺に傷がつくのである。傷の場所が中央なら四辺とも中央、ずれていれば芯と同様の方形になっている。また、磨輪とは通常以上に外輪を磨いて、銭径が小さくなっているものである。大銭と呼ばれる銭径が大きな銭貨を磨輪して、一文銭の大きさに揃える場合はよく見かけるが、この事例は一文銭を小さくしている。金属片として他の用途で使用したものかもしれないが、その理由は判然としない。



図5 文字無銭 レントゲン写真

表1中に文字無銭と表記したものがある。銭貨の外側の盛り上がった部分を輪とよび、中央にある四角い孔の周りの盛り上がった部分を郭とよぶが、図5及び本書40頁の拓本、図版14の写真(No.16-82)から明らかなように、この銭貨には輪も郭も存在しており、無文銭ではないと判断できる。つまり、無文銭には輪も郭も存在せず、両面とも平坦になっており、銭径も22~23mmとやや小さいものが多いという特徴を有する。蛍光X線による映像でも文字部分が若干黒ずんでおり、文字は存在していた可能性が高い。したがって、この銭貨は鑄型の段階で文字が入っていなかったものを使用したか、整形時ないしその後文字を削り取ったものと推測できるので、文字無銭と表記した。

次に、島銭である。島銭とは政府が公式に発行した銭貨ではなく、中世に民間で鑄造されたものであると推定されている出自不明の銭貨を指す古銭収集界の用語である。銭貨全体の中でみれば、島銭はほとんど存在しないが、出土銭は長期間土中に埋まっていたこともあり、遺存状態が悪く、文字が不鮮明なものも多く、注意深く観察しないと島銭の発見は難しい。本資料からは淳化元寶と読めるものが1枚検出できた。島銭に関する学術的考察はほとんど存在しないといつて良いが、永井久美氏による考察があるので以下に引用する。「淳化元寶」は島銭の中でも最も多い。中世の出土銭では、中村岡の久保が17枚、鞍馬二ノ瀬町が9枚、塩野が7枚、大里と吉田若宮が各5枚の検出がある。中村岡の久保の埋蔵時期は1330年~1350年と推定されることから、おそらく14世紀初頭には流通していたと思われる。この銭の製作は、後の元化通寶や元平□寶と共通し、銭穿が大きく、銭肌がブツブツした特徴がある。島銭の淳化元寶の書体は北宋の淳化元寶とまったく相違するものであるから、銭の特徴を掴むと容易に識別できる。全体としては文字の不鮮明なものも多く、銭厚が1mm前後、重さ約2.5gと軽く、どちらかと言えば粗悪銭に属す。この状態ゆえに、14世紀後半になると次第に出土銭から減少する。淳化元寶の書体は若干の変化がある。」(永井2002)この論考には、本資料に含まれていた淳化元寶と同一ないしは類似のものが拓本で紹介されており、時期的な限定と面的な広がりを考えることができる。つまり、中村岡の久保と鞍馬二ノ瀬町、塩野、大里、吉田若宮1次では、吉田若宮1次が第3期(=洪武通寶を最新銭とする)であることを除けばすべて第2期に属している。さらに拓図が掲載されている館山が第1期(=南宋銭で終わり、元銭を含まない)、志海苔、小田、下道は第2期に属している。このことから、永井氏の言うように14世紀の前中期に流通していたものと推定できる。流通していた場所としては、順に愛媛県、京都府、兵庫県、徳島県、長野県、青森

表2 第2期銭種構成比較

銭種	国	初铸年	中津居館跡		大里		八条三坊		小原		大宰府83次		斎宮54次	
			数(枚)	比率(%)	数(枚)	比率(%)	数(枚)	比率(%)	数(枚)	比率(%)	数(枚)	比率(%)	数(枚)	比率(%)
開元通寶	唐	621	87	9.0	5,809	8.3	2,669	8.5	239	8.8	97	9.7	979	8.5
太平通寶	北宋	976	21	2.2	597	0.9	297	0.9	18	0.7	7	0.7	112	1.0
至道元寶	北宋	995	20	2.1	1,109	1.6	485	1.5	57	2.1	17	1.7	194	1.7
咸平元寶	北宋	998	19	2.0	1,207	1.7	546	1.7	56	2.1	10	1.0	193	1.7
景德元寶	北宋	1004	22	2.3	1,475	2.1	712	2.3	49	1.8	24	2.4	239	2.1
祥符元寶	北宋	1008	19	2.0	1,791	2.6	774	2.5	80	3.0	18	1.8	297	2.6
祥符通寶	北宋	1008	11	1.1	1,061	1.5	451	1.4	38	1.4	14	1.4	165	1.4
天禧通寶	北宋	1017	21	2.2	1,463	2.1	644	2.0	55	2.0	14	1.4	242	2.1
天聖元寶	北宋	1023	35	3.6	3,538	5.0	1,558	5.0	128	4.7	49	4.9	539	4.7
景祐元寶	北宋	1034	16	1.7	1,033	1.5	483	1.5	39	1.4	16	1.6	196	1.7
皇宋通寶	北宋	1038	126	13.1	9,677	13.8	4,199	13.4	366	13.6	128	12.8	1,502	13.0
至和元寶	北宋	1054	10	1.0	822	1.2	388	1.2	34	1.3	12	1.2	130	1.1
嘉祐元寶	北宋	1056	15	1.6	896	1.3	376	1.2	29	1.1	14	1.4	130	1.1
嘉祐通寶	北宋	1056	20	2.1	1,783	2.5	764	2.4	77	2.9	17	1.7	291	2.5
治平元寶	北宋	1064	12	1.2	1,166	1.7	590	1.9	47	1.7	16	1.6	242	2.1
熙寧元寶	北宋	1071	103	10.7	6,918	9.9	3,001	9.6	253	9.4	99	9.9	1,076	9.3
元豐通寶	北宋	1078	101	10.5	8,490	12.1	3,734	11.9	327	12.1	134	13.4	1,333	11.5
元祐通寶	北宋	1086	91	9.4	6,529	9.3	2,941	9.4	257	9.5	103	10.3	1,073	9.3
紹聖元寶	北宋	1094	38	3.9	3,007	4.3	1,365	4.3	100	3.7	49	4.9	500	4.3
元符通寶	北宋	1098	17	1.8	1,053	1.5	462	1.5	36	1.3	20	2.0	186	1.6
聖宋元寶	北宋	1101	47	4.9	2,796	4.0	1,341	4.3	104	3.9	39	3.9	487	4.2
大觀通寶	北宋	1107	10	1.0	881	1.3	415	1.3	22	0.8	9	0.9	165	1.4
政和通寶	北宋	1111	41	4.3	2,501	3.6	1,248	4.0	108	4.0	30	3.0	473	4.1
その他			62	6.4	4,160	6.4	1,972	6.3	182	6.7	63	6.3	832	7.2
全体			964	100.0	69,762	100.0	31,415	100.0	2,701	100.0	999	100.0	11,576	100.0

県、北海道、長野県、新潟県の遺跡であり、本資料が山口県のものであることを考えれば、九州を除く日本全域からの出土を確認できるのである。その結果、この淳化元寶はどこで铸造されたのかは特定できないものの、相当数が铸造され、日本で全国的に流通していたものであると推測できる。これまで学問的には軽視されていた感がある島銭だが、今後はその出土例を精査することによって、銭貨の生産や流通に関する知見を得られる可能性もあることが明らかとなった。島銭といえども無視はできないのである。

参考までに、コレクター大名であった丹波福知山藩主朽木昌綱が収集した銭貨を所蔵している大英博物館にも、同種の淳化元寶が1枚含まれている²。朽木昌綱にとっても収集対象として魅力的であったと思われる。

本資料の最新銭が元の銭貨であることから、その当時の中国貨幣事情を説明する。元は基本的には交鈔(宝鈔)とよばれる紙幣を使用する国家であり、至大通寶と至正通寶という銭貨の発行は例外的だったので、元銭の出土例はかなり少ないという事情がある。鈴木公雄氏によれば、至大通寶の存在率は0.02953%であり、一括出土銭全体からすると3,400枚に1枚ほどの割合になる。また、時期的に新しい一括出土銭ほど、元銭は含まれなくなる傾向にある。中国は銭貨が流通していた国家であるという常識を、認識し直す必要がある。つまり、元や明では銭貨の流通は例外的であり、清の時代になってから、ふたたび北宋のような銭貨が流通する国家となるのである。

本資料は鈴木公雄編年で第2期のものであり、ほぼ同時期のものであると考えられる他の地域の一括出土銭と銭種構成比率について調べてみたのが、表2と図6である。つまり、本資料の中に10枚以上含まれていた23種の銭貨について、京都の八条三坊、徳島の太田、長野の小原、福岡の大宰府、三重の斎宮と、広域に散在する同時期一括出土銭の比較を試みたものである。これらの一括出土銭はいず

れも至大通寶を最新銭とする第2期のもの、発掘調査中に出土した資料的に信憑性が高いと考えられるものを選んだ³。表2の銭種別構成比を小数第一位まで示した百分比で折れ線グラフを描くと(図6)、6

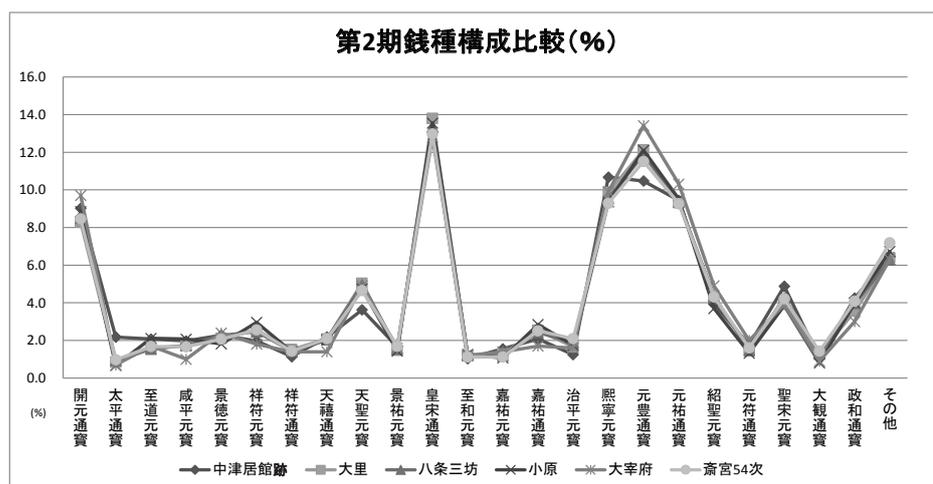


図6 第2期銭種構成比率比較グラフ

つの資料はほぼ重なっていると判定できる。つまり、これらの銭種構成比はほとんど変わらないということである⁴。1,000枚の抽出でもデータとしては精度が高いものと判断でき、1310年以降14世紀中期にかけては、このような銭種が混じり合いながら日本各地で流通していたことを確認できた。この時期は、先述の新安沈没船に28tの銭貨が積み残されていた事例でも明らかのように、大量の銭貨が中国からもたらされ、金属製品の材料として用いるためのものも含め、日本国内で銭貨が広汎に使用されていた時代であった。中津居館跡に住んでいた当地の豪族も、輸入されていた大量の銭貨を利用できる立場にあったことは間違いない。地方にあっても、土地の売買や高額商品の売買に銭貨が使用されていたのである。

ここで、本資料に対し2つの理化学的機材を使用した調査を実施したので紹介する。まず、九州歴史資料館のCT (Computed Tomography) を使用して、銭種の判読作業を実施した。X線撮影による銭種判定はこれまでもなされているが、CTによる一括出土銭の銭銘判読作業は初めての試みであると思われる⁵。本資料は繙状態のため、固着した銭貨を剥ぎ取らずに読み取ることが、遺物保護の観点からも最良の方法である。通常のX線撮影では3枚程度の固着でないとX線が透過しない。また、銭貨が同一方向を向いているとは限らず、複数の銭貨の文字が正立・倒立や鏡字状態などで重なって見え、読み取りが難しい。そこで、CT撮影では何枚までの重なりなら透過できるのかを実験した。結果、今回のCT撮影で分かったことは、5枚程度であれば判読できるということである。また、断層写真なので文字の重なりがなく、銭貨と銭貨の接着面に断層面を正確に当てると、きれいに文字が浮き出ることが分かった。もっと多くの枚数の銭貨が非破壊で読み取れるような方法が今後出現することを期待したい。

銭貨の金属組成分析も26点について、非破壊分析である蛍光X線分析を福岡市埋蔵文化財センターの機材を使用しておこない、その結果を表3に示した⁶。銭貨の真贋や鑄造時期と場所などを見た目の外観だけでなく、金属組成からも判断できる可能性があるからである。とりわけ、文字無銭と島銭については、金属組成からもその特色を把握したいと考えた。加えて、元や金、南宋銭など、これまでに分析例が少ないものを選んで実施した。また、す穴のある仕上がりの悪いものなども、同一銭銘の制銭との比較のために組成分析を実施した。

表3 錢貨の蛍光X線分析値 (Wt%)

No.	9-34 南唐開元		14-78 島錢淳化		15-5 至大通寶		15-33 政和通寶*		10-42 政和通寶		16-82 文字無錢		10-3 淳化元寶	
Sn	16.97	15.68	6.26	5.86	14.19	14.87	8.10	6.67	10.50	9.90	16.85	14.85	16.44	19.07
Fe	0.48	0.45	0.16	0.20	0.20	0.16	0.35	0.13	1.51	1.54	0.22	0.27	0.22	0.23
Cu	58.94	62.82	76.94	79.71	70.33	71.34	64.33	76.34	74.74	73.21	67.03	68.94	68.33	62.44
Zn	0.27	0.26	0.31	0.29	0.39	0.37	0.23	0.22	0.36	0.38	0.29	0.28	0.16	0.20
As	0.00	0.14	0.16	0.00	0.00	0.00	0.18	0.00	0.38	0.64	0.00	0.00	0.00	0.00
Pb	23.35	20.65	16.16	13.95	14.89	13.27	26.81	16.63	12.51	14.34	15.61	15.67	14.86	18.06

No.	16-26 正隆元寶		11-8 聖宋元寶*		11-77 聖宋元寶		12-15 皇宋通寶*		13-90 皇宋通寶		13-92 開元通寶*		15-8 開元通寶	
Sn	6.24	5.71	14.40	14.97	11.49	11.52	9.42	9.96	12.30	14.12	9.92	10.71	13.48	13.39
Fe	0.37	0.44	0.24	0.15	0.14	0.20	0.56	0.56	0.15	0.14	0.22	0.30	0.47	0.21
Cu	89.40	89.22	68.52	69.23	69.14	68.39	78.51	78.85	76.16	68.44	73.70	73.26	59.53	62.34
Zn	0.63	0.66	0.19	0.31	0.29	0.28	0.22	0.31	0.31	0.27	0.20	0.20	0.17	0.30
As	0.00	0.00	0.00	0.00	0.07	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.04
Pb	3.36	3.97	16.65	15.34	18.86	19.59	11.29	10.32	11.07	17.03	15.97	15.54	26.35	23.72

No.	12-41 元豐通寶*		17-92 元豐通寶		9-77 紹興元寶		13-21 淳熙元寶		13-50 紹熙元寶		13-33 慶元通寶		11-80 嘉泰通寶	
Sn	10.22	12.10	10.87	12.20	12.38	11.00	4.12	6.60	8.17	5.32	4.26	4.55	3.46	3.49
Fe	0.22	0.12	0.20	0.11	0.38	0.35	1.54	1.43	1.79	1.66	1.64	1.33	1.27	1.35
Cu	76.93	78.77	72.90	69.06	74.97	70.24	64.95	68.05	67.90	68.50	66.79	65.81	65.84	67.70
Zn	0.23	0.31	0.21	0.29	0.19	0.20	0.15	0.24	0.15	0.17	0.21	0.32	0.27	0.22
As	0.00	0.07	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00
Pb	12.40	8.64	15.82	18.34	12.08	18.20	29.23	23.68	21.99	24.35	27.10	27.96	29.15	27.23

No.	13-14 嘉定通寶		12-12 嘉熙通寶		13-54 淳祐元寶		10-40 景定元寶		9-35 咸淳元寶	
Sn	0.84	1.00	2.68	3.03	5.98	3.51	5.40	6.82	3.03	4.27
Fe	2.07	1.85	1.26	1.37	1.73	0.93	1.78	1.40	1.40	1.61
Cu	62.27	64.50	63.54	68.04	75.22	77.09	66.25	64.80	61.05	54.27
Zn	0.24	0.25	0.31	0.26	0.27	0.23	0.20	0.27	0.16	0.18
As	0.00	0.00	0.00	0.00	0.15	0.00	0.00	0.05	0.00	0.00
Pb	34.58	32.39	32.21	27.30	16.15	18.23	26.36	26.65	34.36	39.66

*は模鑄錢の可能性のあるもの、ス穴があるなど状態の悪い錢貨

結果、島錢の淳化元寶はやや錫が少ないものの、際立って特徴的な金属組成を示すものは存在しなかった。通常、制錢の混合比率は銅：錫：鉛＝7：1：2程度であると認識されている。ただ、南宋錢はもっとも調達しにくい金属である錫の割合が少なくなっていることが分かっている。今回の分析結果からもこのことは言える。金の正隆元寶は錫の割合が低く、銅の割合が高い。元の至大通寶は7：1.5：1.5と、鉛と錫の割合が同程度であった。また、日本の錢貨には砒素を含む場合もあるが、分析した資料にはほとんど砒素が含まれていなかった。鉄も同様である。亜鉛は、明末から使用されているので、含まれていないのは当然である。模鑄とも考えられる錢貨と制錢との比較では、ほとんどデータに差がないので、模鑄錢ではないか、制錢を鑄潰して模鑄錢を作ったのであろう。

最後に、本資料に対する一連の処置が世界における貨幣考古学の中で如何なる位置づけにあるのかについて、英国での一括出土錢 (hoard) 調査と比較して述べる。英国での一括出土錢研究も長い歴史をもっており、多くの資料がこれまでも Numismatics (古錢学) や経済史研究に活用されてきた。最近出土した資料として、2007年にイングランドのバースの Beau Street で、コッツウォルド協

会の調査団によるホテル建設前の調査で発掘された一括出土銭が存在する。これは現地 (=遺跡内)での内容確認調査をおこなわず、遺物を適切に処置し、遺構からそのままの状態で切り離し、クレーンで持ち上げ、まず大英博物館に搬入され。そして、予備的調査が保存部及び科学調査部金属課のスタッフによっておこなわれた後、サウサンプトン大学に搬入された。ここでは、形状を記録するためにまず3Dスキャンがおこなわれた。さらに、X線撮影や可能な限りの理化学的研究を交え、内部構造を確認しながら詳細な調査がなされ、報告がなされた。結果、このhoardは、大きく3グループに分けられる8つの皮製バッグに入れられており、17,500枚以上の3世紀ローマ時代の銀や銅のコインを含んでいた。大英博物館で刊行された書籍から、今回われわれが中津居館跡の一括出土銭に対しておこなった処理とほぼ同様であることが分かる。洋の東西を問わず、遺物を遺跡から切り離し、博物館等の施設に搬入し、3D撮影やCT撮影など、可能な限りの理化学的手法を交えながら調査を実施するというのが、現時点での最高レベルの調査であると考えられる。ただ銭種の判読をすれば良いという時代は終わったのであり、一括出土銭研究はこのレベルまで来ていることを指摘しておきたい。

注

- 1 初鑄年は『中國古錢譜』(文物出版社1989)によった。
- 2 大英博物館のホームページからこのカタログはPDFファイルで見ることができる。(141頁、資料番号177)
- 3 大里は家屋の新築工事に伴う基礎掘削工事での発見であるが、ほぼ完全に採取されている。
- 4 皇宋通寶はピタリと重なるが、元豊通寶は若干のずれがあることについては、前述の順位逆転問題と関連する可能性があるため、今後の課題としたい。
- 5 胞衣壺などの内容物が外見で観察できず、銭貨が納められているか否か、その存在を確認する際に使用されているケースはある。
- 6 本来のメタルが露出している箇所2点にX線を照射して、測定した。

参考文献

- 赤岩操・大川勝宏・杉谷政樹1996「齋宮跡の埋納銭について」『齋宮歴史博物館紀要』三
- 小宮山隆1996「小和田館跡出土銭」『出土銭貨』第5号
- 桜井英治1996『日本中世の経済構造』岩波書店
- 櫻木晋一2009『貨幣考古学序説』慶應義塾大学出版会
- 昭和女子大学国際文化研究所2008『ベトナム北部の一括出土銭の調査研究』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.12
- 鈴木公雄1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 竹尾進1988「埋納銭の検討」『平安京左京八条三坊七町一京都市下京区東塩小路町一』(財)京都文化財団
- 太宰府市教育委員会1994『遺跡だより 第28号』
- 徳島県海部郡海南町教育委員会1994『阿波海南 大里出土銭—中世期大量埋蔵銭の調査報告書—』
- 永井久美男編1994『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』兵庫県埋蔵銭調査会
- 永井久美男編1996『中世の出土銭 補遺 I』兵庫県埋蔵銭調査会
- 永井久美男2002『新版中世出土銭の分類図版』高志書院
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編1994『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅱ—北部地域南半分の調査—』
- 深谷市教育委員会2000『根岸遺跡(第3次・第4次)—北通り線建設工事に伴う発掘調査Ⅱ—』
- 松本市教育委員会1993『松本市小原遺跡Ⅱ—緊急発掘調査報告書—』
- 山口県教育委員会1980『下右田遺跡 第4次調査概報・総括』
- 山本源太郎1987「山口市興隆寺出土の渡来古銭について」『山口県立山口博物館研究報告』第13号
- 渡政和1996「文献史料における「緡銭」の表現について」『出土銭貨』第5号
- Eleanor Ghey, 2014, The Beau Street Hoard, The British Museum Press
- Shinichi Sakuraki, Helen Wang and Peter Kornicki, 2010, Catalogue of the Japanese Coin Collection (pre-Meiji) at the British Museum, The British Museum Press

弘中氏について

宮田伊津美

はじめに

弘治元年（1555）の巖島の戦いで敗れた陶晴賢に味方して滅びた岩国地方の領主弘中氏がどこから来たのか、その一族は大内氏の家臣の中でどの様な広がりを見せたのかについて考察した。

一. 岩国地方はいつ大内氏の所領となったか

大内介知行所領

一所 矢田令 一所 宇野令 一所 佐波令 一所 国府浜
一所 小津馬嶋 一所 下右田 一所 富田保一分地頭
一所 大内村 一所 宮野 一所 本庄 一所 由宇郷
一所 通津郷 一所 横山 一所 日積村 一所 大海
一所 安主所職 一所 惣追捕使職

以上周防国

一所 参河国高須郷

一所 伊予国味酸郷法師名

以上略元了假令右状ニハ自余委細之旨行進候旨載之坎（「東大寺文書」）

御蘆生翁甫氏は『大内氏史研究』の中で、この文書について「大内介の知行領所に惣追捕使職とあるのは、必ずや、源平戦争の際、弘盛が一時この職掌を持って職田を給せられていたのであろう。（中略）この領所文書が東大寺の所蔵であるから、大内介に惣追捕使職田なるものが残されていたという事実から見て、文治二年周防国が東大寺造営料国として寄付された直後のものと看做さざるを得ないのである」としている¹。

大内氏系図の弘盛の条に「元暦年中、平家追討の時為功賞賜長門国」とあることから、弘盛が源平戦争後、何らかの恩賞を得ていることを思わせる²。この知行所領の中に「富田保一分地頭」があり、この知行所領が作成された時期には大内氏が鎌倉の御家人になっていたことを示す。

建久3年（1192）大内介弘盛が東大寺柱の運搬を違乱して幕府へ訴えられた時には、まだ御家人ではなかった。建長2年（1250）に内裏造営がなされた時、大内介は御家人となっていて築地三本を担当している。³ 大内氏が何か所の地の地頭に補任されたかはわからないが、富田保一分地頭だけということは、大内氏が御家人になってから間もない頃のものであることを推測させる。

これらの所領は周防国に土着して以来、追々に集積してきたもので、『大内氏史研究』にも「以上の内、矢田令・大内村・宇野令・宮野の四所は、大内氏の始祖琳聖太子が賜わったと伝えられるところのいわゆる大内県の地で、大内氏の本拠地であるから、最も古い領所であるに相違ない。その他が後世次々に加増されたものと見え」とある。

これらの中で（岩国）本庄・由宇郷・通津郷・横山は源平戦争の時の行賞で、大内弘盛が平家方の岩国氏の旧領の内から与えられたものと考えられる。大内氏系図の弘盛条に見える長門国は誤表記で、実はこの周防国の岩国氏の旧領のことかと思われる。

本庄は岩国本庄で、御庄・多田を中心とする山陽道沿線の地域であり、横山は横山を含む錦川河口

部・海岸部であろう。今津はまだ無く、室木は大内氏の所領となった時点ではまだ村として成立していない僻地であったと思われる。

なお、今津の地名が出来たのは、吉川広家が岩国へ入った頃、慶長五年頃のことと思われる。それまでは民家もない、地名も無い荒地の堆積地であったといえよう。錦見の沖に船手組の屋敷と港を置いた時、その地を今（現在）の津（港）という意味で今津と称し、その対岸に船入を設けて港の一部としたので、その地を対岸の港という意味で向今津と称するようになったと思われる。この時、中洲も中津と改称したものとといえよう。

「永禄十三年九月十四日宮司中尾寺慶恕」の年紀銘のある『八幡宮御宝前縁記』には「玖珂郡山代庄岩国の郷白崎八幡宮」とか、「玖珂郡山代庄岩国錦見郷白崎八幡宮」とあり、永禄年中にはまだ今津という地名はなく、その他は錦見郷あるいは岩国郷に含まれていたことを示している。広家が城下町を造営する時、中洲の対岸に水軍の拠点をついた時、今津という地名を作ったものとといえよう。

延慶2年（1309）に大内弘幸は岩国の横山に不動山永興寺を、山口の古熊に大雄山永興寺を創建した。⁴ これは大内氏の本拠地である山口と同じくらい周防東部の岩国地方が重視されるようになっていたことを物語るものであるといえよう。即ち、この頃には、大内氏が周防の東西に拠点を置き、国内に勢力を拡大していく体制を確立したことを物語るものであろう。大規模な寺院は信仰の場であると共に、軍事拠点ともなり、領国拡大・防御に必要な重要施設でもあった。

岩国地方が大内氏の領国拡大体制の中で、一方の拠点とされるまでにはかなりの時間を要した筈であり、その点からも岩国地方が大内氏の所領となったのは鎌倉時代の早い時期と思われ、大内氏が御家人になるよりも前である。

二. 弘中氏の出自

弘中氏の始祖とされる「清繩左衛門良兼」については『玖珂郡志』の頭注に「清繩左エ門良兼ハ、父五郎良俊、義経の父義朝の家臣也。義朝被誅ニ付、良俊周防室木へ配流。右の筋目故、左エ門良兼、義経公を我屋敷上で暫らく休め奉ると也」とあることが知られている⁵。

この記述は享和2年（1802）頃『玖珂郡志』が著述された後のある時期に、九郎判官義経



写真 玖珂郡志の頭注部分（□で囲った部分）

を祭る室木村の「九郎明神」の記述を補足するものとして追加されたものであり、『玖珂郡志』の著者である広瀬二兵衛（喜運1761～1833）が、何らかの情報を得て追記したものであることがわかる。

広瀬二兵衛について、『御窺申上控』（文化八年七月八日決裁）は「常々系図・古実・御家譜等相心懸ヶ居候処、段々害ニ相成候趣も相聞、彼是御役をも可被召放」とされたことを記している。「害ニ相成候趣」の具体的内容は不明であるが、系図・古実などに関することであることは推測できよう。この頭注の清縄左衛門良兼に関する記述も広瀬二兵衛がでっち上げたものと言ってよいであろう。

前述のように、山陽道から錦川河口部・海岸部に至る周防東部の岩国地方が鎌倉時代の早い時期に大内氏の所領となっており、大内氏の勢力外の者がこれらの地の支配者として存在することは困難であり、大内氏の代官として派遣されて管理したのが大内氏の被官の一人、清縄氏であったと言うべきであろう。

三. 清縄氏と弘中氏

清縄氏の名前は白崎八幡宮の神殿棟札（文亀3年）に見えるのみである。建長2年（1250）に琵琶頸に小社を創建したのが清縄左衛門尉で、諱は良兼かどうかは不明。それから98年後の貞和4年（1348）に社領を寄進し、社役を定めて、壮麗な社殿を建てて現在地に遷宮したのが弘中堂内源兼胤である。

その清縄氏の所領は周防西部の大内氏の所領内にあったものと思われるが、その痕跡を、現在のその地方の地名から見つけることは出来ないし、大内氏関係の諸史料の中に清縄の苗字を見つかることも出来ない。

後述するように神殿棟札の銘文より清縄氏が、後に弘中氏と苗字を改めたことがわかるが、建長2年（1250）以後、貞和4年（1348）以前の何時に苗字を改めたかは不明である。大内氏家中に弘中を苗字とする武士は多数存在するが、清縄氏が見当たらないということは、清縄氏が幾つもの家に分家する前に弘中に苗字を改めたことを思わせる。

清縄氏の分家が岩国へ派遣された後、周防西部へ留まっていた本家の清縄氏が何らかの理由で弘中と苗字を改めたことにより、岩国の清縄氏も弘中と苗字を改めたといえよう。

四. 白崎八幡宮と弘中氏

白崎八幡宮の神殿棟札（文亀3年）によると、建長2年（1250）正月20日、清縄左衛門尉によって、琵琶首に八幡宮が創建された。遠石八幡が白鷺と化して垂迹したものを左衛門尉の息男が射ようとして暴死し、八幡大菩薩が息男を蘇生させ「我は八幡大菩薩であり、当境を旺化し衆生を済度せん」と託宣したことにより、小社を建立し、薄奠祭祀したというものであるが、これは大内氏の代官として岩国地方へ赴任してきた清縄氏は横山（錦川河口部・海岸部）に居を構え、仕事をしていたが、その何代目かの左衛門尉がその地に勢力を根付かせるようになったことを物語るものであろう。この縁起により当初は白鷺八幡宮と呼ばれたものと思われる。

その後、清縄氏から弘中氏に改めた何代目かの弘中兼胤が貞和4年（1348）9月17日に錦川河口部の現在地に遷宮し、社領を寄進し、社役等を定めた。巍々たる宮殿、堂々・奇麗なる鳥居は「ア」字を表わし、空門・緋玉垣は「マン」字形である。この門・玉垣を出入する者は必ず始めのないよう

な罪障も消滅させるというものであったが、この頃には弘中氏は大内氏の家臣の中でもある程度の存在感を持ち、岩国地方の有力者としての地位を得ていたことを示すものであろう。神社名も白鷺から白崎に替わり、白崎八幡宮となり、その社地を白崎山と称するようになったと考えられる。

前述のように、この遷宮は永興寺の前衛施設として、河口の中洲に、恐らく大内氏の手で居館を造営し、弘中氏が在住して、この地の押さえとすることと一体の施策として行われたもののように思われる。錦川の水運の監視も追加された可能性があるが、錦川の水路と上関方面との陸路をつなぐ連結点の役目を担うようになったといえよう。即ち、中津の居館を経て、門前の喜楽寺峠を越えて平田へ抜け、上関方面への街道が確立した。

なお、御神殿棟札銘文に琵琶首に社殿があった時は清繩氏の居館は室木にあったとされているが、室木は古代より麻里布の浦として知られてはいたが、平地の少ない僻地ではあった。しかし、小瀬川と錦川の河口部の間にあるこの地方の要地と目されていた可能性がある。

永享4年(1432)2月に大内持盛が大内持世に闘いを挑み、大内氏の継嗣問題に発展し、大内家中が持盛派と持世派に分裂して戦った。翌年4月に豊前国篠崎で持盛が敗死して終息した。この動乱で弘中兼勝は持盛方に参加し、乱後、すべての所領を没収された。嘉吉元年(1441)7月28日に持世が死去し、従弟の教弘が当主となってから、時期は不明であるが、持世に没収された所領の内、白崎八幡宮の神領が弘中兼勝へ返され、安堵された。教弘は享徳2年(1453)に朝鮮国王から通信符の印を贈られて朝鮮との交易を始め、遣明船の巡遣で交易を盛んにする一方、戦争に奔走することが多かったため、弘中兼勝の軍勢を必要としたためであろう。しかし、没収された旧領の回復はなかなか進まなかったようである。

応仁元年(1467)5月10日に大内政弘が山名持豊に依りて上洛した時、弘中弘信も供奉し、長く滞陣した。政弘・弘信が無事に帰国することを祈念して、文明4年(1472)4月2日に瑞光寺喜昱藏主を修造司として白崎八幡宮の屋根の葺きかえをした。

明応5年(1496)6月27日の夜羅災し、神社は焼尽した。同年8月に弘信は再建にとりかかったところ、同年1月に筑前では小弐政資が進攻して諸城を下して大宰府へ入っていた。大内義興は同年冬に出陣したので、弘信もこれに供奉して出陣した。よって、工事は遅延し、同7年3月18日時点では、わずかに宝殿が造営できただけであった。

文龜3年(1503)4月28日に本殿の上棟、遷宮があり、舞殿・籠所などが形の如く茅葺きの質素な造作で旧所に遷宮したが、資力不足が響いていて、思い通りの再建は出来なかったのであろう。以上が神殿の棟札からわかる事であるが、棟札の末尾にある銘文を読み下すと、おおよそ次の通りになる。

「白崎大社は中洲を開基とす。八幡三所が白鷺に化し、(清繩左衛門尉の)児・六道の群類に青龍の姿を仰がしむ。北闕は修好し、南風(南朝方の気持)を^{ゆるやか}綏にする。もと室木に在り、子葉孫枝(である弘中兼胤が)今(貞和4年)、当所(白崎山)へ遷す。丹鶴緑亀(が現れ)、外に菩薩を現わし、内に阿弥陀を秘め、(中国古代の)晋・楚の富を慕い、夏殷の棗を^{みこ}供える。神子は神楽を舞い、^{つちぶえ}塙を吹き、^{ちのふえ}簾を吹く。(兼胤は)清和源氏の玄胄(遠い子孫)であり、弘中(氏の中)の白眉。(この大社は)百年の寿命、万行の慈悲(をもたらし)、^{こいねがわくぼ}庶幾宗廟の僧祇において久しからんことを。家国を鎮護して三会の時に至らん。」

この銘文から幾つかの事を知ることが出来よう。貞和4年(1348)に大社を白崎山へ遷宮した開基

は中洲であったということは、弘中兼胤は中津に居館を構えていたと言っているのであろう。貞和4年に遷宮する前、室木に在住し、八幡宮を創建した清縄左衛門尉の子葉孫枝（子孫）が弘中兼胤であり、彼が遷宮を行ったとあり、清縄氏が苗字を改めて、弘中氏となったことを示しているといえよう。

「兎・六道の群類青龍を仰ぎ、北闕を姿り、南風と修好し綏と為す」を意約すると、「兎（清縄氏）・群類（その他すべての人）が青龍（東方＝京都）に注目している今、白崎大社を造営することは、北朝方の関門をここに建てたようなもので、その威容によって南朝方と親しく交流することが出来るようになり、天下が綏らかになった。」と解釈することができ、実際には戦乱の世ではあったものの、天下国家を論ずることが出来るほどに、弘中氏の力が大内家中内で強くなっていたことを示しているものといえよう。

遷宮に先立って貞和3年（1347）10月に白崎八幡に兼胤が奉納した太刀は長門の刀鍛冶守吉の作であった。守吉は左手で銘を彫ったので左安吉と言った。

貞治5年（1366）10月15日に比丘尼慧通によって白崎八幡宮に寄進された洪鐘には「右意趣旨者故慧増禪門有造鐘之願、不成而死。後、室慧通継彼志、願鑄此洪鐘以死夫追善而已」とある⁶。兼胤は鐘楼を建て、洪鐘を掛けたいと思っていたが資力不足で実現できないまま死去してしまったようである。慧増は兼胤の法号であろう。兼胤の妻慧通が夫の遺志を継いで、やっと貞治5年に実現させたものである。

白崎八幡宮楼門棟札案文（『吉川家中併寺社文書』）は弘治元年9月1日の巖島の戦いで陶方が敗北し、毛利元就の軍勢が岩国へ進攻した時紛失したが、永禄5年頃、八幡宮司中尾坊慶恕の許へ戻った。これによると、明応7年（1498）3月18日に御宝殿が完成し、文亀3年（1503）4月28日に本殿の上棟遷宮があった。明応8年（1499）に楼門の再建を企画したところ、明応9年12月晦日に京都より前將軍足利義植が柳井津へ下向し、翌年正月2日に山口へ移り乗福寺に滞在した。これに対する臨時雑税が課されたため、工事は遷延した。永正4年（1507）11月25日に大内義興が義植を奉じて上洛した。これに弘信の息弘中興輔が供奉して、工事は更に延びたが、義興ともども興輔の無事を祈祷するため、永正7年（1510）2月4日に楼門の作事を開始し、翌年4月29日に完成させた。門の左右に客人（人物像）を彫って、6月2日に安置した。

五. 弘中氏の一族

ア. 大内家中における弘中氏

①興隆寺供養勸進帳によると、大内盛見以下43人が30,200疋以上施入しているが、盛見の10,000疋は別格とし、杉氏6,900疋（6家）、陶氏3,300疋（2家）、弘中氏3,000疋（12家）、鷲頭道祖千代丸2,000疋と続き、弘中氏の人数の多さが際立っている。弘中氏の中でも入道円政が1,000疋と多額で、弘中氏の中でも惣領の家筋に当たるように思われる。（表1）

②同時代と思われる興隆寺一切経勸進帳によると、大内盛見が10,000疋、その外、目代殿惣瑞・法泉寺道朴・馬場殿満世・阿幸丸一玄が合わせて2,300疋施入し、これに80名が奉加して総計39,000疋とした。特に多額の奉加をしたのは杉氏一族9名で5,500疋、金額で続くのは陶氏3,000疋（2家）、鷲頭道祖千代丸2,000疋、豊田氏2,000疋（2家）、弘中氏1,500疋（10家）、仁保氏1,400疋（3家）、安富氏1,200疋（2家）、内藤盛貞1,000疋である。弘中氏は家数の多さが特に目につき、大内家中では中堅ど

ころの家臣として繁栄していたことを思わせる。(『興隆寺文書』)

①②を合わせて弘中氏は16家以上に分かれていたといえるだろう。更に、応永11年(1404)2月18日の「国清寺御興行・同寺領等御沙汰条々、守御事書之旨可致奔走事」の請書(常栄寺文書)に連署した弘中左衛門尉重兼・左衛門尉兼綱・沙弥信政・沙弥喜快・沙弥円政の5家は弘中氏の中でも近い同族であることがわかる。しかも国清寺とのかかわりが深いことから考えて、山口近在に拠点を持っていると思われ、清縄氏の嫡流に連なる家筋と思われる。又、「大内殿代々家老寺領寄進之奉書」(興隆寺文書)の中の一通、応永27年(1420)

7月12日の物に「防州吉敷郡永野郷内伍拾石地弘中民部丞兼実事、為氷上山興隆寺領御寄附訖」とあることより、弘中民部丞兼実も弘中円政に近い家であり、しかも大内氏の重臣と目されていたといえよう。弘中円政も吉敷郡小鯖庄内土貢伍拾石地を氷上山御領地に応永9年(1402)6月23日に寄進しており(同前)、同様に重臣であったと思われる。岩国へ代官として送り込まれたのは、この清縄氏の分家と考えられる。本家の清縄氏が弘中と改めた時、岩国の清縄氏も弘中と苗字を改めたといえよう。

又、弘中氏が杉氏と共に多くの家に分立していることは、古くより大内氏の被官として活動してきたことを反映しているのであろう。

イ.『正任記』より見える弘中氏

文明10年(1478)10月8日の条に見える、10月6日付大内政弘が発給した下文によると、弘中新右衛門尉弘信以下、弘中六郎謙兼、弘中源十郎兼国、弘中弥六左衛門尉盛時、弘中才千代、益成八郎兼恒は一つながりのものとして扱われ、その末尾に「為右御礼、弘信御太刀・二百疋、其余五人御太刀・百疋宛進上候。弘節披露候」とあり、中でも弘信が6人の中の中心人物として現わされている。このことから、この6人は同族と見なされ、その中心人物は弘信であると目されていたといえよう。護兼、兼国、盛時、才千代、兼恒の家はそう遠くない前に弘信の嫡流から分家したものであり、更に護兼は父三郎次郎の、兼恒は父左衛門大夫武兼の遺跡を相続したものである。そして、護兼以下5人の家は弘信の家系の所領を分与してもらった形で分家したものであろう。この時、弘信に給された

表1 興隆寺供養勸進帳・一切経勸進帳弘中氏奉加者名及び奉加額一覧

	人 名	①供養勸進帳	②一切経勸進帳
1	弘中民部丞兼実	100疋	300疋
2	弘中勘解由左衛門尉兼連	500疋	300疋
3	弘中七郎右衛門尉兼綱	200疋	100疋
4	弘中縫殿入道喜快	300疋	200疋
5	弘中源左衛門入道信政	200疋	100疋
6	弘中左馬允重綱	200疋	100疋
7	弘中入道円政	1,000疋	
8	弘中新藏人丞兼助	100疋	
9	弘中左近将監重時	100疋	
10	弘中民部太郎弘綱	100疋	
11	弘中与一宣兼	100疋	
12	弘中又四郎盛兼	100疋	
13	弘中藏人兼助		100疋
14	弘中雅楽助重兼		100疋
15	弘中四郎右衛門入道道権		100疋
16	弘中道祖王丸		100疋
	合計	12家 3,000疋	10家 1,500疋

長門国厚東郡吉見郷内矢羽木拾五石地^{嘉馬三郎}・筑前国怡土郡警固内拾貳町地^{嘉賀華人佐}は新しく給されたものようであり、弘信の所領は白崎八幡宮の神領の外に、岩国本庄や熊毛郡・玖珂郡などにも及んでいたようだ。又、筑前にもかなり早くより所領を宛行われていたと思われ、天文24年9月に弘中隆兼が筑前国早良の内、姪浜三十町地^{探提先若}の代官職に補されているのもその流れの中でなされたものと思われる。

永正14年(1517)2月13日、大内義興より明年の氷上山興隆寺修二月会大頭役を弘中右衛門大夫尉興勝が命ぜられた。大内氏の時代の残存している「興隆寺修二月会頭役差文」13通の中で大頭役を命ぜられているのは、興勝の外に、次の者がいる。

杉美濃守重親(文亀4) 内藤彦太郎興盛(永正2) 来原中務丞興盛(永正9) 城井左馬助弘堯(永正10) 麻生宮内少輔興家(永正11) 飯田大炊助興秀(永正12) 杉修理亮興長(永正15) 杉兵庫助興重(永正16) 神代紀伊守貞総(永正17) 問田掃部頭興之(永正18) 杉勘解由左衛門尉興道(大永4) 山田七郎兵衛尉興成(大永5)

これにより、ここに名を連ねる者と弘中興勝は同程度であり、大頭役を担える財力を備えた大内氏の有力家臣であったことがわかる。

『正任記』によると文明10年(1478)10月13日発給筑前国怡土郡波呂村17町3段は弘中美作太郎弘清・弘中五郎正清・弘中十郎伊兼兄弟に分給された。同年10月18日発給筑前国糟屋郡上津屋三町地・穂波郡吉隈村内2町地が弘中図書允へ給された。これらの弘中氏も筑前国内に拠点を持っていた可能性がある。

弘中武長は「益田家文書」明応2年(1493)6月19日の契約状に「童時分石州御領依数年逗留、於于今諸篇可致奉公心中」とあるように、石見国の益田宗兼とも関係を持っていた。筑前国糟屋郡に所領を持ち、山城の守護代を務めたり、防州の警固船の大將を務めるなど、多様な顔を持ち、弘中一族の中でも特異な家であったようだ。弘中正長はその子供と思われる。

終わりに

管見による史料から考察してみても、累代の史料の紛失による制約は大きく、不明な部分が多い。中津居館跡が何時築かれたか、弘中氏の最初の居館はどこにあったか、弘中氏の居城亀尾城は誰が何時築いたか等々、発掘作業の進展の成果を期待する部分も大きい。私の一方的な見方もあり、同じ史料でも読み直せば別の解釈の成り立つ部分も多いと思う。幾つもの史資料を重ね合わせて、新しい見解が次々と出されて、弘中氏の全体像が少しでも明かされていくことを今後期待したい。

-
- 1 御園生翁甫著『大内氏研究』1959年発行 148頁
 - 2 近藤清石著『大内氏実録』339頁 附録之一、大内系図
 - 3 『山口県史』通史編中世、第一編第二節武士の群像
 - 4 荒巻大拙著『山口十境詩考』。但し、『山口市史』「史料編」大内文化附図の山口古図には永興寺ではなく永福寺とある。
 - 5 『玖珂郡志』室木村の項。115頁。
 - 6 『岩国金石文集』1986年 岩国徴古館長 西岡省三 発行

平地居館としてみた中津居館跡

古賀信幸

1 はじめに

中津居館跡は、錦川の河口に形成された岩国三角州の上部に位置する。2008年度～10年度にかけて、最初の遺構確認調査が実施され、その成果は岩国市として初めての埋蔵文化財調査報告にまとめられた¹。そして、2012年度～15年度にかけての調査成果を含む最新の情報、成果が本書にまとめられることとなった。

中津居館跡は、調査開始時には「加陽和泉守居館跡^{か やいずみのかみ}」という名称で呼ばれていた²。それは、旧周防国の東端に位置する岩国が、大内義隆が自刃する16世紀半ば以降において、毛利軍の防長侵攻の重要拠点となり、この地に川内警固衆の一人である加陽和泉守武頼の屋敷地が築かれ、戦国期を中心に利用されたとの認識によるものであった。

ところが遺構確認調査で出土した遺構や遺物を見ると、瑞光寺が存在した近世期や、戦国期のものも確認されるが、もっとも顕著な動きを示すのは、鎌倉末期から南北朝前半期（14世紀前半）であることが判明した。そうした考古学の調査成果とともに、和田秀作によって文献史料からの調査と検討が進められた結果、鎌倉後期から16世紀半ばにかけて、岩国一帯を押さえていた弘中（清縄）氏



図1 対象遺跡の位置

とのかかわりの中で、この遺跡をあらためて理解し直す必要のあることが、明らかとなった³。

一方、山口県下のいわゆる中世方形館について分析を行った増野晋次は、中津居館跡のみが14世紀前半代の成立と、県内他地域の方形館とは成立時期を異にしており、直接的な比較検討が難しいことを指摘している⁴。そこで、本稿では中国地方を射程とし、管見の範囲となるが、成立時期が近接する調査事例（図1）をとりあげて比較することで、中津居館跡の特質を考えてみることにした。

2 調査事例の検討

(1) 院庄館跡（岡山県津山市神戸字御館）

院庄館跡（東西約200メートル、南北約150メートル）は、鎌倉時代から室町時代にかけての美作国の守護所と推定されている遺跡である。遺跡は、津山市街を貫流する吉井川の支流である香々美川・久米川により形成された沖積平野に位置する。この付近は、山陰と山陽を結ぶ陸路の結節点であるとともに、吉井川を利用した水運の要衝でもある⁵。また、院庄館跡の南約600メートルには、旧出雲街道に沿って、戦国期に機能した城郭とされる院庄構城跡（東西約80メートル、南北約110メートル）

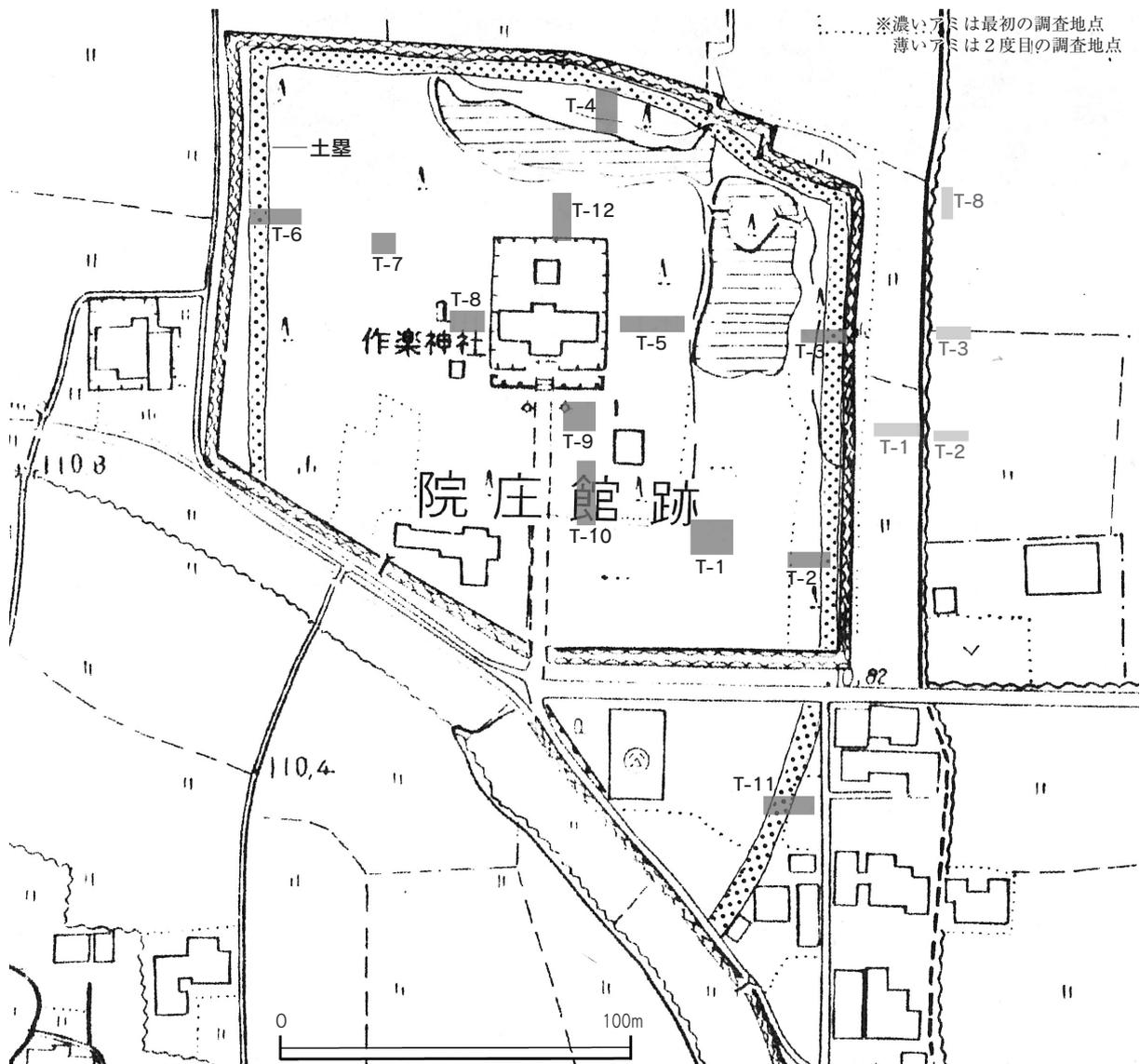


図2 院庄館跡調査区位置図（注7文献中の図を一部改変）

ル。堀は水堀。)や、安国寺跡が存在する。

院庄館跡は、津山市教育委員会が2度にわたる発掘調査を実施している(図2)。最初の調査は1973年~74年に実施された⁶。館跡の平面形は、東・西・北の三方を土塁で囲繞する一方で、南西部は吉井川の旧河道敷によって地形が削られた結果、不整形を呈する。館の区画は、基本的に周囲の条里型地割に沿って構築されたと考えられる。

現存する土塁の盛土は新旧2層に大別される。このうち旧層が館に伴う遺構と考えられるもので、4箇所の特レンチ(T-2、3、4、6)で規模(残存幅1.85~5.30メートル、残存高0.40~1.00メートル)を計測している。旧層土塁の構築時期は、館の成立よりやや遅れ、鎌倉時代以降に築かれたものであるという。この他に、井戸1基(T-1)、柱穴7個を検出している。遺物は、青磁、白磁、墨書磁器、備前焼、勝間田焼、土鍋等、館存続期に使用されていたものが出土している。なお土塁の周囲を囲繞する現存の堀は、明治2年創建の作楽神社の整備に伴うもので、土塁の周囲に堀が存在したか否かは不明である。

2度目の調査は1980年~81年にかけて、館の範囲確認を目的に実施された(T-1~8)。調査は「御館」「堀」など館関連地名の残っている水田を対象に実施され、東面土塁から約30メートル隔てた付近で、現水路と重複して土塁と併行に南北方向にのびる溝(幅約2.5メートル、深さ約0.6メートル)を検出(T-2、3、8)するとともに、柱穴6個(T-1、5、6)を館に関連する遺構として確認したが、館の中心はあくまでも土塁内部の範囲であるという⁷。

(2) 蔵小路西遺跡(島根県出雲市渡橋町)

蔵小路西遺跡を含む四絡遺跡群は、斐伊川・神戸川の三角州から構成される沖積平野である出雲平野の中央部にある。各遺跡は小規模な河流により分断された微高地の上に立地している。調査は1996年~97年にかけて実施されており、推定方一町の大溝で区画された屋敷跡が見つかった⁸(図3)。このうち東大溝は旧自然河流の一部を利用して掘削される。西大溝は、幅が3.2~4.6メートル、残存深が0.5~0.6メートルを測る。西大溝の内(東)側には、一定の無遺構部分が認められることから、土塁の存在が考えられている。本遺跡における中世遺構の年代は、12世紀後半から15世紀前半を中心とするが、西大溝が中世の溝や土坑と重複しており、西大溝の掘削がやや後出することは判明し

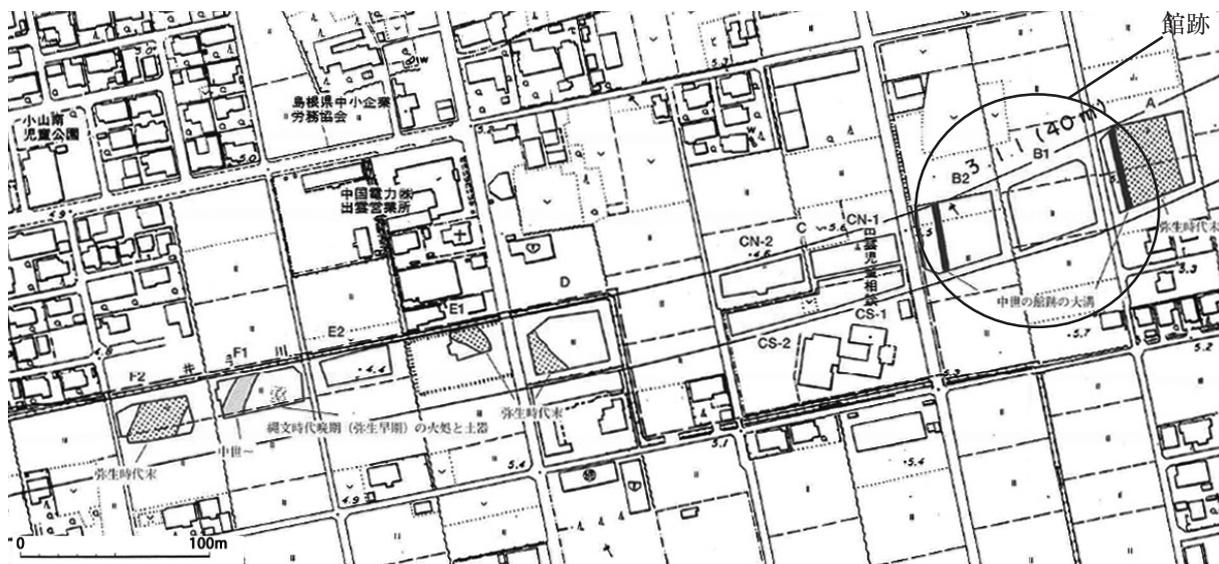


図3 蔵小路西遺跡調査区位置図(注8文献中の図を一部改変)

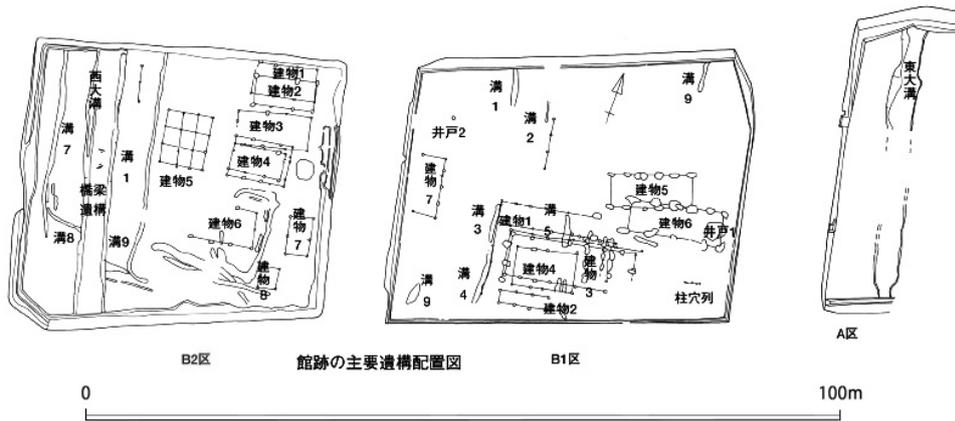


図4 蔵小路西遺跡の中世居館と主要遺構の時期区分（注8文献より）

時期	A 区	B 1区	B 2区
1 期			土坑 1・3
2 期		建物 5、井戸 1 土坑 1、3、8、22	建物 1 土坑 4、6
3 期		土坑 20	土坑 9、20
4 期	土坑 1	土坑 17、建物 6	建物 2

※各期の年代観

- 1 期 12世紀後半以降
- 2 期 13世紀前半以降
- 3 期 13世紀後半以降
- 4 期 15世紀後半以前

ているが、その時期については判然としない。西大溝の埋土中からは、土師器の他に常滑系陶器や青磁碗（上田D類）が出土しており、屋敷空間の区画施設としての機能を考慮して、大型建物が出現する13世紀前半以降に掘削され、15世紀後半以前に埋没したと考えられている（図4）。

居館の内部構造（図4）については、東西大溝の中央部（B1区）に中心的大型建物があり、それよりも西側（B2区）に倉庫（総柱掘立柱建物）や生産活動の場が広がり、反対の東寄りには顕著な遺構の無い空き地ないし広場としての利用が想定されている。

本遺跡で検出された屋敷跡を区画する溝は、周囲の地割り方向とほぼ一致する。東西は大溝による区画が明瞭であるが、調査範囲の関係で北と南については不明である。また、土塁の存在は想定の域を出るものではなく、築地塀等の可能性も考えておく必要がある。

なお、遺跡の性格については、在地領主であり斐伊川平野の開発拠点となった「中世朝山家惣領家」居館の可能性が考えられている。

(3) 三宅御土居跡（島根県益田市三宅町）

遺跡は、旧石見国（島根県西部地域）西北端の益田市中心部にある。市内を流れる益田川の河口から約5キロメートルほど上流の右岸段丘状の微高地に位置する。益田川の対岸約700メートルの位置には、益田氏の拠城・七尾城跡があり、この七尾城跡と益田川、多国川に囲まれたエリアに、戦国期の七尾城下町が形成されたという。

三宅御土居跡の規模は、周囲を巡っていたとされる堀跡を含めた面積では約24,000平米、堀を除いた面積は約15,000平米で、土塁を含んだ東西幅は約180メートルを測る。東西両端に、ほぼ平行して大規模な土塁が現存する一方で、南北に顕著な土塁は確認されていない。東西土塁ならびに御土居が存在する微高地周囲の状況を見ると、北側では幅16メートル以上を測るやや浅い堀跡が、東西土塁の外側では幅約9メートルの箱堀が確認されている。また、南側では地山の落ち込みや護岸遺構が確認され、益田川支流の流れが堀的な機能も兼ねた造りとなっていたことが判明しており、周囲の水利も

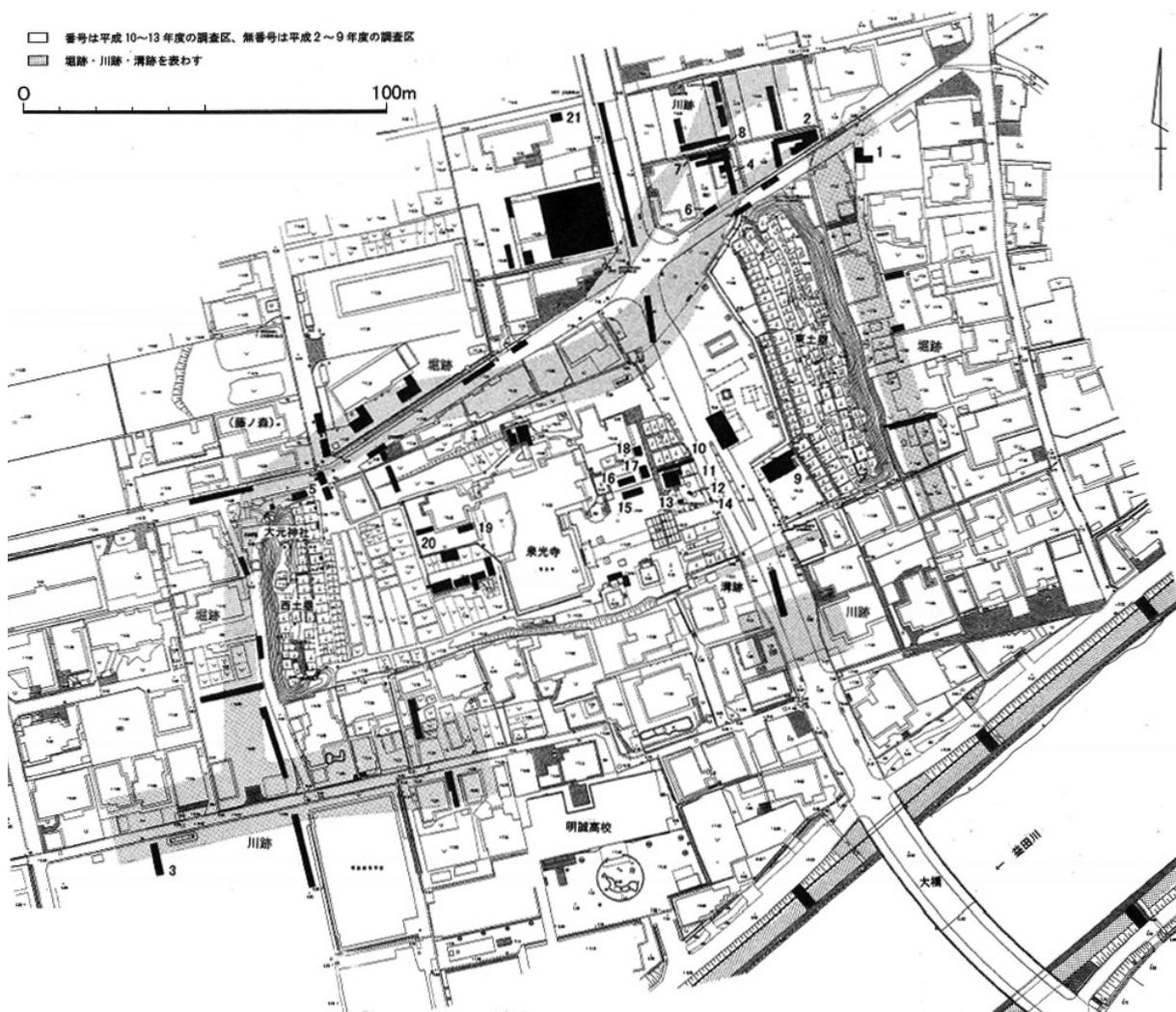


図5 三宅御土居跡調査区配置図（注10文献中の図を一部改変）

含めて河川（水の流れ）を巧みに利用していたと考えられる。

三宅御土居の成立に関する直接的な史料はないが、従来より南北朝期の応安年間（1368～74）に兼見によって築造され、天正11年（1583）に元祥が三宅御土居の大規模な改修を行ったと考えられてきた。

三宅御土居跡の遺構確認調査は1990年度よりはじまり、天正期の改修に伴うと考えられる大規模な盛土造成跡が確認される一方で、館跡の内外を問わず各所で出土する中国陶磁器や、御土居跡中心部の調査で検出される遺構・遺物の年代観から、この地が南北朝期以前の12～13世紀を中心に機能していたことが明らかとなってきた。^{9・10}

もちろん益田氏の拠点、三宅御土居以前の拠点とされる大谷土居跡をはじめ、七尾城、さらには菩提所の万福寺などもあって、ここが唯一の本拠であったわけではない。この様相について千田嘉博は「三宅御土居の場所には、益田氏が拠点を移す前から中核的な施設があったと考えられ、重要な場所であったと考えられる。その重要性は河川との関係を抜きにして考えることはできないであろう。」¹¹とし、益田氏の海洋領主的性格を評価する。また、井上寛司は「三宅御土居が当初から益田氏の居館として成立し機能した可能性は極めて低い」とした上で「平安末・鎌倉期の三宅御土居は益田荘の荘園政所として機能し（中略）南北朝期の益田兼見の時代を画期として、それまでの益田荘の荘園政所

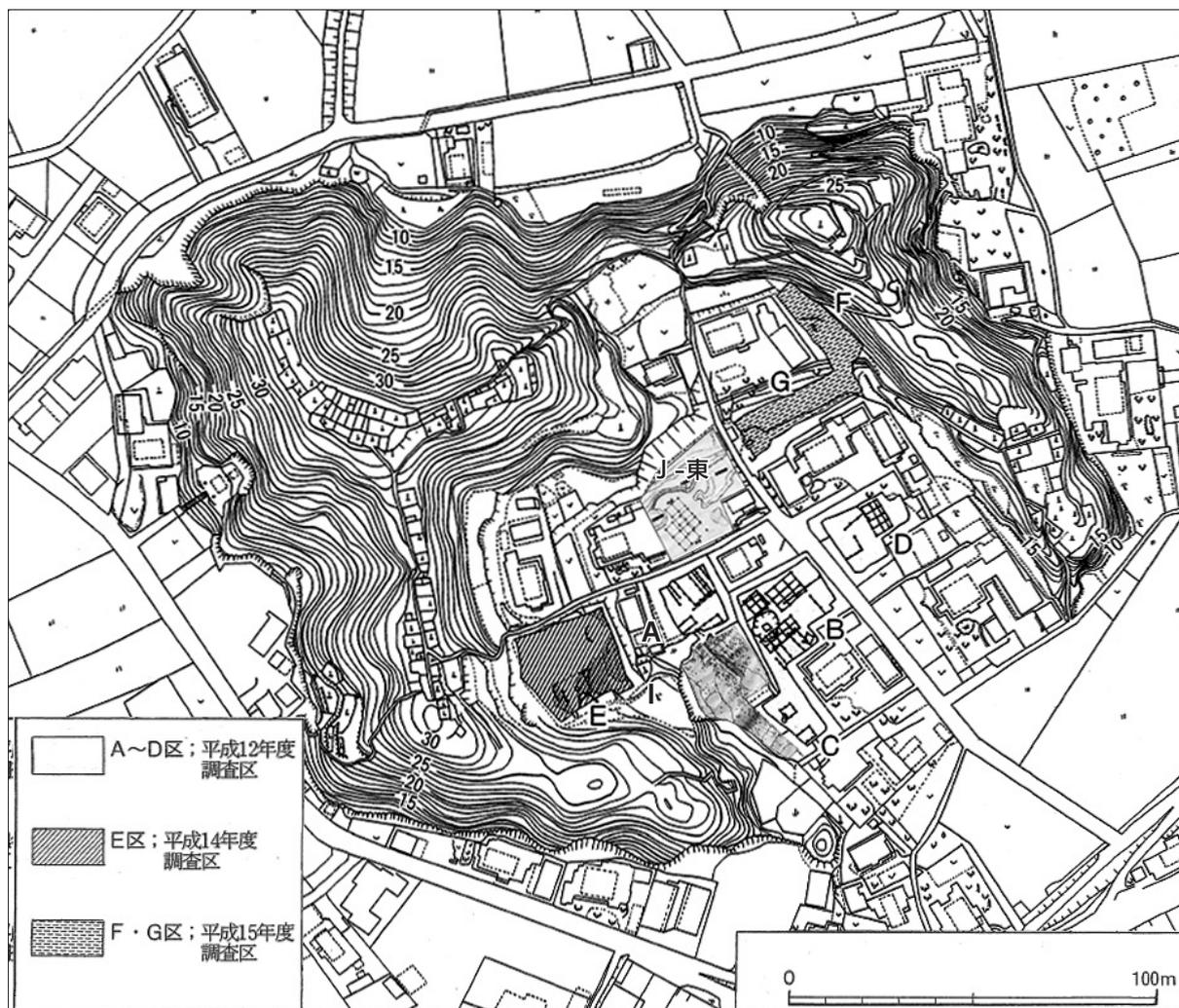


図5 三太刀遺跡調査区配置図（注10文献中の図に追記）

から、益田本郷政所と益田氏惣領居館（=政庁）の両者の機能を兼ね備えた施設へと大きく転換を遂げた」¹²と評価している。

（4）三太刀遺跡（広島県三原市本郷町本郷）

遺跡は、広島県中央部に位置し、旧安芸国東端の豊田郡を瀬戸内へと注ぐ沼田川左岸に広がる沖積平野にある独立丘陵（三太刀山）に存在する。当地は、平安時代末期に成立する沼田荘の範囲に含まれ、当初の開発領主・沼田氏が平氏とともに滅亡した後、地頭として小早川氏が西下し、支配を進めたとされる。

鎌倉時代中期の嘉禎元年（1235）、小早川茂平は三太刀遺跡南方の巨真山寺（のちの米山寺）境内に不断念仏堂を建立して小早川氏の菩提所に定めるとともに、沼田川沿いの氾濫原（塩入荒野）の開発に着手したという¹³。

三太刀遺跡の名称は「御館（みたち）」に通じるもので、14世紀代の南北朝期を中心とした開発領主・小早川氏の館跡と推定されている。遺跡は、東西約160メートル、南北約120メートルの平坦地を中心に広がり、沼田川方向に開いたコ字形の空間を中心とする。発掘調査で検出された中世の掘立柱建物は十数棟あり、A～D区を中心に検出されている。とりわけ2010年度に調査されたJ－東区では、蛇行しながら東西方向に流れる溝でつながった庭園の一部とみられる2つの池状遺構と隣接する

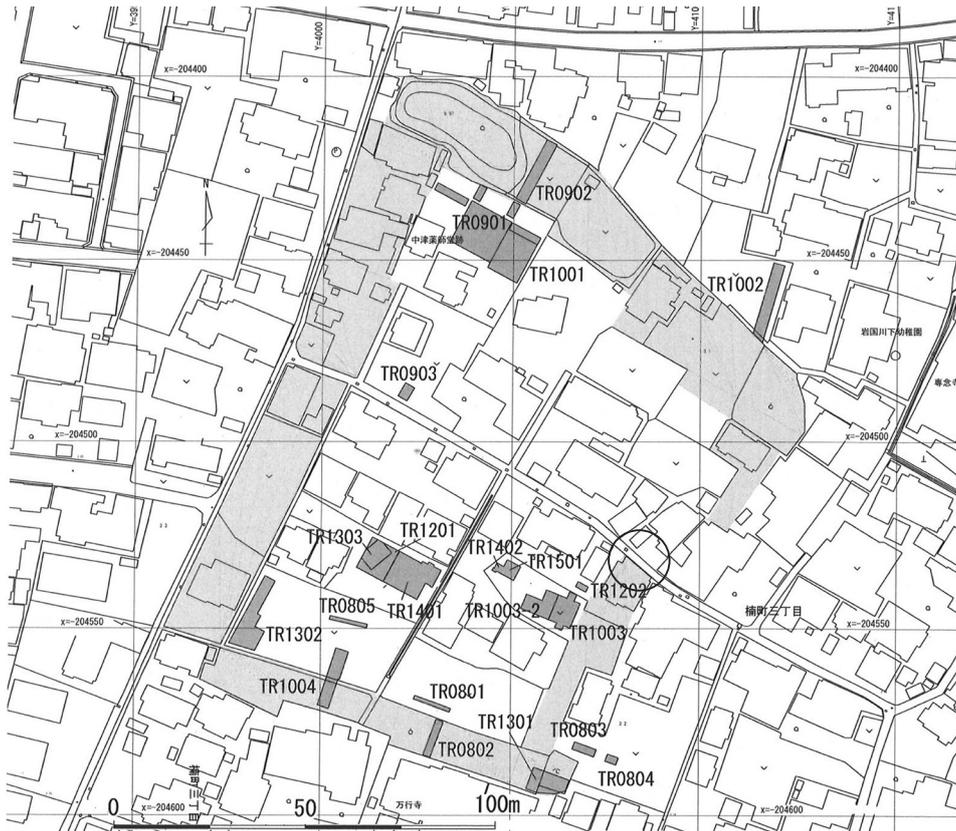


図6 中津居館跡調査区配置図（本書図版を転載）

掘立柱建物跡を検出しており¹⁴、当該期の小早川氏の本拠とするに相応しい様相を示している。

三太刀遺跡の場合、遺構が存在する平坦地の周囲に明確な土塁や堀は存在しないが、東西北の三方は土塁のように丘陵が巡っており、平坦地の西側の丘陵を中心に、みたち古墳群も存在する。

(5) 中津居館跡（山口県岩国市楠町3丁目）

調査成果の詳細は、既刊の調査報告書ならびに本書中で触れられている。ここでは筆者の視点で、要点のみを記述する。

中津居館跡の規模は、四周を圍繞する土塁基底部の外周が東西長約120～140メートル、南北長約130～170メートルを測り、全体の平面形は不整な台形状をなす。平面が不整形である理由は、周囲を流れる河川流路の制約を受けた結果と考えられる。虎口らしき場所（図6○印）が東土塁の中央部に認められるのは理にかなったことで、もっとも洪水流の影響が及びにくい位置にあるためと考えられ、現状の調査における中世遺構の顕著な分布も、この付近に集中している。

中世の地表面標高は、TR1004内の土塁基底部における松田順一郎の所見から、標高2.0メートル前後と見積もることが出来る。また、松田順一郎の地形・土壌の分析結果によると「中世遺構検出面の高度に洪水流がおよぶことはめずらしくなく、むしろ頻繁であった」¹⁵と考えられており、この地で生活するためには、城館か否かという遺跡の性格にかかわらず、洪水流対策として堤防状の施設が必要であったと考えられる。

千田嘉博は、現況調査で堀の痕跡が明瞭でないことを指摘している¹⁶。こうした地形環境では堤防機能を有する土塁または土手状の遺構は必須であったといえる一方で、堀は存在したとしても対岸が常に洪水流にさらされるような不安定な状況であったり、あるいは三角州の中を流れる用水路の機能

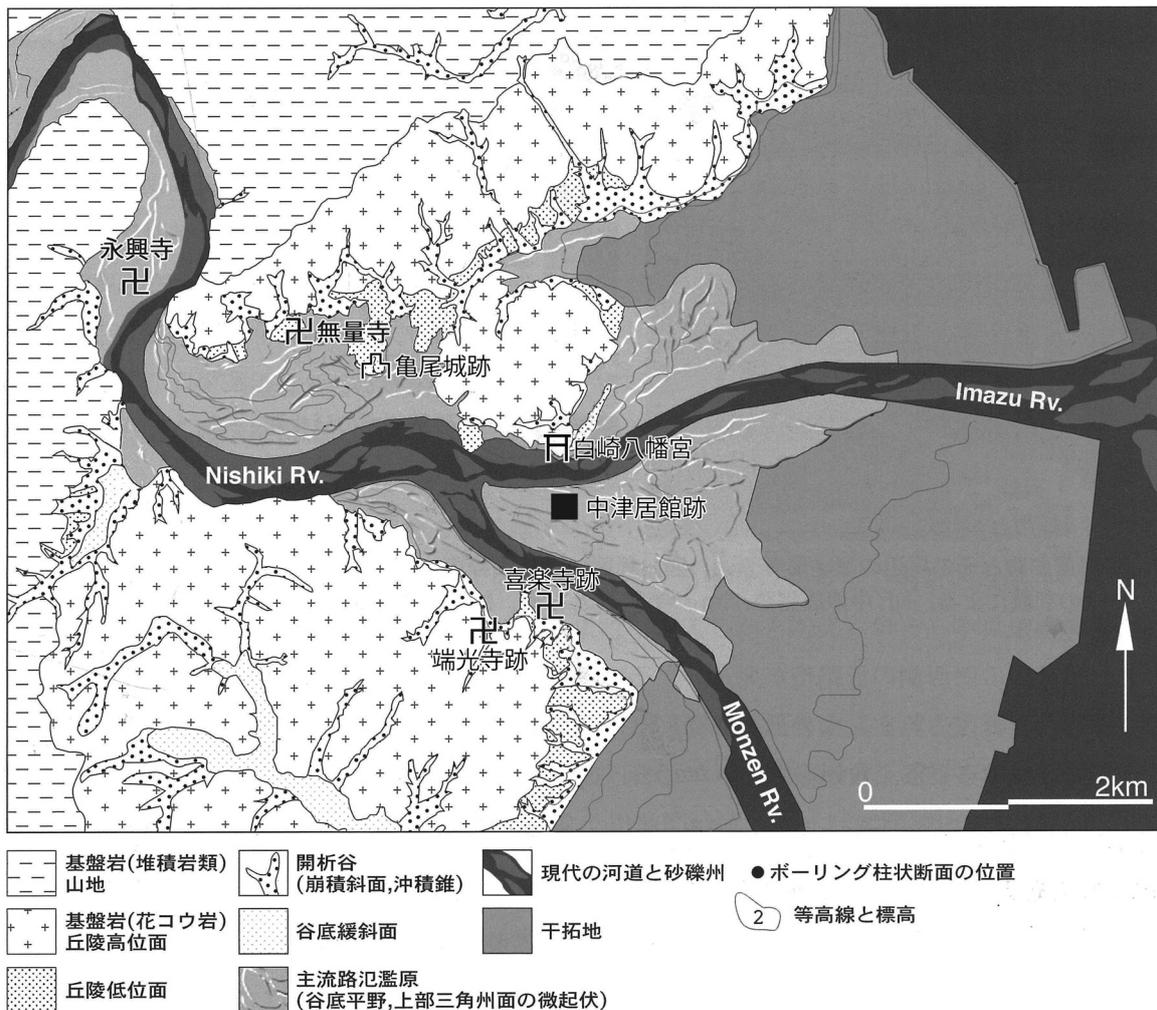


図7 岩国平野とその周辺の地形分類図 (注15文献中の図を改変)

も兼ねていたために不明瞭になると考えられる。

中津居館跡の遺構・遺物の動勢をみると、現状で遺構・遺物ともに、もっとも多く見られるのが鎌倉期末～南北朝前半（14世紀前半）ころ、次に北西部を中心とした中世末期（16世紀後半）ころであり、15世紀代を中心としたその間の動向は、一部遺物の出土を除いてほとんど認められない状況である。このように中津居館跡では、14世紀の遺構・遺物と16世紀の遺構・遺物との2極分化の傾向が見られ、前者を弘中氏とのかかわり、後者を加陽和泉守とのかかわりで理解できると思われるが、前者の機能を領主居館と断じるには、まだ情報が不足している。

3 小結

ここまで、15世紀以前に成立し、遺構・遺物のピークがあると考え居館跡の調査事例を見てきた。最後に、これらの遺跡を比較しながら、中津居館跡の現時点における評価と、今後の課題について触れておきたい。

中津居館跡の平面形は、不整な台形状を呈する。その規模や形状は、益田川の河口に位置する三宅御土居跡に近似する。調査で顕著な遺構・遺物の時代は、中津居館跡が14世紀前半代、三宅御土居跡が12～13世紀と異なるが、検出遺構は土塁や堀（川）跡、木組み井戸や大型掘立柱建物などが共通の

要素として指摘できる。三宅御土居跡の当該期の性格については、益田氏の居館ではなく、荘園政所の可能性等、他の機能が考えられている。

中世の比較的古い時期の居館は、施設の諸要素や機能が未分離のまま、そのすべてを内包した結果として大型化した可能性も考えられ、中世後期と同じ領主の居館という単一の機能に限定して位置付けることが妥当か否か、十分な検討が必要と言える。

図7からもわかるように近世以前の錦川河口に、広大な干拓地は、まだ成立していなかった。したがって、中津居館跡も当時の推定海岸線からは、わずか1キロメートル余りの位置に存在していた。現在の錦川は、河口付近で今津川と門前川とに分流する。

史料上、今津川の開削は慶長7年（1602）とされるが、それ以前からも河流は存在したと考えられている¹⁷。門前川の左岸では中津居館跡の南側に近接して、古い自然堤防と後背氾濫原とが広がっており、一部は土塁南辺と重なることを松田順一郎が指摘しており、少なくとも居館の南辺については、旧河流に接するか極めて近接していたと考えられる。また、北辺も低水路跡と重なりといい、居館の南辺・北辺ともに現状とは異なり、河流に制約された状況にあったことがわかる。

中世後期の内内氏館跡等のいわゆる「方形館」とは異なり、本稿で取り上げた事例では、三宅御土居跡、院庄館跡や三太刀遺跡など、必ずしも堀と土塁で四周を明瞭に区画するという形態を取らず、周辺地割りと密接な関係を持ちつつ、大小河流に接するか近接する位置に築かれており、荘園等の耕作地開発や管理、また水運機能とのかかわりを強く意識していたと考えられる。

これらの遺跡が、それぞれの地域における領主権力の関連施設であったであろうことは論を待たないと思うが、そのことと「方形館」か否かという問題は別の話である。

中津居館跡の所有者を弘中氏と仮定し、居館の周囲に視野を広げると、北に白崎八幡宮、その西北の大円寺山上に亀尾城跡、さらにその西に大内氏とのつながりもある無量寺（普濟寺）、南には氏寺とされる喜楽寺跡や瑞光寺跡と、中津居館跡を中心として狭いエリアに弘中氏とかかわりの深い施設が多数存在していた。

白崎八幡宮は、文亀3年（1503）の棟札により、建長2年（1250）に清繩（弘中）左衛門尉が今津琵琶首に創建し、現在地へは弘中兼胤により貞和4年（1348）に遷宮されたとする。弘中氏歴代の中には、八幡宮の宮司を兼ねたとみられる人物もおり、ここを宮司家である弘中氏が本拠とした時期があっても不思議はない。

無量寺は14世紀中ごろ以前に創建されたと推定され、弘中一族ゆかりの寺と考えられる。あわせて大内氏の周防東部の拠点、家臣団の集結場所、出港拠点として大内水軍の一翼も担ったとも推測されている¹⁸。喜楽寺の詳細は不明であるが、弘中氏とかかわりの深い寺であるとともに、文明10年（1478）10月6日付けの「大内政弘書状」の存在から、大内氏との直接的なかかわりも認められる。瑞光寺は、応永12年（1405）の位牌（大内弘世息女、弘中氏の妻）の存在から、そのころの創建と考えられている。瑞光寺は、喜楽寺の西、鬼神ヶ谷を挟んで向かい側にあったという。

亀尾城跡は岩国山から派生する尾根のひとつにある。標高約40メートルで、大円寺山と呼ばれる地域にある。一次史料ではないが「玖珂郡志」「亨保増補村記（錦見村）」などに弘中氏の居城であったことを伝える記述がある。

弘中氏は、鎌倉時代から300年余りもの長い間、当地を押さえていたと考えられる。この間には南北朝期の軍事的緊張、厳島合戦にかかわる毛利軍との抗争などがあり、岩国は旧周防・旧安芸両国境

の要地でありつづけた。

弘中氏は大内氏の有力家臣であるとともに、白崎八幡宮の宮司を務めた時期もあり、多様な役割を担っていた。同一地域を押さえていたからその本拠も同一地点に存在し続けたと考える必要はない。益田氏にかかわる三宅御土居跡や、小早川氏にかかわる三太刀遺跡¹⁹の例からもわかるように、本拠はしばしば移動するものである。

遺跡の動向や社寺の史料情報を辿ると、13世紀中ごろに弘中氏が今津・琵琶首に白崎八幡宮を創建し、その少し後から中津居館跡の遺構が顕在化するが、何故か当該時期の史料はほとんど確認されていない。また、そのころ大内弘幸により横山に不動山永興寺が創建（1309年）される。永興寺は、巖島合戦の際に、陶晴賢（隆房）が一時本陣を、巖島合戦後には毛利元就が本陣を置いた場所としても知られる。

その後、中津居館跡の遺構や遺物が減少しはじめる14世紀半ば以降に、白崎八幡宮の遷宮（1348年）や、弘中氏ゆかりの無量寺が創建されるとともに、大内弘世の手で永興寺が再興（1367年）される。また、南北朝期という時代背景を考慮すれば、亀尾城跡の利用も想定できるかも知れない。

いずれにせよ中津居館跡の調査は、その一部を明らかにしたに過ぎない。今後も引き続き中津居館跡の発掘調査を進展させ、遺跡自体の内部構造を明らかにして行く必要があることは言うまでもないが、だからと言って居館を単体で見ることなく、さまざまな調査手法を駆使しつつ、錦川河口に点在する弘中氏関連施設の総合的な理解をはかることが必要であろう。

注

- 1 神崎 前ほか『中津居館跡』岩国市教育委員会、2012年。
- 2 『岩国市史 史料編一 自然・原始・古代・中世』岩国市 2002年。
- 3 和田秀作「弘中氏・加屋氏と岩国地域―「中津居館跡」の築造主をめぐる―」『中津居館跡』岩国市教育委員会、2012年。
- 4 増野晋次「山口県における中世方形館の時期について」『西国城館論集Ⅱ』中国・四国城館調査検討会、2012年。
- 5 小郷利幸ほか『院庄構城跡』津山市教育委員会、2013年。
- 6 河本清『史跡院庄館跡発掘調査報告』津山市教育委員会、1974年。なお、報告書中の表では、土塁の巾と高さの数値が入れ替わっている。
- 7 行田裕美『史跡院庄館跡』津山市教育委員会、1981年。
- 8 足立克己ほか『蔵小路西遺跡』鳥根県教育庁文化財課 鳥根県埋蔵文化財調査センター、1999年。
- 9 長澤和幸『三宅御土居跡』益田市教育委員会、2002年。
- 10 木原光「Ⅶ 三宅御土居跡の発掘調査」『市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』、益田市教育委員会、2003年。
- 11 千田嘉博「三宅御土居の規模と歴史的な位置」（注9文献所収）。
- 12 井上寛司「平安末・鎌倉期の三宅御土居の歴史的な性格」『市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』、益田市教育委員会、2003年。
- 13 a 梅本健治『三太刀遺跡（Ⅰ）』（財）広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室、2003年。
b 梅本健治『三太刀遺跡（Ⅱ）』（財）広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室、2004年。
c 梅本健治『三太刀遺跡（Ⅲ）』（財）広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室、2005年。
- 14 時元省二「三原市本郷町三太刀遺跡の発掘調査について」広島史学研究会 2011年度大会発表資料。
- 15 松田順一郎「中津居館跡の地形条件と堆積物の観察結果」（注1文献所収）。
- 16 千田嘉博「加陽和泉守居館跡現地踏査所見」（注1文献所収）。
- 17 注15文献。
- 18 『岩国市史 通史編一 自然・原始・古代・中世』岩国市、2009年。
無量寺鐘銘（天境靈致の記銘）によると「今防州岩国山無量禪院賢檀藏人源公宣兼、^{のりかね}不^ふ辜^こ先考円源遺命、洪鐘ヲ新鑄ス」とある。「宣兼」は「興隆寺供養勸進帳」にみえる弘中与一宣兼であろう。
- 19 小早川（沼田小早川）氏の本拠としては、沼田川を遡った地に高山城、^{にいたかやまじょう}新高山城がある。

地中レーダー探査による遺構分布確認調査

高瀬尚人

(応用地質株式会社)

1. はじめに

本稿では、中津居館跡包蔵地内において平成25年度に実施した地中レーダー探査による遺構分布確認調査の概要をまとめる。この探査の目的は、地下に埋蔵されている遺構の分布状況を推定することにより、今後の埋蔵文化財調査を実施していく上での基礎資料を得ることである。探査対象は二つに大別され、一つは居館跡外縁部において土塁及び堀の断面形状及び残存状況を推定することであり、もう一つは居館跡内部において礎石や柱穴、溝跡等の建物遺構の分布状況を把握することである。測定データの解析では、既往の発掘調査で確認された遺構と比較し、解釈を行った。

調査期間は2012年8月23日から2013年3月20日であり、現地測定は2012年9月12日・13日及び2013年2月19日・20日に実施した。総測線長は4,879.5mとなった。

2. 探査方法

(1) 地中レーダー探査の概要

地中レーダー探査とは、地表面上で牽引するアンテナから地中に向けて電磁波を放射し、その反射波を受信することによって地下浅部の土層境界（遺構面など）や反射体（石など）を把握する非破壊探査手法である。この手法は、深度2m程度以浅の遺構に対して適用性が高く、各種探査手法の中で最も高分解能であるので、比較的小規模な遺構の検出も可能である。また、作業効率も優れているため、平坦な調査地であれば短時間で広域を測定することが可能である。

使用した探査装置は、SIR System 3000（米国・GSSI社製）であり、測定に用いたアンテナの中心周波数は400MHzである。

(2) 調査範囲

調査範囲を図2-1、探査数量表を表2-1に示す。総測線長は4,879.5mとなった。

表2-1 探査数量表

実施時期	調査範囲	測線数量（本）	合計測線長（m）	特記
2012年 9月12・13日	外縁部	19	613.0	包蔵地の北側－東側
	エリア①	73	993.5	測線間隔：0.5m
	エリア②	31	551.0	測線間隔：2.0m
2013年 2月19・20日	外縁部	19	441.0	包蔵地の西側－南側
	エリア③	23	563.0	測線間隔：5.0m
	エリア④	78	1193.0	測線間隔：0.5m
	エリア⑤	56	525.0	測線間隔：0.5m
	総数	299	4879.5	

図中の矢印線は居館跡外縁部における測線配置であり、測線は土塁及び堀の想定位置に対して直交するように配置した。また、居館跡内部の南側において、エリア①、②、③、④、⑤の調査範囲を設定した。

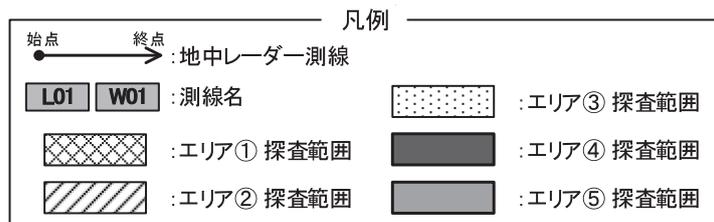
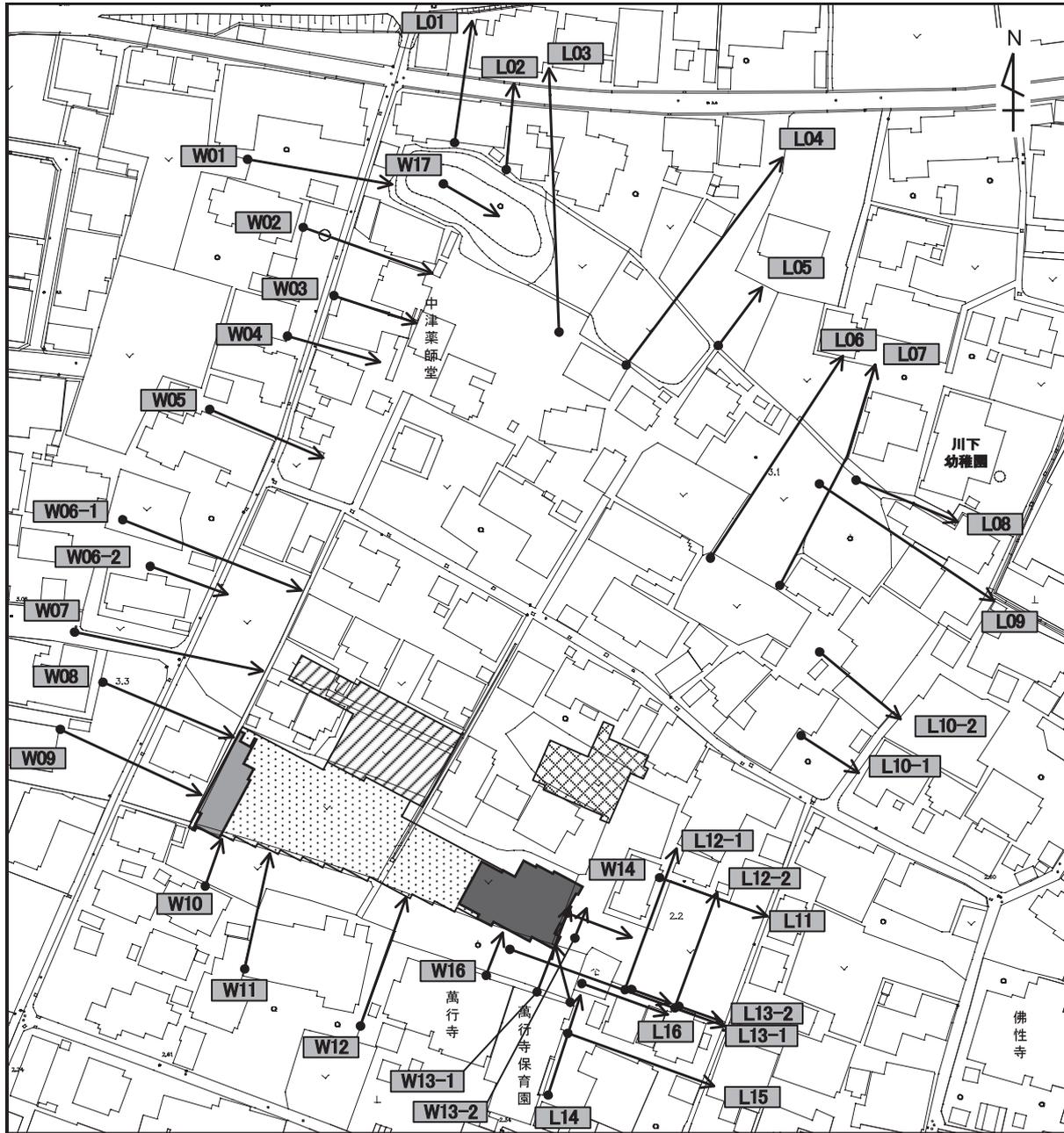


図2-1 調査範囲

3. 探査結果

(1) 代表的な記録例

【記録例① L07測線：外縁部（堀跡）】 図3-1参照

当該測線は、居館跡北東隅の付近において、堀跡の検出を目的として南→北方向に設定した測線であり、“トレンチTR1002”に近接している。¹

- ・測定記録を図3-1の上段、測定記録とトレンチ断面に基づく堀跡を重ね合わせた結果を図3-1の中段に示す。トレンチによって確認された堀の落ち込み（砂礫層の掘り込み）は、探査結果における“掘り込み状の反射面”とほぼ合致する。よって、この掘り込み状の反射面が堀を捉えた記録といえる。
- ・当該測線の地域では深度約1mを上面とした“砂礫層”が分布しており、堀跡は砂礫層を掘り下げて構築している。この砂礫層と堆積土の物性的コントラストが明瞭であることから、測定記録も明瞭な掘り込みとして検出できた。しかし、他測線では砂礫層が不明瞭な箇所もあり、その影響によって掘り込みも不明瞭な箇所がある。

【記録例② L07測線：外縁部（土塁）】 図3-2参照

当該測線は、記録例①の南側に連続する測線である。当該区間は土塁の検出が目的であり、発掘調査によって土塁を断ち割った“トレンチTR0902”と比較した。² なお、このTR0902は当該測線よりも約70m西側のトレンチであることから、ここでは土塁の構築状況を参考とする目的で掲載した。

- ・距離程16m～21.5mにおいて、お椀を伏せたような高まり状の反射面が検出された。検出深度は上面が約1.2mである。特徴的な反射パターンであり、トレンチ断面図TR0902と比較すると『初期の人工盛土（土塁）』と推定される。
- ・『初期の人工盛土（土塁）』と推定される高まり状の反射面の上位に、明瞭な反射面が検出された。検出深度は、距離程8m～15.5mでは約0.9mでほぼ平坦であり、距離程15.5m～23mでは上面が約0.5mと高まり状になっている。トレンチと比較すると『後期の人工盛土（土塁）』と推定される。
- ・距離程23m～28mにおいて、乱れた反射像が検出された。検出深度は上面が約0.8mである。反射振幅が特に強いことから、礫が堆積している状況と推定される。礫の分布状況をみると、距離程26mを境として測線始点側（南側）は礫径が比較的大きく、測線終点側（北側）はかなり細かい礫が密集しているとみられる。トレンチ断面図TR0902と比較すると測線始点側は『土塁外側の補強構造（礫を含む）』であり、終点側は『石積み擁壁の裏込め（礫）』と推定される。

【記録例③ W09測線：外縁部（土塁・堀跡）】 図3-3参照

当該測線は、居館跡南西隅の付近において、土塁及び堀跡の検出を目的として西→東方向に設定した測線である。

- ・距離程14m～19mにおいて、掘り込み状の反射面が検出された。検出深度は上面が約0.5m、底部は約1.8mである。掘り込みの下部（換算深度約1m以深）は相対的に反射振幅が強いことから、径の大きい礫を含んだ土層が堆積していると考えられる。
- ・距離程20m～26mにおいて、乱れた反射像が検出された。検出深度は上面が約0.7mである。反射振幅が特に強いことから、礫が堆積している状況と推定される。既往トレンチと比較した記録例②

の状況から類推すると、この乱れた反射像は『土塁外側の補強構造（礫を含む）』と推定される。

- ・距離程28m～31mにおいて、高まり状の反射面が検出された。検出深度は上面が約1.2mである。記録例②の状況から類推すると『初期の人工盛土（土塁）』であり、距離程26m～34mの範囲は『後期の人工盛土（土塁）』と推定される。なお、距離程29.5mの換算深度約0.9mには局所的な反射体が検出されている。比較的大きな石材と推定でき、初期・後期盛土の中央付近で検出されていることから、トレンチ断面図TR0902に見られる『花崗岩を密に充填した石列』の可能性はある。

【記録例④ AY020測線：エリア①（地下式礎石）】 図3-4参照

当該測線は、エリア①の南側において、西→東方向に設定した測線である。エリア①は“トレンチTR1003、1003-2”によって『地下式礎石』が確認された箇所であり、当該測線は図中下段に示したトレンチ断面図の位置で測定した測線である。³

- ・距離程5.5m～17mにおいて、平坦な反射面が検出された。検出深度は、距離程5.5m～14.5mでは約0.8m、距離程14.5m～17mでは上面が約1.3mで平坦面を形成している。この平坦面がトレンチ断面図による『トレンチの掘削底面』である。
- ・トレンチ断面図によると、距離程7.5m、10.0m、12.2m、14.7m、17.2mの位置で『地下式礎石』が出土した。検出深度は約1.3mである。レーダー記録では、それぞれの箇所において“局所的な反射体”がわずかにみえるが、トレンチ結果がなければ判断できない程度の反射パターンである。このように明瞭に検出されなかった要因としては、埋没深度（約1.3m）に対して礎石の径が小さい（約30cm）、あるいはトレンチ底面の反射が明瞭であり、相対的に礎石が不明瞭となった、等が考えられる。

【記録例⑤ DY120測線：エリア④（礎石、他）】 図3-5参照

当該測線は、エリア④の中央付近において、西→東方向に設定した測線である。

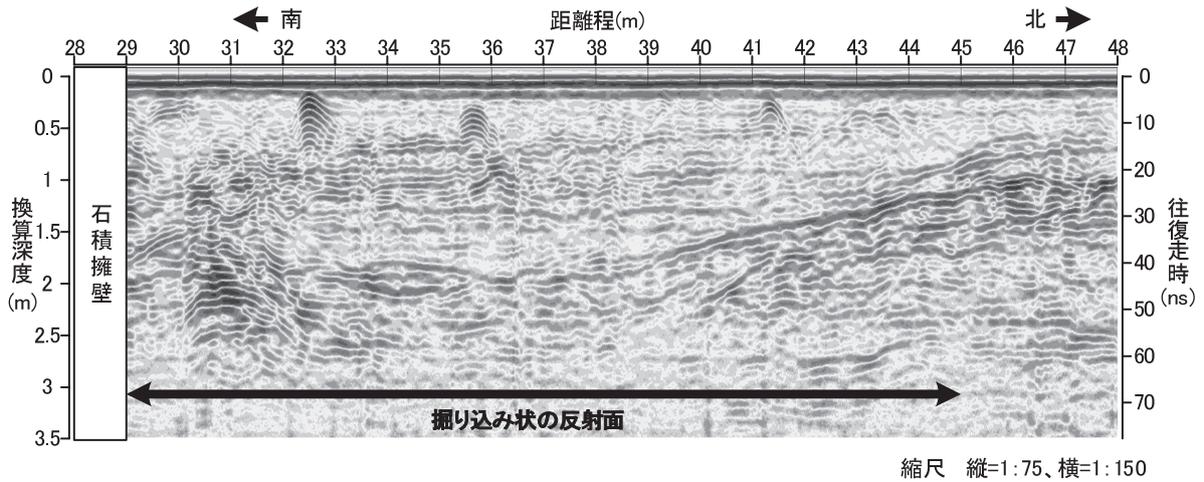
- ・距離程3.5m、約6.5m、約9m、約10m、12.5mにおいて、局所的な反射体が多数検出された。検出深度の上面は約0.7m～1.0mである。反射パターンから類推すると比較的大きな石材の可能性はある。深度および間隔が一定でなく礎石列と推定するには至らないものの、中世造成層内であることから、何らかの遺構の可能性はある。

【記録例⑥ EX010測線：エリア⑤（石敷・礫溜り、他）】 図3-6参照

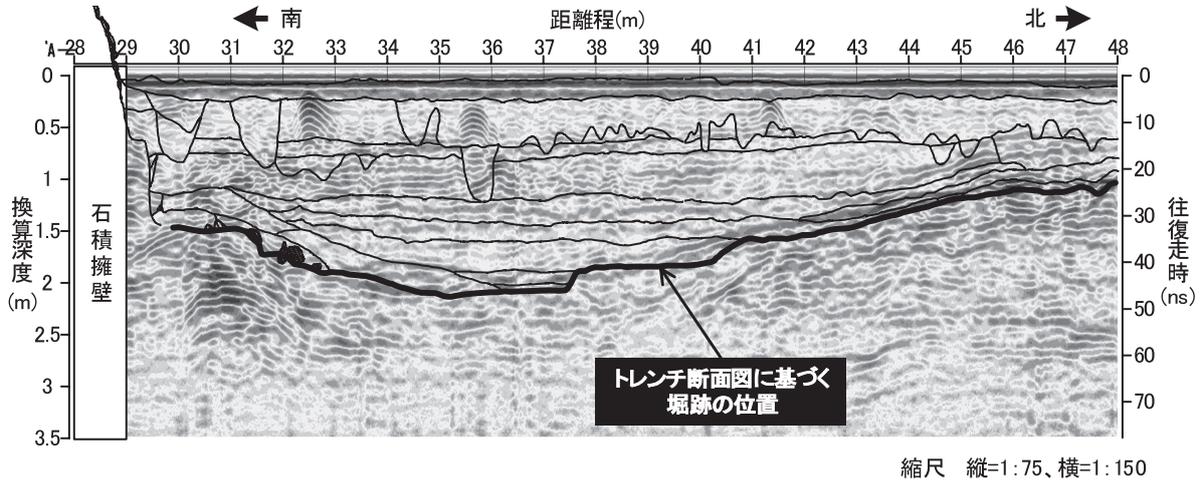
当該測線は、エリア⑤の西端において、南→北方向に設定した測線である。

- ・距離程0.5m～約7mにおいて、乱れた反射像が検出された。検出深度の上面は約0.5mである。砂礫層に近い反射パターンではあるが、自然堆積の砂礫層は深度約1.5m以深に存在している。土塁の裾部であることから、石敷状遺構あるいは礫溜り等の可能性もある。
- ・距離程19m～20mにおいて、局所的な乱れた反射像が検出された。検出深度の上面は約1.3mであり、砂礫層を抜ける掘り込みと推定される。深度約3.3mには凸状の反射パターンがみられることから、比較的大きな石材、あるいは底面が存在する可能性がある。近現代のゴミ穴と推定される掘り込みとは様相が異なっており、遺構として考えた場合には、井戸跡等の深掘りが挙げられる。⁴

《 L07 測線 の測定記録 》



《 測定記録とトレンチ結果の比較 》



《 トレンチ断面図: TR1002 》

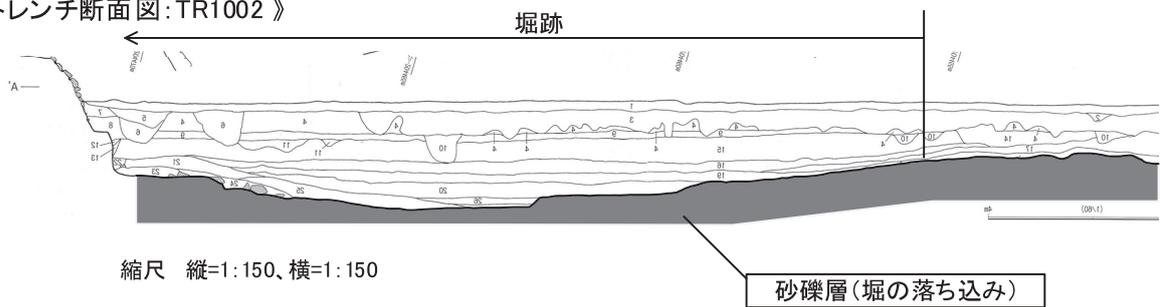
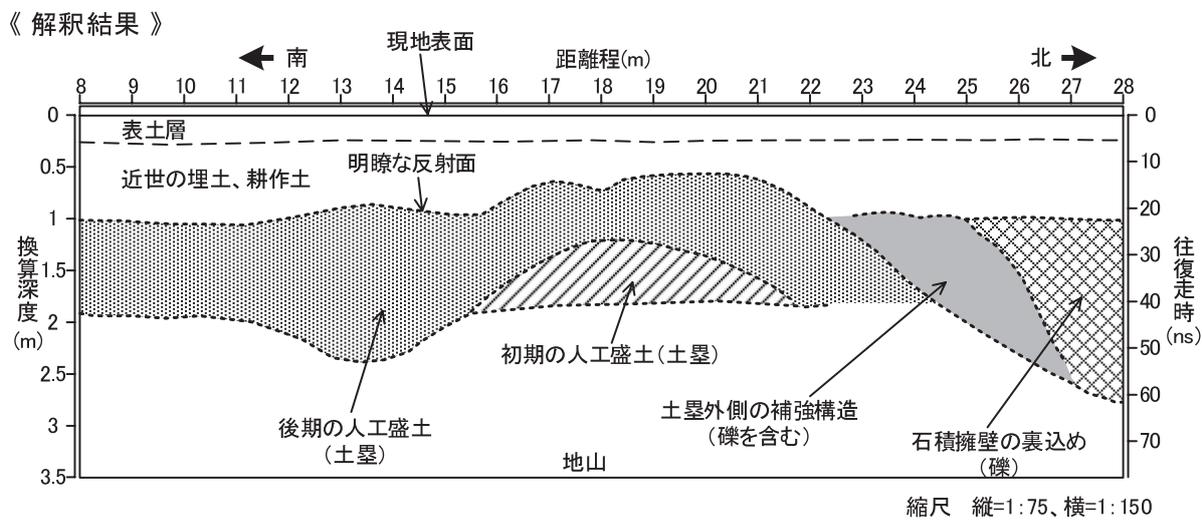
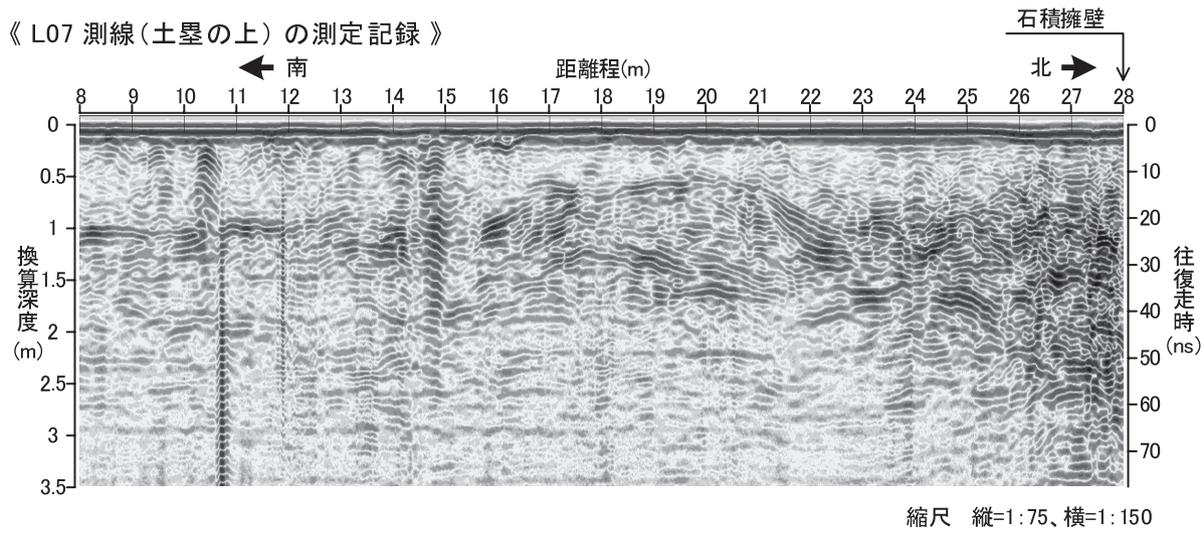


図3-1 記録例① (L07測線:掘跡)



参考 《 トレンチ断面図:TR0902 》 ※測線より70m西側

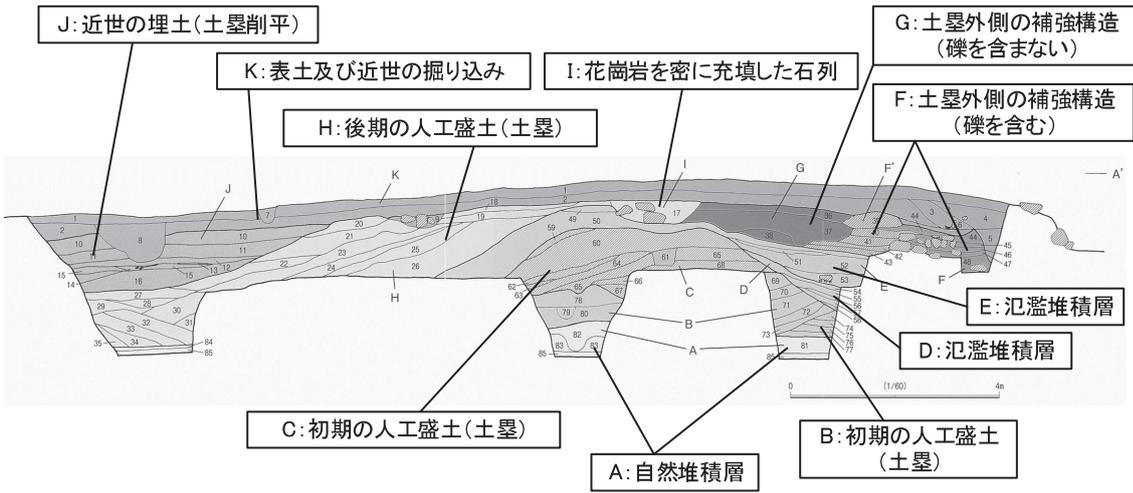


図3-2 記録例② (L07測線:土塁)

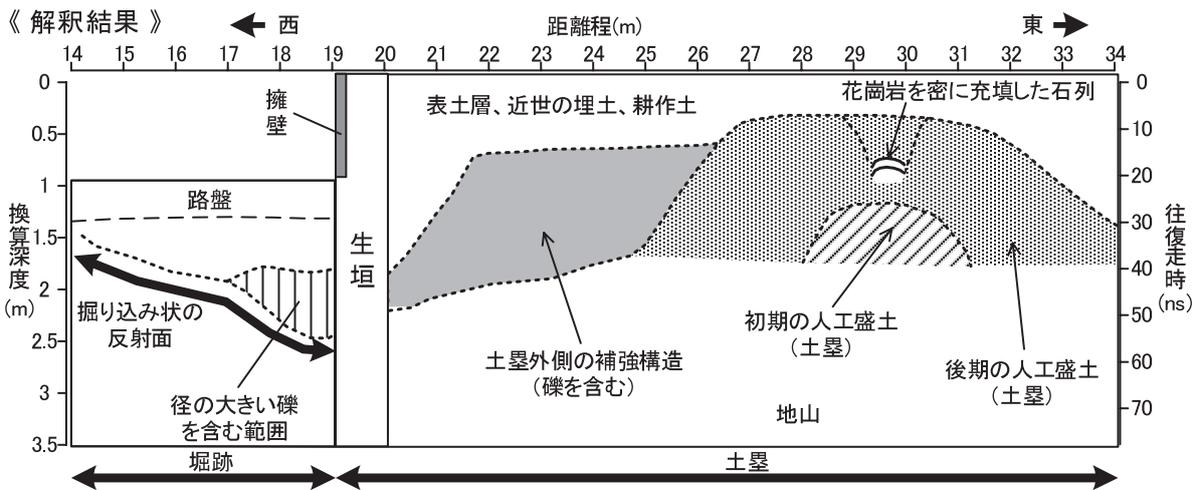
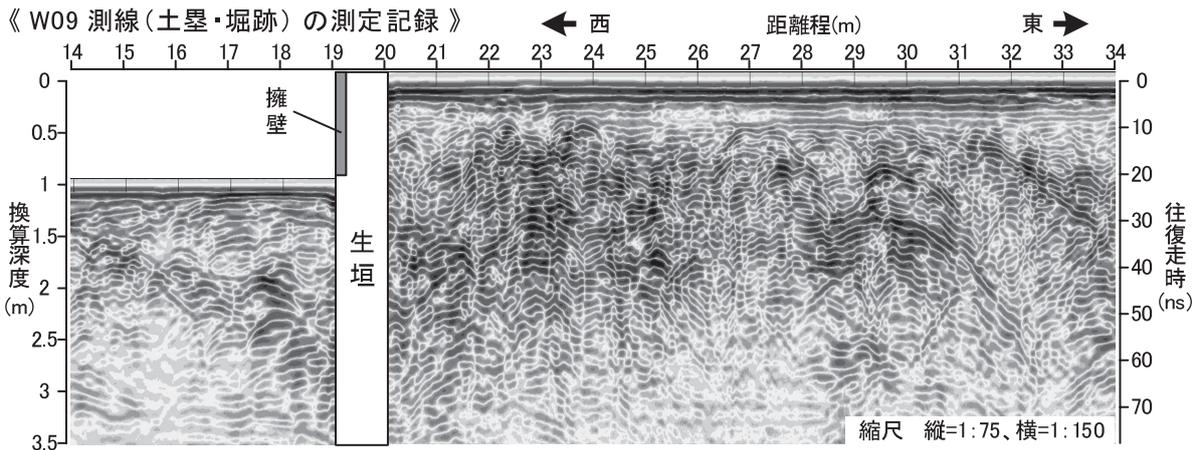


図3-3 記録例③ (W09測線)

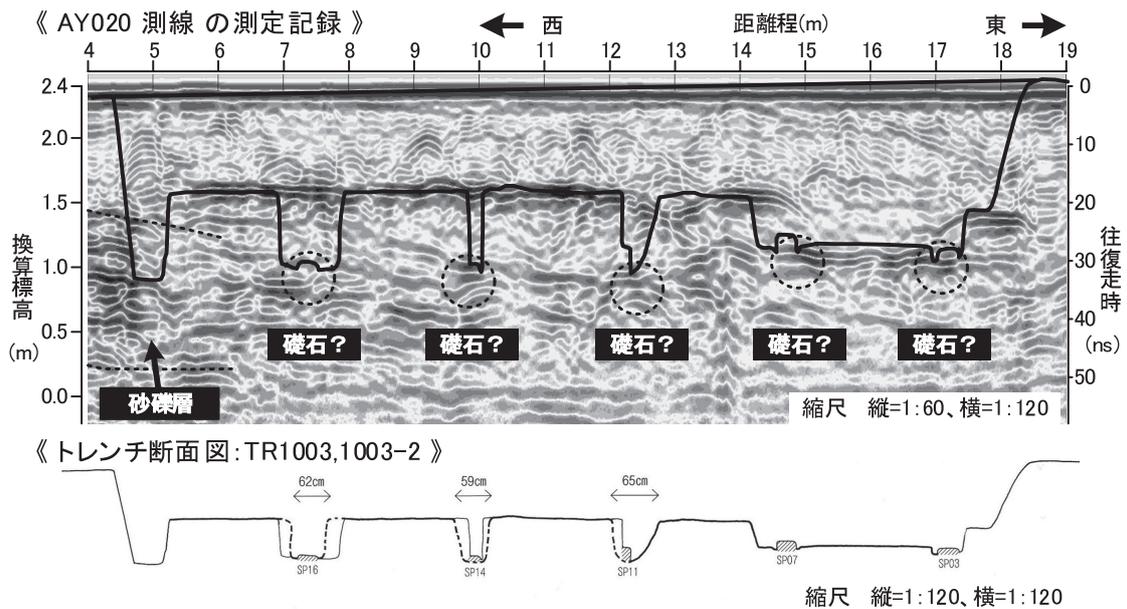


図3-4 記録例④ (AY020測線)

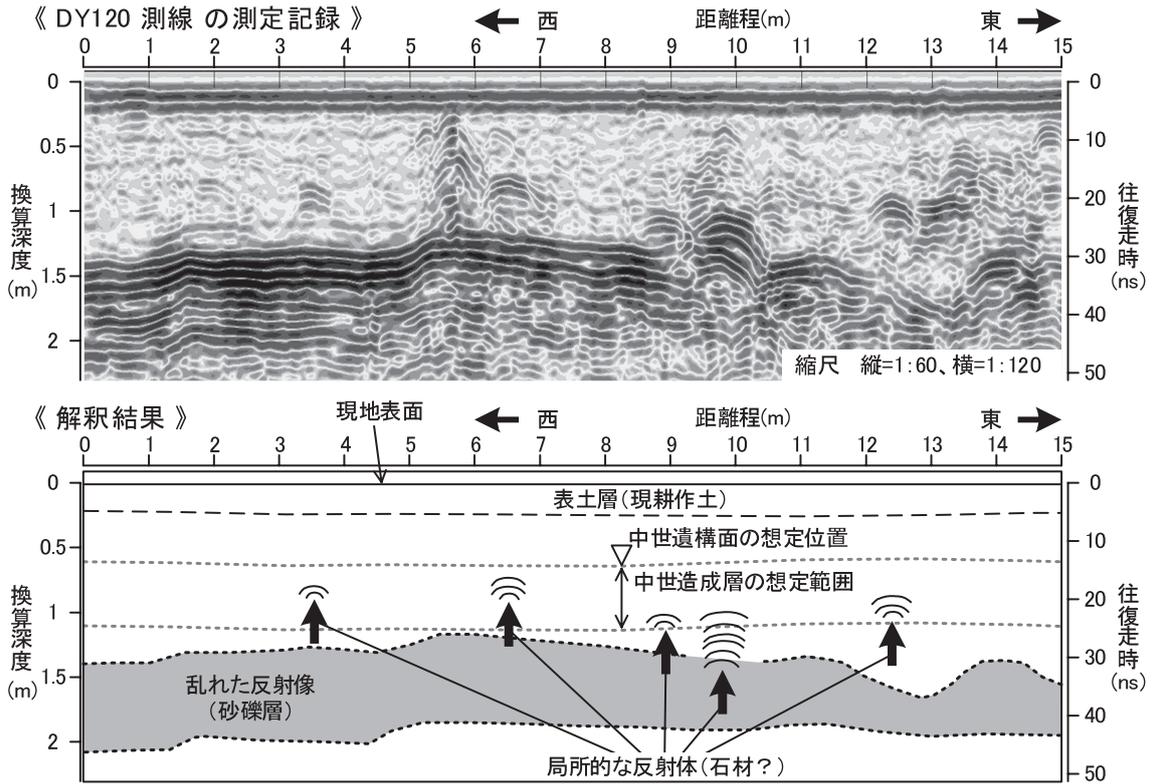


図3-5 記録例⑤ (DY120測線)

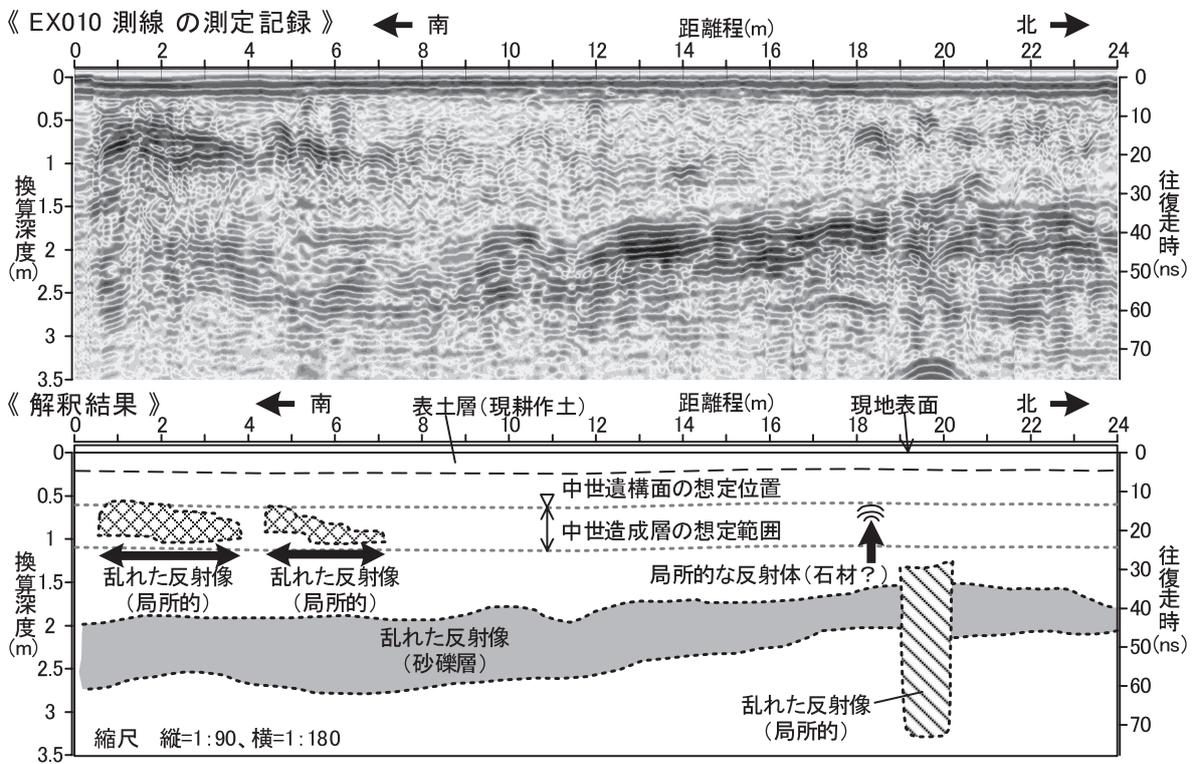


図3-6 記録例⑥ (EX010測線)

(2) 外縁部の探査結果

記録例①、②、③で示したような掘り込み状の反射面（堀跡）や層構造の反射面（土塁）を各測線で抽出し、その分布状況を図3-7に示す。以下に解釈結果を記す。

【堀跡について】

- ・深度1m以深の掘り込みは、北側、北東隅、西側で検出された。堀跡の可能性があり、北側と北東隅での幅は10m～15mとみられる。北側中央付近（L04、L05測線）および北東隅（L09測線）では検出されなかった。西側での幅は5m～6mとみられる。
- ・外縁部の南東隅および南側の各測線では、複数箇所深度1m以深の掘り込みが検出されたものの、堀跡の可能性が指摘できるような位置では検出されなかった。

【土塁について】

- ・外縁部の北側、北東隅、西側および南側に設定した各測線では、『土塁』と推定できる層構造の反射面が検出された。幅は約15m～20mとみられる。各測線で初期の人工盛土と推定できる高まりがみられることから、いずれも同様の構造と考えられる。

(3) エリア①の探査結果

測線間隔を0.5m格子状に配置して詳細探査を実施し、タイムスライス解析を行った。タイムスライス解析とは、測定記録をコンピュータ上で統合し、任意の時間（深度）における反射波を平面的に切り出し、その振幅の強弱を平面分布として図化する解析法である。なお、エリア①の北側は現地盤が一段高くなっているため、深度を標高に換算した。解析結果では暖色系（赤色。以下、アノマリーと呼称）は反射振幅が強い範囲を表し、石材や掘り込み、トレンチ底部の平坦面、等の不均質な部分が分布する範囲である。また寒色系（青色）は反射振幅が弱い範囲を表し、相対的に均質な土質と推定できる。タイムスライス結果を図3-8に示す。以下に解釈結果を記す。

- ・スライス標高2.00m～1.50mおよび1.75m～1.25mでは、トレンチ中央から西側の底面が明瞭に検出された。
- ・スライス標高1.50m～1.00mおよび1.25m～0.75mは、礎石列が確認された標高1.0mが含まれていることから、当該スライス標高が遺構包含層といえる。トレンチ結果と重ね合せると礎石部分の反射振幅がやや強くなっているが明瞭ではない。

タイムスライスでは礎石列を明瞭に捉えるには至らなかった。この要因は、埋没深度（約1.3m）に対して礎石の径が小さい（約30cm）、トレンチ底面の反射が明瞭のため相対的に礎石が不明瞭となった、等と考えられる。なお、礎石列南端の未発掘箇所にも礎石が存在するものと考えられる。

(4) エリア②の探査結果

中世造成層に相当する深度0.5m～1.0m付近に着目し、記録例⑤で示した局所的な反射体や乱れた反射像を抽出し、分布状況を図3-9に示す。以下に解釈結果を記す。

- ・“乱れた反射像”は土坑や礫の集中する箇所、“局所的な反射体”は比較的大きな石材の可能性ある。近現代の掘削跡や自然転石とも考えられるが、中世造成層で検出されていることから、何らかの遺構・遺物の可能性もある。測線が2m間隔と粗いため詳細は不明だが、調査地中央から北側にかけて集中している。

- ・岩国市教育委員会が実施した第4次発掘調査のTR1201の調査範囲を図中に示す。調査範囲内に計8箇所の局所的な反射体等があり、この中で中央付近の反射体では、直径約65cmの備前焼の大甕に4万～5万枚とみられる銅銭を納めた『一括出土銭』が確認された。⁵ その他は最近のゴミ穴等であった。

(5) エリア③の探査結果

局所的な反射体（石材）や乱れた反射像（土坑、礫の集中、近現代の攪乱跡等）を各測線で抽出した。図版の掲載は割愛するが、以下に解釈結果を記す。

- ・エリア③の西側において、乱れた反射像が検出された。何らかの遺構の可能性が考えられることから、詳細調査の実施範囲としてエリア⑤を設定した。
- ・エリア③の東側において、乱れた反射像が検出された。多くは地下浅部からの掘り込みであり近現代のゴミ穴等と推定できるが、一部は中世造成層内で検出されており、遺構の可能性もある。よって詳細調査の実施範囲としてエリア④を設定した。

(6) エリア④の探査結果

測線間隔を0.5m格子状に配置して詳細探査を実施し、タイムスライス解析を行った。図版の掲載は割愛するが、以下に解釈結果を記す。

- ・浅部で検出されたアノマリーは、近現代のゴミ穴や建物基礎等の可能性が高い。
- ・スライス深度0.50m～1.00mにおいて、5箇所のアノマリーが検出された。これらは約2.5m、または約5mで等間隔に並んでいる。エリア①で確認された礎石列や居館跡の主軸には合致していないが、礎石列とほぼ同じ間隔であり、遺構の可能性もある。

(7) エリア⑤の探査結果

測線間隔を0.5m格子状に配置して詳細探査を実施し、タイムスライス解析を行った。タイムスライス結果を図3-10に示す。図中、特徴的なアノマリーは“SX①”“SX②”“SX③”と便宜上呼称し、以下に解釈結果を記す。⁶

《SX①》

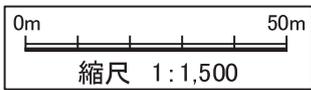
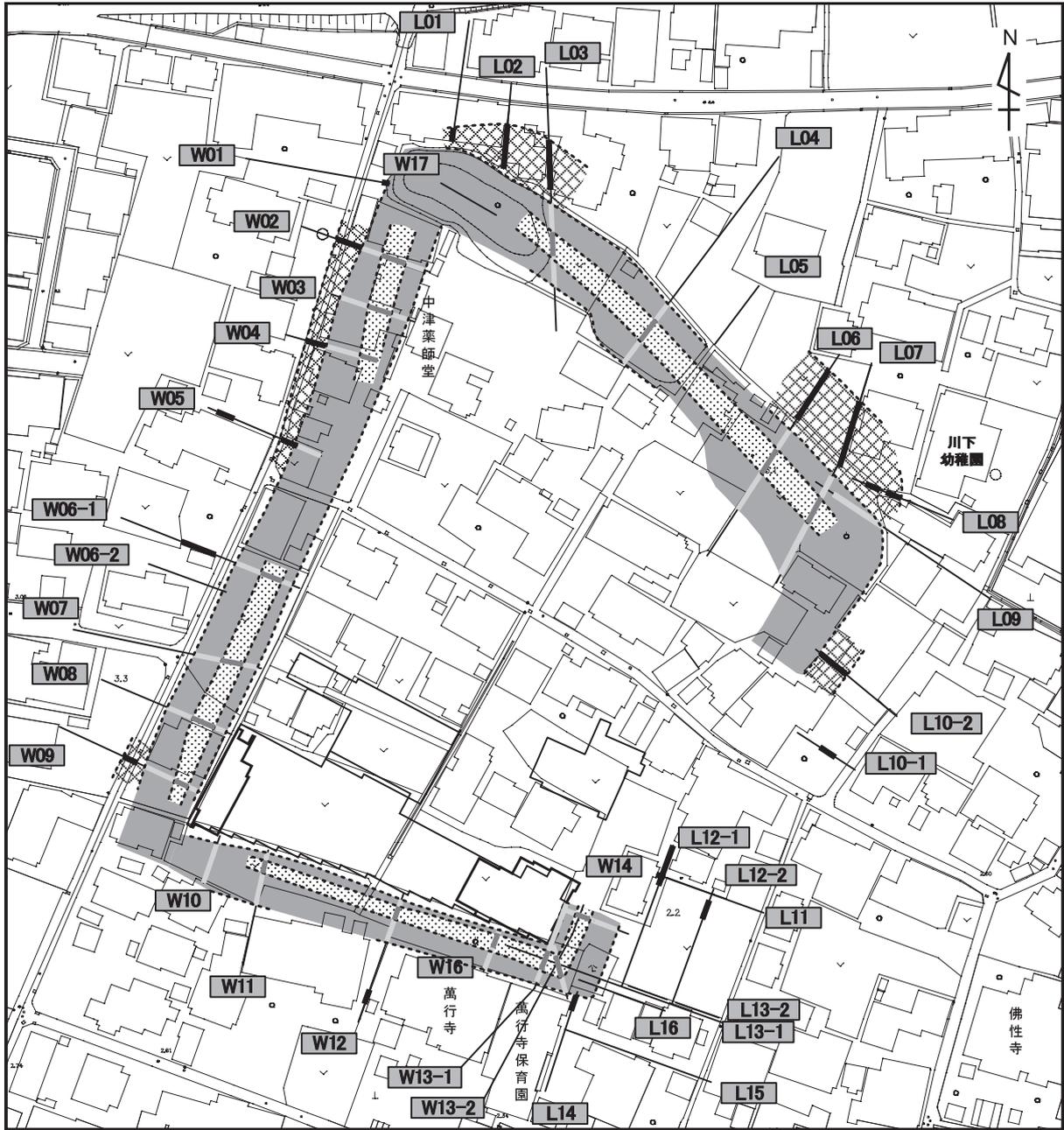
- ・スライス深度0.5m～1.0mにおいて、エリア⑤の西端に沿って細長いアノマリーが検出された。土塁の裾部に位置しており、記録例⑥に示した反射パターンの平面分布を示したものである。石敷状遺構、あるいは礫溜り等の可能性もある。

《SX②》

- ・SX①に近接した位置にアノマリーが検出された。近現代のゴミ穴の可能性もあるが、居館の重要な位置である隅で検出されており、何らかの遺構の可能性もある。

《SX③》

- ・スライス深度1.0m～1.5mにおいて、局所的なアノマリーが検出された。記録例⑥に示した掘り込みの上面であり、砂礫層を抜けたスライス深度2.25m～2.75m以深にも検出されている。井戸跡等の遺構の可能性もある。



凡例	
【探査記録】	【遺構等推定範囲】
—— 掘り込み状の反射面	破線 記録の推定線
—— 層構造の反射面	深度1m以深の掘り込み(堀跡?)
—— 高まり状の反射面	人工盛土(土塁)
	初期の人工盛土(土塁)

図3-7 探査結果及び遺構分布推定図(外縁部)

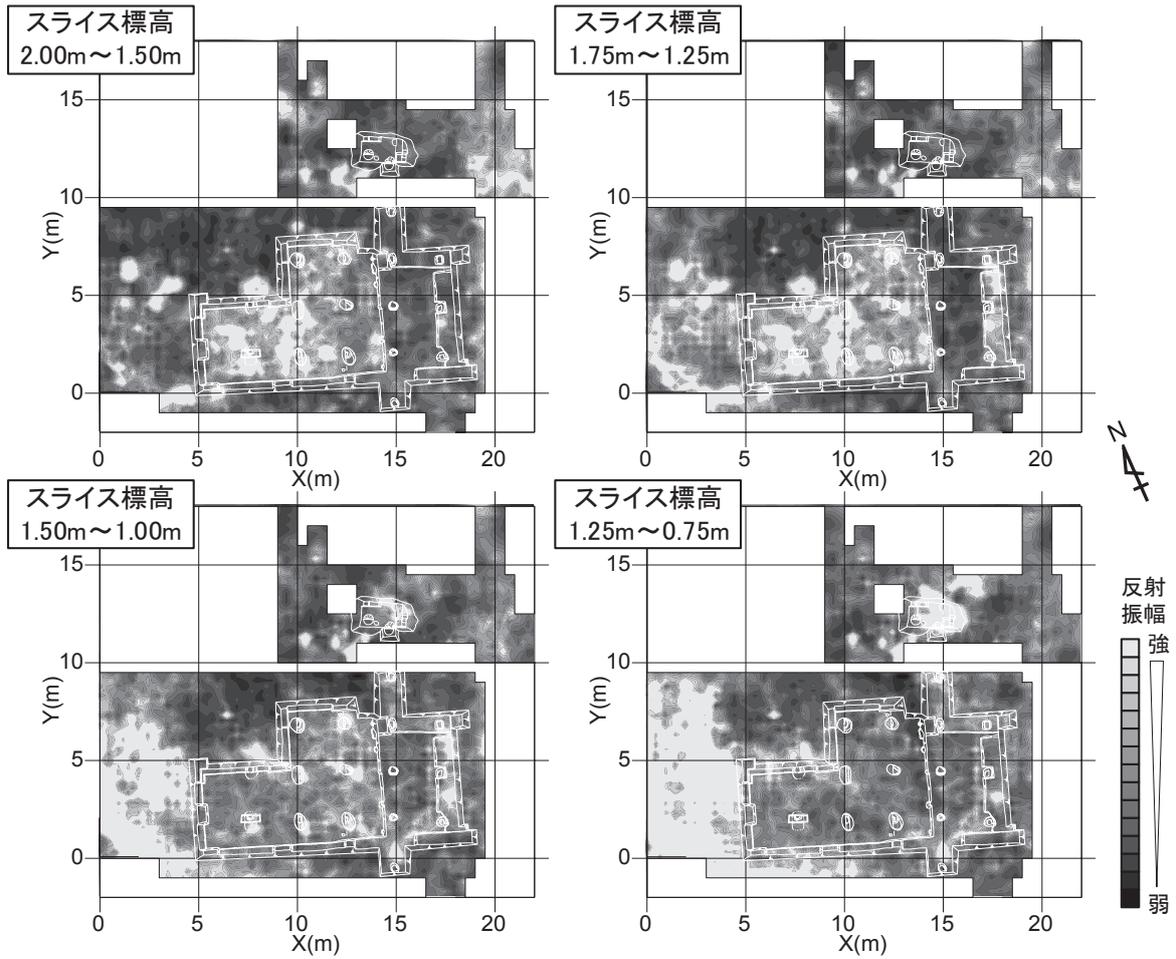


図3-8 タイムスライス結果（エリア①） 縮尺 1 : 400

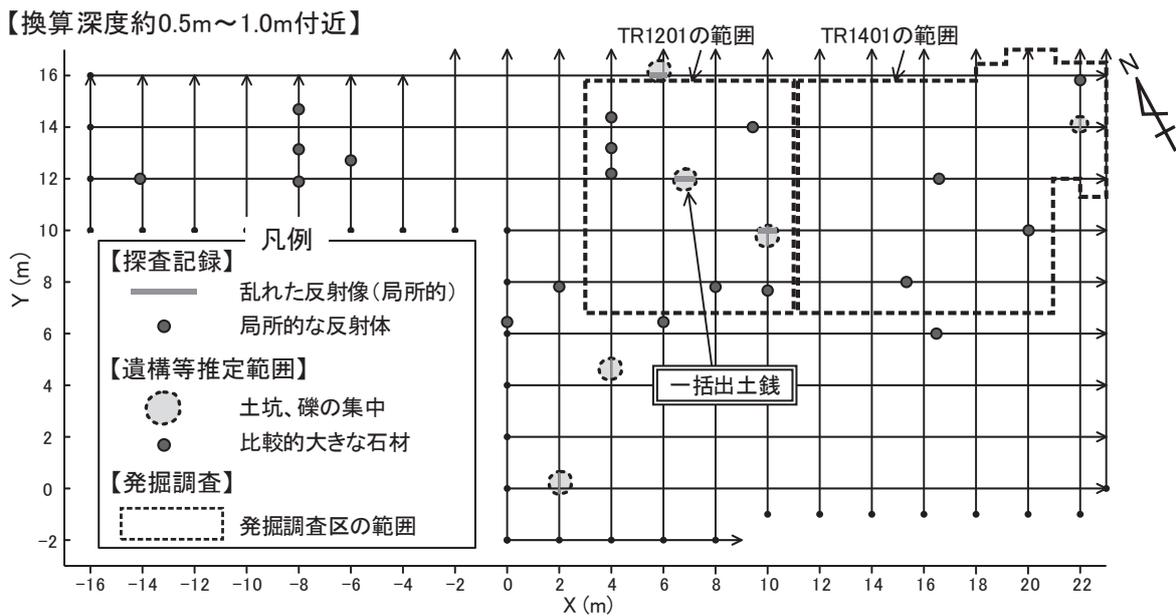


図3-9 探査結果及び遺構分布推定図（エリア②） 縮尺 1 : 300

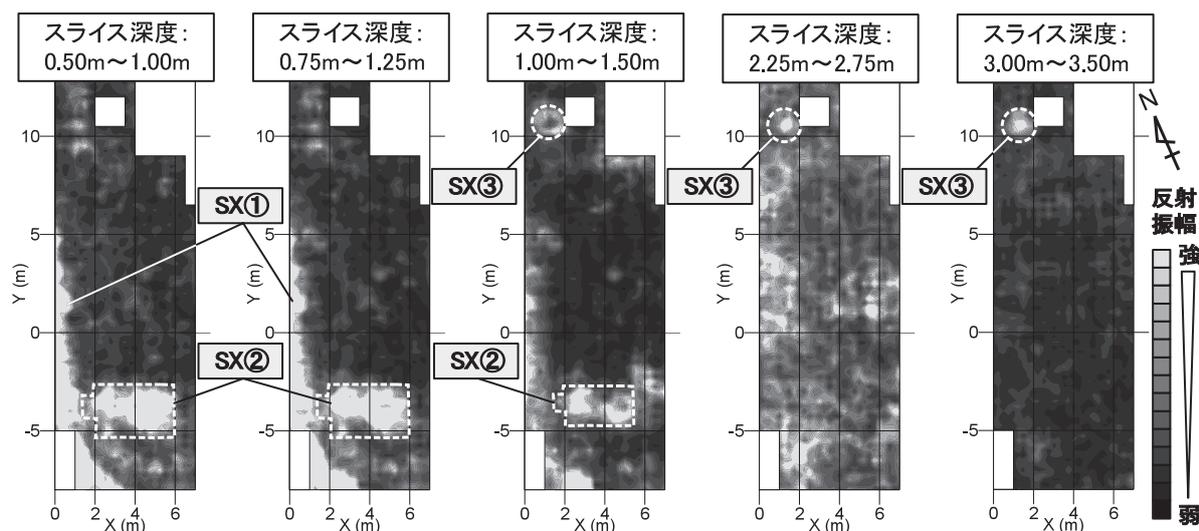


図3-10 タイムスライス結果（エリア⑤） 縮尺 1：400

4. おわりに

以下に探査結果を要約する。

居館跡外縁部における探査では、土塁の断面形状を明瞭に検出した。特に『初期の人工盛土（土塁）』を示す土層境界の盛り上がりが見られ、土塁の拡張状況を推定する資料となり得る。堀跡については、北東隅を除いた全周で不明瞭であり、読み取った掘り込みの幅もばらつきがみられた。この結果より、

- 堀は存在しなかった可能性
- 堀は存在したものの、河川氾濫等による粘性土砂が堆積することによって、電磁波の減衰が顕著となった可能性
- 堀は存在したものの、地山と後世の堆積土との物性的コントラストに差異がないことから、堀と堆積土との境界面が不明瞭

等の理由により、レーダー探査では明瞭に捉えられなかった可能性がある。

居館跡内部における詳細探査では、中世造成層内で多数の反射体が検出された。近現代の攪乱も含まれるが、礎石や遺物等の可能性もある。実際に検出した反射体の一つから、発掘調査で一括出土銭が発見された。また石敷遺構や礫溜まり、井戸跡と推定した箇所では発掘調査によって井戸跡等が出土し、探査結果の妥当性を確認した。

このように中津居館跡における物理探査では一定の成果が得られた一方、建物跡を示す礎石列の検出には課題があることを確認した。今後、探査を適用する際には、礎石等の優先度は下げ、石敷遺構や礫溜まり、溝や土塁等の分布状況をまず把握することにより、建物跡の分布域を絞り込むことが有効と考える。

- 1 岩国市埋蔵文化財調査報告第一集『中津居館跡（旧加陽和泉守居館跡）』2012年3月岩国市教育委員会編集・発行 P41~44
- 2 岩国市埋蔵文化財調査報告第一集『中津居館跡（旧加陽和泉守居館跡）』2012年3月岩国市教育委員会編集・発行 P29~33
- 3 岩国市埋蔵文化財調査報告第一集『中津居館跡（旧加陽和泉守居館跡）』2012年3月岩国市教育委員会編集・発行 P18~25
- 4 探査後に岩国市教育委員会が実施した発掘調査の結果については本書「遺構編」P16~参照。
- 5 探査後に岩国市教育委員会が実施した発掘調査の結果については本書「遺構編」P8~参照。
- 6 註4に同じ。

一括出土銭の調査と保存処理に関する経緯

神崎 前
(岩国市教育委員会)

中津居館跡発掘調査に伴う一括出土銭の発見から、その後の調査及び保存処理等の経緯についてまとめる。

一括出土銭は第4次調査（平成24年度）に伴って居館内部に設定したTR1201で平成24年12月10日出土した。第4次調査に先立つ平成24年9月に、居館の南側を中心に地中レーダー探査を実施し、これによって、中世の遺構の可能性が考えられる反応が幾つか確認され、調査区を設定する際、これらの反応箇所を極力調査区内に含むよう注意を払ったが、その時探知した反応の内の1つが結果的に一括出土銭であった。

検出直後、一括出土銭の上面を覆う木製の板状遺物が残存しており¹、劣化を防ぐために、板状遺物の取り上げを最優先した²。この板状遺物は翌年に樹種同定と保存処理を実施し、材質は杉である事が確認された。今回出土した一括出土銭は、埋納当時の高額な流通形態を非常に良く留めており、発掘調査に伴う発見だった為、発見時の散逸等も皆無であり、遺物の持つ資料的価値は非常に高いと考えられた。そこで、取り上げ方法を慎重に検討するとともに、その実施に向けた準備期間が必要と判断し、銭貨の上面および、一括出土銭土坑に養生を施し、一時的措置として現地にそのまま埋め戻した³。

第4次調査終了後、文化庁および山口県教育庁社会教育・文化財課とも協議し、甕に銭貨が入った状態のまま現地から切り取り、屋内に移動して調査及び保存処理を行う方針を決定し、第5次調査中の平成25年12月16日～同12月19日、現地での切り取り作業を行った⁴。切り取り作業では、埋納銭土坑の記録を取り、銭および甕を緩衝材と樹脂で養生し、周囲の土をおよそ1/8毎に縦に取り除き、そこに発泡ウレタンを充填する工程を計8回繰り返す、甕周囲の土を完全に発泡ウレタンに置き換えた。最後に、全体が梱包された状態の一括出土銭をチェンブロックで地上まで吊り上げ、美術品専用輸送車両に積み込み、保管場所に搬入した。

翌年9月に、岩国徴古館（市立の博物館）に一括出土銭を移動し、内部の銭貨の調査に着手した。一括出土銭の調査において、埋納時期確定のためには銭種判読は最も有効な手段と言えるが、今回発見された一括出土銭は出土時から十貫文緡および八貫文緡とみられる状態を保持していることから、現状の変更を最小限に留め、銭種の判読は一部を抽出しておこなうこととし、推定される総数約4～5万枚のうち、10緡（約1000枚分）の銭種判読をおこなう事とした。内部の銭貨の取り上げ前に、現状を記録する為に3次元デジタイザを用いて銭貨及び甕の上面を計測した後、視認できる計4組の十貫文緡および八貫文緡のうち、最も下層に位置する八貫文緡から、緡銭の形状を保ったまま緡銭計8本（約800枚分）を取り上げた。この8本の緡銭は、後日、元の位置に戻すことによって出土時の状態を復元できるよう、分解せずに緡銭の状態のまま保存処理した。先に取り上げた8本の緡銭よりも更に下層から、別の緡銭を10本取り上げ、これをばらして得られた964枚の銭貨について銭種を判読した⁵。銭種判読調査の後、一括出土銭本体と8本の緡銭の洗浄及び保存処理に着手し、平成27年3月に完了した⁶。同時に、ばらした964枚の銭貨について洗浄・計測・調査をおこなった。なお、銭種判読作業に伴い、緡銭に通された緡紐を良好な状態で採取し、翌年これらの同定をおこない、わら材であることを確認した⁷。

今回新たな試みとして、錆びて固着した状態の緡銭の、X線CT装置を用いた銭種判読を試みた⁸。

結果的には、97枚の固着した緡銭を、そのままの状態で見ることができなかったものの、数枚程度が重なった状態であれば、ばらさずに判読できることが確認され、今後の調査への応用に期待の持てる成果が得られた。また、平成27年12月に、ばらした964枚の銭貨のうち、鳥銭や模鑄銭を含む26枚を抽出して蛍光X線分析装置を用いた成分分析をおこなった⁹。

調査と平行して、公開に向けた準備として専用台座を作成し、平成28年2月28日から、岩国徴古館において、一括出土銭を初めて展示し、大きい反響があった¹⁰。

現時点までの一連の保存処理および調査にあたり、あらゆる意味で特殊とも言えるこの資料を、単に調査・保存するに留まらず、公開・活用の道筋が開けたことは、多くの方に技術・調査方針等について多大な御協力を頂き、この資料が持つ価値を損なわない為の最善の方法を模索した結果であり、この場を借りて深く感謝申し上げたい。今後はこの資料の保存を最優先しながら、更に研究が進むことを期待している。



写真1 一括出土銭切り取り作業前の養生 写真2 一括出土銭の吊り上げ作業 写真3 岩国徴古館での3D計測



写真4 緡銭単位の取り上げ状況 写真5 銭銘の判読作業 写真6 緡紐の残存状況

- 1 Ⅲ章遺構編P8～、および図版1 参照。
- 2 板状遺物の取り上げについて、平成24年12月26日・27日に、現地で鳥根県立古代出雲歴史博物館澤田正明氏の技術支援を受けた。
- 3 一括出土銭の発見以降、調査及び保存方法等の検討にあたり、独立行政法人奈良文化財研究所高妻洋成氏、下関市立大学櫻木晋一氏、鳥根県立古代出雲歴史博物館澤田正明氏、元興寺文化財研究所塚本敏夫氏、山口県社会教育・文化財課、他から指導・助言を受けた。
- 4 現地での切り取りに係る工程は公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
- 5 銭貨の調査にあたっては下関市立大学櫻木晋一氏に指導を依頼した。調査内容については本書V章P68～に所収した。
- 6 一括出土銭本体および緡銭（計8本）の保存処理は公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
- 7 緡紐の同定は(株)パリノサーベイに委託した。調査結果については本書V章P63～に所収した。
- 8 調査には福岡県立九州歴史資料館のX線CTスキャナを使用し、同館の伊崎俊明氏・小林啓氏の指導・協力のもとでおこなった。
- 9 調査には福岡市埋蔵文化財センターの蛍光X線分析装置を使用し、同センターの大庭康時氏・田上勇一郎氏の指導・協力のもとでおこなった。
- 10 「中津居館跡発掘調査報告展」会期：平成28年2月28日（日）～同年5月8日（日）（予定）

Ⅵ 総括

1 遺構について

一括出土銭土坑 (SX120101)

第4次調査のTR1201で検出された一括出土銭土坑 (SX120101) は、標高1.55mの中世遺構面から掘り込まれた土坑の底に備前焼の甕を埋め、その中に4万～5万枚に上るとみられる銭貨が納められており、甕の製作年代および銭種の構成から埋納時期は14世紀中頃とみられる。出土地点周辺では祭祀の痕跡等は見つかっておらず、割られた甕に不均等に銭貨が納められる様子などから、備蓄目的で埋納された銭貨が、何らかの理由でそのまま埋まったものと考えられる。今回発見された一括出土銭の特筆すべき点は、埋納当時の流通形態である緡銭の状態を良好に留め、更にそれらを高額の単位にまとめた十貫文緡が確認できることであり、流通経済史・貨幣史の観点からも高い資料的価値が認められる。このような理由から、甕内部の銭種の調査は必要最小限に留め、現状のまま保存処理をおこなった。従って、正確な埋蔵枚数は不明であるが、表面観察から38,000枚（十貫文緡×2、八貫文緡×2、一貫文緡×2）以上の枚数になるのは確実で、甕底部の未確認部分まで含めると実際の埋蔵総数はさらにふえる。今回の調査では、取り出した緡銭の一部について、CTスキャナを用いて銭同士が固着した状態のまま読み取りを試みた。結果として5枚以上が重なった状態では銭種の判読は難しかったが、将来的には非破壊による調査技術が進歩し、現在未確認の部分も含め、甕内部の全容が明らかになることを期待している。保存処理後の一括出土銭本体の総重量は245kgであり、調査の為に甕から取り出した銭貨の重量6kgとの合計で251kgとなる。ここには甕の重量と、取りきれていない底部の土の重量が含まれるが、仮に総数が50,000枚と考えた場合、銭貨のみの重量は約175kgで、残りが甕と土の重量になる。全国的にみると、一括出土銭の最多出土枚数は、北海道函館市の志海苔館跡の374,436枚である。山口県内では6件が確認され、中津居館跡は埋蔵枚数順で、山口市の興隆寺出土銭に次ぐ2番目の多さである。本資料は、中津居館跡の拠点性・重要性を示すとともに、文献からも伺える弘中氏の経済力を裏付ける意味でも重要な資料といえる。

第10表 山口県内の一括出土銭

(出土枚数順)

遺跡名等	所在地	枚数	容器	最古銭	最新銭	埋納時期	発見年・状況
1 興隆寺跡遺跡	山口市大字大内御堀字氷上	89,000	備前甕	貨銭	朝鮮通寶	15世紀後半 ～16世紀	1972・工事中
2 中津居館跡	岩国市楠町三丁目地内	40,000～ 50,000	備前甕	開元通寶	至大通寶	14世紀中葉	2012・発掘調査中
3 下右田遺跡	防府市大字下右田	13,492	備前壺	開元通寶	宣徳通寶	15世紀後半	1979・発掘調査中
4 遠崎出土銭	柳井市遠崎	2,899	瓦質壺	開元通寶	寛永通寶	14世紀か	1983・工事中
5 丸山遺跡	山口市仁保下郷字片山	2,000～ 3,000	瓦質壺	開元通寶	景定元寶	14～15世紀	2010・開墾中
6 見島本村出土銭	萩市見島本村	不明		開元通寶	至大通寶	14世紀か	1968・民家地下

井戸 (SE140201)

居館内部で中世の木組み井戸1基 (SE140201) が確認された。中津居館跡の内部で中世の井戸が確認されたのは初めてである。井戸は内側に向かって大きく崩壊しており、原型を留めていなかったものの、井戸本体を縦板で組み、横棧で押さえる縦板組横棧式の形式が確認できる。井戸埋土からは、完形の土師器椀や、土師器杯、土師質鍋、陶器、青磁、天目、鉄製品、木製品などの遺物が出土し

た。これらの遺物は、井戸の廃絶時におこなわれた祭祀によるとみられる大量の炭を含む土層と共に出土しており、遺物の年代から、井戸の廃絶時期は14世紀前半頃とみられる。中津居館跡のこれまでの調査では、一括廃棄土坑（SK100310）に代表される、儀礼に伴う土師器等に対し、煮炊具等が遺物に占める割合は少なかったが、SE140201からは、使用に伴う煤が付着した土師質鍋、備前焼のすり鉢、貯蔵用とみられる甕、湧水付近から出土した箸状木製品・植物遺体・貝殻など、居館で営まれた実生活に直結する遺物が多く出土した。遺構としては確認できていないものの、周辺に炊事場が有った可能性は高いと考えられ、居館内部の区画割を、ハレの空間とケの空間に分けていたとすれば、井戸（SE140201）近辺は、生活に密着したケの空間であった可能性が高く、隣接する大型掘立総柱建物跡（SB100301）の性格を判断するうえでも考慮すべき要素といえる。ただし、居館内部全体の構成を推測するには、まだ十分な材料が有るとは言い難い。

大型掘立総柱建物跡（SB100301）

第4次調査のTR1202で検出した柱穴（SB100301-SP17）は、第3次調査で検出した大型掘立総柱建物跡（SB100301）の柱穴の1つであり、これによって、SB100301の規模は、北に柱間1間分（2.4m）拡大し、建物規模は少なくとも、東西4間（ $2.4\text{m} \times 4 = 9.6\text{m}$ ）、南北5間（ $2.4\text{m} \times 5 = 12.0\text{m}$ ）の規模になることが確認された。県内では、同規模の遺構として防府市の敷山城に、南北朝時代の験権寺本堂の遺構とされる、東西5間×南北4間（ $12 \times 9.6\text{m}$ ）の礎石建物跡がある。SB100301の上部構造物については、現時点での特定が難しいが、確認されている範囲での建物規模から、居館の中でも主要な建物の一つであった可能性がさらに高まった。

造成痕跡

TR1401で、14世紀前半と見られる中世遺構面（標高1.6m）よりさらに下層で、自然地形の窪みを平らに整地した、造成痕跡が確認された。造成に使われた客土は、居館内のごく近い周辺から調達したとみられ、土師器の小片や細かい木炭を含む。TR1401がある居館内部の南半において、基本的な層序は、標高1.6m付近に14世紀前半代の中世遺構面があり、標高1.5m付近より下層では、黄褐色シルトが堆積し、ほぼ無遺物となる。堆積学の知見からは、居館が成立する以前の三角州上の地形は、河川流路の影響を受けて、相応の起伏があったことが指摘されており、居館を築く前後に、必要な範囲内を整地した事は十分に考えられる。今回確認された造成痕跡もその一つと考えられる。

その他の建物跡

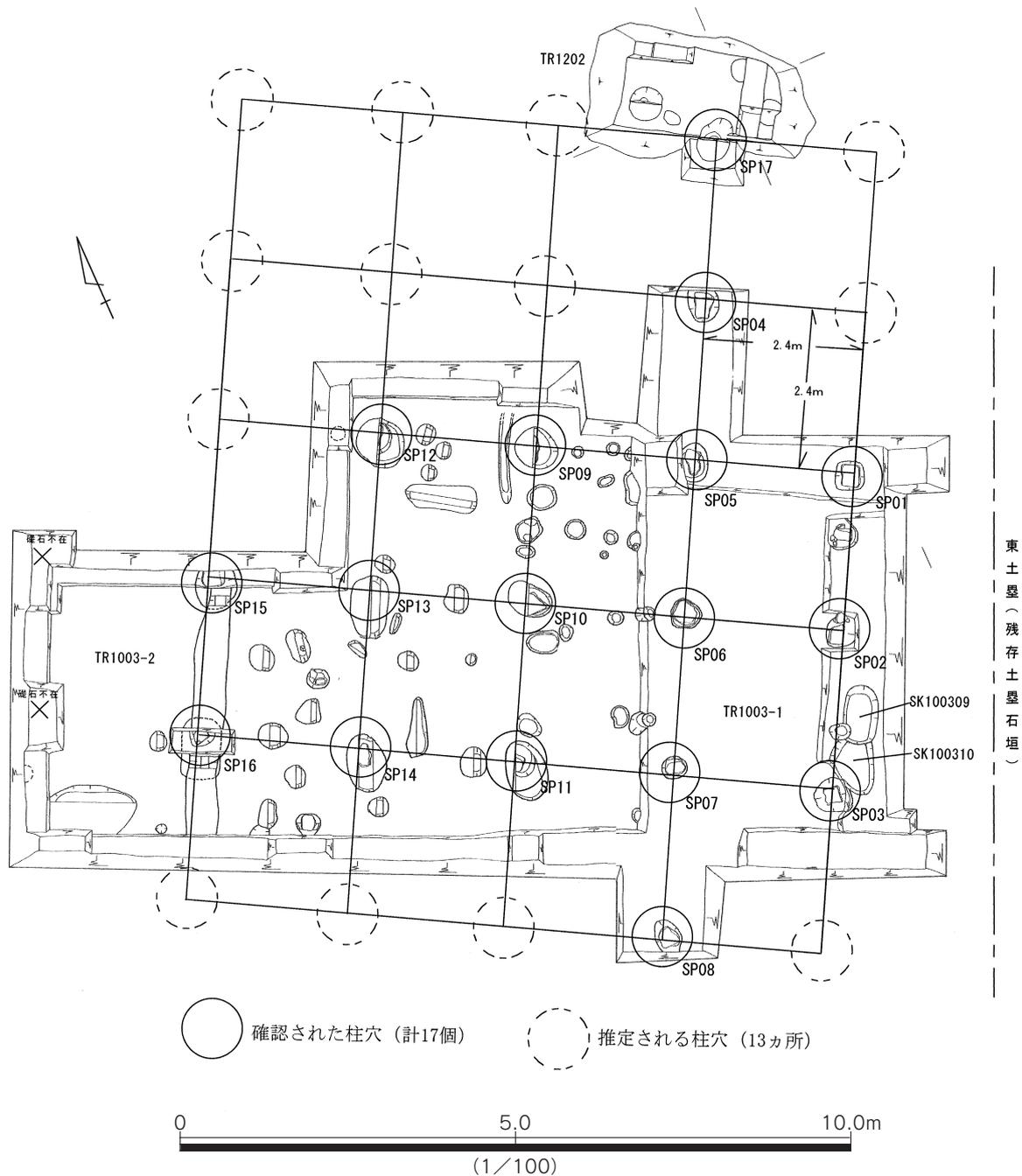
TR1402において、地下式礎石を備えた柱穴2個が検出された。柱間の距離は2.4mであり、2点を結んだ方向は、既知の大型掘立総柱建物跡（SB100301）の東西軸方向とほぼ一致する。柱穴の構造からも、この2個の柱穴はSB100301と共通の計画に基づいて配置されていると考えられる。建物の規模や性格は不明であるが、居館内を区切った門の可能性などが推定される。TR1402の外の未調査部分に、この柱穴に対応する柱穴がある可能性が高く、建物の規模や性格は確定できないが、現時点で中津居館跡で確認された中世の建物跡としては、大型掘立総柱建物跡（SB100301）に続き、2例目である。

土塁

土塁の南東隅にトレンチTR1301を設定し土塁の構造を調査した結果、第1次～第3次調査の土塁断ち割り調査で確認された、3段階に分けられる土塁の構築手法が追認された。

遺構のまとめ

第4次～第7次調査において、確認された主要な中世の遺構として、一括出土銭土坑・井戸・地下



第33図 大型掘立総柱建物跡 (SB100301) 配置図

式礎石を伴う柱穴等が挙げられる。また、第1次～第3次調査において確認された主な遺構としては、大型掘立総柱建物跡・土師器一括廃棄土坑等が挙げられる。これらの遺構は、いずれも、14世紀前半～中頃の遺構とみられ、前回の報告書でも述べられた、「居館が14世紀前半代に盛んに機能した」とする調査成果を追認する調査成果となった。さらに、同時代に中津居館跡を占用した人物の豊富な資金を裏付けるように、推定4万～5万枚にのぼる一括出土銭が出土した。現時点で居館の築造主として大内氏に仕えた弘中氏が最有力視されているが、弘中氏は15世紀前半には、大内氏家臣団でも、重臣の一角を占めていた事が文献史料から確認されており、今回出土した一括出土銭は、若干の時期のずれは有るものの、文献史料と発掘調査成果が示す弘中氏の実像が符合し、弘中氏の再評価につな

がる貴重な成果といえる。今後の調査課題として、14世紀前半代の居館の施設や機能について、より詳細に把握する事も重要である一方、弘中氏が岩国に勢力を持ったとされる16世紀中頃までの間に、中津居館跡が辿った変遷について、発掘調査の中から可能な限り把握する必要がある。同様の課題は以前からも指摘されており、第4次～第7次調査においても、段階的な掘削を行いながら14世紀後半～16世紀中頃の間の遺構の検出に努めたが、これまで実施した調査の中では、この時期に該当する遺構・遺物は14世紀前半代のそれと比較して極端に少ない。これが、発掘調査をおこなった範囲内に限ったことか、若しくは中津居館跡の変遷によるものか、今後の調査で慎重に見極める必要がある。

第11表 調査成果一覧表

調査年次・期間	トレンチ (TR)	調査位置	主な遺構	主な遺物	調査の概要と主な成果	本文	図版
第4次 地中レーダー探査 平成24年9月12日～ 平成24年9月13日 平成25年2月19日～ 平成25年2月20日 試掘調査 平成24年10月29日～ 平成25年1月30日	レーダー探査	居館内部 土塁 堀(推定)	-	-	○遺跡内の広範囲で地中レーダー探査による遺構分布確認調査を実施。 ・土塁上に設定した測線から、3段階からなる土塁構造が、四周の土塁ほぼ全体で確認できた。 ・堀の推定範囲(遺跡外周)に設定した測線からは、北東隅の一部を除き、堀の存在を示す明瞭な反応は得られなかった。 ・居館内部の探査では、一括出土銭の反応を捉えるなど、遺構探査の手段として有効性が認められた。一方で、大型掘立総柱建物跡の地下式礎石は明瞭に捉えられなかった。	95	-
	1201	居館内部	一括出土銭 土坑 柱穴	一括出土銭 備前焼甕 木製蓋 土師器	○推定4～5万枚とみられる銭貨を埋納した備前焼の甕を検出した。(一括出土銭) ・銭貨は甕の中で、十貫文または八貫文の高額単位にまとめられており、当時の流通形態を良好に保持していた。 ・埋納に使われている備前焼の甕は還元焰焼成による青灰色を呈し、13世紀末～14世紀前半頃に製作されたとみられる。 ・一括出土銭土坑(SX120101)周辺から、建物跡等の遺構は検出されなかった。	8	3・4・5
	1202	居館内部	大型掘立総柱建物跡 溝 柱穴	土師器	○第3次調査で検出した大型掘立総柱建物跡(SB100301)の柱穴を1個、新たに検出した。これによりSB100301の規模が北に柱間1間(2.4m)広がり、東西9.6m・南北12mになることが確認された。 ○中世遺構面で、溝・柱穴を検出した。	12	6・7・33
第5次 平成25年9月24日～ 平成26年3月19日	1301	土塁南東コーナー	土塁盛土構造	備前焼	○砂礫・シルトを互層に盛土し、氾濫堆積砂を利用しながら、外側に大型の花崗岩を充填して補強する土塁構造を確認した。同工法は、南土塁(TR0802・TR1004)、北土塁(TR0902)との共通性が認められる。 ○現在、地表に見られる残存土塁基底部の形状と、地下の土塁の遺構分布との間に整合性が認められた。	15	8
	1302	居館内部	溝 柱穴 土坑(近世) 井戸(近世)	土師器	○現地地表下70cm付近で中世遺構面を確認した。 ○西土塁と並行する溝(SD130201)を検出した。居館内部を区切る区画溝とみられる。 ○近世の瑞光寺廃絶に伴うとみられる大型の廃棄土坑、および近世の井戸を検出した。	16	9・10
	1303	居館内部	-	-	○一括出土銭切り取りのため、TR1201の一部を再発掘。 12月19日(月)～12月24日(金)、現地での切り取り作業実施。	108	
第6次 出土銭調査 平成26年11月20日～ 平成28年2月27日 試掘調査 平成26年11月20日～ 平成27年3月26日	出土銭調査	-	-	-	○一括出土銭について室内で調査し、洗浄・保存処理をおこなった。 ・十緡(964枚)を取り出して銭種を判読した結果、最新銭は1310年初鑄の「至大通宝」であり、埋納時期は14世紀中葉と推測される。 ・当初五貫文緡とみられていた緡銭の塊は十貫文緡および八貫文緡と確認された。 ・洗浄・保存処理の後、岩国徴古館で展示し公開した。	68	
	1401	居館内部	柱穴 造成痕跡	土師器 常滑焼 備前焼 鉄滓	○現地地表下70cm付近で中世遺構面を確認した。 ○地下式礎石を伴う柱穴2個(SP140101・SP140102)を検出した。 ・2個の柱穴の距離は約2.4mで、大型掘立総柱建物跡(SB100301)の柱間距離と一致し、柱穴同士を結んだ方角もSB100301とほぼ同じであった。 ○中世遺構面で、居館の築造直前とみられる造成痕跡が確認された。	22	11
	1402	居館内部 (2ヵ所トレンチ隣接)	井戸 礎石	土師器 備前焼 木製品 金属製品 鉄滓 植物遺体	○中世の井戸1基(SE140201)を検出した。 ・SE140201は、縦板組横棧留めの形式で、井戸枠の規模は内径約0.9mの正方形である。 ・井戸枠の東面および南面が内側に倒れ込むように崩壊している。 ・井戸の埋土からは、炭を大量に含んだ土と共に、土師器、陶器、鉄製品等が出土し、井戸の廃絶に伴う何らかの祭祀がおこなわれた可能性が考えられる。 ○SE140201から、西に約1.5mの場所で、中世遺構面に掘えられた礎石2個を検出した。	24	12・13
第7次 平成27年7月9日～ 平成27年8月19日	1501	-	-	-			

2 遺物について

今回の報告では弥生土器、中近世土師器、輸入陶磁、陶器（常滑・備前）、近世陶磁器、土製品、石製品、金属製品、木製品、植物質遺物、植物遺体、動物遺体が出土した。

とくに一括出土銭の発見が特筆すべき事項であるが、ここでは遺跡内の変遷および性格を考える上で重要な資料となる中世土師器について述べておく。

中世土師器は前回報告『中津居館跡』で採りあげられている一括廃棄土坑SK100310、土塁基底部分で見つかった土器集積100401と今回報告の井戸SE140201から出土した中世土師器の検討を行う。各遺構のおおよその年代としては草戸千軒町遺跡のⅡ期¹の13世期後半から14世期前半にあたる。ただ、この画期の中での新旧関係が中津居館跡の資料群からは看取出来ると考え、出土した中世土師器を試みに分類および時期の細分を行った。対象となる土師器の器種は椀・坏であり、各器種の分類は以下に述べる。

(椀)

椀A…いわゆる吉備系土師器椀である。底部押し出しという成形技法で作られており、断面三角形の高台が付く。胎土は白色系であり、在地系土器とは色調が異なっている。

椀B…在地系土器で色調は赤褐色のものが目立つ。胎土底部はヘラ切りである。高台は平底で底部より外湾して口縁端部付近で短く直立気味に伸展する。底部より外湾して口縁端部付近で短く直立気味に伸展する。

椀C…在地の土器で底部は回転糸切りである。色調は黄褐色である。高台は椀Bと同じく平底で、底部より外湾して口縁端部付近で短く直立気味に伸展する。椀Bよりは法量が小さくなっている。全体の形態としてはやや瓦器椀に類似する。

(坏)

坏A…底部より外傾して口縁部に向かって伸展するものである。

坏B…底部より外傾して口縁部に向かって伸展するものである。坏Aに比べて底径、口径が小さい。器高については坏Aと大差はない。

坏C…底部より外傾して口縁部に向かって伸展するものである。坏A、Bに比べ器高が低く、皿状に近い形状を呈している。

坏D…体部の中位より口縁部に向かってやや喇叭状にひろくものである。法量は他の坏より、少し小さめである。

一括廃棄土坑SK100310は椀Aである吉備系土師器椀、坏A、坏B、坏Cが出土している。坏A、坏Cの割合が高い。

土器集積100401では椀は見られないが坏A、坏Bが出土している。坏の法量は一括廃棄土坑100310や井戸140201と比べるとやや大型である。

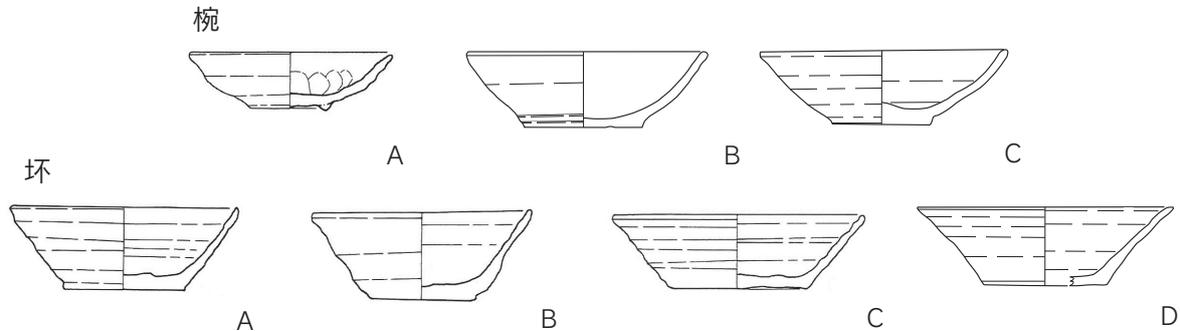
井戸SE140201は他の2遺構には見られない椀B、椀C、坏Dが登場する。椀Aは伴わない。坏A、坏B、坏Cはやや法量が小さいものが目立つ。

以上のように各遺構間には器種構成が異なり、法量の変化が若干であるが看取出来る。中世土師器は基本的に法量の縮小傾向があり、出土した器種の組成をもとに新旧関係を提示したい。

遺構間での新旧については土器集積100401が古く、一括廃棄土坑SK100310、井戸140201と新しくなり、13世紀末から14世紀第一四半世紀、おおよそ草戸千軒町遺跡のⅡ期の範疇の中での新旧関係が

中津居館跡からは看取出来る。近年、柳井市道場遺跡等²でも当該時期の一括資料が出土しており、土器集積100401、一括廃棄土坑SK100310の様相に近い中世土師器が出土している。

本稿ではこれまでの調査で出土した中世土師器の一括資料の新旧関係を示してみた。今後の調査の進展と周辺地域での出土資料の検討などを含めて周防の中世前期の土器様相については今後の課題としたい。



第34図 中世土師器碗・坏分類図

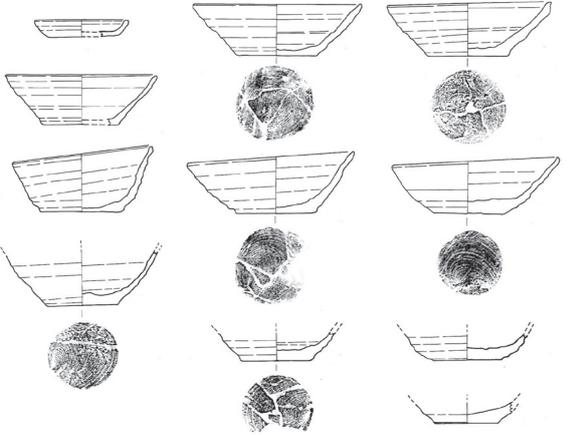
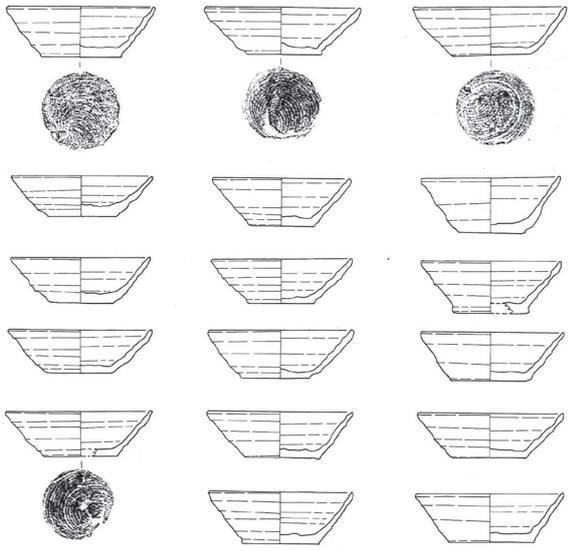
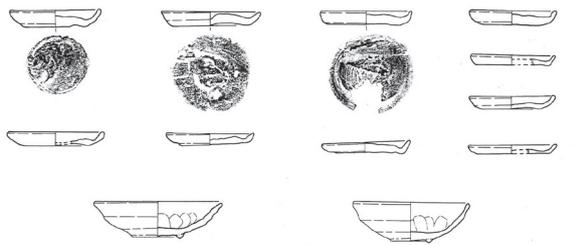
- 1 鈴木康之氏の教示による。
- 2 柳井市教育委員会 2015

3 おわりに

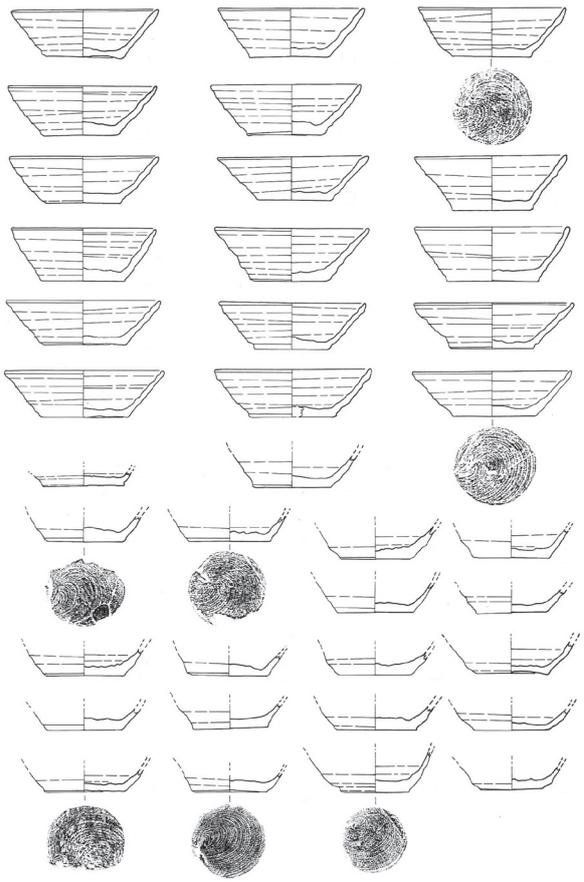
今回報告の第4次調査から第7次調査（平成24年度～27年度）に前回報告の第1次調査から第3次調査の成果も含め総括する。これまでの調査面積は遺跡全体の約5%に過ぎないが遺構では土塁、堀状遺構、大型建物、井戸等が確認され、遺物は中世土師器をはじめ、陶器（常滑・備前）、輸入陶磁（青磁、白磁、天目）、金属製品（銭貨、鉄釘、鉄鏃、鉄滓）、木製品（箸状木製品、折敷、付け木、下駄部材、柄杓底板、不明木製品、井戸枠部材）、炭化種実（コメ、ムギ、マメ、エゴマ）、動物遺体（貝）が出土しており、14世紀前半を前後する時期の良好な資料となっている。また、一括出土銭という単体としての大きな成果もあった。

調査所見での中津居館跡は上記に示しているように主として存続している時期が14世紀前半である。当該時期は鎌倉時代末期から室町時代初期、南北朝時代を挟む時期であり、防長地域も例外なく混乱の状況となっている。この頃の大内氏は周防では同族の守護鷲頭氏、長門では守護厚東氏と争いを続けている状況下であり。大内弘世が防長での覇権を確立するまで続いていく。また、南朝勢力の伸張もあり、大内氏の上記の争いのなかでの南朝への帰順、伊予の水軍勢力である忽那氏が懐良親王の九州下向に協力し、岩国南部の長野郷や離島柱島の地頭職¹の獲得など、防長地域での南朝勢力の展開がなされている。以上の背景が14世紀後半以降の遺物の出土がとぼしい要因となっていると看取出来る。ただ、中津居館跡の主として想定される弘中氏は宮司家である白崎八幡宮の棟札の記述などから居館の周辺域での活動が14世紀前半以降も継続的に行われており、周辺において弘中氏に関する施設の展開が想定出来る。

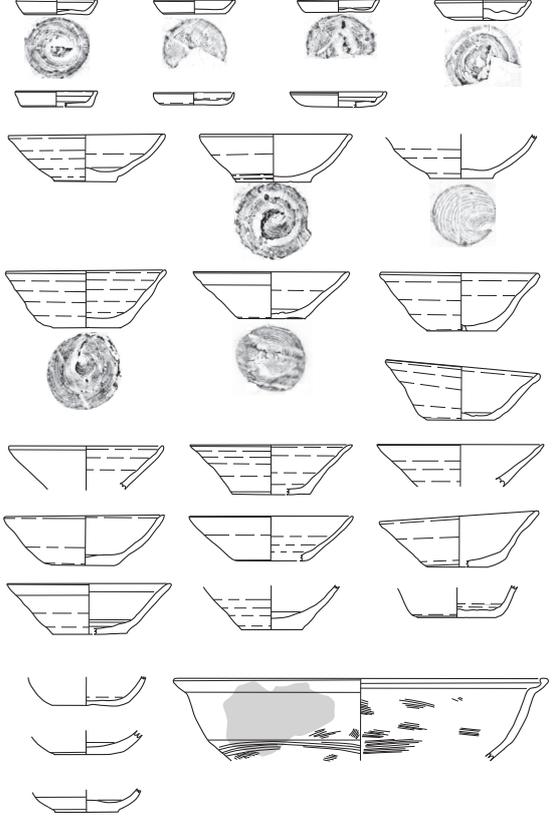
居館の成立とその背景については、土塁基底部100401から出土した土師器から13世紀末から14世紀初頭と考えられ、前回報告の松田順一郎氏の論考²や土塁の堆積状況を考えると、城館が成立した



土器集積 (100401) 土壘基底部出土



一括廃棄土坑 (SK100301) 出土



井戸 (SE140201) 出土



第35図 中津居館跡出土一括中世土師器

頃には三角州上に安定した自然堤防が形成されたとみられ、これを契機にして居館が当地に成立したと考えられる。そして、周辺状況を概観すると、居館の北側には弘中氏が宮司家として管理していた白崎八幡宮、北西には弘中隆兼が拠ったとされる亀尾城、南には菩提寺である喜楽寺跡とあるように弘中氏に関連する遺址が居館周辺、錦川の河口部に展開し、同じ三角州上には穂田元清館跡が存在する。この遺跡は毛利元就の四男、穂田元清が居住した城館と伝えられているが、弘中氏に関連する城館あるいは都市、港湾的な遺跡としての想定が可能である。また、居館からの出土遺物からは少量であるが和泉型瓦器椀、吉備系土師器椀、中国陶磁、常滑、備前など他地域よりもたらされた土器・陶磁器も出土している。これらは瀬戸内海を通じた交易等により本遺跡にもたらされたものである。そこから中津居館跡の錦川河口部での立地は瀬戸内海の海上交通と錦川の河川交通を結節し、弘中氏の所領である岩国庄、岩国本庄と庄内を通る山陽道も伺える要衝ともいえるのである。

以上のように中津居館跡の調査は岩国の中世史解明のみならず、中世考古学の進展にも一助となっている。また地域においても、これまでの成果によって少しずつであるが、岩国の中世に対しての関心、認知が高まりつつある。今後の調査が進展し、中津居館跡の全容が明らかになり、岩国の中世の解明、中世考古学の進展へ寄与し、地域住民、研究者等への周知が広まることを願う。

-
- 1 『忽那開発記』
 - 2 松田順一郎「中津居館跡の地形条件と堆積物の観察結果」『中津居館跡』
(岩国市教育委員会2012)

(主要参考文献)

- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学』 海青社
岩国市教育委員会 2012 『中津居館跡(旧加陽和泉守居館跡)』
宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』第65巻5号 史学研究会
小野正敏・五味文彦・萩原三雄編 2015 『木材の中世』 高志書院
全国シンポジウム「中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—」実行委員会編 2005
『全国シンポジウム「中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—』
大宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡XV』
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』
砺波市教育委員会・北陸電力株式会社・株式会社上智 2013 『大丹保遺跡発掘調査報告』
永田千織・藤野次史 2014 「安芸地方における土師質土器坏・皿の研究(上)」
『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』5号
永田千織・藤野次史 2015 「安芸地方における土師質土器坏・皿の研究(下)」
『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』6号
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1993 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ』
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1994 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1995 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1995 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ』
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1996 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』
柳井市教育委員会 2015 『柳井市伊陸地区 道場遺跡 岩崎遺跡 蛭子遺跡 行宗遺跡』

Ⅶ 資料編

白崎八幡宮御神殿棟札

白崎八幡宮（岩国市今津町6丁目12-23）に、文亀3年（1503）4月28日の日付がある棟札が伝わっている。寸法は、横14.5cm、縦137cm、厚さ2cm、重さ1.89kg、材質は檜で、棟札の上部と下部の一部に虫害が認められ、雨水等による劣化で読み取りにくい部分があるものの、全体的に保存状態は良好といえる。棟札には、建長2年（1250）に弘中氏の祖先とみられる清縄氏による白崎八幡宮の創建に始まり、以降の白崎八幡宮の由来のみならず代々宮司を務めた弘中氏に関する動静が年代および人名とともに詳細に記されており、中世の岩国における歴史資料として高い価値がある。岩国市指定有形文化財（昭和56年8月20日指定）。



白崎八幡宮御神殿棟札

防州岩國白崎八幡宮中古當國遠石八幡化白鷺垂迹于堂木矣、爰有清縄左衛門尉息男弯弓欲射暴死亦蘇自託宣曰我是八幡大菩薩當境旺化濟度衆生故於彼琵琶頸建長二年庚戌正月廿日願主清縄左衛門尉大工藤原元國建立小社奉致薄尊祭祀也厥后貞和四年戊子

九月十七日願主弘中堂内源兼胤遷宮于白崎山寄進社領定社役等巍々宮殿堂々奇麗鳥居表^レ字空門緋玉垣者^レ字形也出入者必消滅無始罪障也其後山名細川の弓箭天下二分之兵乱也兩家不遑劍鋒然應仁元年五月十日多々良政弘上洛也弘信致供

奉為公私歸國之祈念上葺焉文明四年壬辰四月初二日源左衛門尉弘信堂内五代子孫也同修造司瑞光寺喜昱藏主俗姓源氏也大工平兼宣也百年后罹明應第五歲六月二十七夜之火災神宮燒燼其年八月吉日源弘信重興當社之処厥冬少貳一族蜂起筑之前州太守多々良

義興公引率軍勢發向敵方処々城郭輒追落剽討得少貳父子四員也肥前國令探題千葉等諸將構細柳營可謂梲虛回然間次歲春中弘信再興當社當年戊午春三月十八日僅御寶殿造畢也先祖分限等雖巨多弘信親源兼勝之代澄清寺殿勝音寺兩家御弓矢之時勝音寺殿依為御家

督御供仕依負方本領已下相違也築山殿御代彼神領計對兼勝令安堵畢也文亀三年癸亥四月二十八日上棟卯刻迂宮戊刻舞殿籠所等如形茅店造畢遷宮于舊所且夫資財之力不足乎且又擬御伊勢太神之宮居者乎若又吾家子孫中信力与神助相應而富貴繁昌時復舊觀者也仍作銘々曰

白崎大社中洲開基八幡三所化白鷺兒六道郡類仰青竜姿北闕修好南風為綏元在室木子葉孫枝今遷當所丹鶴綠龜外現菩薩内秘阿弥慕晋楚富供夏殷桑神子神樂吹損吹簾清和玄冒弘中白眉百年壽命萬行慈悲庶幾宋廟久於僧祇鎮勤家國至三會時

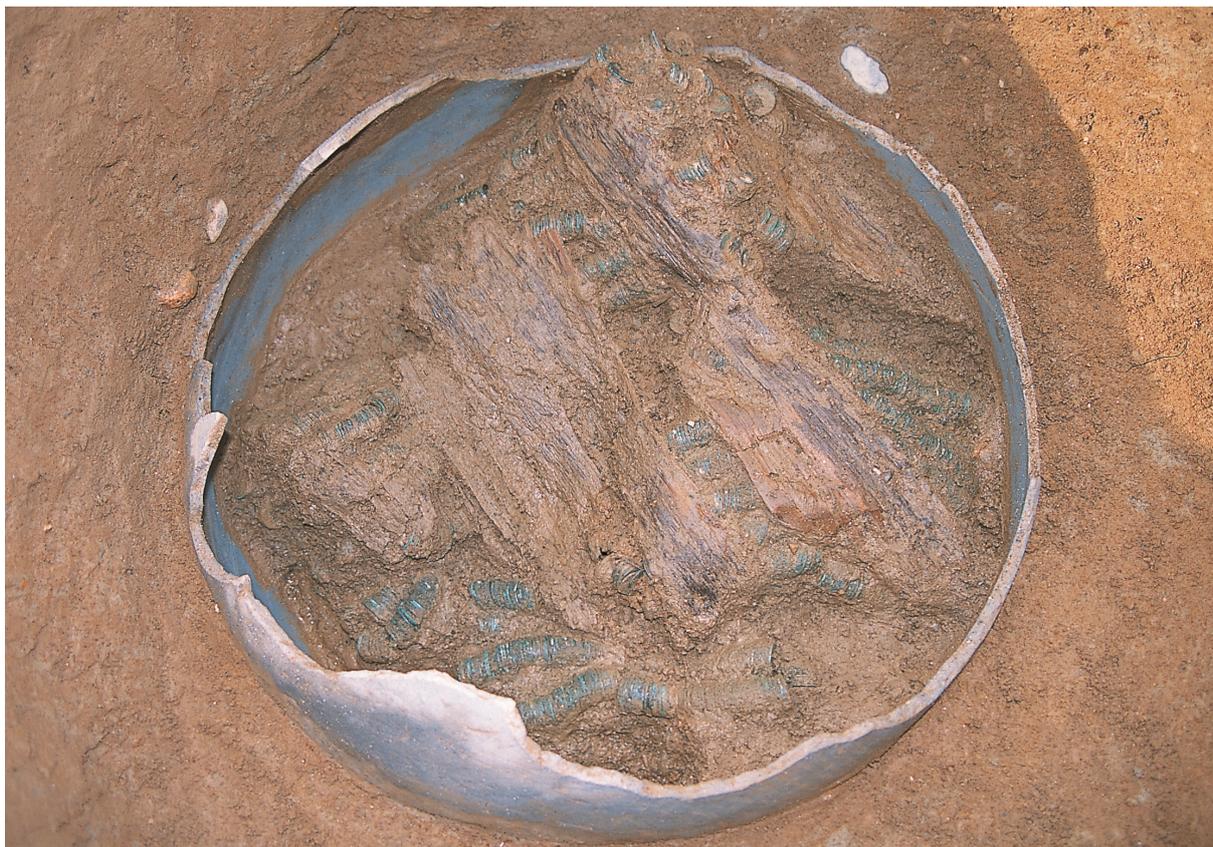
文亀三年癸亥四月二十八日 大工 平信家 願主 弘中右衛門尉源弘信法名源忍同嫡男興輔

弘中氏一覽

ID	氏名	法名	通称・官途名	活動期間	備考
1	清繩		左衛門尉	建長2(1250).1.20見	今津琵琶頭に小社建立(白崎八幡宮御神殿棟札銘)。
2	清繩		左衛門尉息		室木で遠石八幡忘化の白髷を射ようとして死去(白崎八幡宮御神殿棟札銘)。
3	弘中兼胤		源、堂内	←貞和3(1347).10～貞和4(1348).9.17→	八幡宮に太刀奉納(防州白崎八幡宮御劔)。八幡宮を白崎山に遷宮・社領寄進(白崎八幡宮御神殿棟札銘)。
4	弘中		三河守	←康暦2(1380).5.28	安芸内郡合戦で戦死(花宮三代記)。原文は頭中三河守。
5	弘中	円政	沙弥、太郎入道、太郎左衛門入道	←応永9(1402).6.10～応永13(1406).閏6.8→	←応永9.6.11～応永11.12.24→奉書署判。応永9以来遠石得善・室籠庄押妨(石清水)。応永11.2.18国清寺興行・寺領等御沙汰条々(常栄寺)。供養勸進千疋(興隆寺)。
6	弘中重綱		左馬助、左馬允	応永10(1403)カ.2.18見	小行事知知行(興隆寺)。供養勸進二百疋(興隆寺)。一切経勸進百疋(興隆寺)。
7	弘中重兼		左衛門尉	応永11(1404).2.18見	応永11.2.18国清寺興行・寺領等御沙汰条々(常栄寺)。一切経勸進百疋(興隆寺)。
8	弘中兼綱		左衛門尉、七郎右衛門尉	応永11(1404).2.18見	応永11.2.18国清寺興行・寺領等御沙汰条々(常栄寺)。供養勸進二百疋(興隆寺)。一切経勸進百疋(興隆寺)。
9	弘中	信政	沙弥、源左衛門入道	応永11(1404).2.18見	応永11.2.18国清寺興行・寺領等御沙汰条々(常栄寺)。供養勸進二百疋(興隆寺)。一切経勸進百疋(興隆寺)。
10	弘中	喜快	沙弥、縫殿入道、美濃入道	←応永11(1404).2.18～応永30(1423).4.16→	応永11.2.18国清寺興行・寺領等御沙汰条々(常栄寺)。供養勸進三百疋(興隆寺)。一切経勸進二百疋未進一貫文(興隆寺)。←応永23.11～応永29.閏10.3→奉書署判。
11	弘中		勘解由丞	応永11(1404).3見	興隆寺本堂供養出仕(興隆寺)。
12	弘中弘綱		民部太郎	応永11(1404).3見	興隆寺本堂供養出仕(興隆寺)。供養勸進百疋(興隆寺)。
13	弘中盛兼		又四郎	応永11(1404).3見	興隆寺本堂供養出仕(興隆寺)。供養勸進百疋(興隆寺)。
14	弘中兼助		新藏人丞、藏人		供養勸進百疋(興隆寺)。一切経勸進百疋(興隆寺)。
15	弘中重時		左近将監		供養勸進百疋(興隆寺)。
16	弘中兼実		民部丞	応永27(1420).9.16見	供養勸進百疋(興隆寺)。一切経勸進三百疋(興隆寺)。周防吉敷郡永野村内五拾石地知行(興隆寺)。
17	弘中宣兼		与一		供養勸進五百疋(興隆寺)。無量寺鐘奉納(防州無量寺鐘銘)
18	弘中兼連		勘解由左衛門尉		一切経勸進百疋(興隆寺)。
19	弘中重兼		雅楽助		一切経勸進百疋(興隆寺)。
20	弘中	道隆	四郎右衛門入道		一切経勸進百疋(興隆寺)。
21	弘中		道祖王丸		一切経勸進百疋(興隆寺)。
22	弘中兼勝		源	(永享頭)見	一切経勸進百疋(興隆寺)。
23	弘中		将監	文正1(1466).4.5見	一切経勸進百疋(興隆寺)。
24	弘中弘信	源忍	源、源左衛門尉、新右衛門尉、右衛門尉	←応仁1(1467).5.10～永正8(1511).4.29→	弘中堂内五代子孫。応仁1.5.10大内政弘上洛供奉(白崎八幡宮御神殿棟札銘)。文明4.4.2白崎八幡上道(白崎八幡宮御神殿棟札銘)。文明10.10.6長門厚東郡吉見郷内拾五石地知行。10.6筑前怡土郡警固内拾拾貳式地知行(正任記)。明応7.3.18白崎八幡御宝殿造畢(白崎八幡宮樓門棟札銘)。
25	弘中重勝		下野守	←応仁2(1468).9.12～文明7(1475).6→	文明7.6.字智大將(大乘院寺社雜事記)。←応仁2.9.12～文明2.2.3→奉書署判。
26	弘中武兼		左衛門大夫	←文明2(1470).6.1～文明10(1478).10.6→	←文明2.6.→在京。～文明10周防玖珂郡福森北方内拾五石地先知行(正任記)。
27	弘中		上総守	文明2(1470).7.25見	←文明2.7.25→在京(東院年中行事記)。弘中下野守の誤記カ。
28	弘中武宗		四郎、源	←文明10(1478).10.1～文明18(1486).2.13→	文明10.10.1.舊崎社参御供(正任記)。文明15.5.13宮崎松禁制署判(田村大宮司家)。文明18.2.13龜童丸上
29	弘中兼定		又四郎	文明10(1478).10.6見	文明10.10.6周防玖珂郡与田保内十五石地・同伊賀地郷内大原名五石地先知行(正任記)。
30	弘中		三郎次郎	文明10(1478).10.6見	文明10.10.6周防玖珂郡岩国本庄内廿石地弘中三郎次郎跡知行(正任記)。
31	弘中兼伝		九郎三郎	文明10(1478).10.6見	文明10.10.6周防熊毛郡麻合郡貳拾石地先知行(正任記)。
32	弘中護兼		六郎	←文明10(1478).10.6～文明10(1478).10.8→	文明10.10.6周防玖珂郡岩国本庄内五石地鍛冶実平跡・熊毛郡麻合郡貳拾石地弘中九郎三郎兼伝跡知行(正任記)。
33	弘中兼国		源十郎	←文明10(1478).10.6～文明10(1478).10.8→	文明10.10.6筑前越波郡平塚村内七町五段地平塚伊豆守跡知行(正任記)。
34	弘中盛時		弥六左衛門尉	←文明10(1478).10.6～文明10(1478).10.8→	文明10.10.6周防玖珂郡与田保内十五石地弘中又四郎兼定跡・同伊賀地郷内大原名五石地同人(弘中又四郎兼定)跡知行(正任記)。
35	弘中		才千代	←文明10(1478).10.6～文明10(1478).10.8→	筑前禰屋郡上津屋参町地飯田加賀守跡・同越波郡吉隈村内貳町地同人(飯田加賀守)跡知行(正任記)。
36	弘中		図書允	文明10(1478).10.8見	文明10.10.筑前怡土郡波呂村七町三段地知行(正任記)。
37	弘中弘清		太郎、美作太郎	←文明10(1478).10.10～文明10(1478).10.22→	文明10.10.筑前怡土郡波呂村五町地同人(杉前雅楽助盛連後室并同息女跡内)知行(正任記)。
38	弘中正清		五郎	←文明10(1478).10.13～文明10(1478).10.22→	弘清弟。筑前怡土郡波呂村五町地同人(杉前雅楽助盛連後室并同息女跡内)知行(正任記)。
39	弘中伊兼		十郎	←文明10(1478).10.13～文明10(1478).10.22→	弘清弟。筑前怡土郡波呂村五町地同人(杉前雅楽助盛連後室并同息女跡内)知行(正任記)。
40	弘中		玄蕃助	長享3(1489)見	永上山興隆寺修二月会大頭役(興隆寺)。
41	弘中武長		新四郎、兵部丞、越後守	←文明18(1486).2.1～大永7(1527).2.17→	童時分石州益田氏領数年逗留(益田家)。文明18.2.1龜童丸上宮社参御供奉(興隆寺)。明応9.4.10公儀以武長巨漕令申。←明応6.4.19～永正17.閏6.1→奉書署判。永正3.閏11.13筑前糟屋郡東郷半分預所下地契約(石清水)。←永正5.7.13～永正15→山城(上三郡)守護代(久我家)。永正8船岡山合戦馳走注進(松野家)。永正15～17神明御勧請之御社檀御建立之作事方惣奉行(山口大神宮)。大永3.8.1遠崎出津(関160斎藤)。大永3.8.18防州ノ警固番ノ大將(房顕覚書)。大永5.3.23御誓固御裁判之儀奉(関137斎屋)。
42	弘中兼朝		新兵衛尉	文龜2(1502).4.7見	豊前田河郡吉永分陸町五段地先知行(関46大庭)。
43	弘中興輔			←文龜3(1503).4.28～永正4(1507).11.25→	源忍嫡男。永正4.11.25将軍家御堀洛御居形儀供奉御上洛御供(白崎八幡宮樓門棟札銘)。
44	弘中		孫八	永正1(1504).12.13見	長門美祿郡加万別府内参拾石地先知行(田原家)。
45	池内長頼		大膳進、大膳亮	永正5(1508).11.23見	武長家臣。在京(賀茂別雷神社。九条家)。※
46	弘中		小太郎	←永正6(1509).10.12～大永1(1521).9.21→	興兼カ。大内義興供奉(実隆公記)。大永1大内義興・義隆父子松茸狩・鷹狩供奉(藤岡家)。
47	弘中興勝		源次太郎、下野守	←永正8(1511).9.23～天文12(1543).10.11	永正8船岡山合戦馳走注進(関166渡辺)。享祿3.10松崎天満宮御遷宮御神馬奉納(防府天満宮)。←享祿5.8.20～天文13.11.20→奉書署判。天文5.11安芸出陣(平賀家)。天文12石見在陣(石見吉川家)。
48	弘中		又四郎	永正11(1514).9.21見	足利義輝進進神馬につき書状(興隆寺)。
49	弘中興兼		中務丞、	←永正15(1518).7.1～大永4(1524)カ.6.7→	←永正15.7.1～永正17.10.6→奉書署判。大永2安芸佐東所々馳走注進(関130吉原)。大永3安芸大野門山在陣(房顕覚書)。大永3～安芸草津在城(安富惣兵衛)。
50	弘中		越中	(永正5～14).10.19見	武長家臣。在京(九条家)。
51	弘中正長		新四郎、兵部丞、越中守	←大永2(1522).3.29～天文16(1547).閏7.25→	←大永2.3.29～天文16.閏7.25→奉書署判。享祿2御厩奉行(満盛院)。天文8奉行衆(成恒家)。天文9申次(野坂家)。
52	弘中		小太郎	大永6(1526).7.9見	隆兼カ。安芸草津在陣(安富惣兵衛)。
53	弘中隆兼		中務丞、三河守	←享祿2(1529).4.22～天文24(1555).10.3	←享祿2.4.22～天文7.8.11→安芸東西条代官。←天文9.5.17～天文22.閏1.13→奉書署判。←天文12.6.11～天文24.10.3安芸守護代。天文15西条守護殿(大願寺)。天文24筑前早良郡姫浜三拾町地探題先御知行御代官職(西郷家)。天文24長持・大刀在鹿田院(西郷家)。周防玖珂郡本庄之内五石分知行(中村家)。
54	弘中		源次郎	天文10(1541).5.15見	勝道の子。出雲能美郡で討死。
55	弘中		又四郎	～天文12(1543).5.8	
56	弘中勝道		兵軍允	天文12(1543).7.13見	
57	弘中		道租市丸	天文21(1552).4.13見	
58	弘中		新四郎	(天文21～23).10.13見	
59	弘中賢順		丹後守	←天文23(1554)カ.11.10～天文23(1554)カ.12.16→	隆兼家臣。警固奉行人(成實堂文庫_白井家)。
60	清水寺	尊忍		←天文23(1554)カ.11.10～永祿12(1569).6.24→	隆兼家臣。周防山代之内生見郷百石足佐波善太郎先知行・安芸佐東郡新山貳百五十石足三吉先知行宛行われる(西郷家)。※
61	弘中賢俊		右衛門尉	←天文24(1555).4.10～弘治2(1556).12.6	隆兼家臣。周防玖珂郡本庄内拾八足石先知行。
62	弘中		対馬守	天文24(1555).9.28見	←天文24.4.10～弘治2.12.6→奉書署判。
63	無量寺			←天文24(1555).9.28～天文24(1555).9.29→	隆兼家臣。※
64	弘中梅		梅科人、梅女	←天文24(1555).9.28～天文24(1555).閏10.7→	隆兼娘。天文24ちちかか兼一跡相続。
65	諸卜軒			←天文24(1555).9.28～天文24(1555).閏10.7→	隆兼家臣。周防岩国錦見内拾石足・本庄之内隆兼領分五石足・本庄内弘中大炊允先給拾八石足(中村家)。
66	弘中		源太郎	←天文24(1555).9.29～天文24(1555).10.3	隆兼子。蔵島合戦討死(房顕覚書)。
67	弘中こん		おこう	←天文24(1555).9.29～天文24(1555).10.3→	隆兼妻。
68	弘中		備中守	～天文24(1555).10.3	蔵島合戦討死カ(房顕覚書)。
69	弘中		中兵衛	～天文24(1555).10.3	蔵島合戦討死(房顕覚書)。
70	池内		丹後守	天文24(1555).10見	正長家臣。※
71	弘中		大炊允	天文24(1555).閏10.7見	周防玖珂郡本庄内拾八足石先知行。
72	弘中		弥九郎	弘治2(1556).10.28見	長門美祿郡加万別府内五石足先知行(須子家)。

凡例

- ・弘中氏が岩国地域に影響力を持ったとみられる時期を基準に、弘中隆兼と同時代の人物までを収録した。なお、一部に弘中という名字以外の弘中氏家臣とみられる人物も収録し「備考」の末尾に※を付した。
- ・[ID]は「活動期間」の開始年の正しい順に付した便宜上の番号である。
- ・「活動期間」で、「～」を挟んで2つ年月日があるものは、生存したとみられる期間を表す。前後に矢印が無い場合は、生年又は没年を表す。年月日の後ろに「見」と表記があるものは、その時点の前後が不明であることを表す。
- ・「備考」には、年月日・活動内容・典拠資料などを簡略化して示した。
- ・この一覧表の作成にあたっては、山口県文書館の和田秀作専門研究員から資料提供を受けるとともに助言を頂いた。



TR1201 SX120101 一括出土銭及び木製蓋検出状況（東から）



TR1201 SX120101 一括出土銭検出状況（北から）



TR1201 SX120101 一括出土銭 十貫文緋①検出状況



TR1201 SX120101 一括出土銭 十貫文緋②検出状況



TR1201 SX120101 一括出土銭 八貫文緋①検出状況



TR1201 SX120101 一括出土銭 八貫文緋②検出状況



TR1201 SX120101 東西断ち割り土層断面 東側 (南から)



TR1201 SX120101 東西断ち割り土層断面 西側 (南から)



TR1201 全景 (南西から)



TR1201 SK120101 検出状況



TR1301 全景 (東から)



TR1301 北壁土層断面 (南西から)



TR1301 西壁土層断面 (北東から)



TR1301 土塁補強石材検出状況 (南西から)



TR1301 土塁補強石材検出状況 (西から)



TR1301 北壁土層断面① (南から)



TR1301 北壁土層断面② (南から)



TR1301 北壁土層断面③ (南から)



TR1301 北壁土層断面④ (南から)



TR1301 西壁土層断面 (東から)



TR1202 全景 (南から)



TR1201 SB100301-SP17 検出状況



TR1201 SB100301-SP17・SD100302 検出状況



TR1302 全景 (南から)



TR1302 SD130201 検出状況 (北から)



TR1302 トレンチ南西隅 集石検出状況 (東から)



TR1302 SE130201 検出状況 (北東から)



TR1302 SK130201 検出状況 (東から)



TR1401 全景 (南西から)



TR1401 SP140101・SP140102 検出状況 (北から)



TR1401 SP140102 検出状況 (西から)



TR1401 SP140101・SP140102 検出状況 (西から)



TR1401 トレンチ南東隅 土層断面



TR1501 SE140201 検出状況 (東から)



TR1501 SE140201 検出状況 (南から)



TR1501 SE140201 検出状況 (南から)



TR1501 SE140201 北西隅 井戸枠検出状況 (東から)



TR1501 SE140201 北東隅 土師器・木製品出土状況 (西から)



TR1402 全景 (西から)



TR1402 北壁土層断面 (南から)



TR1402 SE140201 南半検出状況 (上から)



TR1402 SE140201 横棧・縦板検出状況 (西から)



TR1402 SE140201 埋土中 土師器出土状況 (西から)



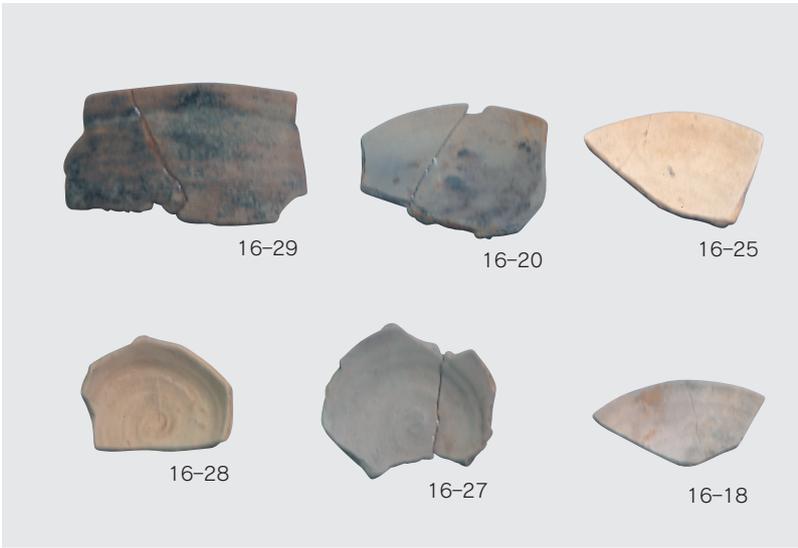
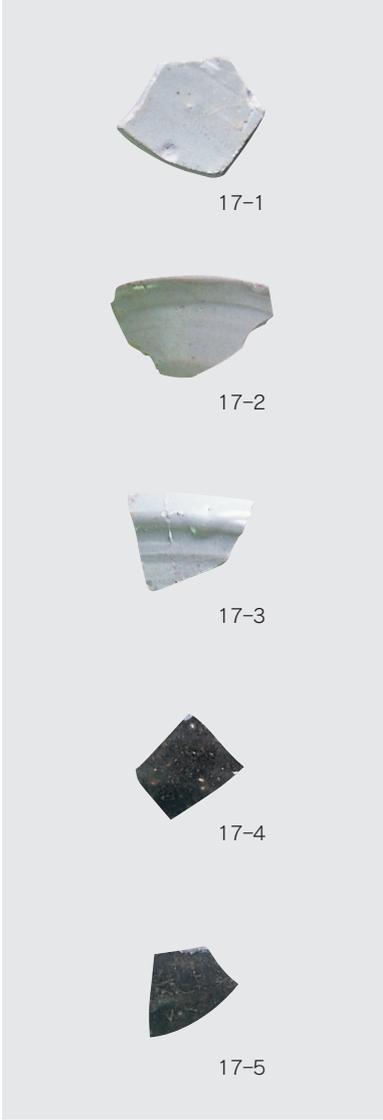
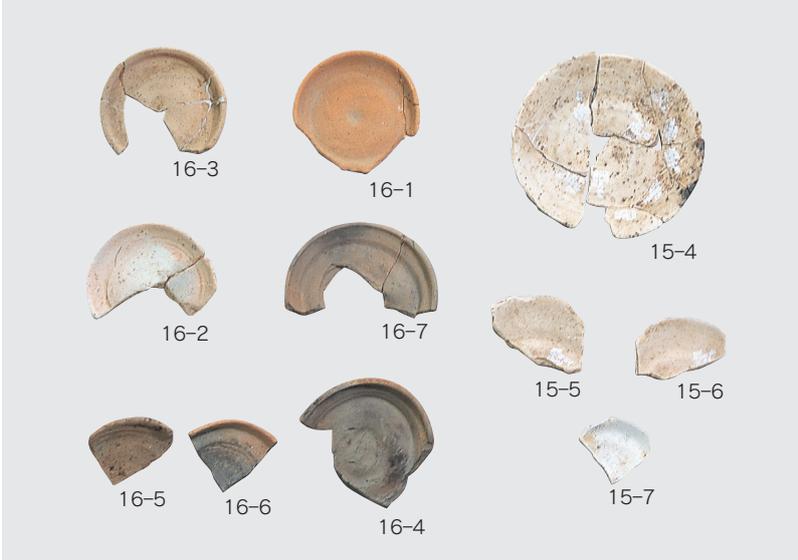
TR1402 SE140201 埋土中 土師器出土状況 (北から)



TR1501 SE140201 北東隅埋土中 土師器出土状況 (南から)



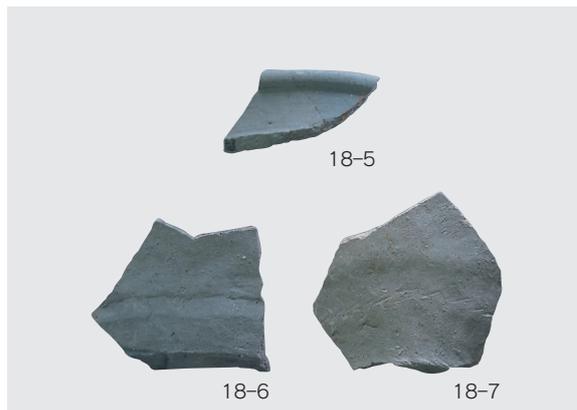
TR1501 SS140201・SS150101 検出状況 (北から)



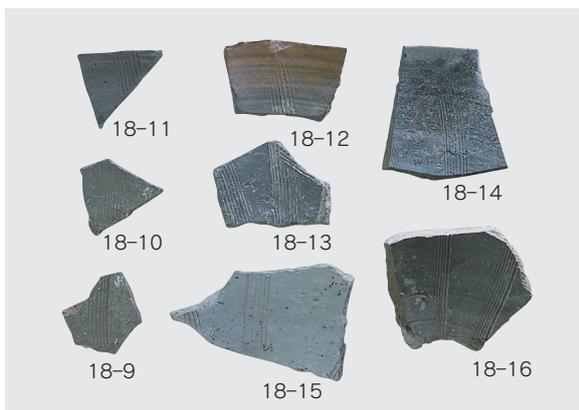
中世土師器・輸入陶磁



中世陶器①



中世陶器②



中世陶器③



近世陶磁器①



近世陶磁器②



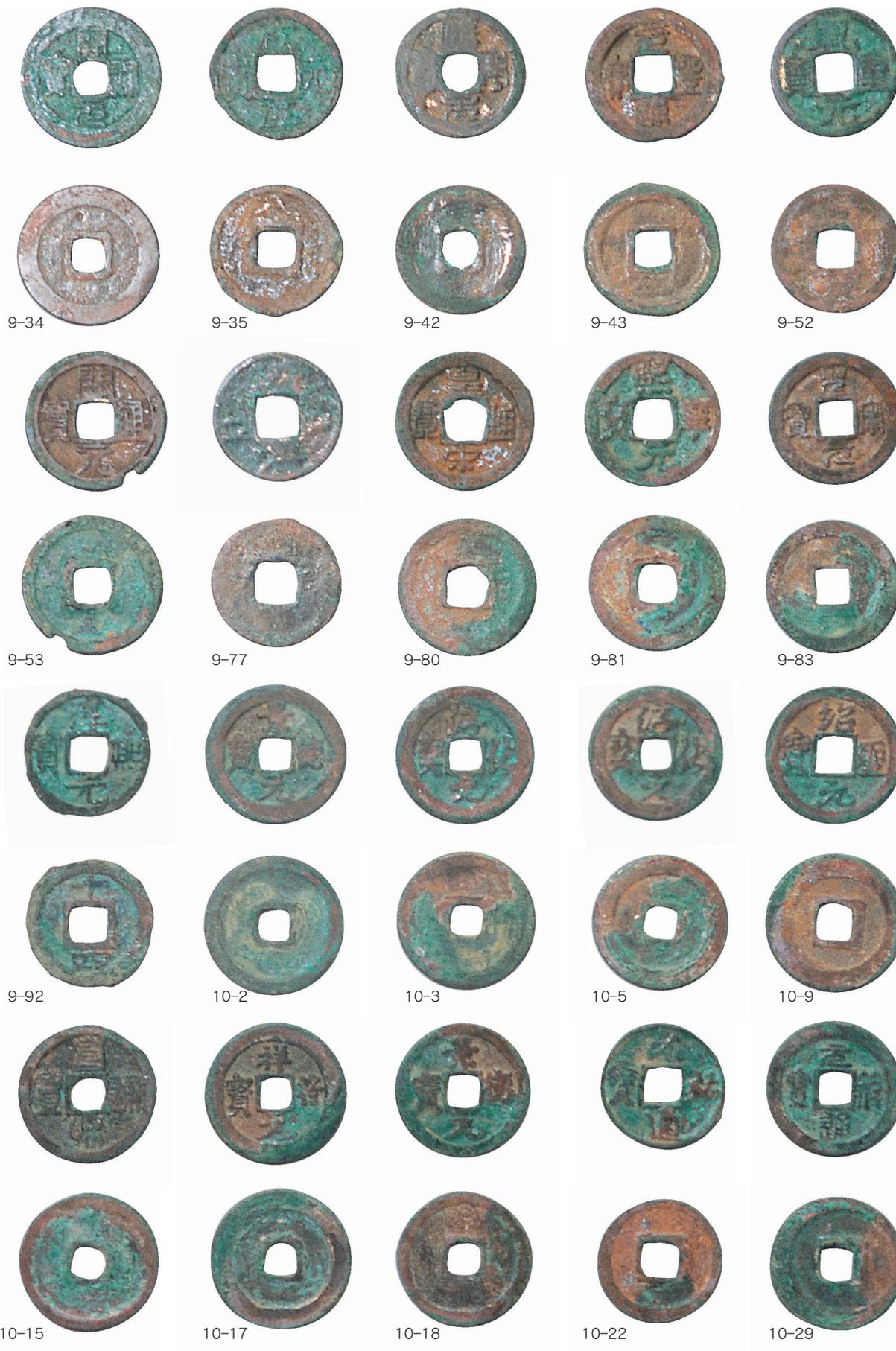
近世陶磁器③



近世陶磁器④



土錘・石製品



出土錢①



10-34

10-40

10-42

10-54

10-59



10-60

10-63

10-69

10-74

10-80



11-1

11-8

11-10

11-18

11-55



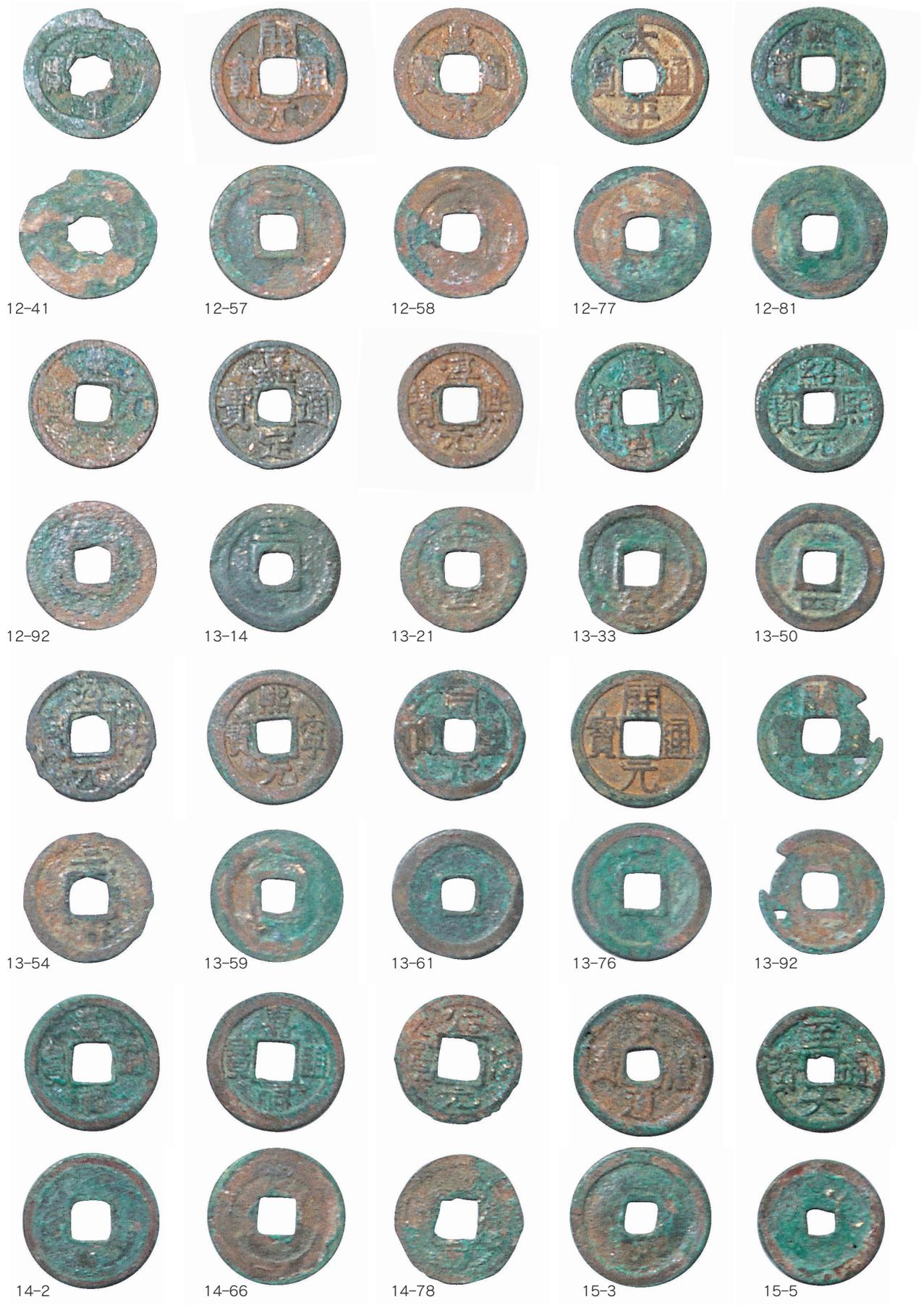
11-67

11-69

11-80

11-93

12-12



出土錢③



15-8



15-33



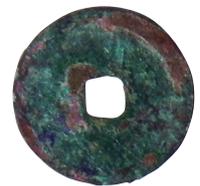
15-75



15-95



16-26



16-82



16-87



16-88



16-94



17-2



17-3



17-10



17-27



17-29



17-32



17-47



17-51



17-60



17-61



17-62





17-65

17-66

17-68

17-85

17-86



17-91

17-92

17-93

18-6

18-26



18-28

18-34

18-36

18-39

18-40



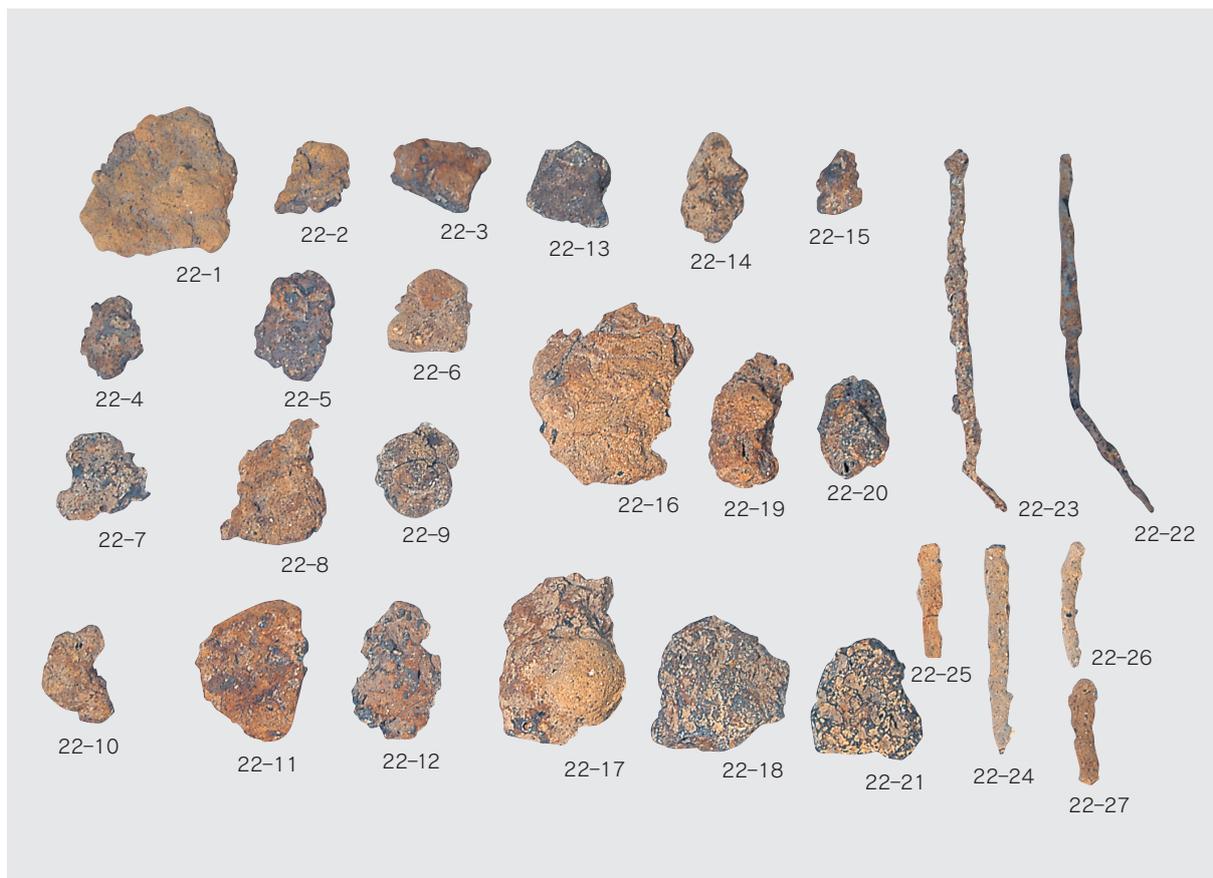
18-49

18-73

18-82

18-84

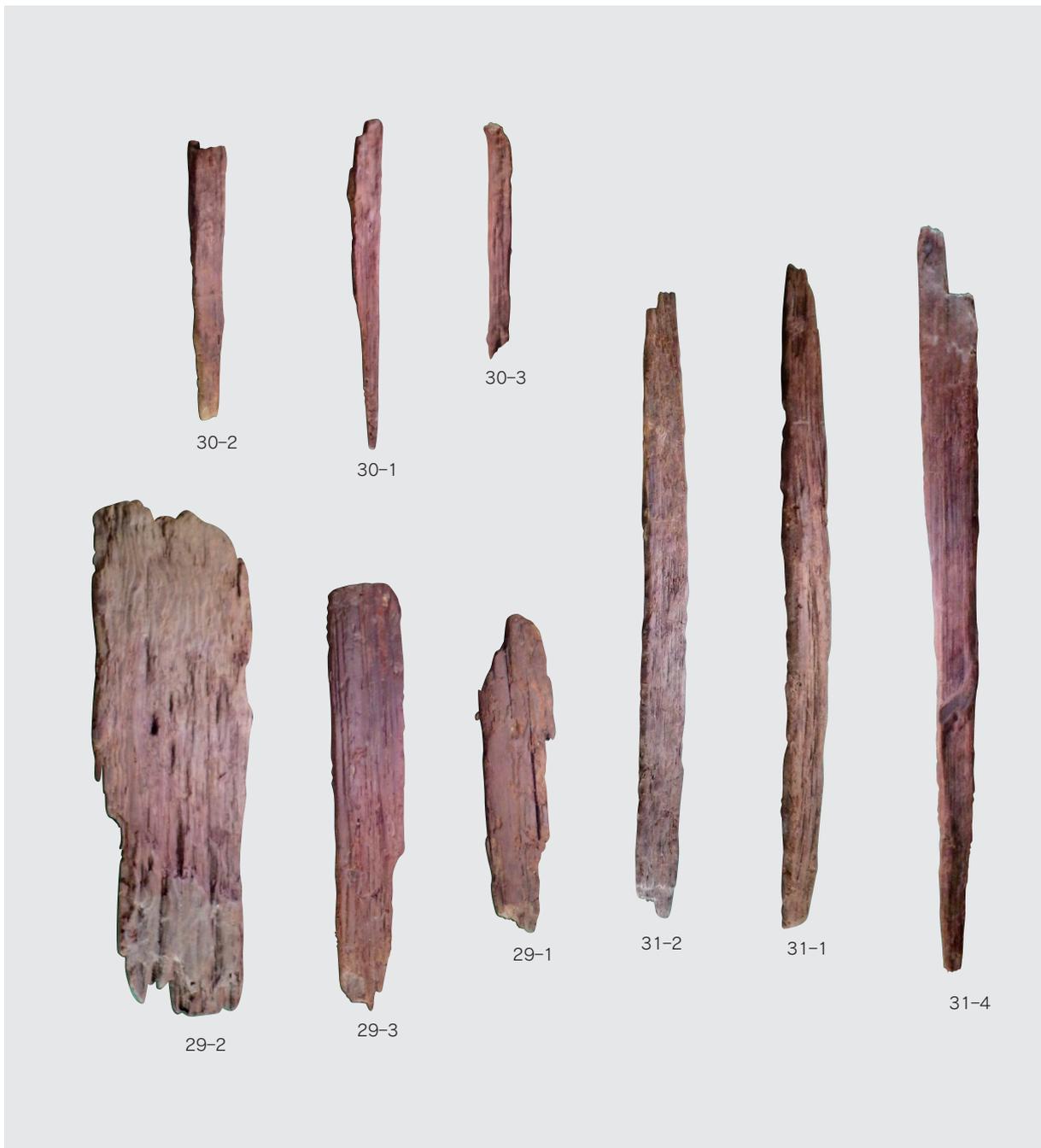
18-89



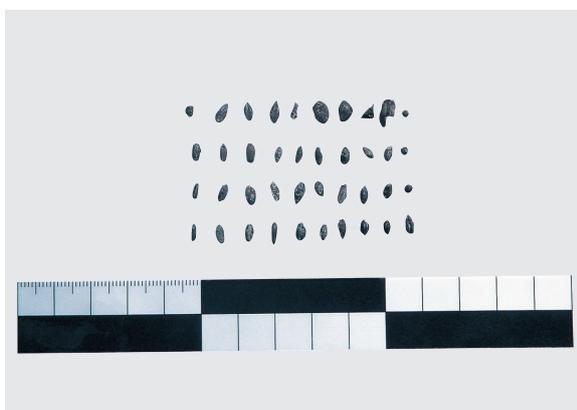
鉄滓・金属製品



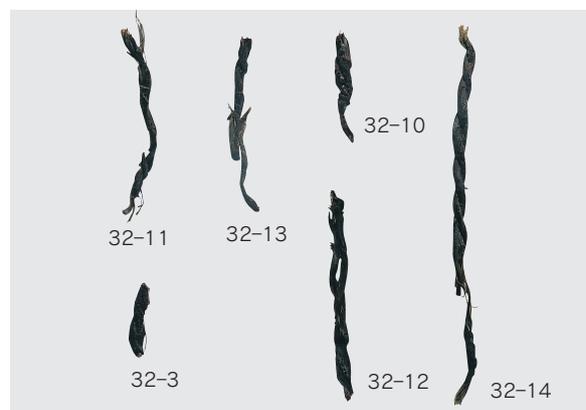
木製品①管状木製品・折敷・付け木・杭・下駄・ひしゃく・不明木製品



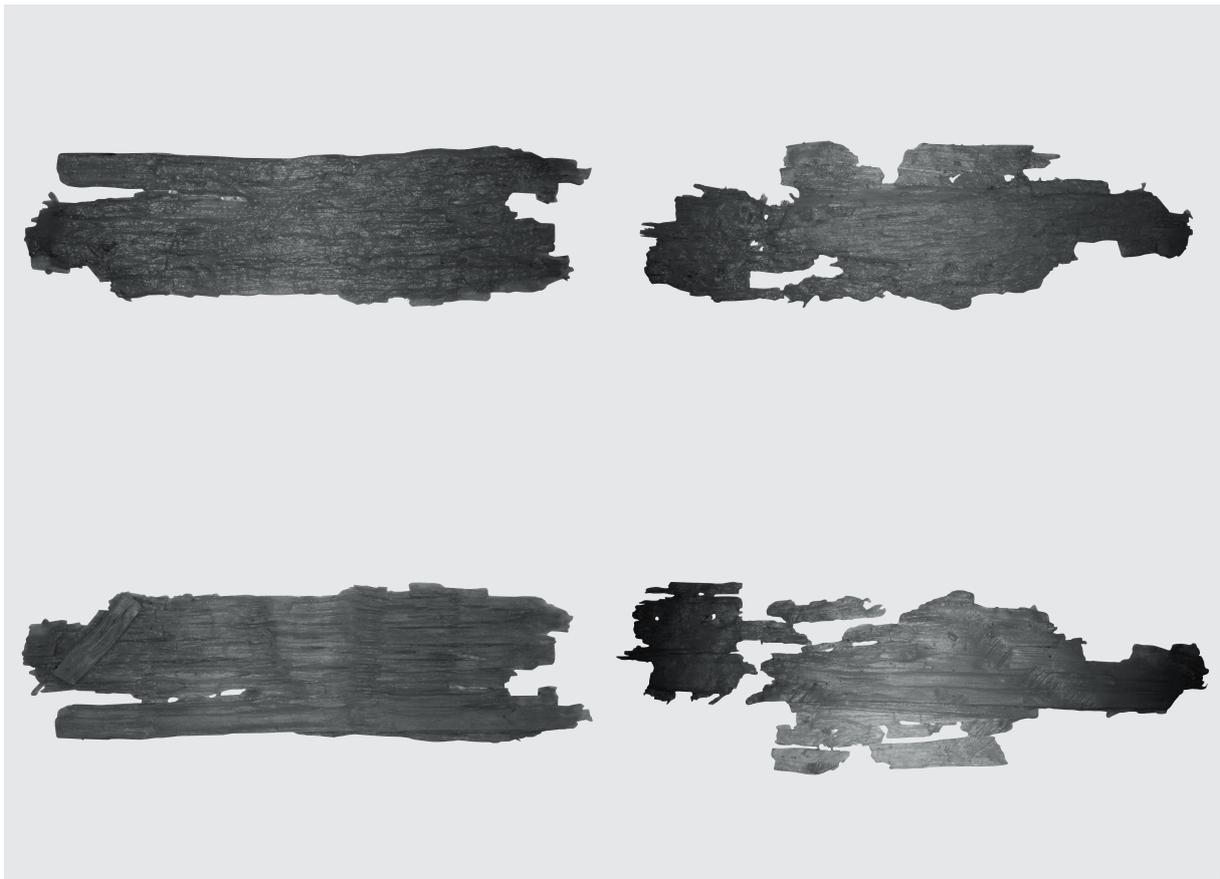
木製品②井戸杵部材



植物遺体 (炭化種実)



繊維製品 (紐)



板状木製品（赤外線写真）



動物遺体（貝・骨）

報告書抄録

ふりがな	なかづきよかんあとに							
書名	中津居館跡Ⅱ							
副書名								
シリーズ名	岩国市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第2集							
編著者名	神崎前 藤田慎一							
編集機関	岩国市教育委員会							
所在地	〒741-0081 岩国市横山二丁目7-19 TEL 0827-41-0452 FAX0827-41-0478							
発行年月日	2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
なかづきよかんあと 中津居館跡	やまぐちけんいわくにし 山口県岩国市 くすのきまちさんちょうめ 楠町三丁目	35208	10008030	34° 9' 23"	132° 12' 38"	①20121029～ 20130130 ②20130924～ 20140319 ③20141120～ 20150326 ④20150709～ 20150819	①78.0 ②173.0 ③118.4 ④16.0 計385.40	試掘・確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中津居館跡	城館跡	中世	土塁 出土銭埋納遺構 井戸 土坑 穴 溝 1カ所 1基 2基 5基 26個 1条	弥生土器、中世土師器、陶器 輸入陶磁器、近世陶磁器 近世瓦、土錘、砥石、硯、 鉄滓、金属製品、銭貨 木製品、動物遺体、炭化種実		推定4万～5万と考えられる一括出土銭が確認された。また、井戸からは中世土師器はじめ木製品、金属製品等様々な遺物が出土した。		
要約	<p>中津居館跡は、中世前期の14世紀前半頃に錦川河口の三角州に築かれ、室町時代後期（戦国期）の16世紀半ば頃まで存続した中世の平地居館跡である。特徴的な構造を持つ土塁が四周を囲み、周囲約120m～170m規模の台形状の平面形を呈する。内部に大型掘立総柱建物跡等の施設を有し、守護大名大内氏の館（大内氏館跡）に匹敵する規模を誇るとともに、大規模な開発も行われておらず保存状態も良好である。</p> <p>今回の報告の対象となる第4次から第7次の確認調査は城館の南半部を調査である。14世紀前半を中心とした遺物が出土し前回の報告を追認することとなった。とくに確認された一括出土銭は貨幣史のみならず、商業史における重要な資料の発見となり、また井戸からは土師器をはじめ木製品、金属製品など多くの遺物が出土した。これらの発見により、前回報告の第1次～第3次調査成果も含めて、中世の岩国地域および周辺地域の歴史の解明の一助となっている。</p>							

岩国市埋蔵文化財調査報告書 第2集

中津居館跡Ⅱ

発行年月 2016年3月

編集・発行 岩国市教育委員会

〒741-0081 山口県岩国市横山二丁目7-19

印刷 瞬報社写真印刷株式会社

〒752-0927 山口県下関市長府扇町9番50号